

新しい風俗文化雑誌

風俗草紙

風俗草紙

12

12



★本誌新年号の発売は、十二月十日です！……

風俗草紙新年号予告

猟奇・耽美読物大特集号

巻頭口絵
大特集

東西臀打ち・大画集

秘画中の秘画を集めてマニヤに贈る！ 堂々十数頁の変態グラフィックの圧巻！

サチ・マゾ画集

喜多 玲子・北原 静男
中川 彩子・八木 環

アブ・ラブ・セクスアリス……高橋 鉄

現代怪猫伝……(女装マニヤの手記)……相磯 秀雄

浣腸責めの陶酔……(責め体験記)……久利須照雄

サチズム・ストロイ処女をいたぶる……鬼頭浩一郎

猟奇マニヤの手記

尾行日記……(毎日女の後を尾行して楽しむ男の記録！)

便所マニヤ……(共同便所や女学校の便所を徘徊する男！)

不具に憑かれて……(不具の女にばかり興奮する、宿命の性！)

絶讀読切 二大連作

落城秘史 敗走会津城……岩堀 光

第六地獄 視姦の部屋……日夏由紀夫

豪華 二大新連載！

アブノーマル 淫雨熄まず……松井 頼子

官能現代小説 妖艶な筆をもって鳴る松井女史が特に本誌に書き下す変態的官能現代小説

サチスチック 時代小説 題 未 定……陣出 達朗

凄艶な構図を描いて無類の氏が愈々執筆する野心的長篇！

◇後記◇

いよいよ初冬となりました。本誌は発行以来、お陰様で毎号絶大な好評を戴いてをりますが、この人の心の荒み勝ちな歳末を目前に控えて、少しでもマニヤ諸兄に甘美な陶酔、魂の痺れるような妄想の遊歩を味はって戴くべく、鋭意努力中です。上掲の予告は新年号のホンの一部ですが、巻頭の「臀打ち大画集」など、まことにこれだけでも本誌購入の意義あるものと、編集部が自負するもので、何卒万が一にも御入手洩れのなき様切にお願い致します。又折込広告の如く年末発刊の秘蔵版も、豪華絢爛他に類のないもので、お早めにお申込下さい。(氏家記)

風俗草紙

第一巻 第九号
毎月一回一日発行

定価 百円

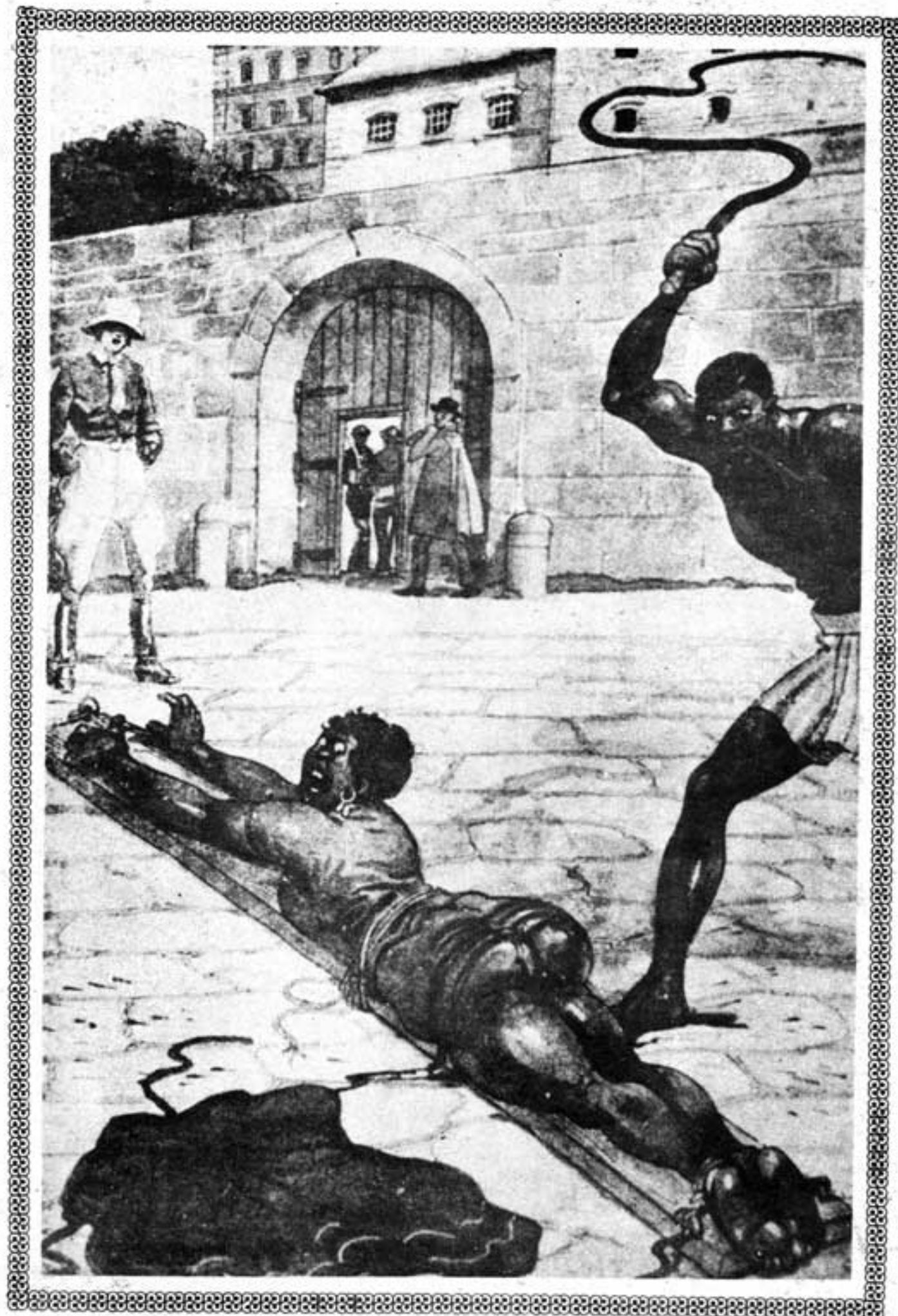
昭和二十八年十一月二十五日印刷
昭和二十八年十二月一日発行

編集人 氏家 富良
発行人 野村 佳秀

印刷所 内海印刷株式会社
東京都文京区戸崎町十二番地

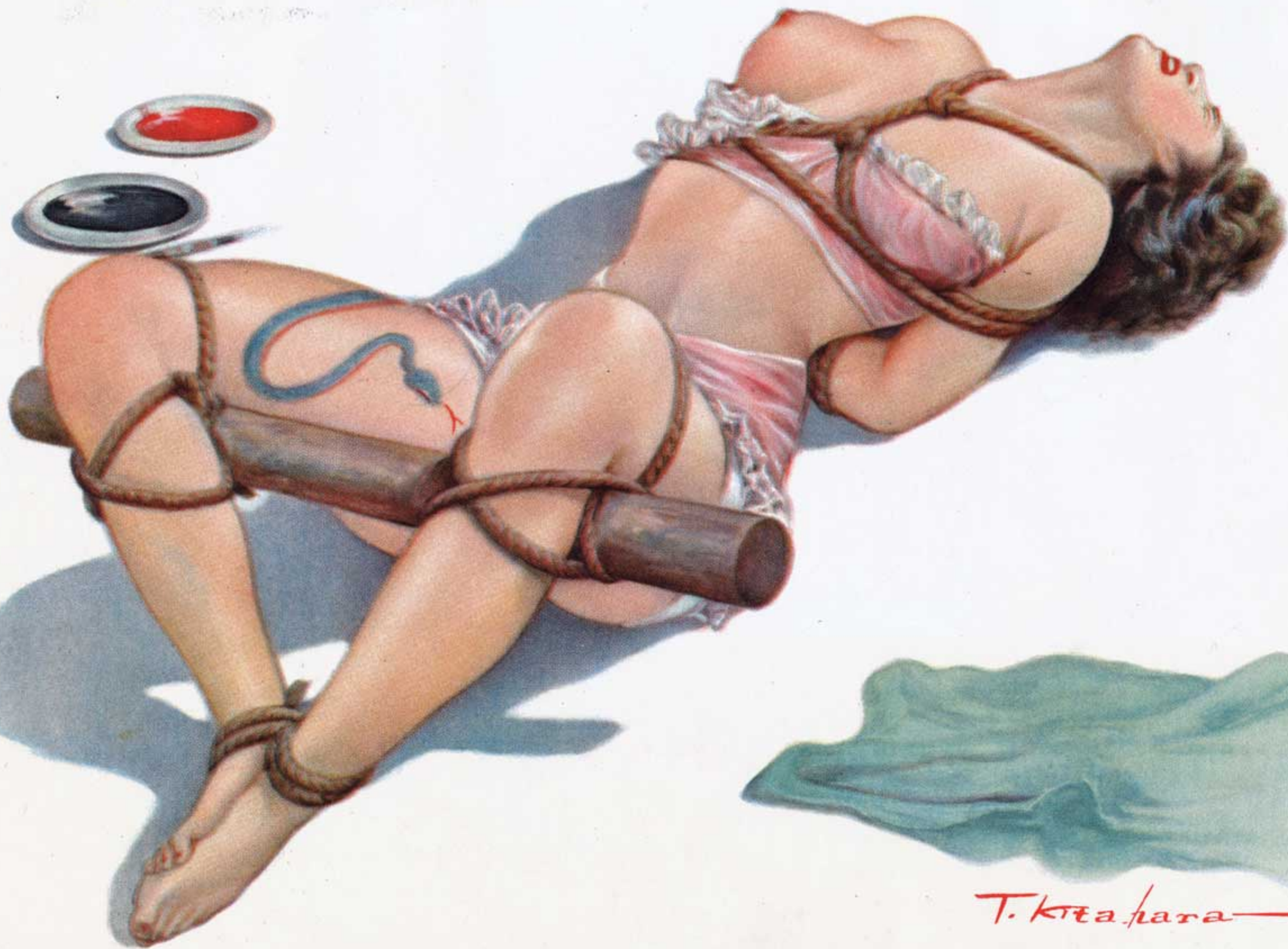
発行所 日本特集出版社

東京都千代田区神田神保町二の三四
電話 九段 三三二七番
振替 東京 二四二五一番



女奴隷の刑罰

女奴隷の豊かな臀部に血潮にまみれた鞭が唸る。かたわらの女主人の顔に、サチスチックな笑ひが浮ぶ……この画は奴隷刑罰史より選り出した、私刑の貴重な一枚です。



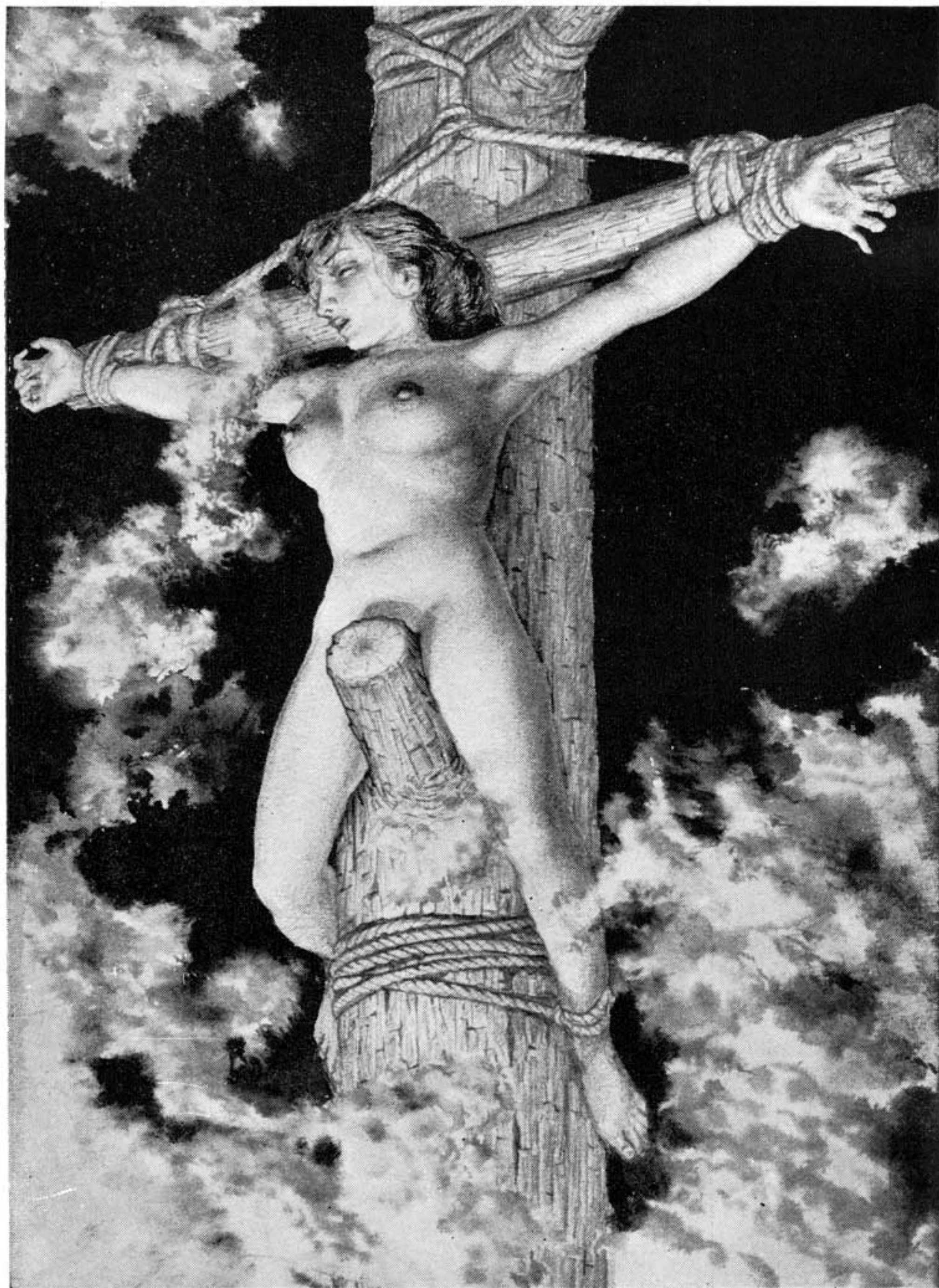
T. Kitahara

力盡きた女

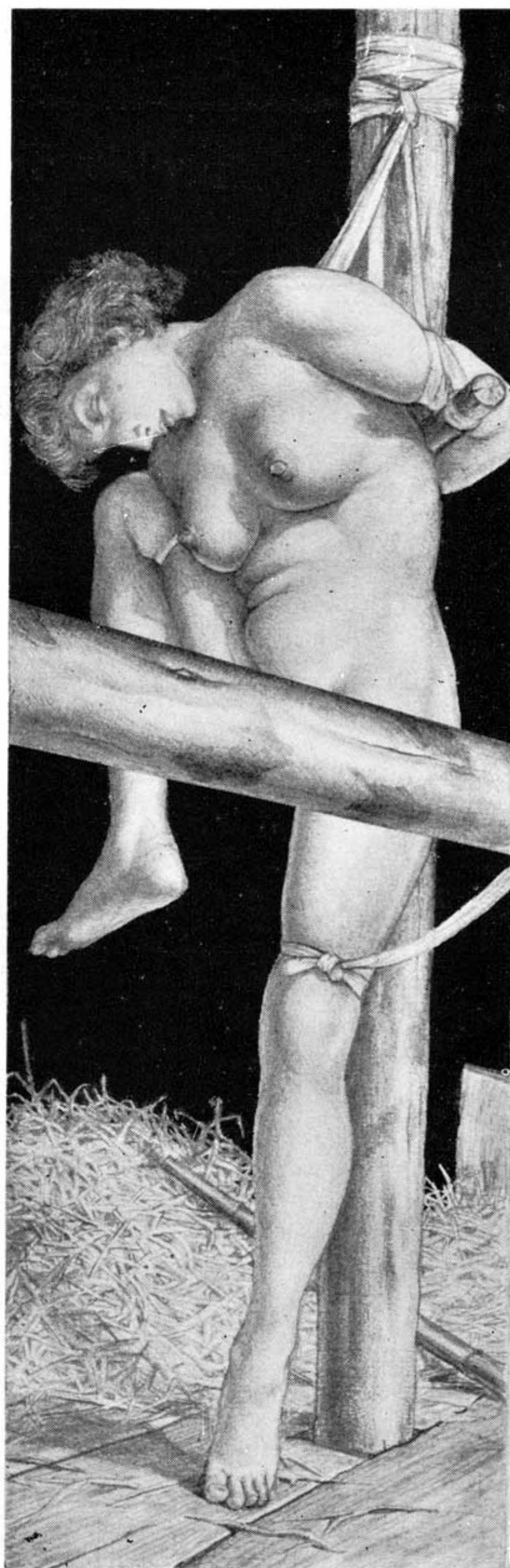
中川彩子妖美画集

空に磔^はられて

地上数十尺の天空に磔りつけられた豊満な美女！ 羞恥にもがく気力も消え、涙も涸れ果てた彼女の周囲に刻々と夜が迫って来る。何処からかギヤアツギヤアツと不気味な鳥の鳴声が……

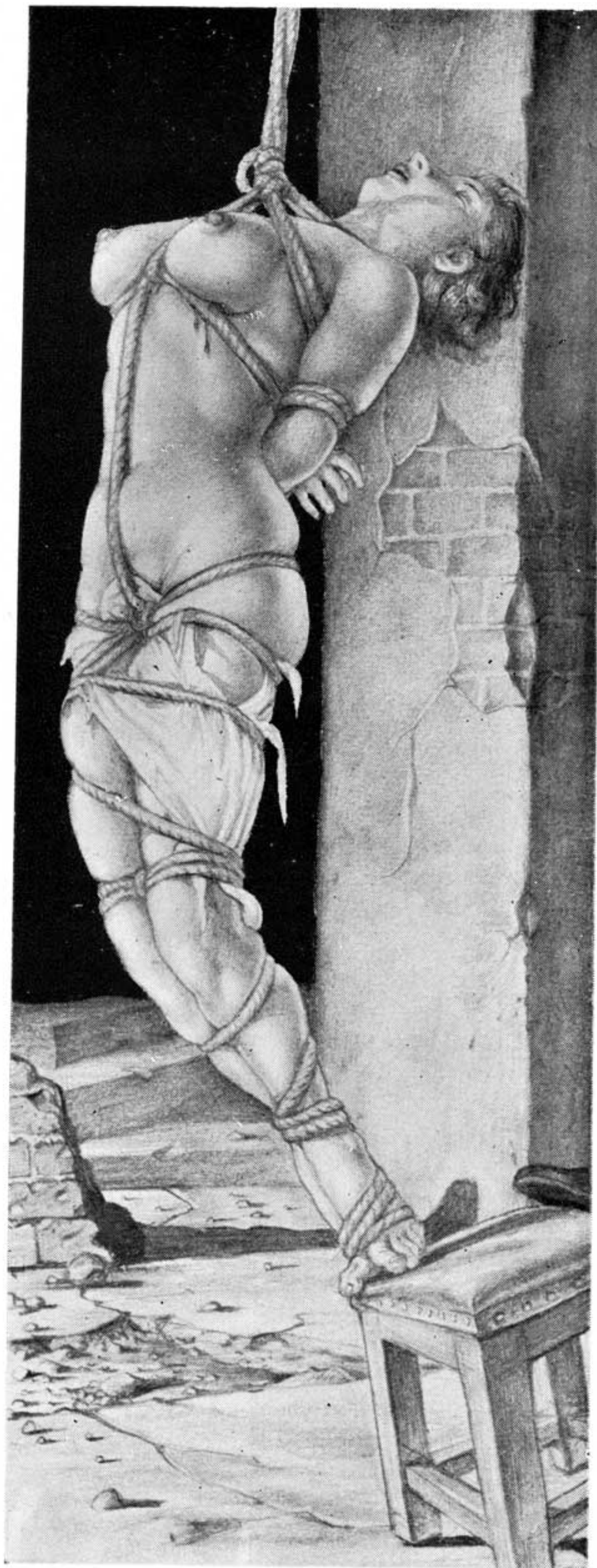


馬小屋



ムツと小屋中に漂う獣の臭い。餌料や馬糞の散乱する中にくゝられた真白な処女の肌が、時々思い出したように唇を洩れる苦痛の呻きと共に、ピクリピクリと震えている……

嗜虐地獄



泣こうが喚こうが分厚い壁にむなしく反響するばかりの秘密な地下室
ガンヂガラメの娘の肩や腰に、鞭が鳴り、淫らな罵声がからみつく。
爪先を支えた椅子さえ、無慈悲な悪魔の足は蹴り倒す……

繪

筆者の芳幾と芳年は井草国芳の門人で芳幾が兄弟子、芳年が弟弟子で、此二人が壯年客氣火の出

の血の色は薄紅濃紅朱漆（少し黒味を帯びてい
る）の三色刷りになつて居るのが特色であつて、
出版当時市内各所の絵草紙屋の店頭に掲げられた
時は朱漆がべとべとと光つて居たので、眞の血が
流れて居た様に感じられたという事である。

「英名廿八衆句」は「衛星二十八宿」をもぢつて附けた戯作者
の常套手段であらう。一名を血みどり血がいの絵とも呼んで居
る。出版当時の世相がそういう絵を要求して居たので櫻田事変
や上野の戦争で、江戸の人々の神経の刺激が強くなつて居た時
であり、江戸から東京への推移の産物と見てよからう。此絵の
特色とも云う可きは人間の血の色であつて普通は紅を用いる所
を朱漆を使つている点である。漆絵を錦絵に応用したのは初代
安藤広重の江房名所十二景の横絵と此二十八衆句のみで、此絵

解説

伊藤晴雨



慘 無 の 治 明

る様な壯んな闘志満々たる作品である。

芳幾は明治二十七年七十二歳を以て本所太平町一丁目に没したが晩年極めて不遇であつた。芳年は天保十年に生れ、明治二十五年六月五十歳を以て本所区亀江町の仮寓に没した。病源は永年の不

衛生から脳梅毒に羅つたのである。奇とすべきは此両者とも日本の名声を博して居ながら道楽の揚句、資産を湯盡して晩年は甚だ不遇であつた点の一致して居る事である。



允 埏 多 玲 子







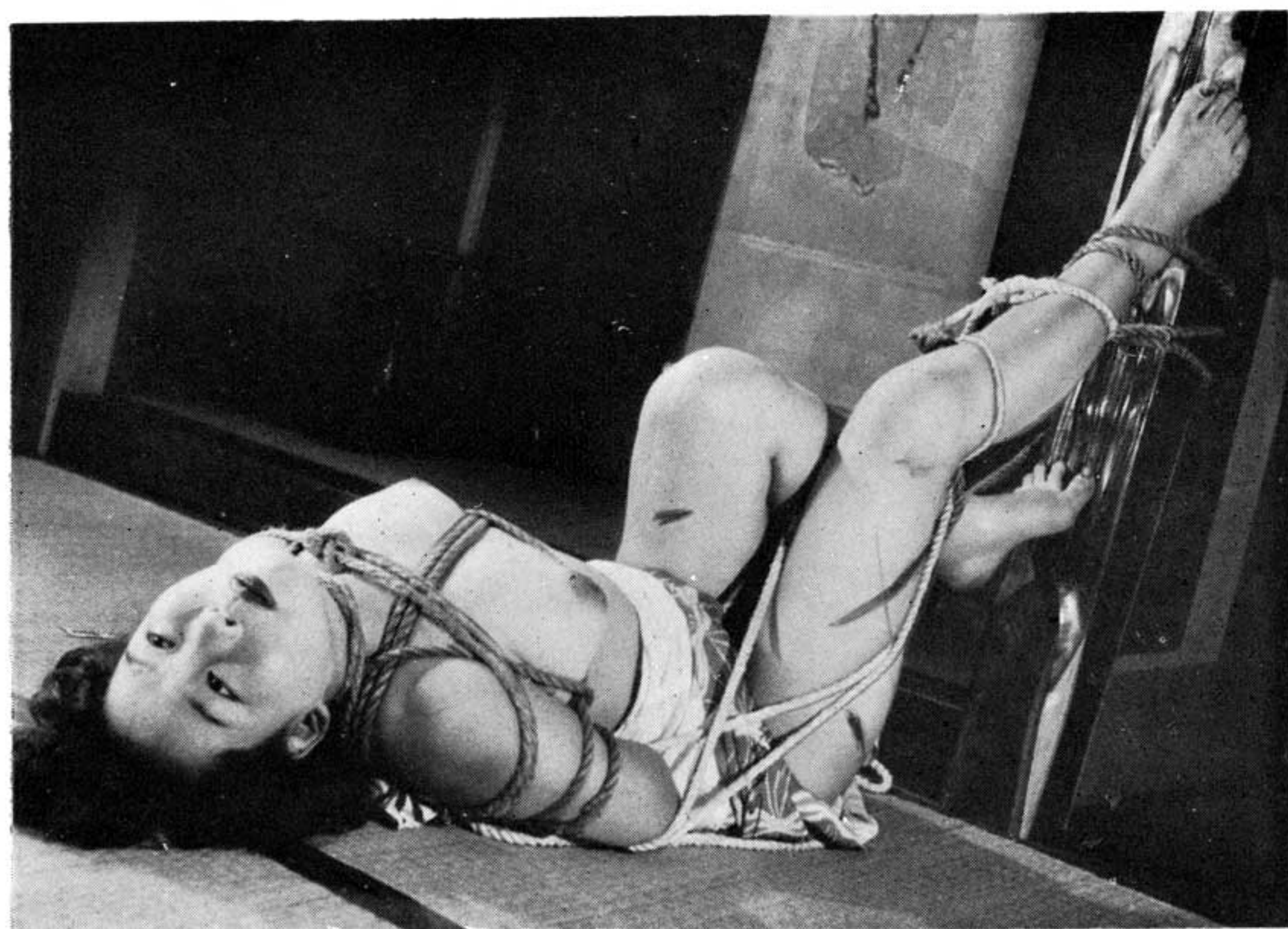
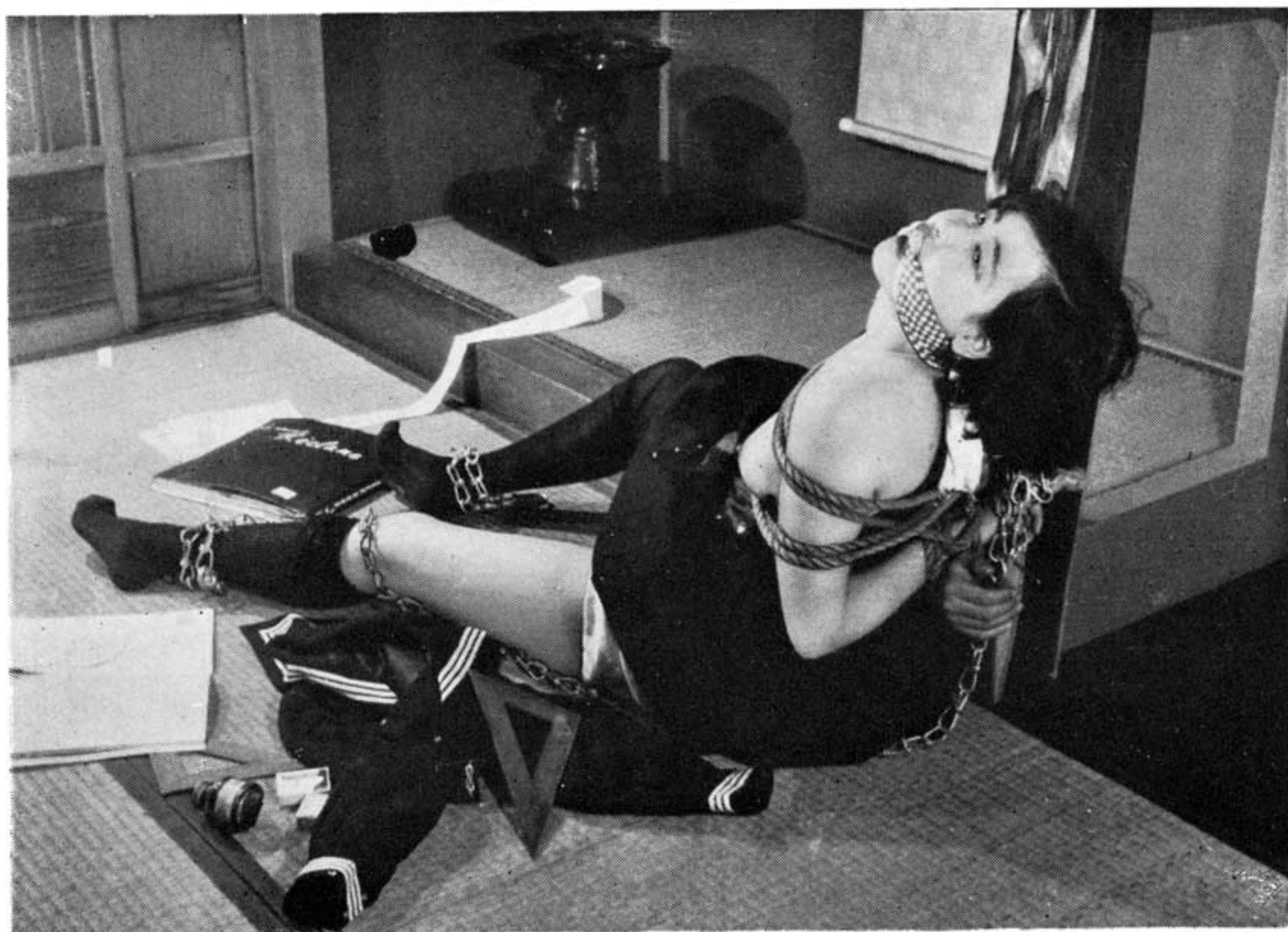
圖 構 の 辱 凌

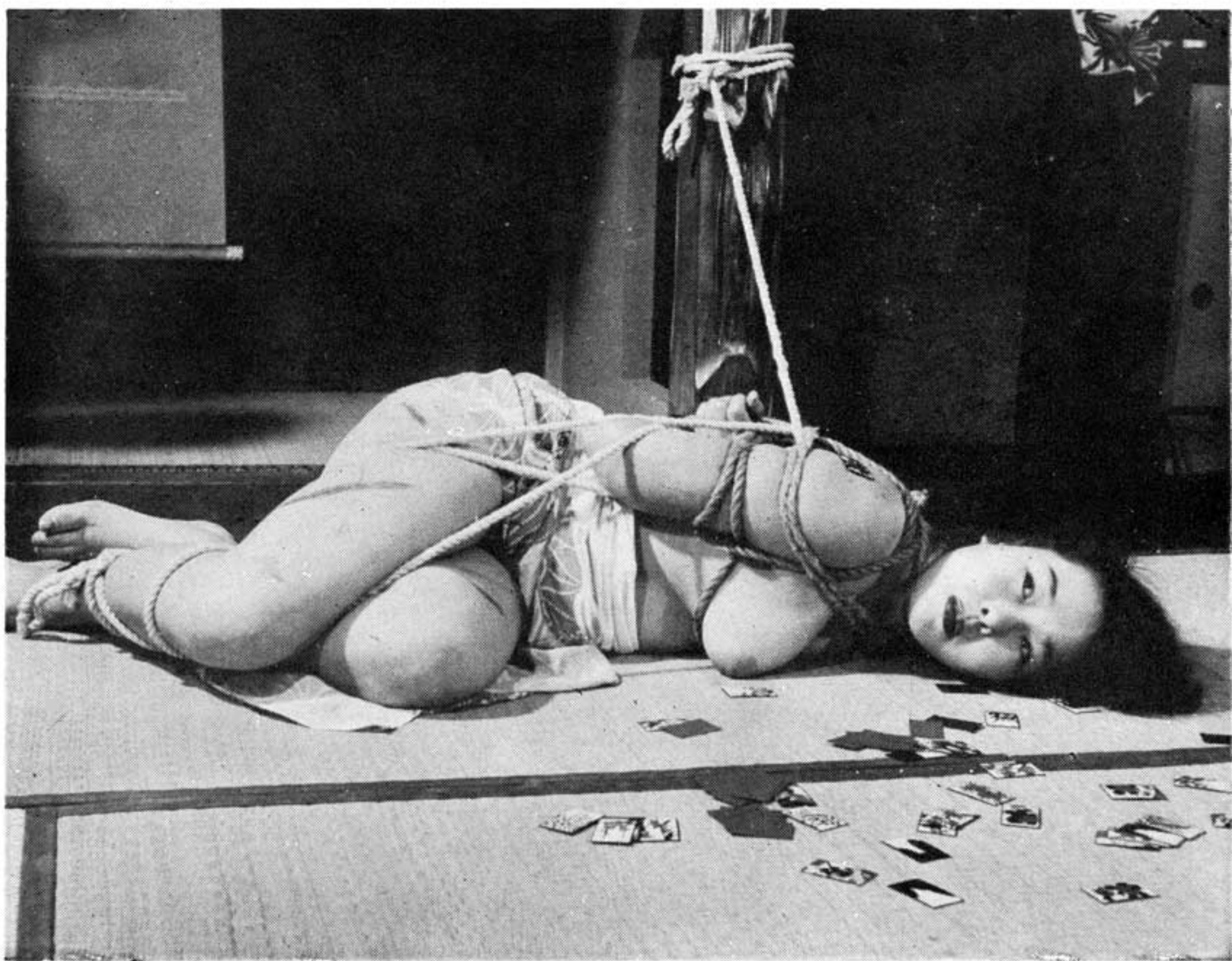
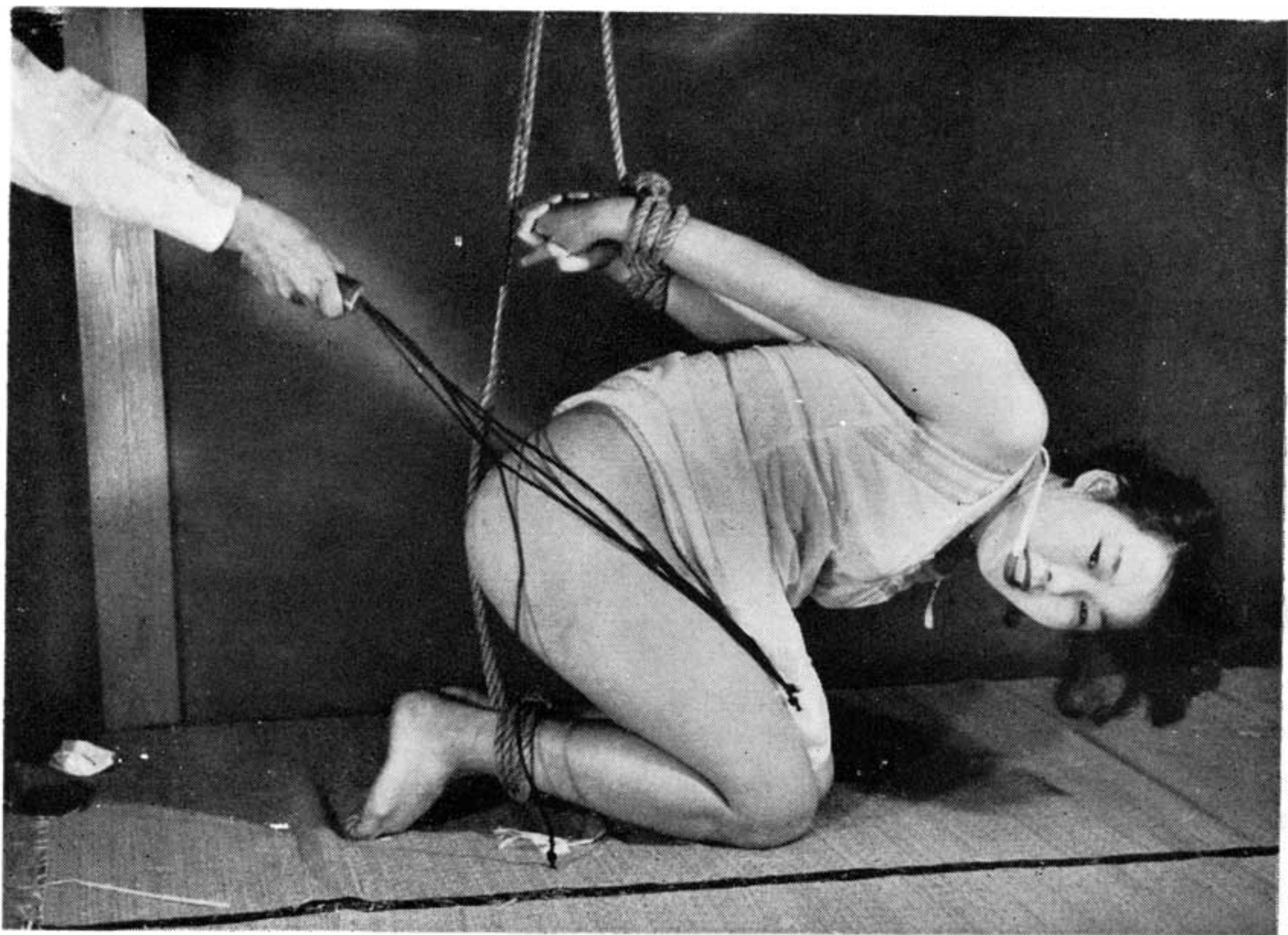
伯 画 雨 晴 藤 伊 する 指導 指

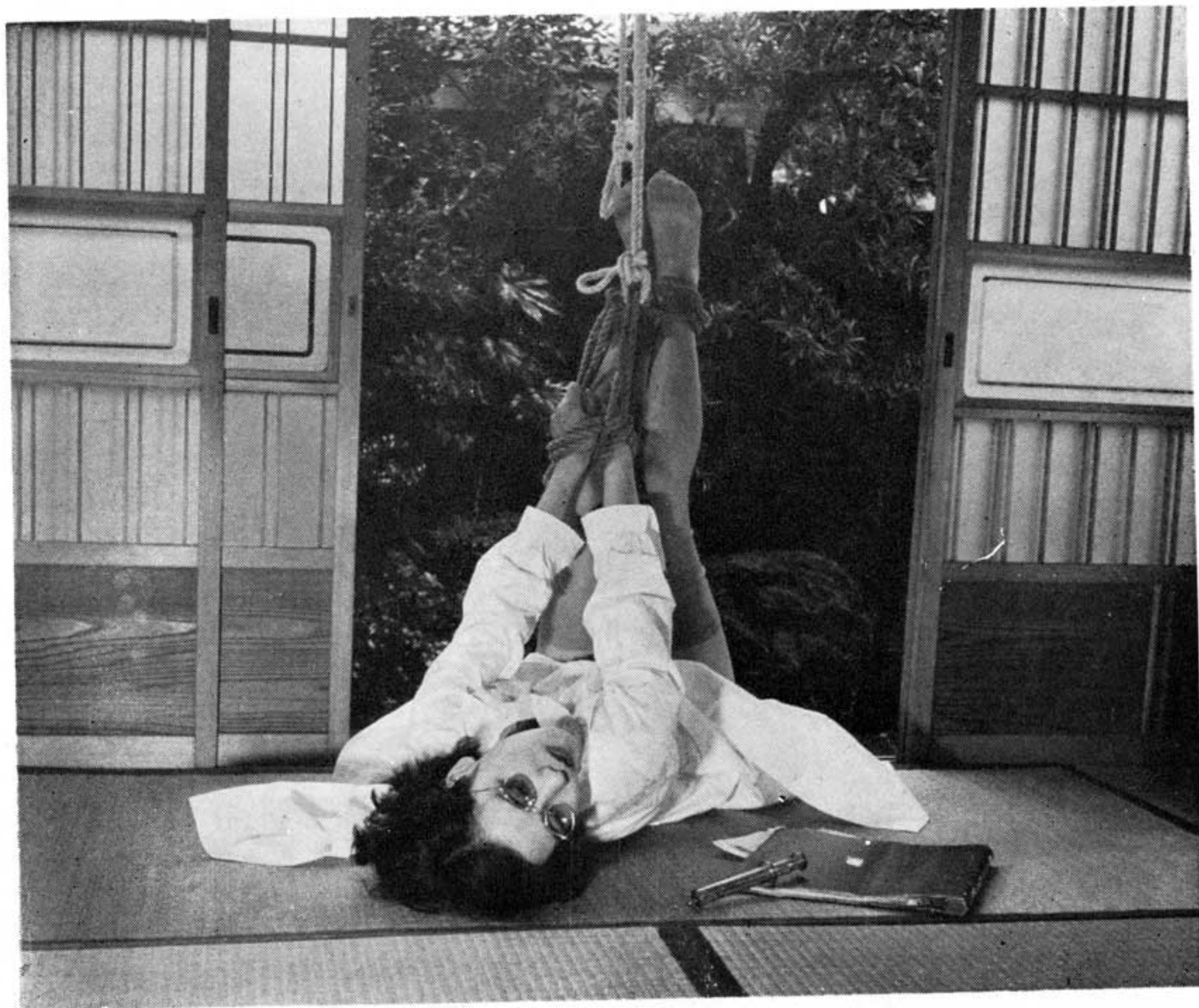
緊縛研究の長老伊藤晴雨画伯は、既に七十歳のお齡ながらなお矍鑠として、一度絵筆や縄を手にすればさながら青年の如く、責めの女体美を追究して倦むところがない。これは本誌撮影会に出席された画伯の熱心な指導スナップです。



眞 寫 寫 特 誌 本







モデルのA嬢はムチムチと肉体のいふ、豊満な体付で、性格も明るいらしく、響きのよい笑い声を立てながら、いくらいられても疲れる様子がない。キメの細かな眞つ白な肌で、盛り上った乳房は見事な緊張感があり、いかにも女そのものである。

B嬢のほうはそれと正反対に、ほっそり華奢な体付で、容貌も智的だが、彼女は実際にK大学の文科に籍のあるアルバイト嬢である。

紺のセーラーを着て、縄を巻かれ、裾がまくれあがると、処女らしい可憐な太腿が羞恥に震えて人々の眼に滲みる。彼女の顔ははじらいで眞つ赤となり、思はず顔をそむける様子も痛々しく、サジスチックな熱氣が返って部屋中に盛り上って来る。

花札が散乱し、三角定規やノートが投げ出され、鞭が鳴る。緊縛される女体にウツスラ汗が浮び、荒い呼吸が興奮を刻一刻高めて行く。悦虐の姿態が風に乱れる花のように、部屋中に交錯して行く。

悦庵園

玲子





絵	口
(四色) 刺青	北原環画
力尽きた女	中川彩子画
明治の無惨絵	伊藤晴雨解説
猥褻の六態	喜多玲子画
凌辱の構図	本誌特写々真
悦慮	喜多玲子画

責めの木馬責め研究記……………島崎哲 26

自転車の車体を改造した木馬に妻を乗せて試みる責めのかずかず！ 責めマニアの秘録

臀部マニヤ……………鞭岡麻冬 105

女性の臀部に憑かれた男が辿る人生日記！ 女学校教師の筆者がめんめんと綴る臀部礼讃！

剃刀男……………伊庭英夫 82

獣の閨……………島田悠次 41

ムツチリとした女の体がバツクリ割れて、紅い血がダラダラと吹き出て来る！ 剃刀の妄想に悩む男！

日本刑罰史 第五回 火焙刑地獄図……………菊山進 88

玲子十二ヶ月画集 霧……………喜多玲子 110

群狼……………佐々木恭 122

奴隷祭……………D・B・アレラ原作 三宅一朗訳 112

変態性慾者はこんな殺人をする……………三谷祥介 96

異常性愛の医学 (アブ・サイエンス)

縛る快感・縛られる快感……………高橋鉄 32

緊縛の性愛術——性科学の大家が緊縛の性愛心理を鋭く分析して読者に贈る特別大読物！

どんな男がマゾヒストか……………西島実 78

汚物狂崇症の性慾……………坂ノ上言夫 59

男色は治癒出来るか……………鹿火屋一彦 137

変態強姦二題……………武野藤介 142

落語糞尿譚……………正岡容 130

そどみあ大座談会……………164

男色喫茶店のマスター・ボーイ氏をかこむ比類なき大座談会！

レスボス通信 (女性だけの秘密な愛のサロン)……………園村恵子 148

読者交歓室 (サチ・マゾ・ソド読者の新設サロン)……………179

カマキリの雌……………鳥羽班子 154

非憤上月城……………岩堀光 184

催情指療師……………日夏由紀夫 66

上流家庭に出入して独特の技術で女体をなびかせる男！ だが崩れ女ばかりではなかった！

続夢魔……………松井頼子 48

一夜の変態遊戯を忘れかねて合寄る森津子と昇二郎！ 嫉妬とサチズムに色どられた凄まじい愛慾の、つばい！





風 俗 草 紙

現代人の新しい趣味雑誌



十二月号

木馬責め研究記

責め體驗記

素人の私の作ったものですが、手を縛つてまたがせ、足首にパイプのくずをぶらさげると、木馬は彼女の重量で自然に股を壓し、それだけで彼女は、耐へ難いうめき聲をあげるのです……

島 崎 哲



責めも、東洋と西洋とは非常に違う方法をとつて居る。例えば緊縛の場合でも、東洋は

昔から、高手、小手が好まれ、手首を高く緊縛する関係上、上体は前こごみとなり責めも蝦海老めの様に屈曲型が多く用いられて居るが、西洋の小説・映画・絵画等でみると、大抵手首を左右別々に縛しそれを左右に釣り、立つたまま両手を高く差上げた様な姿にして自由を奪います。

鞭打する個所も、西洋は殆ど全て臀部であり、東洋は肩又は背中が多い様です。

江戸時代罪人の鞭打部位は、高手小手にし

て肉の盛上つた肩を打つことになつて居ます。

西洋は最も美しい自然の形に緊縛して居る体は大した苦痛を受けていないが、体のすみずみまで他人の鑑賞にまかされて居り、羞恥心を利用して責めて居ます。

東洋は、不自然な形に緊縛された姿から、相手の苦痛を察して満足するのではないでしょう。か。閨房に於ける態位も、西洋に於ては伸長位が多く用いられ、東洋に於ては屈曲位が好まれて居ります。

木馬責は西洋の責め方ではないかと私は考

えます。

三角木馬に直立した姿のまま乗せて居る例は、東洋にはあまりなく、日本で昔用いられただけと記憶します。尤も日本の例は、三角木馬ではなく、丸太に馬の首をつけたものですが、「泣き叫ぶ青春」の様に臀部を露出させるために用いる例が多いのです。

切立つた三角木馬に、股部のみで全身の重量をささえることは、死を意味するものであり、愛するものの肉体を損じてしまふと言う事は、我々の意図する所ではありません。

しかし不安定な木馬に身をよじらす、姿の

魅力は、私の常々実現したいと思つて居るところのものであります。

大変前置きが長くなり恐縮ですが、私独特の木馬責めを語る前に、是非聞いていただかなくてはならない事と思います故御了承下さい。

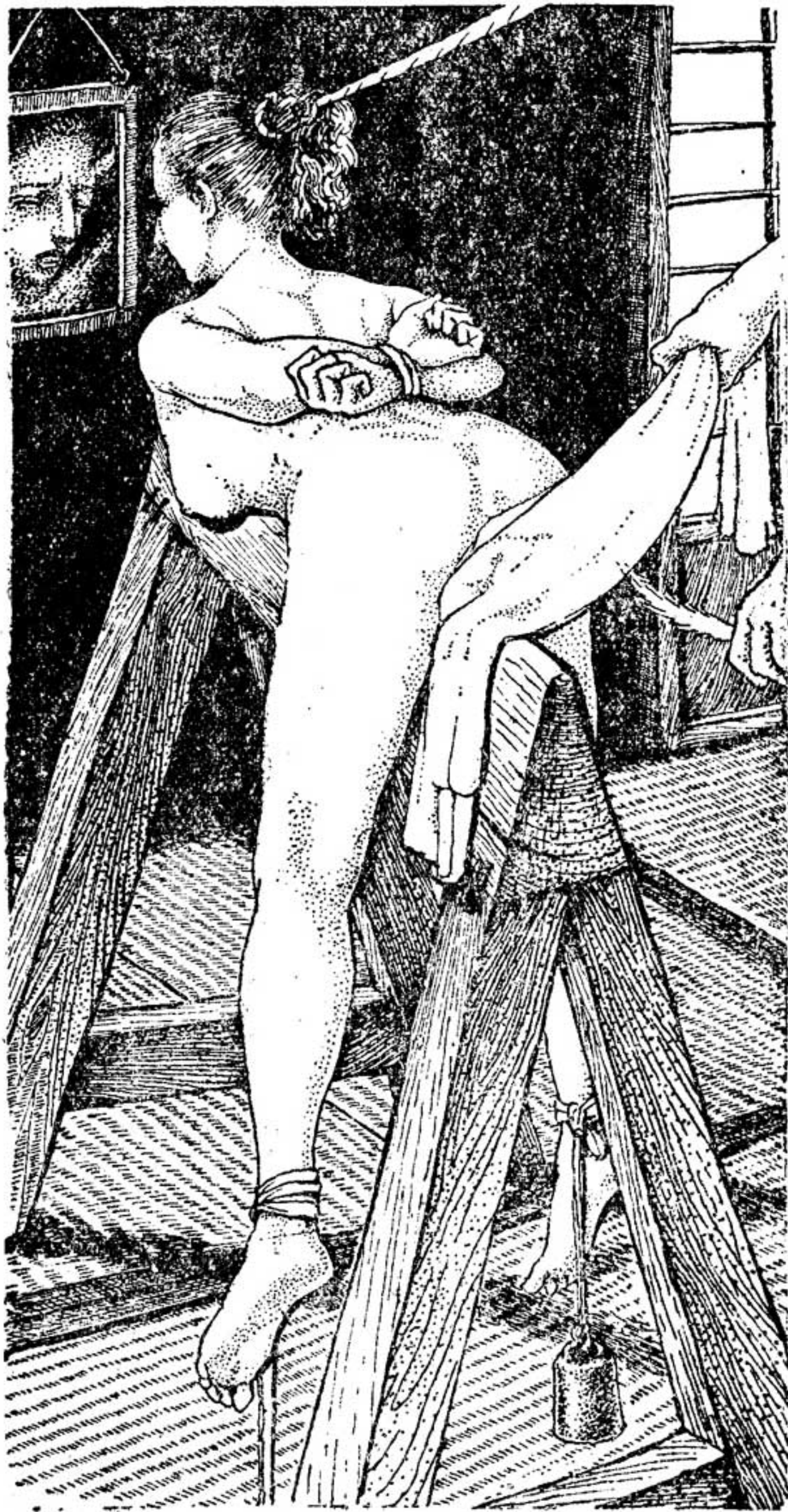
或日私は、夕暮時の学校のグラウンドを散歩して居りました。遠くに新婚夫婦らしい二人が、楽しそうに自転車（原文：自転車）の稽古をして居りました。夫が荷掛を押えて居ると、妻が不安定な姿で自転車にまたがり、夫が押してくれ、るままに一生懸命ハンドルを握つて居ます。自転車と云う

ものは、馴れば何でもないが、始めて乗ると馬鹿に高く感じ、両足が一度に地につかず、実に苦しいものです。

彼女も安定を失うと、両足を地に着けようとあせり、サドルの上で尻をよじり、背をまげ、安定を取もどそうと、あせつて居ました。私は、此の姿に非常な魅力を感じ、家に

帰るとすぐ自転車を掃除して家の中に持込みました。

高さ一尺程の台の上に自転車を置き、部屋の四隅からロープを引いて来て、自転車を固定させました。私の作業がやつと終つて手を洗つて居ると、K子が快活な足どりで帰つて来ました。



「今日はとても楽しいことをするよ」

「何よ、早く言つて」

と私をせき立てます。ゆつくり手を拭きながら部屋の戸を開けると、K子はびつくりした様ながっかりしたような表情をしました。

私が説明してやると嬉しげに、私に飛び付いて来ました。K子と私は夫婦ですが雙方の親が許さずその頃家出同様に東京に来て郊外の小さな家を借り、共稼ぎをして居りました。

美人ではないが愛くるしい顔に、スポーツできたえた、よくのびた姿態を持つて居ます。胴より足が長く、鳩胸の上に乳房の発達がよく、セーターを着ると、マンガノを思わせます。終戦の年に爆撃で死ぬまで、二年間は彼女と共に本当の幸福を味わいました。彼女は私の言い出す、相当な責めまで耐えて呉れました。その時も、新らしいこころみに期待を持つて居りました。

全裸にしたK子を後手にして、（高手小手ではなく）手首縛りにした縄で、胴の一番くびれた所を一まきぐつとしました。抱き上げて自転車に乗せ、足首に有合せのおもりをつけ、細いむちで打つたり、羽根の先で撥り責めをしたりしましたが、或程度の満足はあります。期待した程ではありません。K子は

自転車は得意中の得意で、両手ばなしは私よりうまい位です。彼女は自転車に少しも恐れず、実によく乗つて居ります。又責めの小道具は、責め場の雰囲気をおこす様なものではないけなわけ、今の私に必要なのはサドルだけであり、二つの車輪もハンドルも、邪魔であり、四隅から来て居るロープは雰囲気をおこします。

彼女がサドルの上で身体全体をくねらす程、責めれば、僅かにロープで支えられた自転車は台上からころがり落ち、彼女を傷つけます。

そこで不要なものは全部はぶこうと思い、自転車屋へ行き、最も小さい子供用の革サドルを購入し、それに一米ぐらいの鉄パイプをつけ、パイプの下端を大きな木の台に固定しました。

此の上にK子をのせると、彼女の大きなお尻は子供用の小さなサドルを殆どかくしてしまい、パイプが恥部から下腹に迄差し込まれて居るような感じをあたえます。

足首にパイプのくずをぶらさげると、彼女の重量と共に、股部を圧し、サドルが小さい故それが更に劇しく、乗つただけで彼女は耐え難いうめき声を出しました。

不安定な姿勢になつて居るK子は、私の責めをちよつとでも逃れる事は出来ません。ただ苦しげに猿ぐつわの下からうめくのみです。

私は大きな満足を得ましたが、素人の私がつくつたものです故、台がどうしても不安定です。

パイプを支える台は少くとも、彼女の重量以上ないと危険ですが、そんなものはないし、木材を二つ組合したものを用いた関係上、苦しさにもがくと台がひっくり返りそうです。そこで不本意ながら、高手小手に縛り、胸、腹等に充分に縄をかけ、殆ど天井から吊り下げるぐらいにしました。

綱が身体各所をしめつけ、K子はその姿のまま苦しさにもがいて居りました。

此の場合よほど注意して、各所の縄に平均に重さがかかる様に、しないと耐えられない苦痛になつてしまいます。私は元来縄をあまう用いるのを好まず、不自然な形に緊縛するのを好みません。

此の場合、両手を上げた形ですと、美的でなくその上苦痛の爲、腕に力を入れると身体が浮き上り、サドルからはずれて、本当の吊りになつてしまいます。

又高手小手でないと上から来て居る縄は、あまりにも補助的になり、それ自体の責めの感じがうすれるので、止むなく高手・小手にしました。

K子を此の台の上にのせ、上からも吊り、乳房のまわりを、羽根又は毛の剛い刷毛でくすぐりました。

本稿の題からはずれませんが、私は針を用いるのを好みます。肌に突差すのではなく、皮膚がへこむくらいにして、皮膚を破ることは絶対にありません。

責めのつきものとして、猿ぐつわはよく言われますが、目かくしは、あまり聞かない様です。私は非常に好んで用います。猿ぐつわも用いますが、よくよこれた布を口の中に入れるのが、猿ぐつわの本当のものだと云われますが、私は絶対反対です。

常に清潔な布を入れます。愛するものが細菌又は、汚毒で多少でも損われては大変ですから、私及びK子は、汚物に（又は異尿愛好的な）趣味は全然ありません。

猿ぐつわと目かくしをして、耳の前で両者をひもで結びます。そうすると猿ぐつわは絶対にはずれません。猿ぐつわのみを利用して

れてしまうものです。

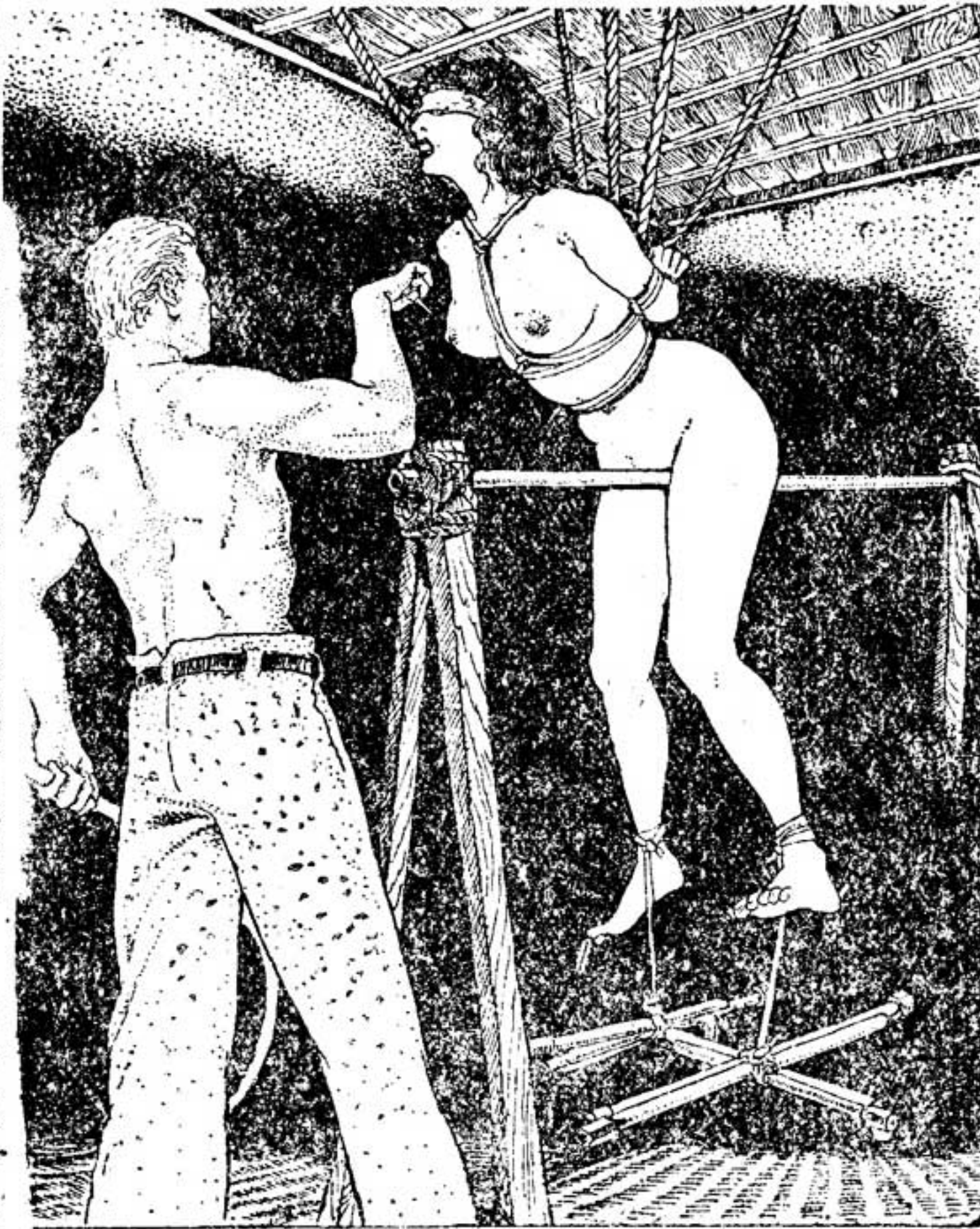
K子は全裸にされてパイプの上に乗せられ、足にはおもりを付け、高手小手で天井から吊られます。その上

目かくし猿ぐつわをされて、見ることも叫ぶことも出来ません。

私は両手に針を一本ずつ持ち、彼女の感覚の鋭敏な所でチクリ、チクリ責めます。

彼女は見る事が出来ないのです、私の手が彼女の何処をねらつて居るかが全然分りません。或る時は彼女が、体を引くであらう方に一方の手をおき、二、三纏体からはなして他方の片手でチクリと責めると、反射的に身を反対側によじると同時に、待ちかまえて居た針にふれます。

首から口に廻わした布は、いくら嚴重にしましても、疊、又は床にこすれば、すぐにはずれて、急に羽根に替え、そつとさわつただけで



も、彼女は針にさされた様に体を引込めます。

目かくしは、どの様な責めを受けるのかと体で感じる前に、他の感覚を通じて、或程度の覚悟を与えない爲のもので、私は殆んどどんな場合にも用いて居ります。猿ぐつわをしない時でも目かくし丈は用います。

猿ぐつわは小生にとつて、声を立たせないとか云うより、悲鳴とか、「よして」「苦しい」とか云う言葉に残酷さを感じてしまい、愛するものの、肉体の責めによる変化の観賞をまたげられるからです。

私にとつて責めは、それに依る女体の無限の変化の観賞のためとも云えます。

衣服をつけての責めは殆ど試みません。

私達は此の責めをパイプと名付けて、よく行いましたが、もはや木馬責と縁遠い恰好になつてしまいました。

又前にも書いた様な不満もあり、次のような本格的な木馬責めでしたら理想的です。

サド的性格を有する私は、戦前より苦勞して資料を集めて居りましたが、犯罪科学集の口絵に次の様ながありました。

戦後各誌上に転載されて居りますから、御存知の御方も多いと思います。フランスあた

りの絵画らしく、題は「マゾズムの女」としてあつたと思います。

地下室と思われる、コンクリート壁の物置か拷問部屋の様な所に、三角木馬が置いてあり、その上に婦人がまたがされて居ります。が、直立した姿ではなく、上体を前に倒し、腹及び胸を木馬の三角に、尖つて居る所につけて居ります。

木馬の上に俯向いて寝た姿勢で足は下に下つて居り、足首にはおもりがついて居ります。手は後手に縛られて居りますが、手首のみで、体に繩はまきついて居りません。頭髮をたばねて紐で結び、天井から吊つて居り、無理に顔を上げさせた、形になつて居ります。

上体全部で体重を支えて居るとは云え、三角形に尖つた木の上ですから、苦痛は劇しく又無理に頭を上げさせられて居り、殆んど身動き一つ出来ないでしょう。

私は此の写真を愛し、常にながめて居りました。

或日、私の所へ遊びに来たK子が、私の留守にそれを見つけ、私の帰つて来たのも知らず見入つて居りました。

私は自分の秘密を見られた恥かしさと同時

に、彼女の中にあるマゾ的性格を発見して驚きました。私はそんな性格故、普通な結婚は考えず、私を満足させてくれる女性でなくては結婚しないつもりで居りました。

さりとて小心ものの私故、積極的にさがすつもりはなく、一人悩んで居た所でした。それからK子と手に手を取つて家出するまで、充分二人は理解しあつたのです。

そんな事もあり、私の三角木馬の情熱は消え難いものとなつて居りました。然し乍らその絵のまま実現するにはあまりにも残酷で出来ません。恥骨と云うものがあり、下手をするとそれを折つてしまう危険があります。

そこで三角木馬を苦勞してつくりましたが彼女のまたがるべき所は、深く木をえぐり、綿をつめ、木の様な色をして居る布でおほいました。勿論K子の恥骨保護のためのものであり、それに乗せた場合、彼女の身体で殆どかくれてしまう様にしました。

やつと出来上つた日、真冬にも拘わらず二人で炭をおこして部屋をあたため、実行した日の喜びは今も忘れません。

K子を全裸にして、三角木馬の両側に台を置き、彼女自身で最も痛くない様な位置で、木馬の上にうつむきに寝てもらいました。三

角の尖り方も感じを悪くしない程度に丸くして、台をはずし、足首におもりを下げました。「大丈夫かい」と聞ききますと、黙つてうなずきます。

一生懸命支えて居る手を邪けんに取り、後に廻して縛ります。そして頭髪を紐で結び、除々に上に引くと彼女の頭は段々上向きになり、遂には反りかえる位になりました。

そのままの姿勢でも実に苦しく、股部を強く圧せられて居るので、もがく度に摩擦されK子はたちまち肌一面に、フッフツと汗を浮かべました。口は大きく開かれ、ハーハーと苦し気に息をして居ります。

此の場合目かくしの用はありません。

彼女の顔の前に鏡をおきますと、後方に居ながら、彼女の表情を見られます。臀部は鞭打をまつて居る様に、完全に露出して居り、二つの半球は木馬により、二つに切れそうです。

恥部の下に綿が入つて居るので遠くから見ると、木馬が肉身に切れ込んでしまつて居る様で、私の嗜虐心を此の上もなく満足させます。

彼女は顔を動かす事も出来ないで、私が後方で次の責めを準備しても、見る事が出来

ません。此の木馬になると目かくしを必要としない程、完璧なものになりました。

鞭を用いたり、針を用いたりしたが、それ以上に肛門責めが最適です。詳細は遠慮しますがその位置が私が彼女の表情をみながら、そして彼女には私が次に何をするかが分らない、一番よい位置である事を附加します。

此の責めは、そのままの姿でも大変苦しいものですから、最高十分を限度として行いました。此の木馬が出来てから、パイプ責は全然行わず、直立してのせる時も此れを利用しました。

此の木馬なら、上から吊らなくとも、大した危険はなし、落ちそうになればすぐ助けられるだけの餘裕があります。

戦のはげしい時、食糧もなく真暗な人世に二人だけの夜があつたことは、一生忘れられないたのしい時期でもありました。

共稼ぎの關係上、彼女の手首等に、みにくいあとを残すことは出来るだけさけ、手首は必ず巾の広いやわらかい布で巻きました。

責め終つた後は、必ずK子の全身をマッサージュして、血行のよくない所がない様にしました。

殆ど動く元氣もなくなつて居るK子を、マ

ッサージュするのも私にとって、大きな喜びでありました。

しかし此の私にとつて全てである、可愛いK子が無残にも戦争は私から奪い取りました。忘れもしないあの大空襲の日、K子は出勤したまま私の所へは永久に歸つて来ませんでした。彼女の死体をだいて、どれ程泣いたことか。私は今、此れを書きながら泣けて泣けて仕方がありません。

私はその時以来、真暗な人生を墮性のまま生きて居るだけです。

愛 読 者 週 信

私は結婚に破れてから、自分がソドミアである事を知りました。どうしても、女性より男性の魅力にひかれてしまひます。此の性質を打明ける人もなく悩んで、自殺迄も考へた事もありました。

併し幸ひな事に貴紙を発見し、友を御紹介頂ける事に一縷の望みをかけております。四十才以上の柔和で気品ある肥満型の紳士、なるべく名古屋近郊の方を。私は当年廿七才で五尺三寸、容貌は知性的な感じですが。能動、被動いずれでも結構です。(名古屋 竹橋)

緊縛の性愛術

縛る快感・縛られる快感

女性には愛する人に強い力で抱きしめられることが大好きなものである。身体中、胸からお腹、背中、脚まで全部を緊縛されたように。この秘願が亢進すると、手枷足枷を締められたと空想するだけで興奮してオナニーをするというような實例も少くない。……



高橋 鐵

古澤 岩 美 畫

1 淑女を縛り上げた少年
2 息苦しくさせるヨロコビ

3 縛られたがる女たち
4 男を縛って愛撫する情熱女

5 キリストを夢みる男たちの實例

6 戀愛・結婚中の實驗應用——

性愛緊縛の快感（スプリーニングやネッキング）

1 淑女を縛り上げた少年

何の理由もなく縛つたり縛られたり、或いはそういうところを見たりするのが実に嬉しいという心理がある。

西洋の文献に現れた最も有名な実例の一つは、スッチェルバーク氏の報告であろう。

Xという聰明な一青年。彼は幼い頃から、手錠や足枷をはめられて投獄されている囚人に異様な興味を抱いていた。シペリアの氷獄へつながられて行く徒刑者は特に彼の空想の中心で、自分自身がそういう流罪人だと考えると、わくわくした。

ところが、思春期以後になると、その空想の対象は、女囚でなければならぬようになり、やがて、女は女でも、華麗に着飾り美しい靴をはいた淑女が縛られていることを夢みて興奮するようになった。

ただ、そんな空想はなかなか実現出来ないで、彼は自分自身を両足を鎖で縛り上げ、独りの部屋を歩き廻つたりしてみた。それは大して嬉しくなかつた。

そのうち、間もなく、この十五歳の少年は十も年上の素晴らしい淑女と親しくなり、或るとき思いきつて自分の秘められた空想を打明けたところ、彼女は眼を輝かして「あんたがそんなにし

てみたいならしてもいいわ」と云う。

彼は燃え上つた。そして美しいその肉体にとり縋つて、彼女をうしろ手に縛り上げた。次には両手を縛つた上、両足を揃えて、縛ろうと夢中になつた。彼女の美しい脚がパタパタ蹴つて瞬間、靴先が彼の股間を微かに蹴つた。と、その一触と共に彼の興奮は爆発しほとばしつてしまつた。エジャキュレートしたのであつた。

そのときから、彼は永いこと、彼女一人を対象にして青春をおくつたのである。別に、オナニーもしないし、彼女の肉体を乞いもしない。ただ、それだけが彼の白晝夢であり、夜の夢でもあつたという。

これは、代表的な（純粹な？）緊縛のサディズムの一例だろう。しかし、こういう美しく優しい女性が縛り上げて身悶えするような姿を美しく感じる心理は多くの人にありがちなものである。

ニッポンの歌舞伎劇でも、絢爛たる「金閣寺」の雪姫が柱に高手小手に縛り上げられ、牡丹のような裾も露わにしながら白魚の足だけ出して床に絵を描く場面など、私たち心理学者が見ていても、思わず溜息が出る。

又、「明烏」の中の遊女浦里が、愛人時次郎をかばうため、鬼のようなボス達に、雪の庭へ、長襦袢一枚にされて縛りつけられる場面は、痛々しくて吐がたちながらも、幻の絵をみているような絵画美を感じさせられる。

このような「しばり」の心理については、私も数々の著書で事例を分析して来たが、現在までの学説では、昔々、男が暴力で好きな女性を奪つて来てワイフにする、いわゆる「略奪結婚」の欣びが今に残っているためだろうといわれている。

又、男は原則として、或る程度、女性に苦しみを与える欣び（サディズム）があるから、その表現の一つだと解明されている。それで、この傾向の強い人は、犯罪に陥り易いことだけを警戒しないといけない。

数年前に、或る「青線区域」の女たちから赤裸々な生活実態を語つて貰つて速記をとつたことがあるが、そのとき、一人が次のような話をしてくれたものである。

「うしろを縛つてしまつて遊ぶの。若い人ね。二十五六の人。

『僕変なことするんだよ。勘弁してね』『どうぞ』『怒るだろう』と言うから『怒らないわ。やつていいわ』といったら、『じゃあごめんね』と言つて、うしろへ手を廻す。『アレ、変つたことするわね。こんなことあるの？』と言つたら『あるよ』『そう』……そうしたら、うしろへ縛つてしまつて、全部脱がして、それで『悪いね。勘弁してね』と云つてあやまつているの。殴つたりはしない。だから強姦しているみたいな感じなのね』（速記録のまま）

——なるほど、これでその男は犯罪にならぬ程度で自分のサド願望を満しているんだなと私は苦笑をもらしたことである。

2 息苦しくさせるヨロコビ

いろいろな動物の交尾を観察していると、ライオンなどから家鴨に至るまで、雄が上から掩いかぶさつたまま、雌の頸や肩をくわえ、まるでうしろから絞めつけるようにしながら行うものが多い。

雌もそれで案外よろこんでいるらしいのである。

だからこそ、性科学者クロツツ氏などは、そういう動物的な態度（脊向位）こそ最も自然であり、人間でも女の髪が長いのは、男がうしろからそれをつかんで行うように発達しているのだと主張している。

又、性心理学のエリス教授は、凡ゆる動物は——人間も含めて、性愛の表現中、肉体をおさえつけ、息苦しくさせることに無意識のヨロコビをもっていると説いている。

特に、その傾向は、男（雄性）のほうが強いのが、普通なのである。

こういう心理をよく自覚しておかないと、脱線し易いものである。

強姦犯人などが、女を縛つて犯すのは抵抗力を奪つて悠々と行うためであることは云うまでもないが、縛ることを女が合意でも、縛つてやれば強姦罪になる。刑法で、これを「抗拒不能の状態」という。

先年なくなつた法医学の泰斗浅田一先生の話によると、次の



ような珍犯罪があつた。

或る館屋が、子守娘などが集つて来たのを見て、

「両手を前へ縛つて、その手の中へ脚を入れられるか。入つたら御褒美をやるか」

と云い出したのである。

すると、一人の子守娘が、後に残つていて、あたいがやつてみると申し出て、一生懸命でやつてみた。その格好をみた館屋がそのまま難なく犯してしまつたという。

なるほど、これでは、いわゆる「海老責め」に似た姿態になり、「抗拒不能」状態を呈するであろう。勿論、その珍犯人は強姦罪になつたのである。

普通の強姦犯人、殊に常習的な強姦魔は、もつと惨虐な脱線に陥り易い。

例の小平義雄など、判つただけでも十人の女性を皆、強姦した後、絞扼殺している。考えようによれば、強姦よりも「息苦しくさせる」ということのほうが好きな異常サディストだと云えよう。

内村祐之博士の精神鑑定記録がそれを一番正確に伝えているではないか。以下、博士の原文のまま。

彼の犯行の遣り方は？

「まず女を殴り、次いで頸を絞めて假死状態にします。……三十分ぐらいすると息を吹き返し、深い呼吸をして来ます。そこで揺り動かしてズボンを脱げ、ズロースを取れと命ずるのです。……絞めて後は全部のものが大小便をしました。私がふ

いてやつてから関係するのですが、充分快感はありました。関係している間、女は眼を開けて手を拡げて居ます。云々」
しかも、散々弄んだあげく、この淫魔は再び本当の絞扼殺をしたのである。

彼の本当の淫楽が、性交自体よりもサディズムそのもの（首シメ）にあつたことは、次のような自供で明白だろう。

第一の宮崎光子さんの場合——「そこで宮崎を倒し、馬乗りになつて頸を絞めたのですが、この間に射精してしまいました。この時は本当の性交の時よりも快感を感じました。このことは今初めて申し上げます。六疊の間に來ましてから煙草を吹かしながら蘇るのを待つて居ましたが、女がズボンを脱いだ時また半分位勃起しました。しかし今度は二回目ですから餘りいい気がしませんでした。云々」（同精神鑑定記録原文のまま）
これを契機として、小平は、絞扼殺の強姦魔になつたのである。

ここが、問題だと云える。

小平は、妻の陳述によつても「関係はすぐして簡単にすませます」（同原文のまま）という。

つまり、彼は、早漏気味で、どの女とも、「本当の性交の時に相手を極致性感（アクメ）に達しさせたことがない男であつた。従つて、女性がアクメに入つて取乱し身悶えし、息苦しくなり、取廻るようなところを見たことは少かつたのである。

そのため、絞殺や強姦で苦しめて欣ぶ。精神分析では、こういうのを「代償行爲」という。

大正時代、尼さんばかり狙つて強姦致死をやつた淫虐魔大米龍雲も、よく絞扼殺でトドメをさしたものである。

「本当の性交」がうまくいかない、こんな犯罪にかりたてられるから危険なのだ。

首でなく、胸などを縛つたりしても、まずくすると、「胸壁圧迫」「呼吸逼迫」の極に達し、致命的なことになり易いから。

3 縛られたがる女たち

世界中、どこの男女でも、アメクの時には苦しそうな表情になり、凄い力を出す。この種々相については私も山のような文献を引用して近著中に書き盡したから、ここに省略するが、第一、アクメのときでなくとも、特に女性は、愛する人に強い力で抱きしめられることが大好きなものである。身体中、胸からお腹・脊中・脚まで全部を緊縛されたように。

そのため、良人や愛人がそうしてくれないとか、或いは、それでも足りないほど締められたい願望の強い女性は、絶えず縛られたいという秘願を抱くようになる。

事実、こういう女性は、統計は出ないけれども、夥しい率だろうと思う。

手枷足枷を箠められたと空想するだけで興奮してオナニーをするというような実例は少くない。

その一番、演劇的な例は、一七〇〇年代のフランスの侯爵モンペリエ夫人だろう。

彼女がポルドーの葡萄酒醸造家サパチェの令嬢として育ち、モンペリエ侯と結婚した。ところが、どうしたことが、優しい良人を嫌つて……初夜にも身体を許さない。そして夫妻共、悶々の中に一カ月過ぎた。その或る夕、この処女妻は物思いに沈んだまま、独りで広い庭園内をそぞろ歩きしていた。

そのとき、どこからともなく忍び寄つた三人の黒装束をした怪漢が彼女に襲いかかり、美しい顔には猿ぐつわ、両手は身動きも出来ないように縛り上げられて、叢の中に抛り出されてしまった。救いを求める自由も奪われている。と、漸てその兇漢のうち二人が立ち去つた際に、残つた男が飛びついて来て、縛られたままの処女の身をオモチャにし、良人にも捧げなかつた蕾を散々に散らしてしまつたのである。

男は、グッタリしている夫人のいましめをとき、猿ぐつわを脱がせ、自分も覆面をはずして顔を近づけた。それは——怪漢は侯爵自身だつた。と、夫人は夢中になつて彼に抱き縋り、キスの雨を降らせたのである。そして二人は、夕闇の叢で再び、初夜の交情を繰り返した。

その瞬間から、彼女は真実、良人を愛するようになったと云う。しかし、交情の度毎に夫人は縛り上げてクタクタにされてからでなければ、興奮も性感も湧かないのだつた。

こうして、結婚生活十五年後、侯爵は死去し、それから後はルイ王廷などの男たちがこうしたサド的な愛を示せば、彼女は夢中になつて征服され、あらゆるアクメをみせたという。

これが評判の実話だとして、一七八〇年刊のチモテ・ジョリ

著「現代美女遭遇記」に書き残されている由、畏友矢野目源一氏の紹介による。

こういう例は、日本にもないことはないのである。——昭和廿二年、名高い作曲家T・K氏が弟子であり愛人である〇〇千里さんを監禁して、ひどい「縛り」をやつたというので、千里さんの母親から訴え出られた事件など、その一つであろう。

K氏は二人の愛のベッドへ、彼女にアルミの手錠をはめ、布製の足枷を施し、その肉体を、お腹と脚を二重に縛りつけて、暴逆を加え、炊事と廁へ行くとき以外は許さなかつたという。

それなのに、彼女は逃げ出さない。そして父親が東京地検へ母親が世田ヶ谷署へ訴え出て、連れ戻されたときも、「両親の迷惑になつてはと思い、泣くような気持で戻りました」と探訪記者に語っている。

——彼女自身も、モンペリエ侯夫人と同じマゾ女性だつたに相違ないではなからうか。

4 男を縛つて愛撫する情熱女

このように、愛する異性を縛つておいて狂喜するのは、原則として男のほうが多い。

けれども、主客顛倒のこともないことはないのである。

日本の吉田御殿とか姐妃のお百、鬼神のお松など、そうした「男しぼり」の譚は数限りないが、前記と同じくフランスの十六世紀末にナント市の修道院で起つた怪奇事件は正にその白眉

であろう。

徳高き四十二歳の尼僧でその修道院長だったセシルは、なぜ刑死しなければならなかったか？

この尼僧院は、強僧のもとに弱僧なしとかや、よく通り掛りの人や旅僧を泊めた。そして、総掛りで男を縛めて、次々に弄ぶ。文字どおり「念佛講」である。

しかも、男が性力を喪いかけると、その根元を紐で緊縛するのである。そうすれば鬱血状態が去らずに役立つからである。

その結果、セシル院長が現れて犯し、ヨニで男のを咬み切つたという。(これは、現代科学でいうと、鬱血させたまま、彼女の陰痙攣にも等しい括約力のため、脳動脈硬化症や心臓病の人が頓死を遂げる場合、或いは陽物壊死や慢性勃起症の結果死に到る場合であろう。でなければ、疲労の極、絞殺でもされたのだろう)

こうして、屍体は森の中に葬られてしまう。それを、最後に唯一人だけ助かつた男が訴え出たため、尼僧院事件が明るみに出たのだそうである。

ところが、このような「男縛り」が、我国にも発生して当時の司法界で問題になった事があるから面白い。

今、資料を見失っているので、正確な年月や所を忘れたが、大正初期の事だったと思う。

さる地方の女工寄宿舎へ、顔見知りの出前の小僧が立ち寄つたところを、女工達十数人が皆で掴まえて縛り上げ、イタズラしてエレクトロスさせてから根元を縛り、次々におこなつたので

ある。そのため、少年はビッコになつてしまった。が、「女の強姦」というのは刑法にないため、論議のタネになつた次第である。

兎に角、こうした数々の実例によつても、女性たちにも、縛りたい欲望が潜んでいることを判つていただけよう。

愛の独占欲が昂じると、相手の自由さえ「束縛する」という。又は、俗に「家庭にシバつておく」などという。

情死する時などはその束縛慾がひどくなり、二人の胴や腹や手足をシツカリ縛りつけたまま死ぬのが多いのも、畢竟、心理は一つである。

大正十年、哲学者野村暎畔が女生徒岡村梅子(24)と死んだ際も、半月後、死体が発見されたとき、梅子は、野村氏の着物の袖から手をさし入れて先生の脊を抱きしめていて、はなれなかつたという。

先年、太宰治氏も愛人と紐で胴を結び、抱き合つたまま発見されたが、特に彼女のほうは、男の頸を両手で抱き締めたままだったのである。

女性にも、こうして「束縛」したまま離すまいとする心理が強い。生理的に云えば、陰痙攣ワキニスムスのように、肉体で肉体を縛り締めつきたい作用がある。婦人科学や法医学でいう「陰莖捕虜」ベニスカフツウである。——それを、紐や縄でやるのが、「男縛り」のおこないのだ。

5 キリストを夢みる男たちの實例

前にあげた娼街でも一人の女が次のような珍談を話してくれた。(速記録のまゝ。時は昭和廿三年の事だからガーゼなどは貴重品だったのである)

「お医者さんで来るたびに配給のガーゼの反物二反もつてきて体にまきつけ、高小手小手に女に縛らして、そしてその上に乗つけて自分が満足している人があるわよ。遊んでいくたびにガーゼを置いて行つてしまう」(笑)

こういう例も少くないが、私は、同性愛にマゾヒズムや露出



症等々が加つた珍らしい実例を二つ語ろう。

一人は或る名門出のフランス文学者だった。

彼は明らかに同性愛の傾向が強いが、変つてゐるのは、野性的サド的な相手を見つけると、二人で近県へ旅行する。

旅館の一室を締め切ると、相手に暴力的に裸にしてもらつて柱へしばりつけさせ、両手はキリストのように上へ高くあげたまま縛らせる。それだけで彼は興奮に燃えてエレクトするのだが、その上、鞭などで身体中はれ上るほどなくつてもらうと遂に絶頂に達して噴出するのだという。

又、も一人の紳士はさる中流会社の社長であつたが、支那事変に狩り出されて下士官をつとめていたとき、野獣のような隊長と衝突して現地の良民を護ろうとしたのがキツカケで、或る日、

ひどいことを命じられた。

現地の婦女を強姦してみろと云うのである。

そこで、彼は必死に拒んだ。すると、その隊長は猶一層憎んで、彼を全裸にし、道端の電柱へ縛りつけたものである。

同僚も通行人も気の毒がりいつか助けようとして集つて来るところが人間の心理というものは何たる奇異なことであろう？ 彼はぐつたりと「曉に祈り」ながら、性は興奮し、みるみるエレクションを起し何時間か元に返らなかつたという。

この時から彼は、他の人の前で裸になれなくなつてしまつたのである。人が（特に、女よりも男が）彼の性器を見ていると思うと、エレクトして、そのまま縛られたような格好で裸を露出したくなるから。

この両氏とも、人間としては実に立派な善意の人なのである。ただ悲しいのは秘願である。

6 戀愛・結婚中の實驗應用

性愛緊縛の快感（スプーニングやネッキング）

男にも女にも、愛する人を縛りたい、束縛したいという熱望があり、又、愛する人に縛られたい、束縛されたいという気持ちも心底にひそんでいる。これは、大体、お判り下さつたであらう。

この心理は、精神的な「束縛」だけでなく、時には（交悦のラীগや抱擁中に）息がつまるほど抱きしめ絡み纏りたいとい

う肉体の欲求になつて現れる。

だから、「縁結び」「結婚」「交尾」などというのである。支那では又縁が結ばれることを「赤繩、足を繋ぐ」と言い現している。眼にみえないナワで足をつながれるのが愛なのであらう。こういう性愛心理をうまく応用すれば、犯罪や極端な異常行為までもなくてもシバリの快感はお互いに満足出来るのである。たとえば、「スプーニング」と云つて、二つのスプーンが重なり合うようにピッタリ抱き締めて臥るヨロコビなどは、肉体による緊縛に他ならない。

又、「ネッキング」という頸を抱き合う抱擁や頸への接吻を交しあつていれば、軽度な発散で救われる。

その他、紐で首引きするようなコイツス方式もあるし、キリストのハリツケに似た態位も二人の間ではなかなか有効である。男上位の場合に、ヴァン・デ・ヴェルデ博士やその亜流は、肘で支えて重味をかけないようにと口癖のように注意しているが女性によつては、肘などで支えず、男の重味をかけて「息苦しく」して貰つたほうが絶頂に達し易い人もあるのである。

又、女性にとつては、アクメの後（或いはいつまでも絶頂に行かぬままに）結合して眠る保留性交を欣ぶ場合が少くない。肉体で肉体を縛っているような気がするからである。もちろんお二人にとつては、あまり極端でない程度の緊縛アソビは、時に変化ある前技になるだらう。そうして新鮮さを求め合えば、「異常も愉し……！」愛の生活に於ては。

變質者ざんげ

獣の園

—ある動物愛好者の手記—

ゴリラのハナ子は毎晩、奇聲をあげて私を迎えた。
夜も晝も殆んど衣服を着更えたことがないから、私
の鉢には獣の異臭がしみこんで、同僚たちでさえ顔を
をしかめる……

島田悠次

動物たちも、やはり晝間は落着かないように見える。子供や暇人たちの見物が多く、雨の日でもない限り、相当に人の出入りが激しいから、無理もないと私は思う。

例えば狸にしてもそうだった。これはひどく陽気で、ユーモラスな獣のように思込んでいる人がいるのだが、実際には決してそんなことはない。此奴は大変憶病で、むしろ神経質だと云つてもいいと、私は思っている。だから、檻の前に人だかりがしているような時には、殆ど姿を見せず、コンクリートの人工



穴にもぐりこんでいる。

たまには陽の当る檻の中を、落着かぬ様子で行き戻りすることもあるが、大抵彼奴は暗い穴の中で孤独に、疑い深い眼を光らせているのだ。

五時には門が閉つて、見物を全部吐き出してしまふが、園内の清掃其他の雑用が終つて仕舞うのは六時になる。この時刻には三人の同僚たちも帰つてしまふから、静かになつたこの小動物園には、可愛い動物たちの外には、たつた一八の人間である、私が残るだけである。

私も動物たちも、この静かな時間が訪れるとホツとする。獣たちはそれぞれ警戒を忘れ、おのおの本来の自然な性癖にかえつて、夜のひとときを楽しんでいる。この時が私にとつても一番生甲斐を感じる時なのだ。

私はもう三十を二つ三つばかり越した男だが、まだ家庭らしいものはもつたことがない。だから、今だに女房も子供も居ない一人者である。世間はおかしなもので、こんな私にも女房の世話をしようと御節介をする人間もいる。それでも、私はそんな縁談話さえ、身を入れて聞いたことがない。

「小金を持った、太り肉の後家」などと聞く

と、たいていの男なら聞耳をたてるものらしいが、私はそんな話に、この歳まで魅力と云うものを覚えたことがない。ぼんやり聞き流して、一向に興味を示さないから、もの好きな同僚たちも、終ひには呆れてしまふような按配である。

だから他人は、こんな私を、貧乏な上に手に負えない変屈人だと思つていらしい。そう思うのは勝手だが、私はこれでも毎日の暮らしに満足している。勿論、トビ切り結構な暮しだとは思つていないが、それでも、まあこの暮しに不満はない。

それは第一に、私が現在の仕事に満足しているせいだろうと思う。私は現在の仕事がつたのしくて仕方がない。自分の好きな職業と云うものには、なかなかありつけないものだ。云うことを、私はよく承知している。だから、その点では大変な果報者だと思つてゐる。

こんなに仕事々と云うが、実は収入の点ではお話にならない。一人者の私には家族手当もなにもつかないから、税引で月に八千円ばかりにしかない。気の利いた女の子の方が、私などよりはよほど高給をとるだろうと思う。それでも、酒も煙草も飲まないし、衣料に金がかかるわけでもないから、結構こ

れで暮してゆけるのだ。

話が、ヘンな具合になつたが、ついでに書くと、私はこれでも公務員のはしくれであるらしい。つまり、身分上から云えば、市の雇員と云うことになる。だが、御役所とは殆ど関係がない。某市が経営する遊園地に附属する、小動物園の傭員なのだ。

この遊園地の所在はハッキリ書くことをはばかるが、関西のある中流都市で、珍しくおとりした街だ。遊園地は古くからある公園の中に出来たもので、大して大仕掛なものではない。その遊園地に附属しているのだから、動物園と云うのは名前ばかりで、まづたく、子供相手のチャチなものに過ぎない。

設備も御粗末で、動物の類も至つて少い。子供が喜ぶ猿が中心で、あとは熊、山猫、狸、狐、豪猪、鹿類山羊類が少しいる他は、錦蛇などの爬虫類、それに鶴、白鳥、おしどり、などの鳥類が申訳ばかりにゐるのである。何分にもここは無料で、市の財政で賄はれているのだから、諸事万端安直に出来上つてゐる。

私は此処の、飼育掛と云つた仕事をしてゐるのだ。猛獣はいないから、専門の飼育掛はいない。殆ど経験のないものでも、まあ馴れ

れば務まる。現に私は最初専属の飼育掛ではなく、園内の清掃や雑役夫として勤めた。日給で如何にも分が悪かったが、田舎から出て来て職がみつからず、贅沢は云つて居られなかつたのだ。五年前のことである。

私はそれまで、別段極端な動物好きと云うわけではなかつた。しかし農家育ちで牛小屋は同じ軒の下に建てられているし、少年の頃たまにはその牛小屋の敷藁の上で、寝てしまつた記憶もある。それからよく捨犬や捨猫を拾つて来て、母親から怒鳴りつけられたこともあつたから、現在の下地は充分あつたと云つてもいい。それはとにかく、私は小学校を出ただけで学歴もなく、技術があるわけでもないから、就職口に困り、喰うために人が嫌がる、遊園地の小動物園の雑役夫になつたわけである。

ところが、そうして毎日朝から晩まで動物たちの面倒を見ているうちに、私の氣持が、奇妙な風に変つて来たのである。だんだんと、この獸たちが可愛いくなつて来て仕方がない。勿論言葉は通じないが、長い間には此奴等の感情(?)がいろいろ判つて来て、ますます可愛いくなつて来る。

そうなれば、今まで他の同僚たちが面倒臭

さがつていい加減にやつていた餌料なども、私は一々彼等の氣に入るように按配し、与える。清掃の度に敷藁や其他の面倒にも心から氣を配つてやる。否、そうせずには居られないうほど、私は獸たちが可愛いくて仕方がないのだ。

不思議なことには、畜生とは云ひながら、あいつ等にも、チヤンとこの私の氣持が通じるのだ。こんな反応は、人間同志よりも、あいつ等の方がずっと正直で可愛い。私が檻の前に立つと、あの疑深い狐でさえ出て来て、甘えるように啼くようになった。

同僚たちはこんなに獸の世話に一途な私を、よいことにして世話の焼ける飼育の方は全部私まかせにして、日なたで煙草をのみながら、愚にもつかぬ無駄話ばかりする。私は完全に変人扱ひをされている。ところが、私の方もかえつてその方がよかつた。私は人間の仲間入りをするより、獸々とあいつ等の世話をしている方が、数倍たのしかつたからだ。私は幼い頃から、人三化七と囃されたような、途方もない御面相だから、この歳になるまで、まるきり人に好かれた覚えがない。色氣が付き始めた頃にはひどく惱んだこともあつたが、それも馴れつ子になると、こちらの

方でも人に馴染まなくなつた。

人嫌ひと云うのか、話するのも面倒で、一人でいるのがよかつた。そんな風だつたから、この遊園地につとめ始めてから、すっかりこの仕事に私は氣に入つてしまつた。御世辞を云つたり義理付合ひをする必要もない。獸たちはものを云わない。ただ黙つて世話をすればなついてくるのだ。

こんな具合で、変人変人と云われながら、私は黙つて獸たちと暮した。しかし、私が本当にたのしい時間は、六時になつて、同僚たちが引揚げて仕舞つた跡である。私だけは園内の小屋に住みこんでいるからだつた。小屋と云つても、それは正確には餌料部屋で、乾藁や馬鈴薯、鯨肉、果物などが積込まれて、その隅の、疊二枚ほどの広さの床に、ムシロが敷いてある。私は此処に一人で自炊している。獸の出産などの時には外の者も泊りこむが、大体に於て私一人の暮しだ。

なんと云つても大公園の一部だから、夜になると普通の人には氣味が悪いらしい。しかも動物たちの中で寝泊りするのだから誰でも嫌がる。私はそれを喜んでもう四年間も続けているのだ。

今頃はもう六時になると、外はトツブリ暮

れる。私は明るい内に自分が気に入るよう
に掃除を済ませてから、自分の小屋に帰つて食
事をする習慣になつてゐる。食事と云つて
も、手近の馬鈴薯や、兎肉、鯨肉を煮て喰
う。簡単だからすぐ終る。ついでだから書く
が、私は食事の他には酒も煙草もやらない人
間である。

夕食が終ると、私は外に出る。晝間あれほ
ど騒々しかった園内がシーンと静まつて、時
折あいつ等の啼声がするだけだ。真暗だから
カンテラを持ち、腰にはたくさんの檻の鍵の
束をさげている。

こうして静寂と闇とにつつまれた園内を歩
いてみると、なんだ私がこの動物園の持主
で、可愛い獣たちが、私の所有物のような
氣持がしてくるのだ。まつたく、晝間は單な
る雑役夫の私が、夜になるとなんとも云えぬ
誇らしい、満ち足りた氣持になる。誰が何と
云おうとも、夜は、この小動物園は私一人の
ものである。

小屋を出て左手は丸く金網がめぐらしてあ
り、鳥類が入れてある。私はこの鳥類には大
して興味がない。尤も交尾の時には必ず詳細
に眺めるが、普段はあまり好まない。ついで
だが、この遊園地には鷲や鷹などの猛禽類は

おいていないのである。

鳥類の先には猿の檻がある。此処には大し
た種類はなく、日本猿が重で、あとは台湾
猿、クモ猿、手長猿だけである、先刻、交尾
の話が出たが、猿類は人間と同じで、交尾の
時期が、例えば犬のように決つておらず、何
時でも行う。

晝間でも見物の前で平気で始めて、子供づ
れの若い母親が顔を赤くする光景はよくある
ことだ。まして、猿公たちは、私をまるで自
分たちの同類のように思ひこんでいるらしい
から、私の前では何の警戒もなく交尾を行
ふ。牡猿が後から抱きつく。その間、約一分
間ほどのものだ。

この猿の世界は尤も強い牡猿が支配してい
て、牝猿を従えている。弱い牡猿はワンマン
猿のスキを狙つて、おこぼれを頂戴するに過
ぎない。まことにこの猿たちの生態を見てい
ると、賑やかなことだ。

私がカンテラをさげて、この辺りまでく
ると、いやそれより遠く、小屋を出る氣配を逸
早く知つて、「ギヤツ、ギヤツ」と、喧しく
叫声をあげるのは、ハナ子である。ゴリラの
牝だがもう老齡近いと云つてもいい。その割
に牝は大きくない。アフリカ産には違いある

まいが、何しろチャチな市営の動物園だから、
動物もなるべく金のかからない、よせ集めの
ものが多い。純粹なものは少くて、産地が知
れないものも大分あるような具合である。

このハナ子も、以前はサーカスか何かで飼
はれていたらしく、悪く人ずれしていて、始
めの内は私もひどく手こずらされた。ところ
が、その人ずれしているのにはイ、ワ、クがあつ
て、私は或夜、ふとしたことから彼女の生活
に巻きこまれてしまつた。そして、このこと
が私の、この獸園の生活を決定的にしてしま
つたのだ。

このハナ子の檻の隣には、一番の狐たちが
いる。この狐の交尾の時期は真冬、嚴寒の頃
に行われる。そして彼等は非常に敏感だか
ら、人前では交尾しない。しかし、狐は一度
交尾すると、牝をある期間牡から離してしま
わなければならぬ。それで養狐場などで
は、交尾した狐を見分けるために、場内に高
いヤグラを組んで、その上から係員が晝夜の
別なく交尾を監視すると云う。

この動物園では、たつた一番の狐だし、養
狐場ではないから、そんな大変な心配はいら
ないのだが、私は一度狐の交尾を見たいもの
だと思つた。こんな獸たちは、発情期になる

とすぐ判る。そこで或る夜、カンテラを消して、ひそかに狐の檻の傍に張り込んだわけである。

思つた通り、私は案外容易にその交尾を目撃することが出来た。日本猿などとは異つて、その壯絶な光景に私は声を呑んだ。私の外には人気のない静まりかえつた夜の動物園である。時々ほうほうの檻から、獸たちの啼声がする。他人が見たら、それは鬼気迫る光景と云つたかも知れない。しかし私は、ただただ、一心に狐の交尾に見惚れていたのだ。

その時、傍の檻から「ギャツ、ギャツ」と啼声がする。ゴリラのハナ子だつた。私の眼の前の檻の金棒に、両手両足をからみつけないが、呼びかけるように啼いては舐を揉むようにする。それが訴えるような、又ひどく真剣な様子だつた。

私は狐の交尾を邪魔したくない一心から、彼女の傍によつてなだめるような身ぶりをした。その頃はもうひどく私になつていて、私の云うことなら、何でも素直に聞くようになつていたのである。

ハナ子はますます檻越しに私に舐をこすりつけては、甘えるように低く呻る。それで私は、彼女も又発情していることを知つた。可

哀想に独

身者の彼女は、

狐の夫婦の仲の良

ところを見せつけられて、

身も世もない惱みをもて余

していたらしいのだ。

私は少し滑稽な気持ちも

したが、何気なく檻の鍵

をあけて中に入つた。

その時には、別段ど

うと云う気持があつ



たわけではなかった。しかし、牝ゴリラのハナ子は、短い歡びの声をあげて、私にかじりついて来たのだ。

ツンと異臭が鼻に来て、私は狼敗した。しかし、結果から見れば、実は私自身も狐夫婦の交尾によつて、ひどく刺戟されてたのだと云うことが云える。私に対して、すっかり発情して媚態らしいものを示すハナ子に、私は少しも嫌悪を感じはしなかったのである。私は亢奮に、人間と獸との區別を忘れていた。

飼育係と牝ゴリラの結びつき。人々は驚き、且つ嘲けるだろう。しかし、それは極く自然に行はれた。彼女が人間にもつとも近いゴリラであるためか、又は私が獸に近いのかそれは判らない。しかし、ハナ子が以前にいたサーカス団の何者かによつて、既にその行為に馴らされていたに違ひないことは、私にもハッキリ判つた。

翌朝、ハナ子の檻に朝の餌料を持つてゆくと、彼女は甚しく喜んで、私に対してさまざまな媚態を示した。しきりに愛情を示すのである。勿論、私は何の後悔も感じはしなかった。私にとつては、決して不自然ではなかったのだ。

私はそれまでも、獸姦について多少の知

識があつた。私が育つたのは大変辺鄙な山村だが、奇妙な迷信があつた。つまり性病にかつた者は、獸姦を行へば性病が癒ると云うのである。可笑しな話だが真面目に信じられていた。それが子供の頃から耳に入ってくるし、大人同志の、

「鶏をやつたが、出来んじやつた」

「牝山羊が、一番人間の女子に似とるそうじやの」

「兎はどげんじやろかのう」

などと云う会話も聞いた覚えがあるのだ。

それから、私の家の近くの某家の作男が、発狂したと云う話がある。この男は主に家畜の世話をしていたが、ある時、不思議な顔をした、奇形の豚が生れたのを見ると、何かわけの判らぬことを口走るようになって、とうとう喚きながら村を飛び出してしまつた。

「ありや、人間と豚の合の子ぞ。そいであの男は氣狂ひになつてしもうたんじや。何とおぞましいことぢやのう」

私は子供だつたから、この話を信じていた。しかし、時々この遊園地に来る獸医の話によると、そんなことは嘘つばちだそうだ。よくは判らなかつたが、なんでも人間と獸とは精子の形が違ふから、受精は成立たない、

と云うような話だつた。

とにかく、私とハナ子の間には、こうして奇妙な關係が結ばれてしまつた。この經驗を経て見ると、私も一人者だから、不思議な愛着を感じるようになった。夜になると、カンテラを下げて園内に出るようになったのは、この頃からである。今頃この辺りをうろつくような物好きな人間はありつこないから、私はゆつくり、思う存分獸たちと遊ぶことが出来る。

ハナ子は毎晩、奇声をあげて私を迎えた。夜も晝も殆んど衣服を着更えたことがないから、私の牀には獸の異臭がしみこんで、同僚たちでさえ顔をしかめる。だからたまに街の外食券食堂などに出かけると、皆、私の傍から離れるようだ。

ハナ子は私に、精一杯の愛情を見せるが、なんと言つても、彼女は老齡だし、又他にも私には向き兼ねる点もあつた。そこで、私は自然に、他の動物たちを物色するようになった。

始めはアンゴラ種の牝兎が私の対象になつた。こいつは大人しいし、都合がよいかと思つたのだが、失敗だつた。翌朝見廻つた時、この牝兎は死んでいたので。その死体を見た

時には、さすがに私も嫌な気持ちでしたが、しかし不思議なことにはそれに輪をかけられたように、私は躍起になつて牝獣あさりを始めたのである。

鹿、山羊と、片つ端から手をつけた。こいつらは木柵の中にいる。私は靜かに彼女たちに近づく。彼女たちは概して大人しく、今では向うから軀をすりよせてくる。私の両手は彼女たちの首をヒシと抱きしめる。

夜の動物園である。もしこの光景を見る人があつたら、膽をつぶすだろうが、それは私の知つたことではない。

こうして私は毎夜牝獣めぐりをするが、その他に牡獣を発情させる遊びも知つた。園には狸のように、番ではなく、牡だけの獣もいる。その牡を私が根気よく発情させるのだ。発情した牡が、牝を求めて啼く声は胸に迫るものがある。

私はこうして、殆ど自分の寢床では寢ず、檻の中の獣たちと一緒に寝るような、不思議な生活を喜んでつづけている。

現在、一番私が愛着を感じているのは、三歳の牝山羊である。彼女は私を見ると、実に愛らしい声を出して甘える。それに、牝山羊が一番人間の女に近いと云うのも、私の経験

では確かなようだ。

こうして、今では夜になるとゴリラのハナ子の前を素通りしてゆく私を、ハナ子は嫉妬して絶叫するが、私は軽く彼女の檻を叩くだけで牝山羊の許に通う。この牝山羊に私はキヨと云う名をつけている。

キヨとは、私の生れ故郷の隣家にいた、二つ歳下の美しい娘だつたが、器量をのぞまれて町に嫁に行つた。私はその直後に村を飛出したのだ。

今でもこの牝山羊を見る時、私はあのキヨの美しい肢体を思ひ浮べているのである。

愛読者通信

私は八月号よりの愛読者です。幼ない頃より同性に対して心ひかれて居りました。好みに合つた同性と親しく御知合したいのですが、みつかりません。日夜淋しく暮しております。

当年三十八にもなりますが、年だけ取つてもまだ大人になれない気持ちです、したがって今だ独身を続け、異性との関係はありません。

異性の美くしさは認めますが、結婚の対象として考へた事はありません。異性の日常や

る仕事皆好きです。異性に生まれて来なかつた事が悔まれます。

どうぞ、同好の方、私をお救ひ下さい。

(東京 三菱)

私も愛読者の一人です。以前にも交歓室の京都の方へ御手紙書きましたが、御返事がありませんでした。

私は自分ではどうにも出来ないくらい、同性を愛して居ります。異性に対しては少しも亢奮も魅力も感じない者です。

学生時代二、三人の同性と関係しましたが、皆んな兵隊に取られたり、結婚したりして、今では風俗草紙が唯一の友となり、毎月自分を慰めてくれます。

是非、同性の方を御一人御紹介下さい。私は二十五才・十三貫身長一米五十三釐で、性質は朗らかです。受身ですが、もしよろしかったら御手紙下さいませんか、吉報を御待ちして居ります。

(滋賀 KO)

岡山の同性の皆様、お互ひに語り合いたいと思ひます。きつとお友達になれる私と信じます。住所本社宛におたずね下さい。御便りを御まちして居ります。

(海 樹)

続

夢

魔

奈津子は恥かしさに全身をふるわせた。すると、肩で胸で
腿で、じかに皮膚に突き通された赤い羽が小きさみにゆれ
た。細く糸のように肌をつたつて血が流れる……………

松 井 籟 子

喜 多 玲 子 畫



絵具で画かれた傷痕は、風呂で洗い流したが、洗つてもお

ちない心の痕が、昇二郎には疼くように感じられた。これは傷痕というよりは、皮膚に美しく彫る櫻の花びらを、心に彫つて朱をいれたという方が似合わしいかもしれない。痛んで、熱が出てそれが引いても彫物はその人の生のある間消えないように、昇二郎の心の中に、赤い小さな櫻の彫物が永久に残ることだろう。

昇二郎は熱に浮かされたように、その夜芝居が済んでから、又、奈津子の家の門口へ立つたのだ。痛みや熱が去るにはまだ間があつた。昇二郎はただ憑かれたように奈津子に会いたかつた。それは恋と、はつきり名づけられるものではなかつた。自分でもわからないのだ。十年以上にもなる役者稼業で、女に慕われた事も何度かあつた。水商売の女と浮名を流したこともあつた。恋の手くだも知りつくしているはずだつた。

それが今日、楽屋で顔を作つていても、舞台に立つていても、体中に酔いが残つているように、奈津子とすごした一時が忘れかねるのだ。

背中を向けて眠つてしまつた奈津子が自分をどう思つていいのか、それが妙に氣になつてならない。奈津子が自分にしたことと、最後の線をふみこえなかつたよそよそしさは別人の様で、昇二郎はどうしても解けない謎の様に氣持悪いのだ。今までの女にこうした経験がなかつたから、この氣持を恋だと名づけてしまえない。恋なら恋でいい。得体の知れない感情はただもて

あつかうだ
けだつた。

とに角もう一度会いたい。会つてたしかめたい。もう一日で東京の公演が終れば、又いつ東京へ来られるかわからない。明後日は大阪へ帰えるといういとまごいを口実に、彼は奈津子の家をおとづれたのだ。

駅から遠くなるに従つて家がまばらになり、奈津子の家はまるで田舎家の様に畠の中にぽつんと灯がともつていた。

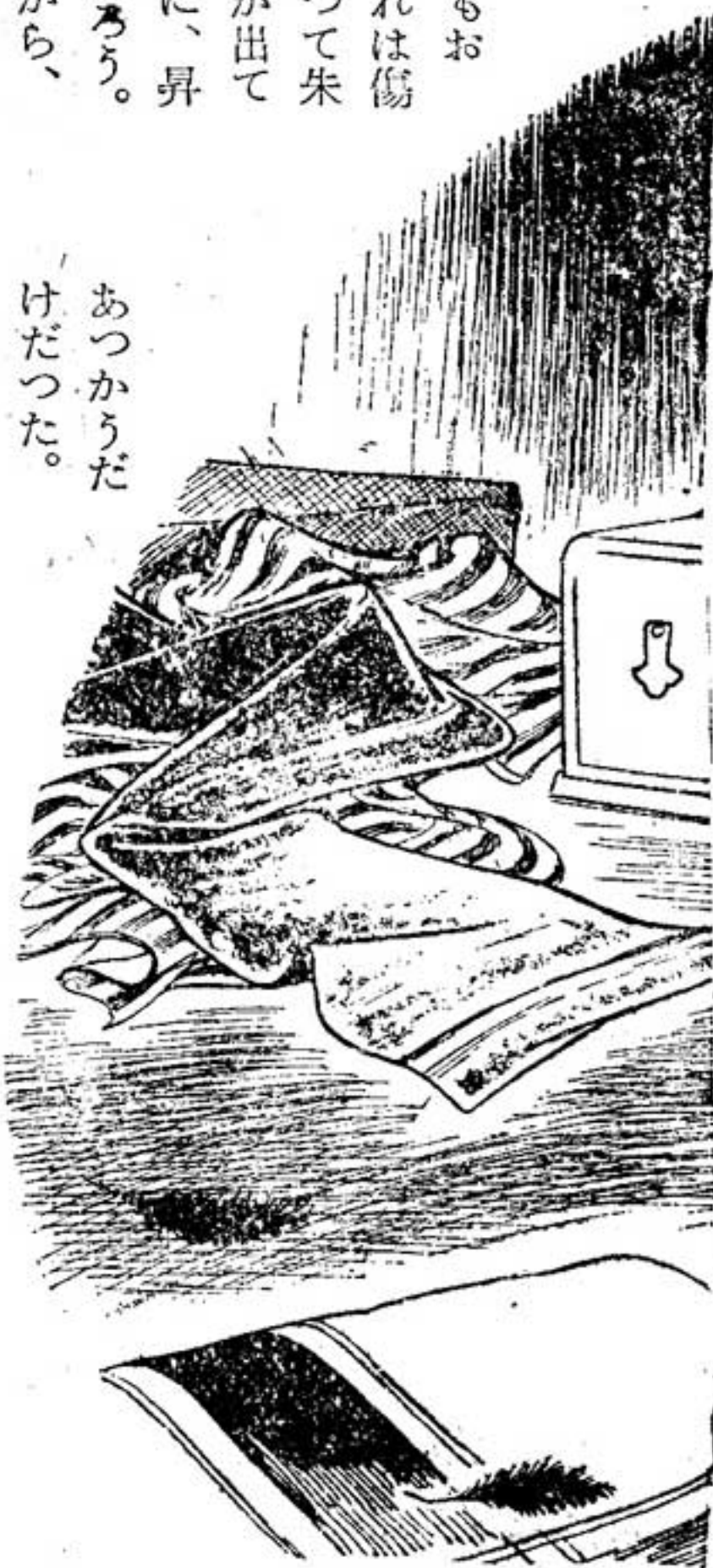
しかし、その灯に心躍らせて急ぎ足で近づく彼の耳に「ううっ！ ヒーッ！」

という悲鳴が聞えた。

それは押し殺したような低い声だつたが、奈津子の家に近づくにつれて、その家の中からひびいてくるのがはつきりしてきた。

昇二郎はげげんに思いながら、昨夜、彼女のあけてくれた裏口の戸に手をかけた。

すると、戸はガタンと鳴つただけで、中から鍵がかかつているらしく開かなかつた。それと同時に、中の悲鳴が聞えなくなつてしま



つた。

「ごめん下さい」

彼は声をかけた。

中に人の気配が感じられたが、答えはない。

「嬢さん、いやはりまつか？」

重ねて聞くと、

「あつ、昇二郎さん——」

叫ぶような奈津子の声だった。

昇二郎ははつとすると同時に、今まで聞えていた呻めき声が気になつて

「嬢さん、あけておくれやす。どないしやはりましてん？」

と、少し声高に外からたづねた。

戸に近づく足音がして、中から鍵をはづしがらつと戸があけられた。

奈津子かと思う昇二郎の気持を裏切つて、あけた人は男だった。

瞬間、戸惑う彼に、男の方から口を切つた。

「昨夜おみえになつた人ですね？」

問われて昇二郎はそれに返事を与えず

「嬢さん、どないしてです？」

と問い返へした。

「奈津子は居りますが、あなたは？」

「私は大阪で御世話になつていた昇二郎いうもんです。もうあさつて去にますさかい、夜分失礼とは思ひましてんやけど、一寸嬢さんにおいとまごいに……」

「そうですか。はじめてお目にかかります。私は殿村といいまして奈津子の夫のような者ですが……」

殿村がそう言いかけると

「うそ！ 違う！」

奥から奈洋子の声がした。

殿村は苦笑したが、

「まあ、お上り下さい。大変取りちらかしていますが……」

と、昇二郎に言つた。

昇二郎は姿は見えぬながら、奈津子が奥にいるらしい気配に「では……」

と、履物をぬぎかけると、

「駄目！ 昇二郎さん、帰えつて、上つて来ちやいや！」

奈津子の声がした。

殿村はそれを聞くと、つかつかと奥へ姿を消したが、

「では昨夜の相手はあいつなんだな」

と、奈津子に聞いている声がした。

「違う！」

奈津子が叫ぶ。

「まだ強情をはるのか」

ピシヤツと、頬を打つ音がした。

「昇二郎さん帰えつて！ 来ちやいや！」

奈津子が叫ぶ。叫ぶだけで出て来ようもしない奈津子に、昇二郎はふといぶかつた。

「正直に言つたらどうだ」

殿村の音がする。

返事はない。

「言わないか」

返事のかわりに

「ううっ！」

という呻めき声だった。

昇二郎はぬぐのをためらっていた草履を急いで脱いで上った。

座敷へ入るなり

「あつ！」

と、思わず立ちすくんでしまった。

そこには素裸にされた奈津子が、簞笥を背に縛られていたのだ。

後手にくくつた縄は頂度その高さの左右の鑢にきつちりと結びつけられ、股を開くように座らせられた兩足首は、別々に下の鑢に結えられているのだ。そればかりか、のどへ廻した赤い紐は二た巻き三巻き、のどへくいこむように結ばれていたが、それを吊りあげるように、簞笥の一番上の開き戸の手へ通して縛りつけてある。

まるで簞笥一面にくもの巣をはって、女の裸身を捕えたように、上が開き戸になつていて、小引出しが三つ、長いひき出しが二つある簞笥の全部の鑢に、縦に横に、犇々と奈津子の体を縛りつけて縄がわたされていた。彼女は身動きも出来ず、顔さえ無理に仰向くように引張られたまま、さらし者の様に体のすみずみまで電燈の光の下に見せていた。

「昇二郎さん、見ちやいや、いや！」

奈津子は泣くように訴えた。恥しさが全身をふるわせた。すると奈津子の肩で、胸で、腿で、赤い羽根が小さきみにゆれた。羽のさきの針を皮膚にちかに突き通されているのだ。細く糸のように血が流れている。顔だけはよけて、体中、ところどころ刺さっている赤い羽根は、もしかしたら、裸の彼女を的にして、吹矢のように投げつけたものかもしれない。

「ああーっ！」

奈津子は泣くように呻めいた。醜く歪む顔を手で被うことも出来ないのだ。体中の赤い羽根が嘲笑するようにふるえるだけだ。

「痛い！ とつて！ 針をとつて！」

奈津子は訴えた。

身を動かせば、よけいに痛いらしい。

「もう、かんにんして！」

奈津子は泣くように言つたが、

「昇二郎さん、こんな所見ちやいや。早く帰えつて」と、重ねて言うのだつた。

昇二郎は物も言わず奈津子に近づいて、羽をぬきとつた。二つ、三つぬいたばかりで、後から殿村に羽がい締めに制されてしまった。

「何すんねん？」

「君こそ何だ。僕が僕の女を折檻するのに君に文句言われる筋合いはない。それとも、昨夜此処へ泊つたのは君なのか？」

殿村は昇二郎の手をしっかりと押さえつけながら言つた。

昇二郎が返事するよりさきに

「違う」

奈津子が叫んだ。

「この人は私の父が可愛がつていた人よ。昔から私の家へよく来ていたの。昇二郎さん、帰えつてちょうだいね。あなたには関係のないことなの」

言いながら奈津子は哀願するような目を昇二郎に向けた。

奈津子は彼が今日再びたづねて来てくれたというだけで嬉しかった。それは昨夜自分が彼にした異常な行爲を許してくれている証だつたし、彼が奈津子に愛情を持つていてくれるとうぬぼれられると思つたのだ。それでもう充分だつた。

華奢な昇二郎と、上背のある殿村とは、腕力にかけて勝負はきまつていた。自分にさえこんなひどいことをする殿村が昇二郎に何をするかわからない。

「本当に奈津子のいうとおりかい？」

殿村は昇二郎に言つた。

違うと言いたかつた。昇二郎は奈津子こそ自分の愛人だと言

いたかつた。しかし、そ

う言いきれ

る何に



も確信がないのだ。まして奈津子は帰えつてくれと言つてゐる。も

し、殿村のいうように、奈津子が殿村の女なら、こうしたことも情痴の上の痴態の一つで、自分の関ることではないのかもしれない。

今日に限つたことではなく、奈津子はよくこんな目にあわされてゐるのだろうか。それ故にこそ、昨夜、自分にあんなことをしたのかも知れない。自分は奈津子の日頃されていることを、そのまま逆にしたにすぎないとしたら、踊らされた人形のようなものだ。それを憑かれたように今日一日、何にも手につかずに奈津子を想つてきた。

昇二郎は急に奈津子が憎らしくなつて来た。

「嬢さん。私はもう去にます。このお人に可愛がられるなり、苛められるなり、勝手にしてもらひなはれ。嬢さん。私はあんなが普通のお人や思ふたから、今までどんな女にも言わなんだこと言うてみる氣になつたんや。あんなこと言うからには、どないにされようと私は嬢さんに心も体もささげてしまふつもりやつた。それもあんなが、清いお人や思ふたからや。かね万はんの嬢さんや思ふたからや。私にはひとり身やつて言わはつたではないか。それにこんな男に、こんなめにあうような関係がありなはんのやな。もうええ。たと苛めてもらひなはれ。私は知らん。たと痛めみせてもらひなはれ。この羽も、もとの様に射しといてやるわ」

昇二郎は抜いた針を再び奈津子の肩へブスツとさした。

「ああッ！」

奈津子が呻いた。

「さあ、これもこうして射してやる」

乳房の上のふくらみにも、縛られて瘤の様に奇妙にふくれてい



る二の腕にも、ブスツ、ブスツと羽についた針をさすと、昇二郎はふらふらと、奈津子と殿村に背を向けて、夜の街へ出て行ってしまった。

二

汽車が大阪へ近付くにつれて、昇二郎はあの夜、奈津子を救つて来なかつたことがくやまれた。

あれからどんなひどいめにあわされているか。

—俺の知つたことか—

とうそぶく気待と、

—嬢さん、かんにんしておくれやす—

と、詫びたい気持と交互に頭をすぎた。

大阪の公演に、昇二郎のもらつた役が縛られる役だつた。

それは新作もので、彼の役は劇の筋にはかかわりなく通行人のように、ただ舞台の上手から、下手の花道へ曳かれて通るだけの役だつたが、半裸に近い姿で縄をかけれるので、体に白粉を塗らなければならなかつた。鏡にうつる自分の肌を見ていると、その肌に絵具でめちやめちやに疵痕をつけられた夜のことを思い出す。

舞台裏で後手に縄をかけられ、芝居とはいえ、大勢の観客の前を、こづかれながら曳かれて通る時思い出すのは奈津子のことだつた。

昇二郎が忘れよう、忘れようと努力しても、毎日毎日、同じように縛られなければならないとは何という皮肉だろう。その芝居が一と月つづけば、昇二郎は一と月の間、縄をかけられ、こづかれて、よろよろと舞台を横切らなければならないのだ。

彼は奈津子を忘れ去ることが出来なかつた。

そんなある日、ひいきの客から言つて、お茶屋からの招きがあつた。

—もしや?—

そう思う気持が強くなつて、昇二郎は行こうか、行くまいかと迷つた。

料亭の小座敷に小さく座つている奈津子を見ると、彼は急には言葉もなかつた。

奈津子もただ頭をさげただけで、何にも言わない。

女中が酒さかなを運んで、

「御用がおありになつたらお手を……」

と、言つて去つてしまつても、二人ともだまつて、卓を中に座つていた。

「とうとう逃げて来たの」

奈津子がぼつんと言つた。

逃げるという言葉が、妙に殿村の姿を昇二郎の頭に浮き上らせた。彼は答えなかつた。

「来ていけなかつたかしら?」

奈津子がおぼおぼと聞いた。

それでも彼はだまつていた。

話のつき穂をなくしたように、奈津子もだまつてしまつた。

しかし、ぼそぼそと、ひとり言のように言つた。

「あれから随分殿村に責められたのよ。犬の首輪を買つて来て、私の首にはめるの。着るものは真赤な長襦袢だけ。パンツもはかず、素裸に赤い長襦袢を着せられて、着物や洋服は簞笥に入れて、その鍵を殿村が持つているのよ、逃げることも出来なかつたの。おまけに足にも手にも鎖をまきつけられて、家の中だけはヂャラヂャラと鎖をならしながら歩けるけれど、やつと自分の用が足りるというだけ。苦しかつたわ。夜になると、鎖をはづしてはくれるけれど、別の縄でぐるぐる巻きに縛つてしまうの。まるで玩具の様にさいなまれて、……毎晩、毎晩……いいえ、夜だけぢやないわ、晝は晝で長襦袢一枚の姿で首討やら、手錠、足枷……。囚人だつてそんなひどいことされないかも知れないかも知れないわ。水風呂の中へつけられたり……」

「もう、沢山や!」

急に昇二郎がさえぎつた。

「嬢さん、それ、のろけと違ひまつか?」

「え?」

「嬢さん、そんなことされて、喜んでほつたのと違ひまつか?」

「昇二郎さん、それはあんまりだわ」

「なにがあんまり……。ようそう玩具のようにされて、かね万の嬢さんともいうお人が、今日まで辛抱してはりましたな。やつぱり嬢さんはそうされることが嬉しかつたんや。私はもう嬢さんにだまされまへん」

「そんなこと……。あんまりだわ。どうやつて逃げようかと思う気持は、どうやつてあなたに会えるかと思う気持と一緒にやつたわ。や

つと殿村の奥さんがやきもちやいて押しかけて来たので、私は助けてもらうことが出来たんやわ。それを、そんな……」

「嬢さん、ほんまでんな、それ？　もし、嬢さんのいうのがほんまなら、私が殿村よりもつとひどいことしても辛抱出来へんことない筈や」

「昇二郎さんがそんなに疑うなら、どんなことでもしてみたらいいでしょう」

「では今夜、私の家へ来ておくれやす。これからすぐ来てくれはりまつか」

「行くわ。どこでも！」

愛し合っている二人は、まるで敵同志の様に、きつい瞳を向け合った。

三

大阪の役者の家は、大抵市内か東の方の郊外にあるのは、みなみの歌舞伎座や中座に便利な爲からだろう。昇二郎の家も焼ける前まではそうだった。

しかし、その晩、彼が奈津子をともなつて行つたのは梅田から阪急に乗つて、神戸よりの住宅だった。

K駅でおりると、丘の上に新しく建つた集団住宅までは何人か同じ道を行く人があつた。しかし、その住宅の前も通りすぎ山道にかかる頃には、昇二郎と奈津子の二人以外に通る人もなかつた。

どこからか金木犀の甘い香が漂ってくる。関西の夜は木犀の

匂いではじまるのが常だった。奈津子はその匂いを郷愁の様にかみしめた。

細い山道の片方は松や雑木におおわれて、片方は崖の様に低くなり、段々島のさきに人家の灯が見えていた。

「まだ遠いの？」

奈津子が聞いた。その道のさきに人家があるとも思えなかつたからだ。

昇二郎はそれに答えずあたりを見廻したが、

「嬢さん、さつきどないことでもするといわりましたな」

「ええ、言つたわ」

「そんなら、此処で着物を脱ぎなはれ」

「え？」

「足袋もとつてはだしになるのや」

「そんな……」

「私はここから家まで、私が舞台で曳かれていくように、嬢さんを縛つてつれていきたいのや。何でもすると言わはつたんやさかい、裸になりなはれ」

さあとうながされて、奈津子は帯をといた。どうにでもされようと観念したのだ。

月の美しい山道を、自分の愛する人に縄尻をとられて、曳かれて行けば、殿村に汚された体のつぐないになるかもしれない。

奈津子はいった帯を昇二郎の手にわたした。伊達巻も、腰紐も、着物も……、時色の長襦袢が夜目にぼーつと白く、芝居で囚人の着る浅黄色の囚衣のようだった。

「その紐もとくのや」

昇二郎がいう、

長襦袢の紐をとくと、ぱらつと胸がはだけて、白い肌に黒々と痕があつた。殿村に責められた傷だつた。

昇二郎はそれを見ると、つき上げられるような嫉妬を感じた。いきなり持つていた紐を奈津子の胸にまわすと、ぎゅうと締めた。そして、奈津子の手を後手に重ね、ぐるぐると紐で縛つた。「私が足袋をとつてあげる。そこへ座りなはれ」

昇二郎は邪険に奈津子の肩をこづいた。

奈津子は地面へちかに膝をついた。小石がヂャリヂャリと、膝の下で鳴つた。

昇二郎は奈津子の草履かぬがせ、足袋もとつた。そして、腰紐でさらに強く奈津子の二の腕を縛り、帯締めを首にまわして背中の手をぎゅつと上へあげて一つに結んだ。女の和服は縛られる紐にことかかない。帯あげのはしを背中の紐と結び合わせて、そのさきを昇二郎は引いた。

奈津子はよろめきながら立ち上つた。

長襦袢の前がだらしなくはだけて、白い脛が太腿のあたりから歩くたびにのぞけた。

昇二郎は奈津子の衣類を片手で一とまとめにかかえると、その手に紐をにぎり、右手

にはいつみつけたのか、折れた小枝を鞭のように握つていた。

「さあ、歩くんだ」

後から小枝で突つ



「ううっ！」

「それともこうしてか？」

小枝のさきで、肉をえぐるように、ぎしぎしと押した。

彼は抓つた。

「この痕はあの男につけられた痕やな？ どうやってつけられた、こうしてか？」

彼は抓つた。

少し行くと、道の横に細い松の木が枝をのぼしていた。

昇二郎はその松の木に奈津子をくくりつけると、いきなり胸を押

つかれ奈津子は小さきみに歩いた。はだしの足に、小石の多い山道は早く歩けなかつた。時々針をさされたように足の裏が痛いのは、松葉か杉の葉か、とがった落葉が多いからだろう。

「苦しいか？」

昇二郎は聞いた。

奈津子はだまつていた。

「あんたは私のとりこや。嬢さんの本心のわかるまで、私はあんたをいじめてやるのや。さあ、さつさと歩きなはらんか」

小枝のさきで肩をつき、尻をつく。

奈津子は歯をくいしばつてこらえた。

「それとも、こうして出来た痕か？」

今度は枝を奈津子の肩を

打ちおろす。

「ああつ！」

彼女は身を

よじつた。

「こんなこと

もされたのやろう？」

昇二郎は両方の乳のさ

きをいじる。

痛さとは違った呻めき声

が口から洩れた。

すると昇二郎は、やわらかく動

かしていた指先を、急にきつく、爪

を立てて乳首を引きちぎるようにした。

「痛い！」思わず奈津子は言った。

「あの男にはもつと痛いことされたのやろ？」

ああ、どないしたら私の気が済むのか。嬢はん、私

は鬼になつたんや。こうしないと、私の気持がどうにもならへ

んのや。さ、どうや、さあ、どうや」

昇二郎は気狂いの様に枝をふりおろした。

「うつ、うつ！」奈津子は歯をくいしばる。

しかし奈津子はその苦痛を通して、救われていくような気が

した。毆村に責められて感じなかつた歡びを、昇二郎の枝の下

で感じた。

月を浴びて、高ぶっている昇二郎の顔を美しいと思うゆとり

が、苦痛の中にあつた。それはまるで神秘的な深い美しさだつた。



いきなり昇二郎が松の木ごと彼女を抱いた。

「許して、嬢さん、かんにんして！」

頬をすりつける彼の頬が、涙にぬれていた。「痛かつたやろ？嬢

さん、私は馬鹿や。こんなに、嬢さんが好きなのに……」

昇二郎は唇といわずのどといわず接吻の雨をふらした。彼女のい

ましめをとくことさえ忘れたように、しつかり抱きしめて彼女の唇

にしつかりと自分の唇を重ねた。火傷しそうな接吻をまるで月が恥

ずかしがつたように、薄雲が空にひろがつていた。

(終)

風俗草紙最近號主要目次

★七月号★

責められる女三態 喜多玲子画
男色喫茶店 かびや・かずひこ
私が拷問した女 根津 明治
新らしい責古い責 上田青柿郎
のぞきの悦楽 最上 京子
華麗な惨虐の回想 須川 夏枝
嗜虐放浪記 進藤江利子
秘色大阪城絵巻 天野 鉄治
悦虐の部屋 岩堀 光
レスボス通信 喜多 玲子
そとみあ通信 園村 恵子
嗜虐倶楽部 藤井 晃
大槻久良二

★八月号★

妖虫図 喜多玲子画
いけにえ二題 北原 環画
ぐろてすく芸談 正岡 容

★その他華麗悦虐読物満載！御入手洩れの方は直接本社へ！

★九月号★

少年監獄 安野 洋治
男色営倉 松尾 亮
責められる女の表情 伊藤 晴雨
やわ肌を責めて 喜多 玲子
木馬責め滑車責め 上田青柿郎
私が責めた六人の女 林 譲介
共同便所の秘密 宗方 綾子
まぞひすとの街 吹岡清一郎
そとみあ通信 藤井 晃
レスボス通信 園村 恵子
みだらな指 鳥羽 瑛子
まにや地獄 日夏由紀夫

★十月号★

ジャック・ナイフ 北原 環画
縛り絵六景 喜多玲子画
縛り写真・兇行現場写真 喜多玲子画
女体の縛り方十五種 伊藤晴雨
歪んだ閨房 武野 藤介
凌辱開花 日夏由紀夫

★十一月号★

隠花植物 相磯 武雄
男色アパート 志摩 雪夫
悦虐の泥沼 喜多 玲子
刑事部屋の拷問 三谷 祥介
懺り責め臀部打ち 大槻久良二
爛れた肌 和田 夏枝
哀しき被虐 木暮 陽子
あなぐら 喜多玲子画
悶える女三態 中川彩子画
責められる女三態 特写真 眞
ぐろてすく芸談 正岡 容
奴隷祭 三宅 一郎
双生児犬 比企狂一郎
女はこう縛られた 伊藤 晴雨
新らしい スタイルの責め 喜多 玲子
責めにおける 各種の小道具 細谷満佐子

★十一月号★

馬をみる夫人 日夏由紀夫
そとみあ放浪記 渡川 徹夫
腎部狂崇症 油井 啓二
甘美なる糞尿 菅 芳一郎
美しい獲物 北原環画
裸になりたがる淑女 特写真 眞
女装男 日夏由紀夫
夢魔 松井 籟子
秘密な淫蕩 赤沢 澄子
悦楽の悲鳴 青山いづみ
そとみあ断層 鹿火屋一彦
奴隷祭 三宅 一郎
続刑事部屋の拷問 三谷 祥介
そとみあ通信 藤井 晃
読者交歓室

定價 各號千共 百圓

◎書店各位へ！

風俗草紙は万雷の如き拍手のうちに
即日売切となり初号より取揃への読
者の声益々高く雑誌界の前例を破り
増刷するに至つた。依てここに初号
七月号より⑧⑨⑩⑪全冊揃いとなる

注文書
日本特集出版社
33-3427

風俗草紙

月号

冊

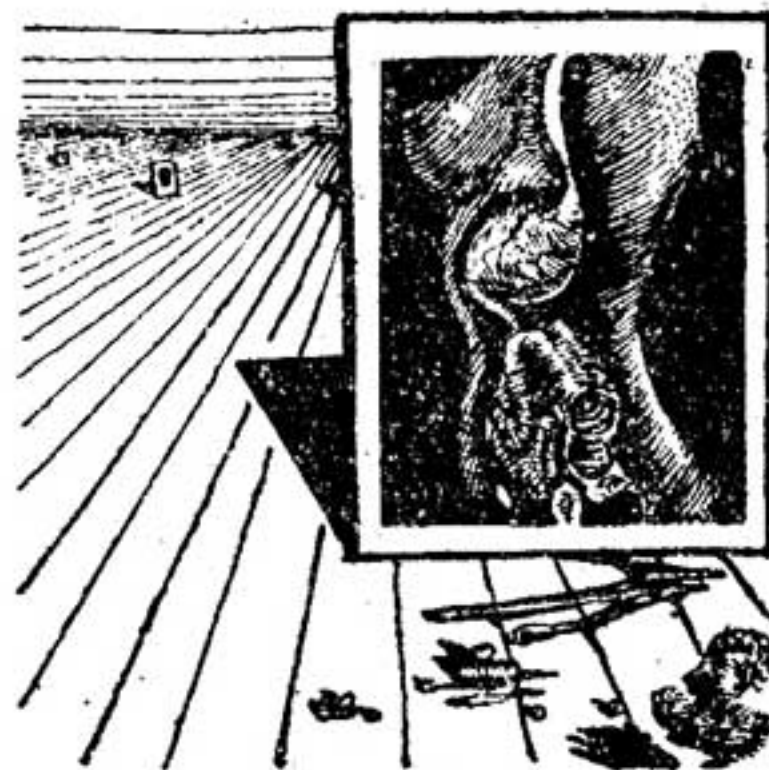
本誌の取扱店
東販・日販・中央社・大阪や・栗田

書店名

◎讀者各位へ！

本注文書を切りとり書店へ注文して戴けば通信費送料は無料です
東京都千代田区神田神保町二ノ三四 日本特集出版社

十二世紀ごろ、ドイツのビンゲンに、聖ヒルデガルトという長老で医者の女がいた。「自然の記載」とか「疾病の原因と療法」とかいふ書物をものした、有名な碩学であるが、癩病の療法として経水の全身浴をすすめているという。そんなに多量の経水を集めるのはなかなか大変だろうが、とにかく、それには、そうした効果があると信ぜられた。今でも、ロシヤの或る地方では、経水で汚れた下着を水にひたして、その水をのむと、熱病がなおると信ぜられている。フランケン地方の婦人は、催経法として、処女の初潮血を水



異常性愛の醫學

汚物狂崇症の性慾

彼は女性の放尿に近づき、その尿流をうまく浴びると極度に満悦した。彼は偶然女性の放尿を目撃してからそうなったのだという……

坂ノ上言夫

にまぜてのむ。古代インドでは、ポテンツをたかめる催淫剤として月経血が尊重された。北ハンガリアのチゴイネリン（ヨウロツパにおける一種のジプシイ）は、性交する前に、処女の経血と、胎盤血液と、洗礼をまだうけぬ少年の尿と、葫蘆の核とをまぜてつくつた一種の軟膏を局部にぬることによつて、子供が授かると考へた。やはりヨウロツパの或る地方におけるユダヤ人の居酒屋では、娘の経血を酒樽の中へ注ぎ入れる。一度この酒をのんだ客は、その酒の味がわすれられずに、ワツと集つてくる。大繁昌うけ合ひだという。

月桂冠ではない月経酒だが……

こうした月経血の效用は、じつは徹底的に観念上のもので、いわば一種の迷信にもとづくのである。一般に血はむかし一種の神秘感のうちに思惟されたのであるが、特に、出血すなわち生体から外へ流れ出た血に極度のおそれを感じた。で、いうまでもなく、人間生命の門である、女体のあそこから流出する月経血に、害毒を発散するものとしての悪魔の戦慄を感じたことには、実に不思議はないので、十六世紀初頭の自然科学者として有名なパラセルズスの如きさへ、負傷しているとき

月経中の女を見ると、その傷がなおりにくいなどといっている。こうした迷信的な考え方は十八世紀のはじめごろまで絶へなかつたので、千七百四年、コシエヴィツという教授の本の中にも経血は人を健忘にし、遲鈍にし、憂鬱にし、時には全く狂気にし、或は癪病やみにするなど放言しているそうである。しかし、そうした悪魔的な、神秘性の故に、その反面ではむしろ不思議な魔力的な効用が信ぜられたのであつた。

ところで、丁度それと同じような考え方で、脱糞や尿などという排泄物が考えられた。そこでは、脱糞尿がまじなひに使われ、薬ともなつた。二十世紀の今日この頃でも、民間では、それをやはりまじなひに使っているものもある。その呪的な力は、いまだに心の藪、文化の隅にうずくまつてゐるらしい。

糞尿に關係する則神信仰の民俗についてはここでは詳しくは觸れないとして、しかし、糞尿の神秘については、昔からいろんな報告がある。

デエルという人の古い薬学書によれば、むかしは人間と動物の糞尿が医薬としてきわめて重大なものだつたことを知ることができ、それも、特に異性のそれではなくては效力

がないとされたが、紀元前三千三百年ごろのエジプト王フエロンが盲目になつたのを、王宮の庭師の妻と寝て、その尿を使つたらさしもの難病がとたんに全快したとある。もちろん、それで洗つたのださうだ。果して、尿が利いたのか、そうでなくとも、癒るはずの眼疾だつたのか、それはわからないが、未開人の間では今日でも最良の解熱剤とされている。それが薬料となつた経路は、糞尿崇拜から転化したのに違ひがないが、インドには、象の尿にうたれて身滌ぎをする宗教がある。メソポタミアの平原に栄えたエジプト以前のいわゆるスメル人の文化では、糞尿による汚物療法といふのがあつた。しかし、この場合それを汚物とするのはわれわれの意識で、彼らにおいては、それは決して汚物でもなんでもない。聖物だつたのである。

じつさいにそれは異臭を放ち、見る目にも觸れる肌にも、決してきれいなものではない。快適なものでもない。しかし、その異臭に聖なる香匂を感じ汚穢の感覚を美化するのも、この信仰による感覚感能へのケレンである。一般には忌はしいかぎりの女の腋臭が、さて、ゾッコンほれぬいた女のそれでは、むしろたまらない性的魅惑となつてい

ようなものであらう。

バイブルに「イエスでけるは、なんじらいまださとらざるか、すべて口に入るものは腹にゆき、遂に則におつるを、まだ知らざるか」とあり、この考へ方はたしかに科学的である。科学的に考へ、そういう知性の境地に立つなら、そこには單なる自然現象の眞実のみがあつて美醜と清汚もない。ないはずである。お医者さんが、それを平気で顯微鏡下や試験管に取扱ふことによつて理解できる。それを舌の上にチヨイとのせて、検査する医者もないとは限るまい。だが、この場合には、その科学的な知見、意識において、感覚の上に襲いかかつてくる異臭、汚穢の觀念が完全に克服されて、それが氣にならぬというだけである。臭いものは、依然として臭いだ。けれども、進んでそれが魅力的なものとなる成行は、じつさい、宗教的な信仰にもとづく一の鍊金術なのである。これは、科学者の場合とはちがつて、異臭が匂い高き魅惑となり、汚穢の意識は清淨化する。感覚が神や悪魔に、ごまかされるのだといつてもよい。変質でも、変性でもよい。とにかく、聖なる意識の中では、臭い匂いそのものが、たまらなく尊い芳香となるのである。いわしのあた



まも信心という、つまり、糞も信心なのである。で、一たびこの信仰を失つたものには、必然、それは鼻つまみになつてしまう。

性的な変痴症として知られている汚物狂崇^{スコトフアガス}という言葉がある。狭義には猥褻^{コウロク}発情症^{コウロク}或は尿狂崇^{ウラキョウ}としてあらわれるが、特に異性の糞尿を見、嗅ぎ、攝取し、時に身にすりつけ、かぶるなどによつて、狂崇心酔の欲求を示すがそれで、動機は必ずしも同じではないが、しかし、前述の、宗教的な糞尿崇拜と同じような事態があらわれる。で、それによつて宗

教的興奮がおこる代りに、ここでは性的な陶醉^{コウロク}がおこり、それだけで、性の絶頂感にも達するといった、極めて風変わりな異常心酔である。

では、そうした性的な意味のスコトフアガスでは、何か彼女と彼をそうさせたか。

知人の妻君で、厠に出入する姿を絶対に、人に見せたことがないので有名な奥さんがいた。排泄の生理にモラルを感じて、きたない行動という固定観念にとらわれたつつしみなのであるらしいが、ナニ、気にすることアな

い。イヴァン・ブロッホが、その本に一女性の言葉として示しているように「男と女の愛情では、相愛するものが、毎日、自然の生理現象をしなくてはならないと考えたつて、そのために詩的なおもてをこわされるはずはないと思います。何をしようとも、それがきたないとか胸がわるいとか、絶対にそんなことは思はない」ので、それが一種の魅力とまではならなくとも、無関心にはなりうる。(これが、健康な意識の上に把握される常態である。いうなれば、これは以前に述べた科学的境地であろう)。しかし、これも信心の立場におけるとひとしく、性的な境地においての魅力にまで発展するわけは一体何であろう。

糞尿が聖意識の中にもられて、それが崇拜された限りは、排尿も、共に神聖な事態だつたにちがいない。しかし、その聖なる意識がまだ個人的に発芽しない以前においては、それは貴重視される以上に、むしろきわめて自然的な快感の根元だつた。それはたしかに気持ちのいいことだ。排泄そのことの気持ちよさに、加うるに、排泄後のユツタリした快感は、だれでもが身に覚えのあるはずのものが、これは幼時期において特に深かつた。精神分析の学者にいわせると、大体性欲発達の

コウスとして、前驅的な幼兒性欲(原始性欲)では、性感帶はまず全身的な皮膚接觸としてあらわれ、からだ中のどこを撫でてでもさすつても、氣持がよい。しかし特に、「口で吸う性感」^{ディグ}として、それから尿道と肛門との排泄腔(孔)に、集中的に、敏感に、あらわれる。それが、排尿と排便によつてあらわれる快感、すなわち尿道性感と肛門性感である。で、口と尿道と肛門とは、人間性欲の発祥点みたいなもので、肉体的な快感の根元だともいえるのであるが、しかし、それが段々に育つて行くと、この全身的な性感、及び特にするどい三局部の性快感も、次第に弱まつて、性器を焦点に、完全にその一点に集中していく。人間性欲の基地は、かくして決定的に成立する段取りになるのであるが、中には一向かんじんの場所に集中しないで、いつまでもこの三局部で足踏みしている変り種も出てくる。これには社会的に、體質上の、いろいろな原因があるのであるけれども、その一例として私が小学時代からの友人で(今は故人になつたが)大学生にまで成長していながら、まともなマスでは徹底的にダメで、ひたすらに肛門手淫の一すじ途でのみ、遂情し射精までした変人があつた。これは、あなが

ちに、被鷄姦の常習によつてそうなつたのではなく、生得元来の發明だつたことを彼は私に告白したが……

それはとにかくとして、こうして、こういういわゆる童稚性性欲の藪の中で迷ひ子になつてゐるものにおいては、その正常な発達を阻害された性欲が、したがつて、幼時期の、この快樂の座にうづくまり、リビドウ^{ノスタルチア}への郷愁が切実だ。或は、あるアクションですぐそれへ回歸する。しかも、現実的には、そう深くは感じないので他人、特に性欲対象としての異性のそれに、フレッシユな聯想の快感をよびかける。この聯想の追真方は、自分のそれよりも、自分以外の、特に異性のそれによつて、遺憾なく發揮されるのである。そして、それを見、嗅ぎ、食ひ、のみ、かぶる、なすりつけることにより、射精にまで昂奮してしまふ。とんでもない——しかし、すばらしい。ロマンチケルだが、こうなると、異臭もヘツタクレもありはしない。ただ一向きな性陶醉の中で、それが、こたえられぬ魅惑になるのである。汚物狂崇は、大体、まア根元的にまづかうした成行であられるのであるが、そうだとするなら、元來がそれは一のフェチズムでなければならぬ。

モルが報告する或る少壯実業家のスカトロジイでは、彼は五六歳のころ、小間使のスカトロの中にはいりこんで、フトその顔が女の臀部にふれ、ぞくぞくツとするような非常な快感をおぼえたことを記憶しているという。それから数年の後、偶然のことで、従妹の少女が、彼の顔に臀をのせた時嬉しくなつて、何べんも何べんもそれをくり返してもらつたが、その快感への欲求が、無意識のうちに成長し発達して、のち立派な糞便狂崇^{コプロフニヤ}になつてしまつた。リビドウへの記憶が、こうした偶然をチャンスによみがへり、逆コースを驕進したものとするべきであらう。これは視姦に結びついただけのものらしいが、ただ眺めるだけの汚物狂崇では、エリスにまた、イタリイの一尼僧に関する次のような一例の報告がある。

彼女は、早熟八才にして自慰を知り、同性愛の快樂にも耽溺したが、のちに尼僧院へはいつてから深くつつしみ、信仰一途にそれを忘れようとつとめた。しかし、世話している子供の排便を見ていると、どうにも我慢がならなかつた。そして、とたんに、はげしいオルガスムスがおこるのだつたという。さて、次ぎには

再びモルによる報告の一つに、こんながある。

二十三才の青年として記されるその男は子供のときから、同性にのみ愛情を感じ、特にその排便が、気になつて仕様がなかつた。便秘とか痔疾とか、消化とか大便とかいうトピツクの説明を本の上によむだけで、もう興奮する。少年の、排泄物で充満した腹や臀のことを考へると更に興奮した。大人の中でも子供のでも、その排便を偶然に見ると、とたんに勃起して射精した。これは、同性愛とむすびついているらしく、異性のそれよりも、同性のそれに敏感に反応したという。更に珍らしいことには、この男は十四才ごろから、自分の排便に性的な快美を感じて、全裸体で、脹満した自分のお腹を眺めたり、さすつたりしながら用便して同時に射精した。

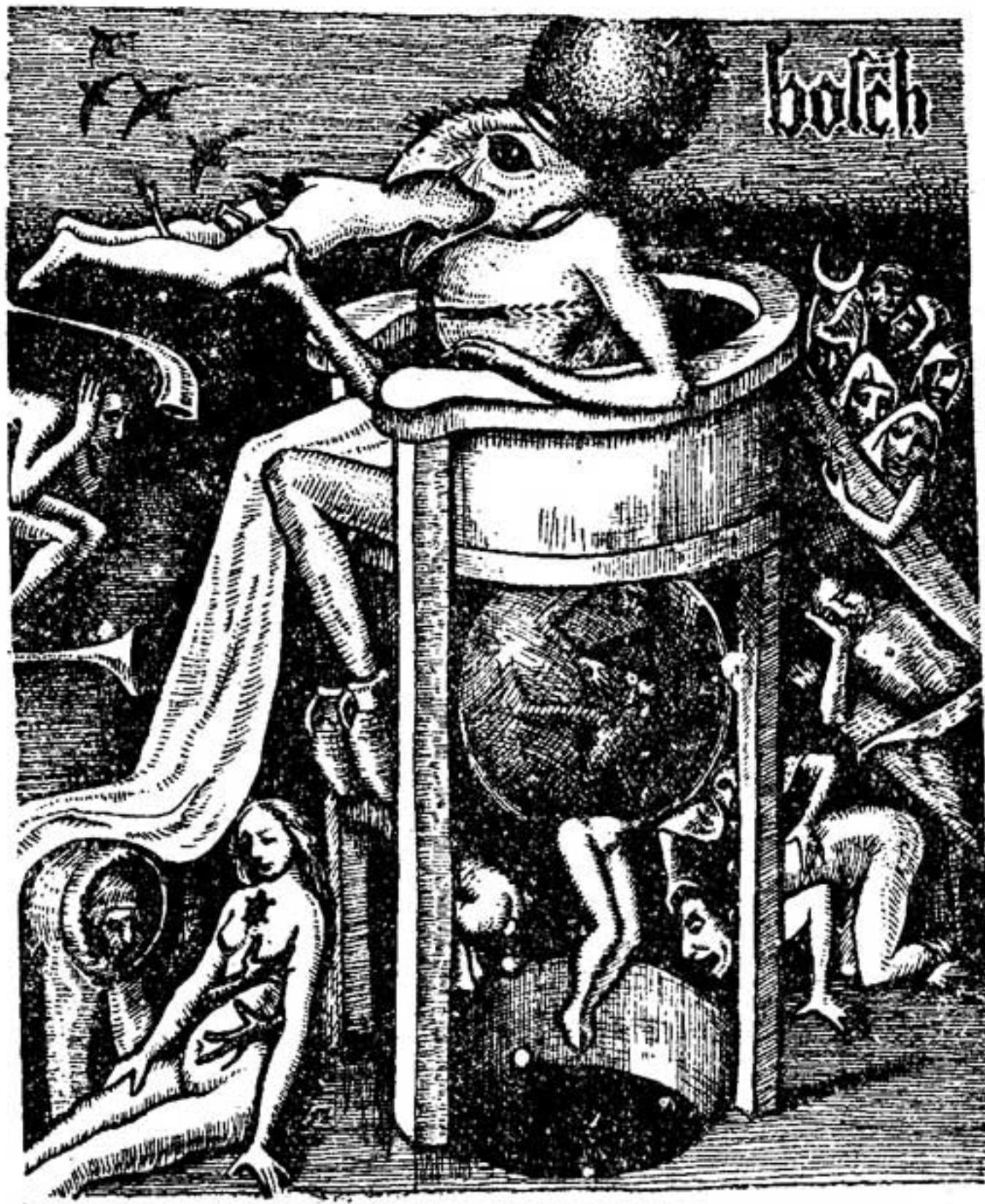
スクハノフの報告として、高橋氏が引用するそれでは、二十七才の青年である。女性の放尿にちかづき、その尿流がうまく自分の口にはいると、極度に満悦した。彼は、偶然女性の放尿を目撃してから、そうなつたのだという。つまりそれが、リビドウ回想へのチャンスになつて、俄然、とんぼ返りしたわけである。更に、同じくペランダの報告なるもの

によると、女性の放尿を、その温熱がまださめきらないうちに、呑むため、若い女性の上脛を尾けまわしたという男もある。

これは十九才の人妻である。男の尿臭がこたえられぬ。公衆便所の前なんか通ると、夢中で手淫せざるを得なかつた。

で、その危険な衝動から自分をまもるために、家にかえると、男の尿を入れた壺をしまておき、時々、

その臭ひをかいで自慰したという。彼女は、まともな性交よりも、醗酵して臭が強くなつた異性尿をかきながら自慰することによつて、無上の快美感到昂奮したというし、男の尿と、女のそれとを嗅ぎわけるといわれてい



このような尿心酔が更らに昂揚すると、それを身にかぶることもなる。丁度、酒呑みが、文字通りに、ビールを身に浴びるようになった。マニヤンが報告するところによると、十一になるその少女は、たいへん伶俐な子であつたが、自分よりも年下の少年を誘惑して、地面に横たはり、尿をひっかけて貰つてよろこんだ。

大震災のすこし前、浅草に、半氣ちがいの三十位になるお初という女乞食がいたそうだった。この女は、常に四合瓶を一本ぶらさげて自分の放尿をこの中へ、一滴も洩らさずたく

のウロラガニアではなかつたのかもしれない。今一つ、これも高橋氏の引用として、次のようなケースがある。その男は、少年時代か

はへて置く。そして、空腹になると、思ひ出したようにそれをゴクンゴクンと呑んだ。夜は、同宿の男乞食に、お冷酒を一杯テナわけで、その放尿を振舞う。その男乞食たちが、それを受けたかどうかは判らないがこの女が異性の尿を求めたかどうかはつきりしない。報告では、「自分の尿に対して、病的な嗜好があったのではないか」と書いてあるけれども、そうだとすれば、或は、自己愛にむすびついた尿心酔だつたようにも思えるが、しかし、有名な蔚山籠城では、渴を



いやすために、人馬の尿をのんだとあるから、そうしたことから異嗜症になつた結果ではないかとも思われ、いわゆる知的な意味

う、女性の太腿の間に顔をはさみつけられたままその臀にしかれて眠りたい。そうすれば自然に彼女の尿がのめるからという、妄想を

いただき、幻想にふるえて遂にそれを実行にうつしたという一官吏もある。すべて、こうした、飲み、食うことに結びつくスカトロロイは、口淫に結託されたものであるが、或は、一人の青年が、美しい娘を自分の部屋へつれてきて、裸体でおどらせたり、いろいろな姿態で高く跳躍させたりした上で、そのまま放尿させる。それを見ていて射精したというようなフェチの例もあり、ひそかに恋している女性の奴隷となつて、彼女に胸へまたがられたり、顔へペツタリ臀をのせられたり、用便の時傍へ侍らせておかれた。時には尿を顔にひっかけられたりするという幻想をもちつづけた二十才の青年の如き、空想上のマゾヒズムとむすびついたパギズムの使徒もある。

クラフト・エビングは、「マゾヒズム的感覚は、倒錯者には全く無意識で、ただ嫌悪すべき物件に対する衝動だけを意識しているように見える」として、コプロラガニアを説明しているが、じつさい、それがマゾヒズムやサチズムとむすびついた場合、その範圍内でのそれでは、汚物は汚物としてののはつきりした意識で把握されていなくてはならない。嫌悪すべき汚物であるという意識や感覚なしには、それは被虐加虐の條件にはならぬ

ので、この場合では、多少とも、それが苦痛を伴うことによつて成立し、はじめて性的興奮となるのである。そうしたマゾやサヂとむすびつく汚物狂崇は、完全に、或は或る程度に、もはやフェチズムの限界を遠く、近くはなれていく。

排泄物狂崇におけるその排泄物とか汚物なるものは、糞尿にはかぎらぬ。身、女王の貴きをもつてして癩病患者の膿をすつたなどというのも、これは必らずしも慈悲心情ではなく、汚物狂崇的な性的エゴイストではなかつたかと想像するのであるが、事実において、そうした意味で膿が吸はれる（潤一郎の小説に「颯風」というのがあつて、そうした場面がある）。足の裏がなめられる。肢門がなめられる。咯痰が舐められる。精液をのむ。経血をのむ。支那人においては、婦人の解かれた纏足の生まずっぱい臭が、彼らに、無上のものだった。

最後に、クラフト・エビングが報告するコプロラグニアに次のようなものがある。

Zというその男はのとき五十二才、地位は低かつたが父は申し分のない健全な人だった。遺伝の素質はない。彼は一人息子で神経質だった。七つの頃、すでに下女が室内を掃

除するために、靴や靴下をぬいでいるのを見たとき、たまらない独特の興奮を感じたことがあるが、ある時は、下女に足のうら特に足指を見せてくれとせがんだこともあるという。すべて残虐な物語においてそれが女の命令であるとき心はずんだ。やがて、女の足の裏をなめるという空想が、彼を気がひのうに有頂天にした。結局、完全にマゾの傾向にあつたが、十五才のとき、下女がむく犬に足をなめさせているのを見て、とたんに勃起し射精した。で、その下女をくどいて、チヨイチヨイ犬に足の裏をなめさせ、それを見つけたのしんだ。ついには、むく犬に代つて自分でなめることにした。もちろん、その都度そのために射精したので。女性にも男性にも普通ではまともな色情が起らない。補淫的にまづ足うらをなめなくてはだめだった。小さな靴でゆがめられ、一回も洗わないで臭くなつた貴婦人の足を空想しては自慰した。女のはきるふした靴下に接吻し、なめて、それを水につけ、どろどろにしみ出た垢の水をのむ、ことを空想した。多少のフェチをまじえて、完全なマゾであり、それにむすびついた汚物狂崇である。

惣じて、ここにコプロラグニアというの

は、糞尿にかぎらず、すべての不潔物に狂崇するマゾでありフェチであり、サヂであり、等々、非常に複雑な様相において性を戰慄する。

× × ×

性欲の正体ぐらい複雑怪奇なものはない。肉体の怪奇である。そして、生命の怪奇であり、心の怪奇であり、たましひの怪奇である。五尺の肉体は、そうした宇宙の怪奇を深部に蔵めて、そこには偉大なる悪魔の顔がニツと笑っている。

愛 読 者 通 信

私は中学時代より女性によつて、肉体的に苦痛を与へられる事に喜びを見出す様になり、それがマゾヒストである事を知つた時は大学ももう終る頃でした。それ以来、何とかしてサヂストたる女性に廻り合ひたいと思つて居る内に、御誌を知りました。その内容が私の最も欲していたものである事を知り心から喜んで居ります。

当方廿五才中肉中背で、美男子の部に属する方です。相手方はサヂ傾向を有する女性なら誰方でも結構ですが、成可く大柄な方との交際を望みます。 北多摩 (Y・I生)



連載・あぶ
すとおりの

ま

に

や

地

獄

第五回

催情指療師

……夫人は「あ、ダメ……」とつぶやいて身をよじる……長襦
袢の襟元や、髪のアタリから汗と香料の入りまじった動物質の
匂いが、たゞよつて……

日夏由紀夫

水沢深雪画

マッサージ師の榎が、はじめて、幸子夫人を見たのは、例の
年尾夫人の邸で、夫人をマッサージしていたときだった。が、

「ごめんなさい……」

そう、つましく礼をして、座敷へ入ってきた絞りんずか何
かの、いかにも貴族夫人らしい上品な、スラリとした和服姿に
榎はぐつと、つばをのみ込み、例のいたづらの蟲が、にわかに
身うちをはしり廻るのを感じた。

榎が、めくらでもないのに、他の職業をすてて、マッサージ
師などと云う、あまり名譽でもないこんな職業についているの
も、こういう幸子夫人のような美しい女性にめぐりあい、そし
て、ある特殊な方法で、彼女達の肌にあふれ、それを思いのまま
に、汚すという楽しみがあればこそ、だった。

だから、幸子夫人を一目見たとき、榎は、何とかして、この
ひとの肌にあふれたい、自分の手で、マッサージしたいという欲
望が、ムラムラとおこるのをおさえようがなかった。

年尾夫人は、そう云う彼の心のうちを知っているのか知らな
いのか、

「あ、高木の奥さま、こちら、いつかお話したでしょう？ あ、三宅坂のマッサージの先生」

と、榎を紹介して横になつたまま、
「どう？ 丁度いいから、奥さまも、マッサージしておもらいになつたら」

と云つてくれた。榎は、吾にもあらず、胸をときめかしたが、幸子夫人は冷たく、
「でも、私、一度も、して頂いた事がありませんか。マッサージつて……」

と、少しも関心をしめさなかつた。榎はそれが残念で、

「奥さま、私の、アメリカのプリジストン大学で、研修致しましたもので、マッサージつて云つても、他の施術師のとは、ちがうのです。医学的にも、ちゃんと理にかなつたもので、元宮家をはじめ、上流の奥様方は大抵させて頂いてますが、皆様から大変よろこばれております——」

と、年尾夫人をもみながら、説明し、年尾夫人も、

「本当よ。私、はじめは、ぜい肉をとるのが目的で、かかつたんだけど、気持がよくつて止められないの。これをやるようになってから、風邪一つひかないようになった



わ。……今、一週間に一度づつ、来て頂いているんだけど、都合で休んだりすると、何んだか、とても堪へないの。氣持が悪くて。……だまされたと思つて、やつてもらいなさいよ」

とわきからすけてくれたが、

「でも、何だか、いやですわ。男の方に魅をもまれるなんて……」と意外な位、かたくなだつた。

「なれぬ方は、はじめは、みなそうお思いになります、医者にかかると思ひになれば、……」

となおも、思ひ切り悪く、すすめると、

「ええ、今度、折がありましたら——」

と、少し腹立つたような口調で、ぴしやりと断わられたので、さすがの榎も、それ以上、どうする事も出来なかつた。求愛を拒否されたような氣持で、こちらのよこしまな心を見すかされたかと、榎は、落付かず、年尾夫人の施術も、いつものように十分には出来ずに、そのまま、高輪の邸を出たが、その日一日、幸子夫人の氣品ある、少し目もとにケンがあるが、ととのつた顔と、すらつとした中肉中背の躰が、目先にちらついてはなれなかつた。

榎は、三宅坂に邸宅をかまえ、電気治療、指圧、マッサージを看板に、上流家庭の夫人、令嬢だけを専門に、次から次へと紹介をもとめて出張施術するので、上流家庭の間で、三宅坂の先生と呼ばれていた。アメリカの医学士の称号をもつていて自分では宣伝していたが、彼の前身はだれも知らなかつた。まだ三十五歳の若さで、白哲の額と、眼鏡の奥の、からみつくような鋭い眼が、一種異様な、神秘的な、暗い感じを人に与え

た。

彼は、いつも折目正しい背広をきちつときて、施術のときはその上へ白い上衣を羽織る。聴診器で、胸を、しさいらしく見たり、医学用語をつかつたりする所も、ただのマッサージ師とはちがつていた。しかし、彼が、流行るのは、彼のそういう施術が病氣に対して効果がある爲ではないらしかつた。(夫人達が病氣になると、彼は、医者をすすめ、自分は健康な夫人達ばかり相手にしていた)

上流夫人達は、だれも、はつきりした理由は自分から云わなかつたが、一度人に紹介されて、かかると、病みつきになり、争つて彼の来診を待つようになるのだつた。そして、サロンなどで、彼の噂が出ると、皆、曰くあり氣に、クスクス笑いながら、

「先生には、魔力があるわ」とか、

「今週は、先生がこなかつたので、躰が、変だつたわ」と

というような話を、好んでした。年尾夫人なども、最初からの彼の心酔者で、毎週火曜日に彼の施術をうけるが、その日はどこへも出ずにひる風呂に入つて、お化粧をし、まるで恋人でも待つように彼を待ち、女中をしりぞけて居間で、二時間から三時間も、彼のマッサージをうける。時には、そばに、遊びにきた学生などをはべらせて、

「あなたも、こんな風にして、女の軀もみたいんですよ。もませて上げるから、ここへきて、先生に教わりながら、もんでござんなさい！」

などと、たわむれて、榎に下半身をもませ、学生に上半身を

あたえて、学生が、次第に興奮して行くさまを、じつと、いたずらそうに見ている事もあつた。そんな時でも、榎は顔色もかえず、無表情に、しかし、学生がいなるときと同じようなマッサージの仕方をするので、しまいには、学生はぐらぐらして、手がふるえてしまう。……

年尾夫人にとつては、そんな事も、退屈な毎日をまぎらわせる、刺戟的な遊びだつたのかも知れない。榎の施術料は一回五千円という馬鹿馬鹿しく高いものだつたが、年尾夫人はじめ、だれも、それに文句を云う夫人達はいなかつた。……

二

榎は、高輪の年尾夫人の邸で会つた幸子夫人の姿が忘れられず、それから、折にふれて、それとなく、年尾夫人に、幸子のことをきいたが、それによると、彼女の氣品があるのも道理で、彼女は、元侯爵の近江家の出であるという。

そして、現在の高木家へといふできたのは、まだ学習院在学中の十八の齡で、何も分らないうちに、両家の間で話がまとまり、一度か二度あつただけで、現在の高木氏と御婚儀をあげられた。(だから、在学中に彼女は既婚女性になつたのである。もつとも学習院では、このようなことは珍らしくない) 政略結婚という噂がある。

そんな風だから、夫婦生活もうまく行つてないらしく、夫人は、齡も若い、まだ軀や態度全体に娘らしい堅さがのこつていた。

幸子夫人に会つて一月以上たつた、ある日。

「高木ですが、至急、療治にきて頂きたい」と云う電話がかかつた。

榎は、もう半分、あきらめていたので、この申込は、実にうれしかつた、思わずニヤニヤと相好を崩しながら、他をこつとわつて、ただちに、車を、高木家に向けた。

高木邸は、目白の学習院裏にあつた。年尾夫人の邸におとらない豪華な邸だつた。

女中に案内されて、中庭を渡り、奥へ行くと、しつとりと落ちついた感じの座敷があり、そこが夫人の居間らしく、夫人が華やかなけんちゆうの蒲団を引いて、その上に長じゆばん姿でねていたが、榎が入つて行くと、起き上つて、

「こんななりで御免なさい。……氣分がすぐれないので休んでました」

「どうぞ、そのまま。先日は——」

「私こそ。今日、なんです、あまり肩が張るので、……」

「はア、それでは、どうぞお楽に」

と一通り挨拶をかわした。

髪は、無雑作に、アップにあんであるが、その後れ毛をかき上げる手が、ピアニストの指のように、繊細に動く。少しやつれて、熱っぽいような感じの顔が、榎には、閨房で、満足したあとの夫人の顔に想像されて、なやましかつた。秋草と水の流れを圖案風に描いてある長じゆばんは、すわっている、ひざの円味や、お乳のふくらみを、なまめかしく、覆っている。

「とにかく、一度診察を——」

と、しさいらしく榎が袍をあげようとする、夫人は、襟もとをおさえて、

「いえ、何でもありませんから、すぐ、マッサージだけして下さい」

と、命令するように云った。肌を見せるのがいやなのである。……月の障りなのかも知れない。あまり、しつこくすると、いやがられるから、榎も、「それでは」と云つて、布団の上に座っている幸子のうしろへ廻つた。

長じゆばんの上から、軽く肩口をおさえ、頭から、肩のあたりを、親指の腹で、おさえるようにしてもんで行つた。

はじめて、マッサージをうけるらしい事は、口裏からも分つたから、優しく、柔らかく、もむのだが、それでも、軀をかたくして、少しでも、手が、脇の下の方へさわつたりすると「あ、ダメ……」

と、つぶやいて、身をよじる。肉は、骨がないかと思うほど柔らかく、それでいて、たつぷりした量感が榎の、なれ切つた掌のうちに感じられた。

長じゆばんの襟のなかや、髪のアタリから、汗と、香料の入らまじつた、動物質の匂いが、ただよつてきて、夫人が、身じろぎする度に、榎を、うつとりとさせた。

二人共、ほとんど口をきかない。

ただ、榎の掌と、夫人の肩から背中にかけての肉が、やさしい争い、微妙な会話をかわすだけである。

肩から背中へかけてもり上るようになった肉は、そのまま、お尻の丸い白のような肉のなかへ消えて行く。

そのあたりまで、榎の手が、もみ下し、もみ下しして行くのを、幸子は、目をかたくつぶつて、ひたひたに、ほんのり汗をにじませながら、味わつていたが、手が、少しでも、脇腹の方へ行くと、すぐ、ぴくつと、腕で、榎の手をはさんで、もませない。——年尾夫人などは、もう、どこをもんでも平気でいるがさすがに、幸子ははじめだけあつて敏感である。

マッサージ師の心得として、ことに若い婦人の新しい客などには、もんでほならない禁忌の部位というものがある。

たとえば、乳首のまわりから、脇の下。それから、ヒ腹から股の内側にかけてなどは間違つても手をやつてはならないとされている。そればかりではない。女の軀というものは特殊なもので、その他、何でも無い所でも人によつて、それが禁忌の場所となる事がある。

たとえば、H家の令嬢の場合は、足の裏のやわらかい場所をこぶしで、ぐりぐりとこねまぜるようにして、永い間もんでいると、息をはずませて、軀をもじもじとうごかしはじめ、「お苦しかつたら止めましょうか」

ときくと、

「いいの。つづけて」

と、上つた声で云う。

また、ある夫人は、肩の肉を、両方の手でつまみとるようにぐつと握られるのを特に好む——と云つた風である。

榎は、幸子が、脇をもまれるたびに、軀をひくつかせるのを見て、これが、この女の敏感地帯なのかと思つた。

「おみ足へうつりますから、どうぞ横におなり遊ばして……」



と云うと、

「いえ、結構です。大変かくなりました。有がとう」

と、断わつたので、下まで、もむつもりだつた榎はガツカリした。

しかし、それ以上すすめる事も出来ないの、だまつて、礼をし、女中から金の入っている紙包をうけとつて邸を辞した。

三

幸子夫人が、下に榎の手が行くことを拒んだのは、深窓の夫人らしい羞恥心からであろうか。それとも、榎のみ方に何か邪念がある事を敏感に感じとつたのであろうか。もし、そうだとしたら、大変である。——そう考えると榎は、居ても立つてもいられなかつたが、マッサージ師の身分では、どうする事も出来ぬ。

ウツウツとしていると、それから十日ほど経つて、また不意に、マッサージ依頼の電話がかかつてきた。それにとるものも、とりあえず、榎は、再び目白の邸の門をくぐつた。

その日は、気分は直つたらしく、ちやんと着物をきていた。気位の高いの

は、いつもの事で、ほとんど、口は利かない。

女中に床をとらせると、だまつて帯をとつて、床の上へすわった。

この日は、少しなれたらしく、肩がすむと、自分から、軀をくずして、横になり、

「足も——」

と云つたので、榎は、胸があやしくときめいて、もむ手も、ふるえる程だつた。自分の術中に、女が進んで、身をなげかけてくるときほど、彼を興奮させることはなかつた。幸子夫人を抱きしめたい程、可愛いと思つた。

しどけなく、着物を崩して横になつた夫人の軀は、お尻やお腹の起伏が、一層あらわになつて、いかにも男の目をそるようだつた。それを無意識のうちに氣にして、軽く布団を、お腹のあたりまで掛ける。

その布団のなかへ、そつと、手を入れて、足袋を一つ一つぬがせた。素足の柔かい足は、かすかに汗ばんでいる。

足の裏を十分にもんでから、今度は、着物の裾をわけて、ふくらはぎから、ひざ頭のあたりまで、じかに手をお入れした。その辺の素肌は、餅のようにペタペタして、こつちの手へ、ついてきそうな氣がする。布団のうちではあるが、着物を随分、しどけなく、はだけてしまつたのに、幸子は、軽く目をつぶつたなり、何も云わない。

本当は、自分のひざの上へ乗せてしまつて、ぐりぐりもむのだが、さすがに、それは遠慮した。(年尾夫人などは、榎が、ひざの上へ足をのせ上げると、殊によるこぶ)

ひざ頭の上の、ふつくりした足に手をのばしたかつたが、その誘惑にも、かろうじて耐え、その日は、そこ迄にした。

と云うのは、幸子が、榎のマッサージに興をおぼえてきたのを感じとつたからである。そういう時は、むしろ、物足りない位にしておく、きつと、すぐ、あと注文がかかるのである。

果して、その日から二日ほど間をおいてすぐ又、依頼の電話がかかつた。榎は、心中かすかに、ほくそ笑む思ひだつたが、そんな氣配は、おくびにも出さず、かしこまつてお伺いすると夫人は、いつもの部屋に、長じゆばん一つの姿で、ねていた。そして、榎の姿を見ると、片手をついて、わずかに身を起し「お願いします——」

と、云つてすぐ目を伏せた。榎に、氣を許した証拠である。榎は、さりげない顔をしながら横になつたまゝの幸子をうつぶせにさせ、すぐに、肩にかかつた。背骨にそつて、腰のあたりまで、もみ下し、お尻の肉が、急にもり上るあたりに、力を入れて押す。ここは一つの急所で、押すたびに、幸子は、ウツウツとかすかにうめいて、眉を寄せた。

そこをたつぷりもんでから、今度は、あお向けにさせ、思い切つて、長じゆばんの上からではあるが、お乳をもみほごした。ぷつくりしたお乳は、榎にもまれて、敏感にぷりぷりふるえた。結婚している人妻にしては、未発達で少さいのは、その結婚生活が、幸福でない事を語っているようだ。それだけに娘の乳房のようで可愛かつた。——しかし、こうして、もめば、すぐに発達して大きくなるにちがいない。

幸子は、お乳をもまれ出すと、わずかに軀をよじつたが、止

めずにそれを許し腕を目の上へそつとのせた。長じゆばんの袖がずるつとこけて、ろうのように白い二の腕が、根本の黒いところまで、めくれたが、それを直そうともしない。

お乳の下からひ腹の方へ施術するとき布をへだてているのが残念であつた。よほど、じかに入れようと思つたが、やつとそれは思いとどまつた。

その代り、その日は、前に、遠慮したひざ頭から上の方へ、ちりめんの前を分けて手を進めた。しゅんかん、ピクツとしてかたく両足をあわせたが、それでも

「……………」

と何か口のなかで云つただけで、少しも、拒まず、もんでいるうちに、力をぬいた。

ももは、思つたよりずっと太く、逞ましいと云つてもいい位に肉がもり上つて、宮殿をささえる二本の円柱のようであつた。さすがに足は、決してひらこうとしないで、終始、ぴつたり合わせたまま、マッサージをうけた。

しかし、榎は、それでも、そこまで、この気位の高い夫人が許したのに満足して、常にあらず興奮し、何度もつばを呑み込まない訳に行かなかつた。そして、

「何も、はいていらつしやらないかと、存じましたら、うすいパンティをはいていらつしやるんですね」

と、ささやくように問いかけた。ぴつちりと肌に喰い込むようなパンティをはいているのが分つたからである。——勿論そんな言葉に返事のある筈はないが、そういう事を、女の顔を見ながら云うのが、榎の趣味なのである。

その柔らかい布に保護されている爲に、一層そこが敏感な、貴重な個所である事を証拠立てているような、そんなパンティだつた。

そんな恥かしめるような事を云つたとき、ふとももの内側のまたをしめる筋肉がピクピクと二度ばかり引きつるのを榎の手は感じた。それが返事だつたのかも知れない。

女中は前から云いつけられているのか、一度も姿を表わさなかつた。かえるとき、ようやく姿を見せただけである……。

四

それから、二日おき、三日おきに、榎は通うようになり、その度に、少しづつ、新しい部位に、彼の手のびて行くのを、夫人は許した。

お尻のやさしいぷつくりした円みや、そここの微妙なくぼみなど、一つとして、彼におかされない所はなかつた。

女は、なれてしまえば、どんな、つつしみ深い女でも、平気になる、と、いうのが榎の哲学であつた。

彼女の着物や、下着などにしみついた、むせるような香水の匂い、それに加えて、施術が半ば進む頃になつて、彼女の出す肌の匂いは、彼にとつてすっかり親しいものとなつた。

あるとき、彼は、ももの部位をもんでいるうちに、さつと顔に血がのぼるのを感じた。

その日に限つて、パンティをしていないのを発見したからである。これはどういう意味をもつのだろうか。ただの偶然だろ

うか。

彼の手は、かすかにふるえた。それまで十分に、技術をつくしては、いたけれど、何分、幸子夫人は、氣位が高く、しかも身分の高い女性であり、それにほとんど口も利かず、表情も無表情なので、氣心がうかがえなかった。

もし万一のことがあつたら大変である。

しかし、——と云つて、このまま見すごす事は、残念だった。彼は、遂にマッサージ師としての禁忌をおかした。ほんの偶然のように、彼は手をすべらした。

夫人は、ぴくつとして、何か軽くさけんだようだったが、そのまま、お腰をいくら引き……しかし、何も云わなかった。

もう、そうなれば、他の多くの夫人や令嬢と同じ事で、榎をはなせなくなつてしまふのである。榎は、心に深い満足を感じた。この生れながらの氣品と、ろうたけた美貌の貴族夫人を他の女と同じにしてしまつたことに。……

夫人は、相変らず、何一つ、言葉をかけようとしなかつたし、よそよそしく、彼をあつかつたが、それに反して、夫人の軀は、彼にその秘密をのこりなく、さらけ出し、何もかくさずに彼の問いかけに、いそいそとして答えるのであつた。……

しかし、彼はそれ以上、幸子に、なれしたしむような事は、せず、自分の与えられたものに満足して、心から、幸子に奉仕した。

幸子のもつ、自からなる威厳がそうさせたの

であろうが、そればかりでなく、彼自身いつか、幸子に対して（——と云うより彼女の美しい軀に対して）敬虔な愛を感じていたからであろう。

こんなことは、榎にとつては、はじめてであつた。他の夫人達に施術するときとは、同じことをしていても、まるで、氣持がちがうのである。

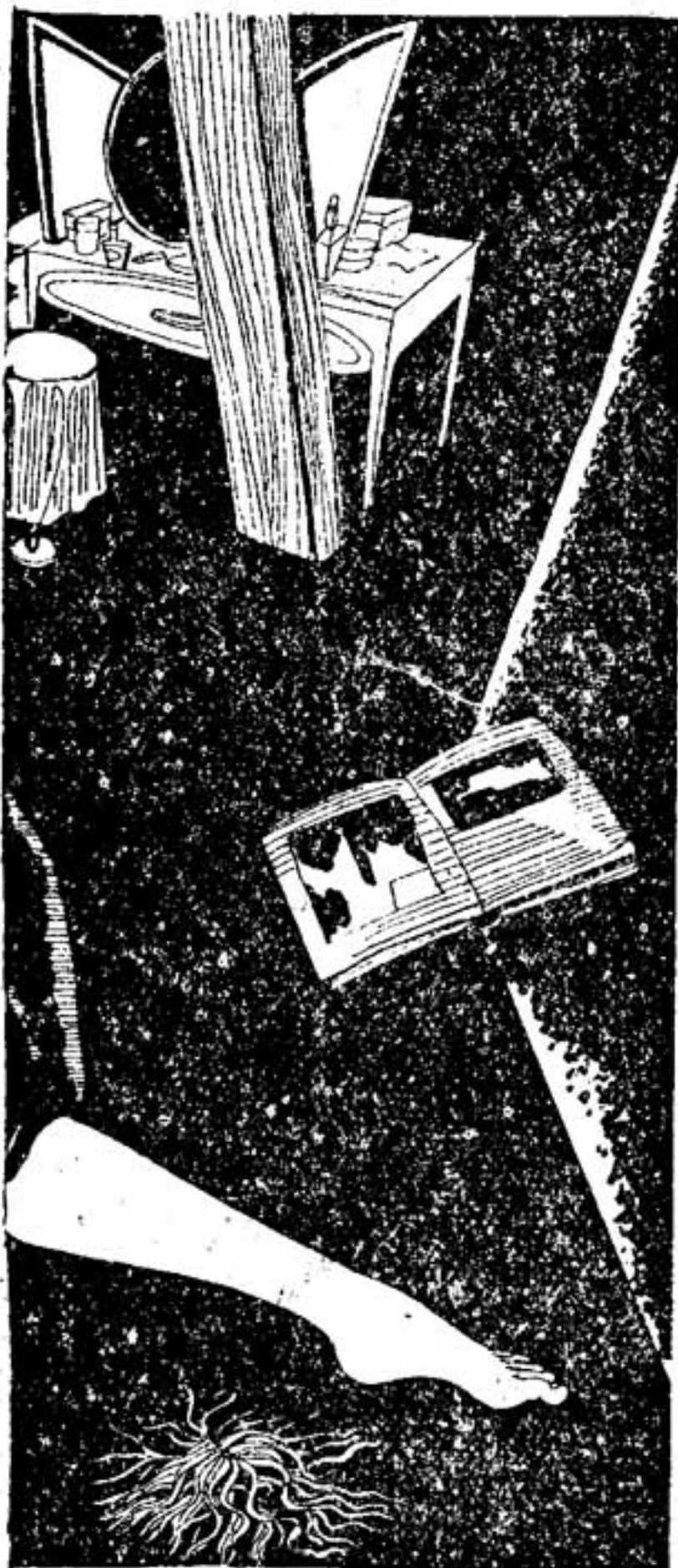
他の女に対するときとは、彼は、

「奥さん、そんなに足に力を入れちゃア……」とか

「どうなさいました？ え？ 御氣分でも悪いんですか？」

などと、しきりに、からかうのだが、そういう言葉が、幸子に対しては、出てこない。ただ心から奉仕して、施術の時間を夢のようにすごしてしまうのである。

五



ところが、奇妙なことに、榎が、そうなつて行けば行くほど、幸子の方は、ますます、榎を冷淡にあしらい、彼を無視するようになって行った。

榎が、ふすまをあけて、あいさつをしても、「あ」と、横になつたまま、うなづかれるだけで、挨拶もしてくれない。顔を見るのも厭わしいという風に、眉を寄せている、ときさえある。

施術中も、ただ、じつと目をつぶつて、布団を目の下までかけているか、故意にそつぽを向いて、小説本をよんでいるか、どつちかである思うに、夫人は、自分の大事な、人にひめた部位を、榎のような、いやしい男に、まかせている事に、たえられない屈辱を感じて、自分の貴い軀が、それによるこんで応えていることにはげしい嫌悪を感じて、それが、榎への厭悪に形をかえていったのではあるまいか。

こういう幸子の気持は、段々、彼女をして、榎を一個の、ちゃんとした人格としては認めないように行つたことは当然のなりゆきであつた。

と云うのは、彼を一個の人格として認めるからこそその苦痛、屈辱であつて、彼を、ただの道具、便利な器具位に思えば、その前で、どんな恥かしいさまを表わそうと、どんな姿を見せよ



うと、誇りがきづく事はないからである。

こういう気持が、こうじたあげくの果てであろう。——あるとき、幸子は、普通だつたら、ちよつと思ひもつかないような大膽なことをしたのである。

(この場合、幸子が、貴族出の女性だと云うことも考慮に入れておいて良いことである)

ある日、榎は、いつものように、施術をつづけていたが、そのうちに、常にも増して幸子が、上気し、興奮している事に気がついて、おや、と思つた。

布団のうちにこもる熱気も、いつもより高く、それに肌がじつとりと汗ばんでいるのも不審であつた。

それで、注意して見ていると、夫人のよんでいる本が、普通の本でないことに気がついたのである。洋綴じの何の奇もない本だつたが、なかにはさんである挿画をふと見て、榎はアツと息をのんだ。

幸子は、それを腕でささえながら、夢中でよんでいるのだがもちろん、榎が、気がついたことを知つても、わざと、それを無視しているのである。——自分の一番恥かしい姿態を見せてそれでも尙、故意に平気で居ようとしているのだ。

榎の顔に血がのぼつた。幸子のような美しい人妻と、そういう種類の本とのとり合せが彼の自制心をこえる程、色あざやかに、刺戟的だつたのである。

ふくよかに匂う布団のなかで、自分の施術しているその白い重たい軀が、この本に、血をわき返らせているのかと思うと、我慢が出来なかつた。しかも、男の目を無視して！

彼は、遂に、吾を忘れて、つつしみを失つたのである。幸子が、彼の人格を無視するなら、彼の方でも、自分の人格を忘れるようと決心したのである。

一瞬のことであつた。

夫人の掌が、自分の頬にはげしく鳴ることを覚悟した。それを覚悟せねば出来ないことであつた。

しかし、幸子は、身をおこさなかつた。

それを豫期したように、パツタリ本を閉じて、わきにおき、眼をつぶつた。……

幸子の軀は火のようであつた。

そして、手をのばして、榎の髪にふれ、その髪をやさしく、何度も撫で、手がよごれるのもかまわず、髪のなかへ指をつつ込んでかきまわしたりした。榎の頭がそこにあるのをたしかめるようであつた。

荒びて行く息を押えようとして、時々、おさえ切れなかつた。それは苦しみのもようであり、女のもつ宿命を嘆く声ともきかれた。

髪にさしたくしがばたりと枕の外におち、ピンが外れて飛んだ。

唇をかねて、こらえ、頬を血の色で染め、くびすじまで、赤らめ、のどの静脈をはつきり外に出して、それが、ドキドキと脈うつのが見えた。

長じゆばんの襟を自分でつかんで、押しひろげ、少しでも息が楽なようにした。自分で自分の行くえが分らないようだつた。しかし、その苦しみも、とまる時がきた。ひくつと、大きく

一つ息をつくと、勇氣をふるつて、床の上へ起きなおり、急に恥かしさが、つのつたように、髪を直し、着物の前を合わせる。とチラと榎の方をとがめるような眼で見て、立ちあがり、手荒くふすまをあけると、出て行つた。あとに香水の匂いをのこして……。

何と艶麗な絵巻のような今の有さまだつたろう。榎が、奉仕したよろこびと、幸子の眞の姿を見得た満足にうつとりして、いと、——ややあつて、ふすまが開かれた。

奥さんとさけぼうとすると、それは幸子ではなく、女中で、彼の前に手をつくると、

「……奥さまが、もう、お帰り下さいますようにと申されました。御苦労さまでした」

と、白い紙づつみを渡した。彼は、だまつて、それをうけとり、ちよつと押し頂くようにしてから、立ち上つた。……幸子は、姿を見せなかつた。

それから、一カ月に二三回きまつて呼び出しがあつた。日が大体きまつていた。月経前後であつた。

月経最中のこともあつた。……しかし、決して、榎は、それをいとわなかつた、いや、むしろ、そういう時こそ、自分が、この夫人のために、身を汚して奉仕しているのだという、よろこびを感じる事が出来た。

幸子も、そういう時は、とくに快樂を覚えるらしかつた。彼女は、榎によつてはじめて、軀のよろこびを知つたのである。彼女の夫は、妾宅をかまへ彼女をかえり見なかつたその爲に、彼女はほとんど処女同然であつたのだ。

榎によつて目覚めさせられた幸子夫人は、しかし、それだけでは満足しなかつた。パーティで知りあつた若い青年と愛し合うようになり、姦通の罪をおかすに至つた。それも、みんな、榎が、教えたようなものだが、夫人は、榎に対しては、いつまでも冷淡な態度をかえなかつたのである。

(この回、終り)

官能的な麗筆で病癪に憑かれた奇妙な人間秘図を描破する「まにや地獄は」愈々絶讃裡に回を重ねますが次回は

視 姦 の 部 屋

「のぞき」の快樂に溺れる偏執者の物語です。御期待を乞います。

アツと眼をみはる

豪華絢爛の本誌新年號!!

數ヶ月の間營々と蒐集したあらゆる材料秘文を投入して自信を持つて皆様の前にお目見得します。

全頁マニヤ垂涎の記事に埋められた本誌新年號を是非御期待下さい。

異常性愛の醫學

どんな男が

マゾヒストか

——マゾ男性の判別法——

広く一般論として、男女両性の性格をみるに、男性はサディズム（加虐性、積極性、能動性、攻撃慾）女性にはマゾヒズム（被虐性、消極性、受動性、被侵略性）を主体としていることは既に常識的事であるが、しかし、彼のワイニンゲルの云うように男性と女性はこの二つの要素（サド、マゾ）が相異なる割合において結合し、而かもいづれの要素も決して全部的に失うことのない二個の実体であることは我々も承認し得る所である。

で本主題に対して第一に述べたい事は、この様に男女は両性具有的であつて世には絶対的なマゾヒストはいないと云う事である。

男性においてマゾヒストと謂われるのは女性的分子の多い男性であつて一口に「女性的な男」（心理的にみて）と云へよう。

第二に注意すべき事は、男性は自己のサディズム或いはその傾向

は容易に理解され意識されるのであるが、反面マゾ的傾向は容易に意識され難いのである。

第三は体質、容貌等とはほとんど無關係であると云う事である。みるからに、男性的な男、威厳ある容姿、頑健そのものの体軀からうける印象はマゾヒストとはどうしても想えない位であるが、かゝる人は得てして（案外）マゾであり、之に反して、容姿、纖弱、所謂優男にサディストがあり体格、容貌などには決定的な特徴はない。

しかし精神身体医学ではないが非常に傾よつた体質（容貌）の者は傾よつた性格の持主になり易いであらう事は考慮する必要がある。即ち、強度のサディストかマゾヒストであるかもしれないのである。



中央精神分析學研究所長

西 島 實



筆者の知人であるが彼は筋肉隆々肩は怒り顔色あくまでドス黒く顴骨下顎骨共に突出し、眼光火を射るが如く一目みた瞬間誰しもゾッとする位である。よく聞いてみると、彼の内面生活（性生活、夫婦生活）はマゾそのものであつたのである。

即ち、先に述べたようにサド、マゾは見かけにはよらない、あの人がねエと我々は首をかしげる事はよくある。所謂、人格者教育者と云う類に案外多くみうけるようである。

第四は、サド、マゾも表裏体をなしていると云う事である。丁度愛情における憎悪の如きものである。

即ち、マゾヒストもサディストも絶対的不變でなく徹底せるMAZOは徹底せるSADIに相通ずるのである。

たとえば、第一線に近い兵隊が志願して敵陣に突入するのは敵愾心（攻撃慾）發露であるが反面自己の生命の危険もかえりみず身を

こう毛の輕きにおくが如きはマゾ的と云えるのである。

即ち、一定の對象（たとえば、仕事、対人關係など）に対し非常に攻撃慾（闘争心）の強い人は自己に對して非常にマゾヒステックになりやすいと云う事は我々は充分知つておく必要がある。

性愛場裡において、性的な嗜好は癖になりやすく相手の指導如何によつて変化しやすいのである。即ちマゾかサディにその反対もなり得るのである。又、性行爲を遊戲化する人もその危険がある。前技を前戯と想ひいたづら半分に（前技の目的に添わず）行ふ場合、それからうける心身の異常な刺戟が、障となつてしまうのである。

どんな男がマゾヒストか？

前置きが長くなつたが委しくは彼の性生活、対人關係を調べる必要があるが左に大体のヒントを述べこれにいささか説明を加えよう。

（1）目に潤ひのある男

男は皮膚的であり、女は粘膜的なそれであると云われる。即ち、皮膚的である事は乾燥している事であり陸棲動物的であり、粘膜的である事は温潤的であり水棲動物的であるとも云える。この意味から体粘膜部が特に潤ひのある人間は女性的と云えるのであつて従つてマゾヒストとしての肉体的要素があるとも云えるのである。

（2）逆前技を好む男

普通一般に性交前技と云えば男の女に對するそれを指し男の技術

として理用するのである。従つて、性愛裡において一般的に云えば男はしかけること（能動性）を好む者であり、女はしかけられる事（受動性）を好むものである。男は投手であり女は捕手である。所で、マゾ性の者は逆に女から、しかけられるのを好むようである。妻から、自分の會陰部、睪丸乳部等を愛撫してもらうと小躍りして喜ぶ夫の話をよく聞くのである。

(3) 女の言葉を使う男

「つい」「思いがけず」「何となく……」「した行爲は無意識（心の奥底）のさせるわざであり、自分で氣づかず、云つたりやつたりしてしまふ傾がある。

よく女の言葉を會話の所々にはさんで云うのを聞く、たとえば、「そうだね……」「そうよ……」などと。特に飲酒時は非理性的となりよく發するのである。

映画のR・Mが酔つた自動車強盜の役のセリフを聞くといかにも自然らしく女の言葉を出すのであるが合本では多少違つていたのではないかと疑う程である。彼は、マゾヒストとして筆者は興味深く觀察していたので何か相通ずるものがある様に想定されるのである。

(4) 妻帯者でコンドームを常用する男

新婚當時B・Cのためコンドームを使用する場合は別として年配者で常にコンドームを使用する夫はマゾとも云へる。

かの、バラバラ事件の夫（伊藤巡査）は妻の要求拒み難く、ほとんど常にコンドームを使用していた。男の攻撃慾は泄情慾とも云え

るのであつて、男性のシンボル（ペニス）を女体に侵入しても肉体はコンドームによつて遮斷され直接、接觸出来ない。攻撃慾をフルに發揮出来難いのである。

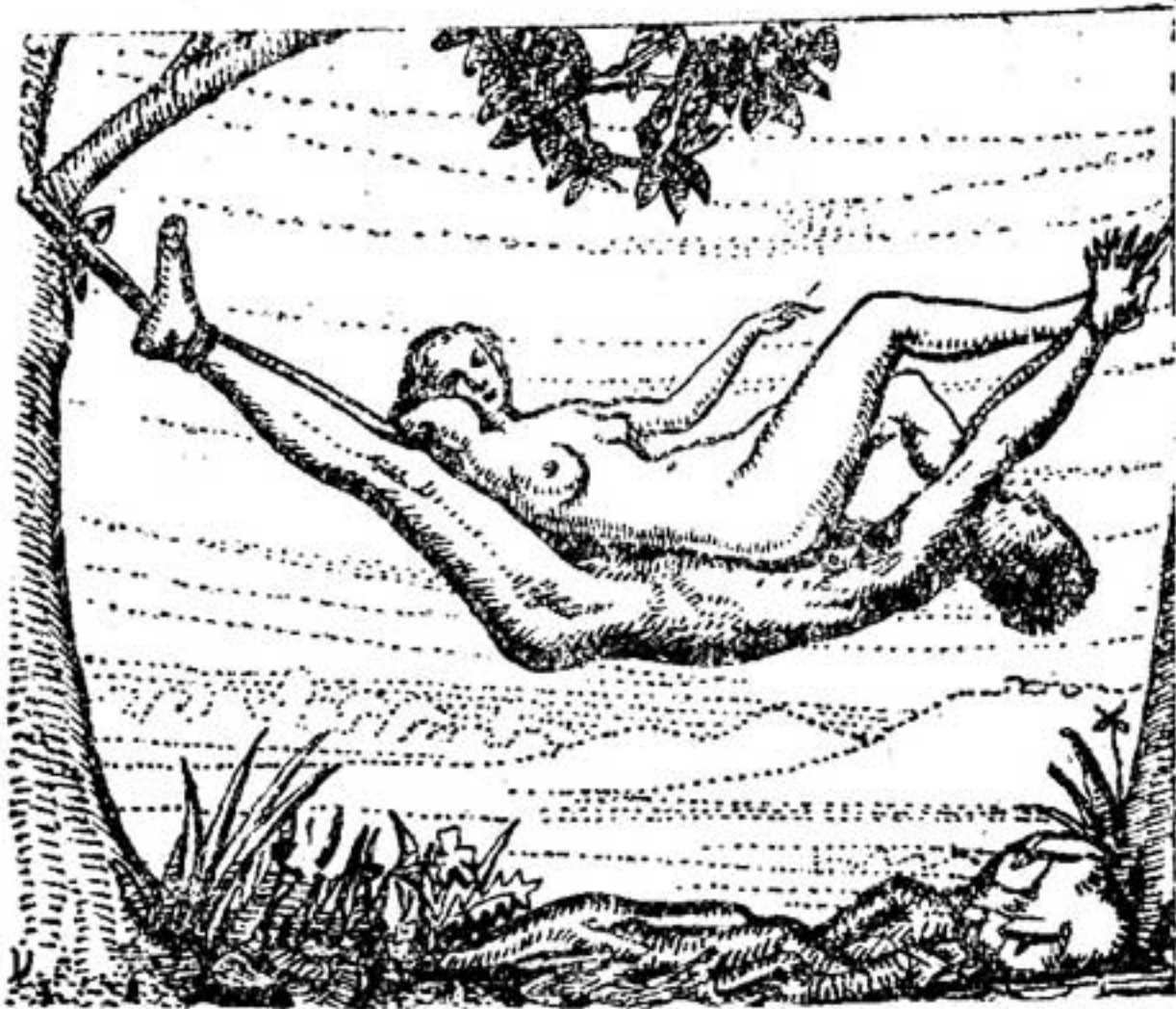
(5) 女上位を好む男

たえず、女の尻に敷かれている男はマゾであるが、これはラーゲにおいてはずきり分るのである。女上位を好むものである。最初は好むと云うよりも妻（女）が好むためその氣持を尊重しすぎた習慣と云えるかもしれない。

フラウオーベン（勝氣な女）に多くそれには男が弱氣になる方がより調和的になり得るとも云えようか。

(6) 露出症的の男

露出する事は着物（文化的なもの）をとる事であり従つてより動物的存在となる事である。所で、男女どちらが裸になりたがるか？と云うと、男より女である。即ち、男性であ



つて女性的因子の多い者にあるのであつて、従つてマゾ的と云えるのである。その意味から力士なども案外マゾが多いのではあるまいかと想定される。

(7) フェミニスト

これは、男性の女性に対する征服慾の減退していると云うより女性の主動性(男性的部分)を尊重しているかの如くである。皮肉なもので、性交において女を尊敬すればする程不能的症狀^{インポテンステック}となやりすいのである。

政界の悲劇の人と謂われるI・Hなどは代表的人物と云えるかも知れない。

(8) その他注意すべき型

(A) 女の仕事を好む男

台所仕事は大抵主婦の役目と相場が決つてゐるがチョコ／＼手伝ふ夫は女性的と云える。又、調理用品をよく買つて来たりする。

猶、育児においてもあまり干渉したり、女手がないからと云つて子供を背負つたりするのをよく見うけるがマゾ性の疑ひがある。

(B) 断種をする男

所謂、男性避妊(輸精管結紮)をする夫は何処かしらマゾの傾向がある。即ち、女体に侵入(攻撃)すべき精子(彈丸)の道路を自から断絶するから生の攻撃慾が閉鎖されるのである。

(C) 一生人に使われる様な男

独立して事をなす様な人はどちらかと云えばサディストである。所で、独立——とまでゆかずとも地位向上しようともせず人に使わ

れる様な人(小使ひ、下男、忠僕、居候)は何か環境の然らしむるとは云え性格的なものがあるのである。

(D) 非常に自己の職業に熱心で単純な性格の男

(E) 狂信家の男

(F) 涙っぽい男

(G) 炎・入墨を好む男

(H) 強情な男、案外マゾ的である事は興味深い。

(I) 妻の浮気をたえず警戒しながらそれに気づかない様な男

妻の浮気は女のサディズム(家庭生活のワクを離れた行動であり夫に対する反逆である)であつて、それに気づかない様では、又、気づいても徹底的に怒れない様な夫は、マゾと解釈されそうである。

(J) 多毛女陰を好む男

多分にマゾヒストと云えるが絶対的ではない。

(K) 性器^{ペニス}の大きい男

ペニスは攻撃慾のシンボルであるが、これが大きい男のうちに、時には非常に優越感を感じ、逆にかへつて侵略されてみたい願望にかられるのではあるまいか、

即ち、肉体的に積極性の強い者は精神的にはその反対を無意識的に希求するのではあるまいか。

愛

讀

者

通

信

本年卅才、五尺五寸、十七貫の会社員です。男子の縛りには興味を持つて居りますが女性には興味がありません。同好の諸氏、御手紙下さい。きつといふ一体になれると思います。(KS生)

變質者ざんげ

剃かみ刀そり男おとこ

乳房のふくらみが見事に見える程の深さの處だつた。ひどく臀を浮かせた恰好で泳いでいるその背後から、耐えきれなくなつたように、狂ほしく彼の右手が動く……



伊庭英夫

八木 静 男 畫

海岸で、若い女性の腿や臀部を傷つけた痴漢が出没したのである。

あの新聞記事を読んだ時、私は思わずアツと声をあげてしまった。丁度食事中だつたがもう食事どころではなく、亢奮で新聞を持つ手がガタガタ震えた。それを家人に悟られまいとしたら、よけいに新聞紙がガサガサ鳴つてくるのだ。

この痴漢(と、私は思つてはいないのだが)は、大膽不敵にも、一日に数回に亘つて、海の銀座の雑踏の中で、その犯行を重ねている

のだ。私が多年憧れ、夢にまで見たことを、彼は易々と実行に移している。だから私にとつては、彼は痴漢どころか、むしろ英雄だと云つてもいい。

私は夜、その新聞紙を握りしめたまま、あの幻想にふけつた。

それはあくまで蒼く晴れた真夏の海浜だ。遠く白帆、そして右手に緑の江ノ島が浮んで見える。打ちよせては砕け散る白い波頭。強烈な七月の太陽にも負けないほどに鮮かな、ビーチパラソルの原色。そして足裏に焼けるような砂浜――。

一日を海に解放された人々が、まるでラッシュ時の銭湯のように混み合つて、押し合いへし合いの賑かさ。むき出しの健康な肌の色と、その裸体に喰いこむような、派手やかな水着の色。それが、走り、躍り、跳ね、嬌声をあげてぶつかり合う。寸時もジツとしてはいない。

人々がそんなにも嬉々として戯はむれる海岸を、だが彼は一人沈鬱にふさぎこんで歩く。追つた眉の下の窪んだ眼は、今日一日の行楽を決して楽しんではいない。それどころか、今スレ違つた、若い水着の女をチラと振りかえつた瞳は、まるで病犬のように暗く熱

今年の夏、私が忘れられないのは、例の片瀬海岸の臀部切りだつた。

ずい分世間を騒がせたから、まだ大方の記憶に新らしいと思う。海水浴でゴツタがえす

つぽいのだ。

そうしてジツと見送る彼に、ドシンと突当らぬばかりにして、又派手な水着の一团が笑声をひびかせながら、海に飛びこんでゆく。彼はその後姿に視線を移して、今度はその中の濃い黄色の水着の女から、ねつつこく瞳を離さない。

やがて彼は薄い胸のあたりで、フツと息をついた。身長五尺三、四寸ばかり。体重三十三貫八百、男としては小柄な方だった。その上前かがみで姿勢も悪く、胸毛もスネ毛も大して生えていない彼の裸体は、義理にも男性的だとは云えないだろう。

容貌は平凡なタイプだが、なんと云つても致命的なのは、その顔色だった。病的に青黒く沈んでいて、如何にも何処か蟲ばまれているらしい、異常さを物語っている。それから頭髪は男には珍しく赤毛で、耳の形もひどく奇形じみている（これ等は、実はすべて私自身の特徴なのです）

彼はたつた一人で、それに人並に紺のパンツをつけているにも拘らず、一向に海に入ろうともしない。こんなにも喧騒をきわめる海水浴場で、彼はひどく孤独なのだ。彼を知っているのは、そのパンツにひそめられてい

る。薄い双物だけだった。

海から上つた黄色の水着の娘が、濡れて一層あらわになつた腰の線を見せながら、彼の眼の前を横切る。豊かに皺一つない、その水着の臀部が、彼女の動きにつれて、プリプリとリズムカルに左右に揺れる。

眼が眩むような誘惑から、彼はもう逃れることが出来ない。右手が自然にポケットにゆく。それを、唯確めたつもりなのに、何時か無意識の裡にしつかり握りしめているのだ。その黄色い水着の動きにつれて、ただそれだけに瞳をすえて、彼は真夏の海浜を、夢遊病者のように歩いた。

海の水の冷たさも、もう彼の皮膚は感じてはいない。まだ乳房のふくらみが見事に見えるほどの深さの処だった。泳ぎは初心らしい女がひどく臀部を浮かせた恰好で、危つかしい平泳ぎの練習を続けている。その背中から、ズイと傍による。水中にぼんやりその充実した黄色がゆれ動いている。ひどく楽しいのだ。

無意識のようでも、彼はトッサにさまざまな条件を判断している。耐え切れなくなつたように、狂ほしく彼の右手が動く。その時のまるで祈るような、献身的な憑かれた男の表

情――。

その献身には、明かに反応がある。堅い、充実したその手答え――瞬間、手先から全身に戦慄する無上の快感！ ああ、この感覚を何にたとえよう……まるで魚のように身をひるがえして、海中を潜りながら、彼の全身は断続的に痙攣する。

雌が水中に産んだ卵をめがけて、凱歌をあげながら精液を浴びせかける金魚の雄のように、青みどろの海中に、彼の異常な性が躍動するのだ――。

新聞記事をつめてみると、こうして、犯人である彼とこの私が交錯して何時か私自身が臀部切りの犯人であるような、錯覚さえ覚える。ああ、若い娘の、斜めに裂かれた派手な水着のセンチユアルな表情。それは女の驚愕にも苦痛にもかかわりなく……。

こんなに内心の慾求は強いクセに、彼ほど自己に忠実になれない私は、ただ二、三十行ばかりのこの新聞記事に圧倒されて、なすすべを知らない。「寝た子を起される」とはこんな私を云うのだろうか――。

私は亢奮と羨望を抑えきれず、その新聞記事の横に、ひそかに秘蔵の剃刀を並べるのだ。それは薄い、極く鋭利な安全剃刀の双か

ら、柄に細い藤を巻いた日本剃刀まで、十一種もある。柄をたたむ西洋剃刀もある。

しかし、私が一番愛しいのは、薄い、小さな両刃の安全剃刀の刃なのだ。世界中の男性が髭剃りに用いる、何の変哲もないあの剃刀の刃である。小さくて薄くてそれは指ではじくと、リーンと小さく涼しい音をたてる。小さいクセに驚くほど鋭利で冷めたい。

豊かな乳房の隆起、豊麗に実った臀部、白い太腿を見る度に、私が反射的に握りしめるのは、この小さな剃刀の刃だ。女の臀部と、剃刀の刃の間にどんな因果関係があるのか、私は知らない。しかし、私にとっては、この二つは絶対に不可欠のものなのだ。影と形のように、附随すべきものなのだ。

女の肉体が楽しく満ち足りている時、私の本能は激しくそれを傷つけることを望む。それは、どうしても傷つけられなければならぬのだ。楽しければ楽しいほど……。だが、それは鈍器であつてはならない。薄い剃刀か糸のように細い錐。醜く皮膚を破り、不様に肌を損傷することを、私は好まないのだ。

安全剃刀のデリケートな切れ味は、この私の欲求にピッタリくる。だから外出する時私のポケットの底には、必ずこの剃刀がひそん

でいる。私はこれにさまざまな工夫を加えて自分の気に入るような柄をとりつける。

丁度スリが指の中に忍ばせる道具にも似て握りしめれば、それはスッポリと掌の中にかくれてしまう。誰の眼にもつきはしないのだ。

朝夕の通勤には勿論、映画にも、たまさかのストリップ見物にも、絶対に忘れたことのない必需品なのだ。まつたくこれを握りしめていないと、どんな美しい肢体でも、私には興味索莫とした、デク同然でしかない。

ストリップ劇場にゆくと、私は何時もカブリつきに坐る。そして眼鏡を外す。軽度の近視なのだが、それゆえに眼鏡を外すと、どんなストリップパーの肌にも、アラが見えないと云う功得がある。近々と追つた白い裸体がポーツと白く豊麗に、そして艶々しく私の中樞神経をかき立てる。

そして主に、私の視線は彼女の腰から下に釘づけになる。勿論私とても、その双の乳房の豊かな魅力にひかれぬわけではないのだが、それはあまりにもろく、他愛ない感じ。私の握りしめる愛器の対象となるのは、やはり手答えの多い、弾力ある臀部から太腿にかけて、と云うことになるのだ。

そして、その大きな原因は、その場所が彼女の性器に尤も近いこと、それゆえに性器そのものを傷つけるような錯覚をさえ覚えること、このことに盡きると、私は思っている。

音楽が高鳴り、ストリップパーの腰の動きが高潮する頃、私はポケットの中で例の愛器をしつかり握りしめている。掌の脂と汗で、それはベツトリと手に貼りついたようになってくる。彼女の臀部が眼前に迫ってくる。

右手で、あの小憎らしいほどに弾む臀を、軽く撫でさえすればいいのだ……。ああ、私は剃刀を握りしめながら身もたえする。それは苦しいほどの、私と云う人間の、魂の底からの欲求なのだ。

そして、今までの間、この激しい欲望を、紙一重のところ、辛じて押えつけて来た結果、奇妙なことには、現実には女体を傷つけなくとも、ポケットの中で剃刀を握りしめさえすれば、傷つけたも同然の、狂ほしい陶醉を覚えるようにさえなつたのだ。

あの、傲つた肢体を、撫でるように、又はまるで刷くように、私の右手が素早く動く。シコリとした手答え、強靱な反撥。だが、私の愛器は勝つだろう。見よ、彼女の白い臀から太腿にかけて、細い細い紅の一線。次の瞬



間、吹くように血潮が溢れてくる。

彼女は不意に肉体に加えられた不可解な痛覚にフト動きを止める。ぼんやり舞台に立ちつくすのだ。まだ、切られた、などとは思いやしない。だが、本人よりも先に、客席が沸くだらう。ほんの今まで、妖しくねっていたストリッパーの臀部から鮮血がしたたつて、太腿をつたい、あとからあとから流れ落ちるのだから……

「キヤア!」と、その時に、始めて気づいた女の悲鳴。フン、まったく女なんて、鈍感なものだ。だが、突破口をみつけた彼女の血液は、あとからあとからしたたりつづける。血の祭典だ。なんと云う美しい……。

私の五感は、まるでこの時のためにあるようなものだ。必ず、激しい痙攣が伴う。生命の躍動。美女との接吻の際でも、決してこんな激しい喜びをもたらしたことはないだろうと、私は思う（二十四才の現在まで、接吻の経験はないのです。だが、私の本能は決して、そのような粘膜との接触をのぞまない）

どうして私の性欲が、こんな異常な形で現はれるようになったのか、私は知らない。二三年前までは激しく悩んだ。その頃漁った専門書によると、私のような変態性欲者を刺傷

狂と呼ぶらしい。そして、この刺傷狂と云うのも、決して珍しい存在ではないことが判つた。

文政の頃には「鼻切」と云つて、美しく化粧した女の鼻をそぐ男が出没したと云う。美しい女、美しく着飾り化粧した女に限つて、出逢い頭に鋭利な刃物で鼻をそがれるのだから、一世を震撼させたに違いない。

又、天保時代には、女の髻を鋭い刃物で突く痴漢が現われ、やはり婦女子を恐怖させたらしい。この場合は豊かな髻部、つまり、今で云えば肉体派の女性を狙つたものらしく、使用した道具は、ヤジリのような鋭い得物であつたらしい。この場合は犯人はひどく金銭に不自由した仲間だつたと云う。別の「鼻切り」犯人は、これも醜男で不遇な下人だつたという。

このような例をあげて、識者たちは刺傷狂を、実際に性交をし得ない者が、女性の肉体を汚したりして、代償的な満足を感じようとするものだ、と定義する。性行爲のことを、俗に「ケガス」「疵物にスル」と称することから、この定義は私にも素直に肯けるのだ。

鼻切りの醜男や金のない仲間のように、精力をもて餘しながら、何等かの理由でそれを

満し得ない時に、こうしたサディズムが起ると云う。肉体のかわりに、刃物を用いるのである。

これを読んだ時に、私にはひそかに思い当ることがあつた。それは、まだ私が二十一才の夏のことだ。

某校専門部に入つたばかりで、私はある理由で学資が続かなくなり、中退して実社会に入つた。日本橋のある食品問屋に入り、意地の悪い番頭や、スレつからの同僚たちに揉まれた。

それまで割合に純真だつた私が、彼等の卑猥な話題に刺戟された爲か、その頃からひどく性欲の処理に悩むようになった。そんな私を見透したように、ある公休日に一人の同僚が私を向島の私娼窟に誘つたのである。

女を選ぶような餘裕がある筈はなく、夢中で三十近いような、太つた女に伴はれて部屋に入つた。みると、四疊半ばかりの狭い部屋一杯に、汚れた布団が敷いてある。ハツとためらう私には拘りなく、女は衣服を脱ぎすてゴロリとその床の上に横になつた。

くずれた、もの憂そうな女の肢体だつた。私はそれを眼の下に見ていると、餘りに刺戟が強過ぎたためか、牀がこわばつたようで、

自由にならないのだ。喘ぎながら、棒のように突立つたままだつた。

「どうしたの、あんた？ なにを愚図愚図してんのサ」

商売女に言葉荒く促されて、私はオズオズと彼女の傍に横になつた。馴れ切つた彼女とは正反對に、私の全身はますます硬直するようだつた。思い切つて、私は女の牀に手を触れた。だが、その次の瞬間、私は既に終つてしまつたのである。

その時の気持を、なんと表現したらいいだろう？ 女は、輕蔑し切つたように云つた。

「なによ、あんた。男のクセにバカねえ」

その嘲笑は無数の矢のように、私の全身につきささつた。一時間経つて、その娼家を出た時、私の同僚はニヤニヤと笑いながら、問いかけて来た。

「どや？ よかつたやろ？」

そして、当惑しながらも、すがりつくように、ドモリながらありのままを告白した私に彼は吐き出すように叫んだ。

「なんや、二十一にもなるクセに、お前はなんちゆう意気地なしや。まるで男のクズやないか！」

こうして、現在の私が誕生したようであ



る。私は、女を憎んだ。私を受入れない、女の肉体を憎悪した。街でも電車の中でも、女の顔よりは下半身の方が気になった。だんだんヒップばかりが眼につくようになって、何かひそかにポケットの中に刃物を用意していた。

実際にこの剃刀を使用したことは、唯の一度しかない。二年ほど前、玉電の中で——。タイトスカートの、成熟した女性の臀部が、満員電車の中で、もろに私の膝にブツかつてくるのだ。私は悲壯な表情をしていたに違いない。まったく、この時の私は「正当防衛」と云つたような気持だつた。

無意識だつたが、手が震えて、僅かに横に三寸ばかり、女の朱色のスカートを切つただけだつた。女は気がつかない。私は一たん逃げ出したが、女が有楽町駅で下車した時に、一瞬ばかり離れて後をつけた。人波に揉まれながら階段を降りる女の臀部が裂かれて、白い肌がチラチラ見える（実際には白い下着だつたのかもしれないが）それを見た時、私は気が遠くなるような快感を覚えたのだ。

夏は、私たち刺傷狂を、文字通り狂ほしくさせる。まして、今年の夏は、例の勇敢なる（？）片瀬海岸の彼のために、私はどれほど刺戟されたか判らない。

初めての彼の犯行が新聞に報じられた次の日曜日に、私も又片瀬の海水浴場に赴いた。勿論水着のポケットに、例の愛器をひそめて——。だから、もし他人にそれを発見されたら、私は有無を云はさず、例の痴漢にされたかもしれない。

夏の太陽の下の海岸で、私は若い女性の美しく豊かな臀部ばかりを、無数に見た。それはまるで私を挑発するように、私の周囲に群れ、躍動した。だが、私はポケットの剃刀を、ただヒシと握りしめるばかりだつた。

ほんのもう少し、今一步の処で、なにか私の実行をさまたげるのだ。私はその道徳、良心のカケラを呪つた。それさえなければ、私はどんなに自由だろう！ 本能の命じるままに、この夏の海岸を狂ひ廻る——。

そして、私のこの愛器にも、たつぷり女の血を吸はせてやれるのに！ 私も、愛器もその血に飢えて、野良犬のように女の臀部を嗅ぎ廻っているのだ。

そんな私を嘲笑するように、その日曜日も又例の彼が出没したことを、私は翌日の新聞で知つた。気弱な私は、再びその新聞記事の上に秘蔵の剃刀を並べながら、果てしのない妄想に耽つたのである。



八百屋お七

火焙りというと、すぐ連想されるのは、八百屋お七である。

天和三年三月二十九日。

十六歳になつたばかりのお七は、各見付を引き廻されたうえで、日本橋から刑場である鈴ヶ森へと引かれていった。そのときのお七の姿を『天和笑委集』に次ぎのように述べている。

日本刑罰史 第五回

火焙刑地獄圖

體の見へなくなる程積まれた薪に焼かれた罪人は、火が消へてから鼻をそがれ、その上男は局部を、女は乳房に止めを刺されて……

菊 山 進

——七がいであつた装束には、肌には羽二重白小袖、甲州郡内の碁盤縞、浅黄の糸にて縫うたる定紋の三つ柏五所につけ、桃色の裏つけて、一尺五寸の大振袖を上にかさね、横幅広き紫帶二重にきりりと引きまわし、うしろにて結び留め、丈なす黒髪、島田とかやに結いあげ銀覆輪の蒔絵画いたる玳瑁の櫛にて前髪をおさえ、紅粉をもつて面を色取り、さしもあでやかにぞいでたちける。——

このお七の髪結びぶりが、なかなか風情が

あつたというので、評判になり、それからひとしきり、江戸では、そのときのお七の様子に似せて、前髪に赤手柄をさげるところが流行したともいわれている。いつの世でも、流行を追う氣持に変わりはないものらしい。

刑法の一つである『引廻し』について、少し詳しく述べるとしよう。引廻しは、死罪、獄門、磔刑、火罪等の属する附加刑である。

町奉行の与力二人と同心が、小伝馬町の

牢屋敷へ出張する。そして牢屋敷の鍵役二

人、打役二人（鍵役は牢の鎖役を司り、打

役は罪人を打ちたたく役目で、いづれも牢

屋敷の同心である）にこの旨を伝えると、

鍵役二人と打役二人とは、牢の鞆内にはい

り、扉の外から其の日引き廻す罪人の名を

呼ぶ。居るか、と問うと、牢名主が、居り

ます、と答え、ただちにその当人の名を呼

んで、御用だぞ、と大声をはりあげる。相

牢の役付二人が、その罪人を牢名主の前へ

連れてくる。牢名主は、紙でつくった珠数

を、罪人にあたえ、なお、金をつつんで口

中にふくませ、行つてこい、という。これ

が牢内より引廻しを出す時の儀式である。

この式がすむと、牢内の役付二人が、そ

の罪人の両腕をとつて、ドドドと床板を踏

み鳴らしながら入口のところへ連れてゆき

牢内から鞆内へ押し出す。

これを受取つた牢屋敷の下男は、藁縄で

縛る。この縄のことを『呼び縄』という。

このように縛つた罪人を、世間では閻魔

堂と呼んでいる改番所へ突き出す。ここで

引き廻しの準備が出来ると、打役検使が牢

証文を読みあげる。

御注文

何年何月何日 何某（町奉行の名）番地入り

一人 何某（罪人の名）何歳

右の者何々の科に依り一日引廻しの上何罪

（鋸引・磔刑・獄門・火刑）罪火に申付る

もの也

奉行 何某

牢証文の読みあげが終ると、非人が罪人を

乗せる馬を索いてくる。馬の背には菰を掛け

その上に、後手に縛つたままの罪人を乗せ

る。罪人を縛つた縄の端は、菰を通して、両

方に分け、馬の左右についている非人が持

つ。もし罪人が病気で、馬にじつと乗つてい

られないときは、曲衆と称している木を鞍に

括りつけ、この木に罪人を縛りつけておくの

である。

いよいよ引廻しに出ることとなると、罪人が

犯した罪の次第を記した紙幟と捨札とを、非

人が担いで、並んで歩く。次に谷の者（牢屋

敷内で使う非人）が槍を持つてゆく。二名で

ある。そのあとから罪人を乗せた馬を非人が

引いてゆくのであるが、行列の人数は、先拂

の非人五人、幟持ちは交代をふくめて非人三

人、槍持ちも同じく谷の者四人、突棒刺股

持は交代人とも谷の者四人、馬添い非人四

人、牢領小屋頭谷の者二人、検使の与力一

人、同心二人、総勢二十五人である。

この行列が、牢屋敷北の裏門から出ると

埋門の所の踏台に乗っている谷の者の頭

が、おつと、あぶねい、気をつけねいよ、

と言いながら、右の手を罪人の肩に掛け、

左の手を罪人の口のところへ持つてゆく。

罪人は口にくんでいる金を、その掌の上

へ吐き出し、その金を、谷の者の頭は手早

く懷中に納めるのであるが、金の多少によ

つて扱いがちがつていたとのこと。首をは

ねられるか、焼き殺されるか、刺されるか

の方法は異つているにしても、とにかく、

命を失わねばならない罪人に向つて、おつ

と、あぶねい、気をつけなよ、とは、皮肉

な洒落ではある。

この引廻しの時に限り、罪人は、自分の

資力次第、どんな立派な着物でも着ること

ができる。

このおきてによつて、八百屋市左衛門は

いとしい独り娘のお七に、流行のはしりと

なつた、哀れななかにも華やかな死出の衣

装を、お七のこの世の思い出に、装わすことができたのである。しかし、襦袢は、御仕着せの浅黄木綿を着せなければならぬことになつてゐた。

罪人によつて引廻す方面が異なるが、どの方面を引廻すにしても、まず江戸橋を渡つて、その先の自身番で休憩することが定りとなつてゐた。この休憩の間に、罪人の好きなものを食べさせ、一行の人たちも、みな、そこで、晝飯を食べたのである。

こうして、晝飯が終つて、豫定どおり、罪人の住んでいた町内を、引き廻したのであつた。

紅 蓮 地 獄

お七が処刑された天知三年三月二十九日には同じ場所で、次のものたちが処刑されている。

本間小兵衛、八藏、喜三郎、そしてお七の四人が火罪。

雷七郎右門は磔刑。

森伝右衛門は斬罪。

以上六名である。

お七の一行が、刑場に到着したときには

刑場には、もう、火罪柱や磔刑のための十字架の用意は終つてゐた。

刑場は、丸竹、矢来でかこみ、入口のころを食い違ひにしてある。

火罪の場合の設備を述べると、場内の中央に檜を材料にした五寸角で長さ二間の火罪木を、五尺のところまで土中に埋める。

周囲七寸ほどの青竹を二つ割りにして、五尺周囲の輪にする。別に割り竹の長さ七尺ばかりのものを、曲げて、半円形にし、さの両端を、前記の輪にひっかけて、折り返したうでで、括りつけるのである。

そしてその半円形の中央上部を、火罪木に結びつける。

こうして、火罪木が出来上ると、火罪木や竹が焼けないように、木舞繩で巻き、そのうえを切の入った泥で塗りつぶし、更にその上を細繩で巻いて、なお、その上を切入りの泥で塗つておく。

この設備が出来上ると、輪竹より三尺ほど離れたところに、燃料の薪を二、三束あて、輪形に立て、その罪人の股のあたりぐらゐにして置き、罪人を入れるために、二尺ほどあけておく。

鈴竹の上から茅をおおい掛け、屋根を葺いたようにする。

——お七の場合には、他の三人とともに四本の火罪木が、それぞれ立てられてゐたわけである。

お七も、他の火罪人ともども、薪を踏みながら、火罪木に縛りあげられた。

両脇を釣り竹に、首や腰を火罪木に、両足を揃えて、同じく火罪木に縛りつけられるのである。そして、その縛りつけた繩は焼けてしまわないように、切入りの泥を塗りつけ、その上を更に繩で縛つて、またしても切入り泥を塗るといふ嚴重さである。

お七が入るために開けられていた場所も薪で埋められた。

薪は、お七の身近にも、いくつか、撒きひかれた。

薪が高く積まれていつて、だんだんと、お七の身体が見えなくなつてゆくと、矢来の上では、泣き声が高まつていつた。

仕度は出来あがつた。

検使が火をつけることを命ずる。

非人どもが、手に手に篝火を持つて、風上のほうから、茅に火を放つ。



パチパチッ。弾くような音を響かせながら、薪はどつと燃えあがつた。

矢来の外には、どよめきがおこり、つんざくように泣き叫ぶ声は、いつそう高まつた。

非人どもはむしろで煽ぎ、火勢をあおる。

一瞬火焰のどよめきのなかを、お七の、

悲鳴とも、呻き声とも、叫び声ともつかないものが、ほとばしつた。

矢来の外のだよめきが、更に高まり、泣き叫ぶ声は打ち寄せる波のように、拡がり、揺れた。

やがて、さしもの火勢もおとろえていった。

火刑の目的が達せられたと思うころ、非人

頭である彈左衛門が検使にそのむねを伝える。

検査から、火を消せ、という命令が下る。非人どもは、用意してあつた水を打ちかけて、火を消す。

火が消えてから、一人の非人が、篝火を持つて、火刑になつた罪人の鼻をそぐ。

そして、男の場合は、局部を、女るときには乳房を焼いて止めを刺すのである。

お七も、しきたりどおり、まだ花の蕾の乳房を焼かれて、十六才の生命を閉じたのであつた。

火附御仕置之事

お七とともに処刑された火罪人のなかに、一人、美少年がいて、彼が

寺小姓の吉三郎ではなからうか、と噂されたが、そうではなかった。

天保二年の暮から翌三年の春にかけて、江戸は大火つづきに見舞われた。

お七の家が類焼したのは、その二番目の大火であつた。それからの物語はどなたも御存知の事と思うのでここではぶく事にした。

前号にも述べた徳川政府の刑法である徳川百箇條では、その六十八番目が、『火附御仕置之事』となつていて、放火犯が、火刑に処せられることを定めている。それによると、火焙にかけられる者は、

①家屋敷に火を放けた者（火を放けても燃えなかつた時は、引廻しの上死罪）

②人に頼んで火を放けさせた者（人に頼まれて火を放けた者は死罪）

③物を盗む目的で火を放けた者等である。

なお、火罪に処せられる罪を犯した者でも、年数がたつてから発覚した場合は、火刑よりも一等だけ罪の軽い死罪に処せられたのである。

吉三郎として知られている美少年寺小姓

の本名は、生田庄之助とも、山田左兵衛とも伝えられている。

彼がお七と共に火刑に処せられていないところを見ると、よほど言葉たくみに、それとなく、お七に放火をそそのかしたにちがいない。もしも、彼が公然とお七に放火を求めたのなら、火焙りにされるのは、彼の方であつて、お七は、ただの死罪でいいわけである。

吉三郎という美少年は、よほど言葉の巧みな軟派やくざだつたのだろう。

一説によると、彼は、お七の処刑後、自害するつもりであつたが、その決心を翻えし、出家して、お七の菩提をとむらつて、元文二年、往生をとげた、ともいわれている。

また、お七の年齢も、裁判では問題となつた。

徳川百箇條には『十五才以下之者御仕置之事』という一條があつて、お七が、もし十五才以下であつたなら、その罰を一段と引き下げられるべき性質のものであつたのだ。

奉行の一部にも、お七のあまりにもいたけなさ、あどけなさ、出来ることなら、お七を助命してやりたい、という動きがあつたのである。

調べによると、その特例よりも、お七は一つだけ年かさだつた。

法をまげるわけにはゆかない。

かくして天知三年三月二十九日の処刑となつたのであるが、お七が、このようにまで人々にもてはやされたのは、この事件の内容は、年若い八百屋の娘の放火にすぎないが、そのお七の、愚かしいとまで思える純情の強さと、少女の火刑にまつわる凄惨美とが総合されて、西鶴によつて『好色五人女』のなかに描かれたり、また庶民がお七を讃美した感情の裏には、近松門左衛門の作品によつて代表される心中ものの流行と同様に、てつていした封建社会の被圧迫層であつた庶民の、せめてもの抵抗が、心中へのあこがれとなり、恋に殉じて火刑に処せられた、いたいけな少女お七への讃美となつて、いつまでも唄われてきたのではなかつただろうか。

惨酷王・織田信長

火焙りの刑の歴史は古い。

『日本書紀』には、次のような記録が残っている。

神功皇后攝政の五年二月。新羅の使者三人を檻中に投じて焚殺した。

雄略天皇の二年七月。百濟池津媛夫婦の罪を罰するのに、両手足を生木の枝に縛つて張りつけ、下から火をたいて焚殺した。

同天皇の崩御後、星川皇子は、叛を謀つて、あぶり殺された、等等。

歴史が、近世に足を一步ふみ入れると、慘虐なる暴君、織田信長が登場する。

信長にかぎらず、その息子の信忠も、慘虐のかぎりをつくしており、織田一家にはそのようなサディスティックな血が流れていたらしい。

『信長記』のなかには、火刑をはじめとして、さまざまな凄惨な刑罰が物語られている。

信長は、美少年森蘭丸を愛したソドミアでもあつたが、それ以上に、サディストであつたらしい。

信長が、息子の信忠とともに攝津に赴いて多くの男女を車裂きの刑に処したのは、有名な事件であるが、天正七年十二月、信長が荒木村重の妻子及びその一族を焚殺した記録は、慘酷王信長の姿を生々しく物語

っている。

——この外、女の分三百八十八人、かせ侍の妻子付々之者也。男の分百二十四人、これは歴々の女房衆へ付け置候若党以下也。

合計五百十餘人。

矢部善七郎御検使にて、家四つに取籠め、こみ草をつませられ、焼殺せられ候。

風のまわるにしたがいて、魚のこげるように、上を下へとなみより、焦熱大焦熱の炎にむせび、おどりあがり、飛び上り、悲しみの声、煙につれて空に響き、獄卒の阿責の攻も是れ成るべし。肝魂を失い。二目と更に見る人なし。

哀れなる次第なかなか申し足らず、云々。

これは火刑に処した慘状であるが、信長の残酷性を現わした別の一例として、大量の女性を磔刑に処した記録も残っている。天保七年十二月のことである。百二十二人も女性、尼崎の近くの七本松というところで、磔刑に処したこともあつた。

このような暴虐のかぎりをつくした信長は、後年、本能寺の変で、猛火につつまれて焼死し果てたのである。宿命と言うべきだろうか。

そのほか、織田一家は、信雄の囚人焚殺、信忠の惠林寺僧侶焚殺など、暴威をふるっているが、それが戦国時代のならわしであつたにしても、残酷な仕打ちであつたことには相違はない。

さて時代はさらに降つて、徳川時代ともなると、本誌の第二号に於て述べられているように、法度とした切支丹宗徒の迫害のために、火刑をはじめとして、さまざまな残酷な刑罰を用いている。

そして徳川政府は、前記したように、刑法としての『火焙刑』を、徳川百箇條のなかで定めたのであつた。

火罪は、獄門などと同様に、日本橋以南の者は鈴ヶ森で、日本橋以北の者は千住小塚原で処刑されるならわしとなつていた。

お七の住所が本郷追分（現在の本郷駒込追分町一番地あたり）であつたことから考えると、鈴ヶ森と言われているが小塚原のほうが、法的には正当な刑場ということになるのである。

火焙りによる宗教迫害

日本に於ける明治以前のキリスト教は輒

られた迫害の歴史である。殉教者の数は想像以上に多く、そのため、世界のキリスト教史に於て、日本は重要な地位をしめるに到っているのである。

教徒への迫害は、弾圧と、そして、惨酷なる刑罰によつて行われているが、弾圧の方法は、本篇の主題ではない。

刑罰の方法は、キリストと同じく十字架による磔刑のほか、火焙りは勿論のこと、ありとあらゆる惨酷な手段が、彼等の上におそいかかっている。しかし、信仰の力は偉大なるもので、そのような弾圧にもかかわらず、キリスト教は日本から滅び去らなかったものであつた。

日本に於けるキリスト教徒弾圧の惨酷さは、本誌の九月号にも述べられているが、公刊されているものとしては、『切支丹鮮血遺書』に、詳しく語られている。

『切支丹鮮血遺書』のなかから、惨酷きわまりない刑罰の模様を、二、三、ピックアップしてみよう。

西暦一六一九年。元和五年十一月十八日のこと。

長崎で木村レオナルドをはじめとして合

計五人の教徒が、火刑に処せられている。

場所は去る慶長二年に、日本二十六聖人が磔刑に処せられたところ。

前方の海岸や後ろの山には、たくさんの信者やそのほかの者たちが、かたずをのんで見守っている。

刑場では、薪をなるべく遠くに積み重ねて、彼等が長く苦しむように工夫されてあつた。

五人の者は、それぞれ、柱に縛りつけられ、やがて、薪に火がつけられた。

迫害にあつて生命を失うことを、至上



の歡びと思つてゐる信者たちのことであるから、いくら苦しめようとしたところで、その苦しさを待ちうけているのだから、役人たちの計劃は、考えているほど、彼等について、苦痛ではなかつたのだ。

なかでも、木村レオナルドは、繩が焼けて、地上に転落したが、靜かに大地に踞ひたすいて、灰をかきあつめ、その灰をまるで宝物を捧げるように両手で頭の上に献げて、キリストの名をとえながら、おだやかに息絶えていつたと伝えられている。

見物していた信者の一人は、火焰がおさまつてから、突然、刑場のなかに乱入し、ドミニコ・ジョルジョという宣教師の片手を盗み取り、遁走した。この手の骨は、後マカオに送られたという。死骸と灰とは、ことごとく海に投げ捨てられた。

西曆一六二二年。元和八年八月十九日に十五名の宣教師と信者とが、同じく長崎において、獄門及び火刑に処せられているがこのうちの二名の宣教師は、宣教のためにルソン島から渡つてきたばかりで、彼等を獄中から脱出さそうと企てた信者があつた。

彼等五名は、のち、とらえられて、八月十五日から六週間の間に、七度、水責めにかけてられた。そのなかの一人、彌吉という者は、板の上に寝かせられ、塩水に酒を混ぜたものを、無理矢理、口の中に流し込まれた。そして、二枚の板で体をはさまれ、二人の人間が上に乗つたのである。

口や鼻や耳などから、飲んだばかりの塩水が溢れ出て、彌吉は非常に苦しがつた。

それでも彌吉は、奉行の言うがままにならなかつたので、怒つた奉行は、彌吉の足に石をくくりつけ、両手に繩をかけて、木に吊りあげるやら、手足を後へ向けて縛り合せ、腹の上に熱い鉛を流し、陰部に焼火箸を差し込み、その陰部の傷に熱い鉛を流し込んだが、彌吉は、苦しみ悶えるばかりで、脱獄計劃の主謀者の名は、ついに明かさなかつたのである。

後日の十月二日、彌吉は火刑に処せられることとなつた。

彌吉は、受けた拷問のために、体が崩れてしまつて、歩行が自由ではなかつたので、駕籠に乗るようすすめられたが、断つて徒歩で刑場におもむいた。

何の罪もない彌吉の妻子も、そのとき、捕えられて、斬首に処せられた。

その直後、彌吉と他の四人の者の火が点ぜられたのである。彌吉は、えんえんと燃える火焰の中で、大声で、われわれは師より五十日ばかり後れたのみだ。と絶叫したという。

一六一九年。元和五年十月七日には、京都で五十二名という大量の老若男女の信者が同時に火刑に処せられている。

一本の柱に二人づつ、背なかあわせに縛りつけられそのなかには、二才、三才、四才、八才、九才、十二才、という幼児や少女まで混つていた。

イエスの名をとええるもの、泣き叫ぶもの、その声は、鬼氣をはらんで、京都の山々に木魂した、と伝えられている。

愛讀者通信

小生廿七才の独身サラリーマンです。マゾ的傾向のある女性と交際したいと思つて居ります。是非御交際を御願ひします。尚以前にも少し体験した事があります。東京のH.Q.氏御連絡下さい。(サードマン)



變態性慾者は

こんな殺人をする

おぬいの死體は木の幹に縛りつけられ、へその下から腰部へかけて、鋭利なナイフで眞一文字に斬りさけてある。のみならず局部へ棒切れを突きさしてあつたのだ……。

三 谷 祥 介

大 橋 彌 生 畫

医博金子準二氏は警視庁の囑託で、変態犯罪者の精神鑑定をしていた。彼に云わせると、変態犯罪者は申すに及ばず、こうした犯人をつかまえる刑事も変態だそうである。

「だから、もし君たちが、精神鑑定をして欲しいと言うことであれば、診察した結果しかるべき病名をつけてあげていい。君たち刑事は、極端に変態的な痴情犯罪を想像してみることがあると思う。それはしかし、君たちが想像し得る限りのものは、犯罪となつて現われるのである。故に、犯人は実行者であつて、君たちと相違するところは、実行しなかつたという点である。キリストは姦通した女を人民広場へ連れてきて、汝ら心に姦淫せざるものは、この女に石をなげよと云つた。

しんじつ、君たち刑事に泥棒する心がなければ、泥棒を取調べることは不可能であろう。君たちが変態的な精神異常者でなければ、変態的犯罪者の心境に立入つて、取調べを續行することはとうてい出来ない相談である。君たち刑事とこれを実行した犯罪者と比較対照すれば、精神異常の点においては、ほとんど相違するところが無いと申さなくてはならぬ」と説明し、二三の例をあげて、何が彼をそうさせたかにつき、精神異常者の犯罪動機や心理的作用について話された。しかしそれが正しい解釈だとは受取りがたい。

本所の生菓子屋の主人で梅原竹松(42)というものが、戦災に遭つて妻子を喪い、名古屋市へ疎開していた。そこで知合つた安藤みよという十九の女と情を通した。つまり夫婦のような関係が出来たワケである。

ようやく世の中もおちついたので、梅原は東京へ引揚げることになつた。彼はみよの親たちに会つて、彼女を妻に迎えたいと相談を持ちかけた。だが親たちの身になつてみると、年令があまりにも相違するので反対した。梅原はどうしてもみよを思い切ることが出来ない。彼は言葉たくみに女を連れ出して、枇杷島の水車小舎で無理心中をはかつた。

梅原はみよを絞殺したが、自分はなんとしても自決が出来なかつた。とうとう死におくれて、みよの絞殺死体を抱いたまま、一週間水車小舎で暮した。この水車小舎はあれはて、ほとんど使用にたえないものだつた。

大工の荒木が、かねて懇意な白石という百姓にたのまれ、修理することになつていたので、様子を見にきた。

「どうもおかしい」

だいいちあたりになたよう臭気というものがなんとも異様で、大工の荒木は嘔吐を催したほどである。四五日雨が降りつづいて、いくら涼しいとは云つても、八月二十三日の盛夏である。小舎の中はむっとする暑さだ。

よく見ると薄暗い水車小舎の片陽に、生ものがいるようだ。大工の荒木は近づいた。すると梅原竹松は、ようようのことでオノレの首を持ちあげ、じいっと荒木を睨んでいたが、やがて女の屍体を抱きかかえ、うらめしそうに立ちあがつた。もう一歩たりともあるく力がなく、藁束が風に吹かれて仆れるように、地べたにへなへたと横になつた。

荒木はあつともすつとも声さえ立て得ず。腰をぬかささんばかりに驚いて、駐在所へ駆けつけた。この駐在には前原という巡査がいて「浮浪者だろう」と、かんとんに片づけ、自轉車を飛ばして水車小舎へやつてきたが、巡査もひと目みて驚いた。てんで近づけないのである。

梅原竹松は屍体から這い出る蛆蟲を全身につけていた。のみならずその容貌はこの世の人とも思えない。

「これはいかに」と、取つてかえし、さつそく本署へ電話をかけて刑事を呼び出した。

ほどなく捜査主任の川崎松太郎が部下の刑事を引きつれて水車小舎へやつてきた。この川崎松太郎という人は、もと東京の警視庁でコロシの現場を専門に踏んでいた刑事だつた。

「おい駐在の前原君、キミもここへ来て手伝え」と云われたが、前原は氣持が悪く、水車小舎へ入ることが出来なかつた。大工の荒木も同じこと。

しかし刑事たちは平気だった。

「こんなものが臭いようでは、クサヤのヒモノは食べねえぞ」

捜査主任は駐在巡査を叱りつけた。いくら叱られても手がつけられない。

梅原竹松は殺した女の屍体を抱いて——しかも屍体の局部は、数日間にわたって凌辱された跡が歴然としており精液が多量にたまっていた。梅原は狂人のふりをして、捜査主任の職務尋問には答えなかった。

彼は水車小舎の中を流れる水をのんで、女の屍体から這い出す蛆蟲を食い、一週間の露命をもちつつひたすら女を抱いて暮したという狂人でなければ極端な変態性慾者だが酒も飲まなければタバコもやらない。梅原は善良で、なにひとつ道楽のない真面目な生菓子屋の主人であり職人であつた。

私は仕事の都合で、刑事の家庭を訪問することが非常に多い。そして種々の殺人事件に立ち入って話をする機会がある。ところがどの刑事の家庭も非常に清潔である。彼等は申し合せたように潔癖家だ。『コロシ』の現場で、鼻もちのならぬ屍体を取扱う刑事が、いつたん家庭の人となると、すこしのヨゴレでも承知のできない暴君だった。この人達が、巡査でさえいやがる特殊なコロシ場の仕事を平気でやるのが不思議に思えてならない。

「コロシの現場では、死人の悪臭に往生するでしょう。ことに血なまぐさいのはいやでしょうね」と私は質問したことがある。

「臭いと云つてもそれが大切なことだからですからね。たとえば死体

の悪臭によつて、何日くらい経過しているか？ だいたいわかりますよ。また死体の切口は重要な捜査の手がかりです。申上げるまでもなく、死体は貴重品ですからね。貴重品には悪臭もへたくれもありませんよ」と答えた。

この事件は現在鶴見警察の署長をしている伊藤広治氏が取扱つた奇怪な死姦であつた。

場所は神奈川縣の高座郡綾瀬村の出来ごとである。

山芋を掘つて生活している黒川善吉というものが、蓼川から百メートルばかり下手の杉林で、木の幹に紐でむすびつけた女の腐爛死体を発見した。黒川の訴えで、ときをうつさず駐在巡査が現場へ駆けつけるやら——村中はいへんな騒ぎになつた。ところがこの屍体は橋川彦次の長女でおぬい(23)というものだつた。彼女は村で評判の美人であつたが、土くさい百姓をきらつて、東京で女中奉公をしていたものである。——ところが二年ほどして肋膜炎を病い、自宅で静養中に、急性の肺炎を併発して急に亡くなつた。この土地は土葬にする風習があるので、おぬいの死体は美しく化粧され、死出の旅路を着飾つて埋葬されたワケである。

一週間目に——つまりおぬいの初七日に、杉林の中で屍体が発見された。親たちは申すに及ばず、村の者は膽を潰して驚いた。伊藤広治捜査主任は部下の刑事を八方に走らせ、犯人の捜査に着手したのだ。

この綾瀬村は橋川という姓の非常に多いところで、ほとんど軒並だつたが、おぬいのイトコにあたるこれも同じ橋川の姓を名乗る梅

吉が、おぬいの生前にしきりに手紙を送った事実があつた。そこで梅吉を警察へ同行し、最初は参考人として取調べをはじめた。すると彼はかんたんに、おぬいの死体を墓場からあばいたことを自白したのである。

「私は、おぬいさんと夫婦になるつもりだつた」というのだつた。

梅吉はおぬいが埋葬された夜中に、そつと家をぬけ出し、墓場から杉林へ女の屍体を選んだものだ。そして彼はそこでキスしたり、いわゆる初夜のイトナミをしたのであつた。申上げるまでもなく死姦である。

「私は決して戦後派のアブレではありません。また軽佻浮薄な精神の持主でもありません。私の恋愛は純真で、誰にもおかされることはありません」と云つた。

しかし、それにしては不審な点がある。前にも云つたように、おぬいの死体は木の幹へ縛りつけられ臍の下から陰部へかけて、鋭利なナイフで眞一文字に斬りさげである。のみならず局部へ棒切れを突きさしてあつた。まったく残忍この上もない行爲だ。

「そんなに可愛い女に對して、なぜお前はあんなむごたらしい仕打ちをしたか」と伊藤主任は尋問した。

「私は毎晩あの杉林へ通つて、おぬいさんを抱いたキリスしたりしておりましたが、五日目に、おぬい



さんのあそこから蛆蟲が這い出しました。このときほど腹が立つたことはありません」

「誰に腹が立つたのかい」

「もちろん蛆蟲ですよ。私はナイフで腹を斬りさばいて、蛆蟲を片端から掴み出しました。それから蛆蟲が出てこないように棒切れを突きさしました」と供述するのであった。

さすがに伊藤廣治捜査主任も、これ以上職務尋問をつづけることが出来ず、ただ呆然として梅吉の顔をじいつと見つめるばかりだ。

この上は犯人梅吉の日ごろの素行について調査をすすめる必要がある。がしかし村では模範青年と云われて一点の非のうどころがない。申分のない純情な男であつた。強て批難すれば蝗や蛙や蛇が好物だということだつたが、蝗を食う者はたくさんいるし、食用蛙もまた同じことであり、蛇の料理は日本橋に専門の料理屋があるほどだ。スッポンと同様に高級な料理として珍重されているので、これをもつてとやかく梅吉の精神状態を判断することは出来ないようだ。

女が殺された場合、それが子供であろうと大人であろうと、刑事がいちばんさきに目をつけて細心の注意を拂うのは、女の陰部である。新聞や雑誌その他の報道機関が、これを取りあげて詳細に報道しないのは、かえつて読者の鑒懲を買うおそれがあるからだ。しかし捜査にあたるものは見逃すことの出来ない重用事項である。

東京府下の多摩墓地で殺されていた老婆が、局部に齒の痕があつて問題になつたことがある。この婦人の身元は、千葉県の山武郡で

すでにつれあいの夫は亡く六十三才の未亡人だつた。刑事がだんだん調査をすすめると、この老婆をめぐつて多くの男が捜査線上に現われてきた。つまり年は取つても性慾はいつこうに衰えを見せぬ婦人であつた。しかし男という男は、すべて金が目あてで淫乱な老婆の相手になつていたのでそれでは金の方がつづかない。なるべく十七八から二十前後の青少年を相手にして欲望をみたすことになつた。

この婆さんはふと、かつて戦争中に東京から疎開してきて、世話したことのある学童のことを思い出した。指折つてみると十八九になる。これを手なづけて自由にしようと考えた。ある日上京して、かねて馴染の正岡の家をたずねると、言葉たくみに長男の茂を連れ出し、浅草で映画を見せたり温泉マートの旅館へ泊つたりして道ならぬ淫楽に耽るという有様であつた。だが茂の身になつてみるとやりきれない。なぜかと言へば、この老婆の性慾は普通のことではなかつた。局部の刺戟をもとめて茂に舐めさせるのはまだしも、齒を立てて噛んでくれと強いるのであつた。明けても暮れてもこのことばかりで茂はほとほと閉口したが、両親に打明けて話もできず、途方にくれていたのであつた。

老婆が多摩墓地へ茂を連れ出したのは、なるべく費用を節約し、郊外の静かな場所で心ゆくまでなぐさむつもりだが、この茂はついに殺意を決するにいたつたものである。

細川家の墓地の蔭に隠れて、老婆は風呂敷を地べたへ敷いた。やがて真ッ晝間の天日に晒されたのは眼を覆うような下半身——けれどもこうした淫乱女に特有のなめらかな肉つきのいい肢体であつた。茂はしかしカッと腹を立てた。彼はいつものようにいどみかか

つて馬乗りになつたが、いつの間にか手拭を取り出して、老婆の首に巻きつけると、力まかせに絞めつけた。

老婆は最初ふざけていると思ひこみ、

「茂ちゃん、なにすんのよ」といいつつ茂を抱いた。彼女はまさか殺されるとは考えも及ばなかつた。

死体は数時間たつて墓守に見えられ、刑事たちが現場へ駆けつけたが、はじめ推定年齢は四十前後と見え、やまられたものである。腰巻は赤いメリンスを用いており、陰毛には一本の白髪もなかつた。この年齢で腹部に贅肉がないのもめずらしく、局部からずつと足のさきまで、丹念に白粉を塗りつけていた。つまり女の隠すべきところを、美しく化粧していたのである。

犯人の正岡茂はおとなしい性質で、両親やきょうだいたちにはまことにやさしく、友達と喧嘩口論をしたことは一度もなかつた。

「なぜ、君は殺す気持になつたか」という刑事の職務尋問に対して「はずかしいから殺したのです」と答えている。

これは府中警察署の稲垣刑事の話だが、殺された女の現場に立会つて、彼女たちの局部を調べた経験によると、たいていの女は局部に何かしら疵がある。そのキズアトによつて、女の性生活を判断することができるといふのであつた。

保谷の町はずれに長島という若夫婦が住んでいた。主人は私鉄へ勤めていい地位であつたが、それは神戸にいる彼の父が、この会社

の重要な株主だつたからである。

彼等は夫婦仲もむつまじく、たつた二人きりの生活は何不自由もなくうらやましいほどだつた。ところが夫が出勤して間もなく、ご用ききにやつてきたクリーニング屋が、細君を絞め殺して、ユビワと腕時計をさらつて逃走した。

稲垣刑事はこの現場をふんで、ときをうつさず犯人を捜査することになつたが、真晝間のことであるからクリーニング屋が長島家へ出入したことを見かけたものが幾人も出て来た。自転車の荷台には預つた洗濯物を入れる大きな籠を結びつけてあり、それには『白洋舎』の文字があつたことまではつきりわかつた。犯人は森田幾松というもので、簡単につかまつたが、どうも合点のゆかないのは、幾松の犯行である。彼は泥棒しようと思つて、かねて出入している長島家へ忍びこんだが、買物に出かけたと思つた細君が、ふいに現われたので絞め殺したと自白した。だが物盗りが目的で忍びこんだものであれば、まだほかに盗む品はいくらもある。犯人はダンスのヒキダシをぬいて、内部を掻きまぜ、物色した形跡はあるが、金目のものは持ち出してない。人を殺してまで泥棒しようという犯人としては、なんとなくヌスミの行爲がものたりなかつた。稲垣刑事は殺された細君の局部を調べて、賊に凌辱されているのではないかと取調べたが、強姦された形跡はなかつた。しかし爪で引ッ掻いた跡が数カ所あつた。そこで稲垣刑事は、単なる物盗りではない——若い細君とクリーニング屋の間に、痴情関係があつたものに相違ない——と考えるようになった。

「お前は奥さんにいたずらしたんだろ。どんなことをしたか」と詰問した。



すると幾松は、「いや。決していたずらしたおぼえはありません」と答える。どうしても白状しないので、聴きこみを取って捜査をつづけた。稲垣は白洋舎の主人にも会って、幾松の日ごろの素行について調べたが、彼は主人の金を使込みしたこともなく、真面目な青年外交員で、出入りするトクイさきでは受けもよかつた。では、いったい彼が強盗するにいたった動機は何んだらう？ 稲垣刑事は犯人のために、強盗した動機をさぐってやらねばならなかつた。こうして

いことですが、妻は刺戟をもとめて、アソコを引ッ搔くようにしてやらねば承知しませんでした。局部の爪跡は、それが習慣になつてしぜんに出来たものと思います。出入りするクリーニング屋について、いろいろおたずねでございますが、私の妻は出入商人とふざけた真似をするようなことはなかつたと思います」長島は閨房の秘事についても、それが捜査に役立てば、隠しておくべきでないと観念し、なにかも打ち明けて、ありのままの話であつた。こうなつてみると、いよいよわからなくなつたのは、犯人

捜査をつづけているところへ、細君を亡くした長島の主人が、参考人として刑事部屋へ現われた。彼が稲垣に語つたところによると、

「妻はもと名古屋で芸者をしておりました。私は父の反対を押し切つて家内にしましたが夫婦間のイトナミは、可成りはげしかつたことをみとめます。はずかし

幾松が強盗を働いた動機だ。そこで稲垣刑事は、犯人について次のような解釈をした。

森田幾松はいつものように長島の家へご用ききに往つた。出てきたのはもと芸者したことのある愛想のいい細君で、主人を送り出したあとは閑でもあるし、幾松を相手に、よもやまの話をとりとめもなくしていたものであろう。細君は身に泌みついた癖で立膝になつたり——別になんという理由もないが、若い男の前でちらちら股のあたりを見せたかも知れない。幾松は日ごろおとなしい青年だつたが、むらむらッとした気持で、

「奥さんッ！」と、抱きしめるように手をかけた。

若い細君は幾松をつきのけてとげとげしく、

「なにをなさるんです。主人に言ひつけますよ」

と、威丈高になつた。

気の弱い幾松は、主人にこんなことを言ひつけられては、どんな結果になるかも知れない。まるで気も顛倒した思いで、細君の首を絞めた。あとはダンスのヒキダシをぬいたり、そこらを取り散らかして、強盗が入つたように偽装したものであろう——と推理をくだした。

稲垣刑事のこの考えがあたつていのかどうかはわからない。犯人の森田幾松は断乎として犯罪の動機については語らなかつたのである。浅草の警察で長く刑事をつとめ、現在はデカ長となつて多くの部下を使つている土屋刑事は、このことについてある日私に、

「恐らく稲垣刑事の解釈は正しいでしょうね」と云つた。

「女の局部に傷ができていたり、むごたらしい殺し方をすると、アベック殺しの河野のように、ヤツは変態で精神異常者だと言います。しかしそれは必ずしもあたつていないようです。人間は誰でも獵奇を好む性格を持つておりますからね。そんな風に推理をした方が興味があるのかも知れません。ところが私ら刑事は、正しく解釈してやらねばならぬ義務があります。浅草警察の管内に山谷^{やまぐち}というところがあつて、ここには簡易旅館が軒をならべているんです。世間で二個^{にこ}四^よと言われる自由労働者が、ごろごろしているところですよ。いちばん大きい旅館が更生館なんです。労働者の群にまじつて独身の女もたくさんいます。更生館には無料の浴場があつて、誰でも勝手に入浴ができますが、さすがに女の労働者は男と混浴もならず、夜更けて入浴します。昨年の十二月三十日に、深尾みね^{ふかお}(37)という女が、この浴槽で死体になつてうかびました。湯水はいつも翌朝になつて、湯殿の世話をしている袋井伝蔵^{ふくろい}というものが、栓を抜いて掃除することになつていました。深尾みねの死体は、この袋井が見つけて騒ぎになつたんです。私は現場へ駆けつけて、袋井から捜査の参考となることがらを聴取りました。彼の話によると、深尾みねは朝早く出て、都内の公衆便所を掃除してまわる女人夫でした。昨夜は遅くなつて風呂に入つたのでつい居睡りがでたかも知れません。いい気持で沈んだものだろうと——袋井は言うのでした。私は浴槽から深尾みねの死体を引きあげ、女を流し場へ仰向けにして、袋井の話をききながら局部を調べました。ところが稲垣刑事が取調べた長岡の若い細君と同じように、大切なところを爪で引っ掻いた傷があるのです。ふと袋井の指を見ると爪が伸びている。

「おい、お前の指の爪を見せてみる」こう言つて私は、袋井の腕を

撫みました。そしてぐつと引き寄せると、袋井はがたがた顫えて蒼白になったンです。

「深尾みねを殺したのは袋井でしたよ。この男はもと吉原の遊廓で風呂屋の流しをやつていましたが。戦災に遭つてチンパになり、ヤケドしてみにくい顔の男でした。女を殺した動機というのは、深尾みねが風呂場から、

「おじさんとともいいお風呂だわ。有難いわ」と言つた。これを袋井はどう勘違いしたものか、いきなり深尾みねが一人でいる浴場へ入りこんで暴行しようとするンです。驚いたのは女で、悲鳴をあげて逃げようすると、湯槽へつれこんで袋井はみねを沈めにかけたンです。袋井は私に、女に騒がれたので、こうするほかに手段がなかつたと供述しました。ヒドイことをする野郎ですが、この男も目ごろはまるで猫のようにおとなしい。だからおとなしいと言うこともあてにはなりませんね。また変態者と言うこともアタツていないようです。こうした犯罪は非常に多いが、こんな男をなんと言いますかね」

(終)

★

★

★

高月大三著・喜多玲子絵
B6判百頁美装本

価三〇〇円
一三〇円

時代小説 お小夜嵐

淫らな嗜虐の嵐にもてあそばれる美女お小夜の柔肌! ぎり／＼と喰込む細目の痛さに悶える姿男達の眼がなめるように覗き込む

伊藤晴雨著

價五百圓千共

凄艶女體 拷問私刑秘鑑集

手梳和紙合紙付豪華麗彩色特型帙入限定
会員頒布版 第一集 (五枚一組)

晴雨隨筆 第一冊
賣の四十八手

小型和装美幀
價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第二冊
繪物語血血郷談

小型和装二色刷
價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第三冊
危機一髪畫譜

小型和装美幀
價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第四冊
與力同心岡ツ引

小型和装美幀
價一三〇圓 千共

晴雨隨筆 第五冊
性犯罪と私刑

小型和装美幀
價一三〇圓 千共

紅夢樓主人著縮刷凸版刷和装(同性色情史)
美少年論 價一〇〇圓 千共

右の書籍御希望の方は代理部宛現
金書留又は小爲替にて御申込み下
さいませ尙書留御送附御希望の方
は書留料加算御送金下さいませ。

伊藤晴雨著 上製巻物 豪華絵巻物
価五〇〇圓 千五〇圓

美人十二支責め繪卷

十二支にちなむ責場を古事逸話傳説等により世につたえられたものを先生独特の麗筆でものした力作絵巻は先生快心の作、蒐集者垂涎のもの。

喜多玲子筆コロタイプ八枚一組三百圓千共

玲子悦虐姿態素描集 (2)

凄艶の姿態を描く喜多玲子の傑作豪華秘帖

峰岸義一著

夜 價二五〇圓千三二圓

伊藤晴雨著

黒繩記 價三〇〇圓千二四圓

伊藤晴雨著 賣のこれくしょん

A五判 和装更紗表紙 價三〇〇圓 千三二圓

伊藤竹醉編 小説に 賣の代表名作選

菊判和装美本 價三〇〇圓 千三二圓

伊藤晴雨著 十二ヵ月行事奇態刑罰圖譜 價五〇〇圓千三二圓

キドロド・シュトック著 被虐の家 價三二〇圓 千三二圓

東京千代田神田神保町二ノ三四
日本特集出版社代理部
振替口座東京 二四二五一番

変質者ざんげ 腎部マニア

……しかも初めて眺める女のヒップの縦に割れた溝。この不思議な圓球のくびれた溝は天の與えた絶妙の美だ。全圖はこの一本の深い溝によつて黄金分割のように……

鞭岡麻冬

風俗草紙十月号の数多い読物中、油井啓二氏の「腎部狂崇症」を読んだ時ほど、楽しく興奮させられた事はない。全く油井氏の言はれる通りの異状な好みを私も持つて生まれて

たくなり。この拙い一文を綴ります。

女性の豊かなヒップ！それは私にとつての全宇宙である漠然とした性衝動が、男性への交接欲として具象化する頃から、私は女のヒップに対して、そのリ

A.K

ビドーを凝集させたと云つてよい。そのむつちりと盛りあがり。海のように深い神秘性をたたえた臀部に魅せられた私は、私の情熱をかたむけて、女の臀部を崇拜し渴望するようになった。

油井氏のように幼い折りの異状なショックは持たなかつたが、私が気付かない、何かの衝動があつたのだらうと思う。

いるのである。自分の氣持を全部かわつて書いて戴いたような錯覚が起きる程、油井氏の説に私も同感しています。見も知らぬ氏に深い親近感を抱きましたので、早速便りが出し

ら、あらめる読物の中から、女性のヒップの記事を拾い出し、又、西歐の詩の中で女性の肢体、特に腰お尻を讃えたものがあれば、書き抜き、写真に対しては、全く感喜して、か



中学に入学する頃か

き集めた。勿論戦前の事だし、めつたにヌード写真なんかなく、例えば、彫刻——この代表的なものには、ギリシャの尻見せのヴァーナスがある——や、女優の海水着写真。そしてある種の写真ではヒップがよく見えるものを選んで集めた。

その中でも特に私を喜ばせ、貴重なコレクションの第一位にあつたのはベルリンオリンピックの数々の女性のスポーツ写真である。

単なる裸体写真の類は、それ自体静止した姿だし、前向きや横向きで、肢体美、特にヒップの躍動美が見られなかつたのに反し、オリンピックの写真では、跳躍にしろハードルにしろ、体操にしろ、パンツやタイツがびつたり喰い込んだ肢体が弾力性をもつて柔軟に躍動した瞬間を捉えているからだつた。しかも鮮明で、写っているのは外国の素晴らしい肢体の持主だつたので、私は完全に圧倒されていたのだつた。これらのコレクションは、私のヒップマニアとしての性格を一層はつきり有形づくらせるのに役立った。中学二年、三年となるにつれて、私は女性のヒップだけに、心酔するようになってしまった。

近所の銭湯にも好んで行つた。番台に金を渡し乍ら、チラッとのおく女湯の脱衣場。そ

こに思いがけなく、むつちりと肉づきのいい白い臀部が向うむきに立っていたり、ひざを立てて坐っていたりすると、私はすっかり興奮して、瞬間、目から光がすつと消えるような衝撃を受けるのだつた。

その頃から私は、一つの妄想に何時も苦しめられた。それは、便所（何処のでも構はないが）の汲取口から忍び込んで、女の臀部をまのあたりに見たいと云う、やむにやまれぬ衝動なのである。他の異状者が尿や糞に憧れて便所をのぞくのと異つて、私ののは、ただ単に白くむつちりしたヒップの半円を、心ゆくまで観察したいと云う情熱なのである。この悩みのために、一時は夜も眠れない位であつた。

秘密のコレクションのヒップ写真を胸に抱き乍ら、この妄想に耽つて床につく夜は、物狂ほしい迄に情感が高ぶり、一夜に何回も夢精したりした。そして、気弱い善良さから、便所のぞきも実現出来ず、この満たされない願望が私のヒップ狂熱を一層強いものに育てて行つたと言えるだろう。

しかし乍ら、年令の成長と共に、私のこの欲求は、いくつかの努力の結晶として徐々にむくわれて来た。それは中学四年生になつた

或夏。郊外の叔父の家に遊びに行つた時の事である。郊外は殆んどが農家であり、叔父の家は青田に囲まれた小高い所にある二階造りだつた。ブラブラしているうちにふと二階の部屋の壁に掛けてある、双眼鏡が目につき、それをのぞき乍ら風景を楽しんでいたところ一面の青田に出て、田の草を取るために草取り機を押している若い女達が目についた。そしてはしなくも彼女等の一人が、生理的处理をする爲に、田の畦に出て、モンペを脱ぎ下しその白く鮮やかな臀部を明るい青空に突き出して、立つたまま排尿するのにぶつかつたわけである。私は飛び上らんばかりに喜んだ。

そしてそれからは暇があれば、二階の窓にかじりついて、双眼鏡で一面の青田の中の女達を追ひ廻して一日を暮した。彼女達は暑いので携行の湯茶を飲む、そして大抵二時間か三時間位で処理をするために、モンペの紐を解かなければならない。十二、三歳から三十歳位迄の十数人について、私は毎日十数回、彼女達の健康なヒップを拡大して見る事が出来た。日頃の望みが思いがけなく報いられて、私の情熱は七色の虹のように噴き上るのだつた。

それから、時には、武器（双眼鏡）を手

に、彼女等の近くに潜行し、あの柔らかく大きいヒップを真近に見、ほとぼしる透明な一條の水液を心躍らせ乍ら見守った。腰をやや折りまげて、明らさまにむき出したヒップは何と純粹で美しい事であろう。何の装飾もなく、何の突起物もないあの肉のかたまりは、又となくずつしりと優美に、こねあげられ、ふつくらと異様になまめかしいものである。色の白いの、少し黒いの、小さきまざまにくりひろげられる美の競艶会は田園のすばらしい美術展だった。そして、この休暇の終りに私は我が最良の收穫をものすることが出来たのだった。それはこうである。

叔父の親類で、私の従弟にあたるAが妹のS子を連れて、やはり休暇で遊びに来た。Aは私より一つ上の五年（十八歳）S子は私と同年で（十七歳）私達と一緒に寝起きするようになり、叔父の十六になる娘と一緒に雑居した或る晩だった。その日は四人で近くの池に泳ぎに行つたので、四人とも、疲れてぐっすり眠ってしまった。二階の十疊の間に蚊帳をつり、ゴロ寝していたのだった。

夜中になり、ふと便所に行きたくて目が覚めてみると、暑い夜なので、皆テンデに寝巻のユカタをはだけて、ぐっすり寝込んでい

る。部屋には三十ワットの電球がつけつ放しである。私は便所から帰ると、そつと蚊帳に入つて、まざまざと女二人の寝姿を見守つた。二人共、そのぴちぴちした手足を思い切り投げ出して寝ている。晝間は感じなかつたのだけれど、こうして、ぐっすり眠つた彼女達には、思いがけなく成熟した女の匂いがただよつてくるようである。

私はすつかり眼が冴えてしまった。胸を躍らせ乍ら、S子の寝ている横——私が前に寝ていたのと反対の端に寝た。彼女が目ざめたら、寝呆けた真似をするつ



もりだつた。S子は都会育ちの女学生で、パ
レー部に入っているだけあつて、すくすくと
延びた肢体が、すっかり成熟はしていないけ
れど、既に花が開いた感じである。彼女は、
向うむきに横に寝て、身体をくの字にくねら
せて身動きもせず、ただ規則的な寢息が他の
二人に交つて聞えるばかりである。そして、
その弾力のあるヒップが真白いパンティにび
つたり包まれたまま、むき出しなのである。

私は鼓動を静め乍ら下にずり下つて、彼女
のヒップのすぐ近くに顔を寄せて、このあか
らさな腎部の実体を心ゆくまま観察するこ
とが出来た。腰のくびれから急に盛り上つた
円球は、無限の実りのようにむっちりとふく
らみ、そのふくよかな肉付きは、息づくばか
りに生々しく、生命の深い泉が、その奥深い
場所から溢れてやまないようだつた。しかも
初めて眺める女のヒップの縦に割れた溝。こ
の不思議な円球のくびれた溝は、天の与えた
絶妙の美だ。全円はこの一本の深い溝によつ
て、黄金分割のように形よく、すつきりと分
たれ、各々の半円は、このたての線によつて
こよなく美しく結合されている。ああこのな
まめかしい実体。それは唯、面の美しさだけ
ではなく、無数のわん曲線の美であり、ずつ

しりした容積の美であり、適度の重さを示
す、重圧的美である。この柔らかく、たくま
しい円球の内部からは、ふくいくたる処女の
なまめいた香りが溢れて、私の鼻腔にしみ入
つて天上の夢をもたらす。その盛り上り、静
止した腎部からは、私を支配する虹が発散し
ている。私は魅せられたように、真夜中の床
の上で彼女のヒップをこの口でなめるよう
に、眺めていた。

そして遂にたまらなくなつて、その触感を
さえ味つたのである。私の掌は吸い寄せられ
たように、彼女のパンティの上から、まるい
豊かな肉をなぜ回し初めた。真白い太腿にき
ゆつと喰い込んだパンティの紐、かくされて
いる爲に、一層神秘性を増したそのヒップの
弾力に、私は、あきることなく、掌をびつた
り当てて、恍惚としていた。私は思わずその
小高い丘や、柔らかに凹んだ溝に接吻した時
彼女は、うーんとのけぞつて、寝がえりをう
つたけれど、眼をさますことはなかつた。

その一夜を契機として、私はすっかり生れ
変つたように元氣を取り戻した。その後は、
町で行き交う女学生の襷スカートの下に、ふ
つくらと感ぜられる尻を見ても、あの夜の感
触と微妙な美しさが思い出されてたまらない

気持になり、油井氏の言われるように数々の
腎部を観察するうちに、その実体まで、すか
して見分けられるように、私の欲求は今では
除々に実証的に満されるようになって来た。
現在。あの中学生の時から、既に約十年の
歳月が経過した。それは戦争による外地生活
の空白期間。私にとつてのヒップ遍歴は絶え
ることなく続き、数々の経験があるが、今回
は省略します。

現在は、私は某私立高第学校の教師をして
三カ年。天の配在は私を私の最も適する職業
に巡り合せてくれた。私は日々数百の若々し
い様々のヒップに取り囲れて暮している。そ
れにしても、私の腎部崇拜は、えんえんと燃
える。オリンポスの火のように燃え続ける。
しかも、私の場合、油井氏のように、マゾ
ではなく、愛する美しい数々の腎部を支配し
たいと云うサディックな狂熱に変つて来て
いる。ここでの楽しい愉快を二・三記して見
よう。

私は三年生の一クラスを受持つている。彼
女達は正確に十八歳が標準である。既に開花
した素晴らしい肢体のマッスである。自由教
育とは言つても、地域的にここらは事大主義
であり、厳格な校長の影響もあつて、教師は



生徒に対して権力があつた。彼女達をびしびし叱りつける時は、一層愛情が増すものである。ある時、掃除をさぼつたA子を放課後教室に残した。運動会真近なので、運動服のまま校庭に出ていた彼女は、私に叱られて、眼をキラキラ輝かせ乍らうつむいて、片手でブルマーの紐をしきりに気にする。さぼつたのが二回目だし、美しい肢体の割になまいきな

とウエストから尻に引締りがちの臀肉をびしびつ打つた。彼女は、痛いと言つて泣きそうになる。私は五六回なぐつて、鞭を捨て、いたわりの口実をもうけて今なぐつた彼女のヒップをなげてやつた。彼女は耳たぶを赤くして、一寸甘える表情をして「ごめんなさいとあやまつた。

C子は小柄だつたが肢体は級の誰よりも、美しく整つていた。彼女は罰せられた初めは泣いた。二回目はもう泣かず、かえつて微笑んでしまつた。彼女は本来的マゾヒストとしての素質があつた。鞭を好み、私に眼で願つた。そのヒップの美事な肉付は、私を恍惚とさせずには置かなかつた。彼女が両足を揃えて立つたり、うつ伏せに寝たりすると尻に二つのえくぼが出来た。このえくぼはめつたに出来ない貴重なものだった。ふつくり凹むこのえくぼは、あふれる

ばかりの色気と、むつちりした盛り上りを感じさせるものである。彼女はそれを知つていたし、その美しいヒップを明らかに私に見て貰うことに無上の愉悅を感じるのだつた。

今一つ、私のすばらしい楽しみは、彼女等が熱を出したりした時、応急処置として、医务室で、ペニシリン注射を彼女の臀部にしてやる時だ。私は、医学のコースを途中でやめたし、医務関係を受持つていたので注射は私の仕事だつた。私の熱望する女性のヒップに鋭い注射針をぶつすりとし込むことは、どんなにすばらしいことであらう。この時は喜びと心のうずきのため、思わず手がふるえてくる程である。しかも、彼女達の尻は未知の全くの美しい処女林である。ふくらみくびれた臀部！これは私の心の糧でもある。一月に四・五回はこの糧が私の生命にすばらしい興奮の泉を湧かせてくれる。中には注射針が射し込まれた時、ヒップの肉がピリピリとけいれんを起す生徒がいる。その見事なめざめ程すばらしいものはない。背徳の行爲と思われるかも知れないが、いいと思つてゐる。尚、油井氏さえ御諒承下さればヒップの写真など交換も致したいと思ひます。

(おわり)

玲

子

十

二

ヶ

月

霧

—其の四—



玲

たてつけの悪い裏戸をガタリと開けたおやじは、寒々とした裏の空地に娘を引きづり出した。

焼跡のままの空地を、ヴェールのように霧が覆い、荒地の向うに散在するバラック建の人家の灯も見えない。

「……あッ。いやッ、ゆるして……。」

「ふん、今更何を言やがる、こんな目に逢うのも、お前の心がらだ。ナニイ？ 寒い？ あたりめえよ、寒いことがよく判るように裸にしてやつたんだ。あとでゆつくり

のぼせるほどあたたためてやるから、その有難さが身に浸みて判るように、今のうち、うんと寒い目をしておくがいいぜ」

ひしひしと針のように肌を刺す寒気の中に、娘はずり落ちそうに纏いついた腰の一枚の裸身をくねらせて、啜り泣いている。後手に縛られた手首が、ジンジンと音を立てそうにしびれ、深夜の霧が悪魔の息吹のように棘を含んで膚を責めるのだ。

おやじは犠牲の縄尻を下駄の下に踏みしめながら、コンロに火を起してそのなかに

太い火箸を突込んだ。

「うふふ。今夜ばかりは、どうしても厭だとは言わさねえぜ。考へてもみやがれ、家出して来て悪い奴等に引つかけられそうになつているお前を、あの駅の暗がりのところで助けたのは僕だ。あの時僕が助けなきや、今頃お前はどうかつてゐるか判らねえんだ……。その恩人の僕が女房にしてやると云つてゐるのに強情を張るからこんな目に逢うのだ。今夜はいつものように首を横に振つてそれで済むンぢやねえぜ、支那そ

ば屋の仕事も今夜は休んで、しつぽりあたためてやろうと云うんだ。酒にほてつた僕のからだか恋しくなるように、せいぜい寒い目をしておくがよい……。」

ハタハタとあおぐ破れうちわの風にあおられて、真赤な焰が鉄の火箸を焼いている。支那そば屋のおやじはむき出しになつた娘の腰のあたりに眼を走らせた。膚は寒気に震えているものの、熟れ切つた若い女の裸身は久しく女に接しなかつたおやじの眼に妖しいまでに美しかつた。

「サア、その臀つべたに、僕の女房になる印をつけてやる。他の男のものにならぬように僕の名前を焼き込んでやるんだ。」

「ああッ。そ、そんナッ、そんナ……」
声を挙げようとする娘の口におやじは猿轡をかませると、楽しむように火箸の焼け具合を調べている。

トロトロと焰の舌が火箸の先をなめて、そのあかりがおやじの嗜虐に歪んだ半面を赤鬼のように浮き上らせ、悶える娘の裸身に陰影を造つた。

深夜の焼跡に香もなく霧が流れて……。

(繪と文 喜多 玲子)





D・B・アレラ 原作

奴

隷

祭

(終 回)

彼はどツかと馭者臺に腰をおろすと、奴隷女の肩の付根から腕に縛りつけられた手綱をギユツと握り、同時に鞭をビシリと鳴らした。とたんに二人の女は前にのめり、ごくんと車が動いた。……デイジイの大きな太ももが緊張し、ローレンスの素晴らしい腰がこわばった

三宅 一朗 譯

中川 彩子 畫

その五 人間馬車

モーチマの奴隷祭はルイジアナじゅうの話題になった。富クジは飛ぶように売れた。古代の運勢の女神にもじつた裸体のクラブが眼隠しをして花の上に立っている畫がついていた。

富クジ券は期日前に売り切れたが、狡猾なモーチマは、次から次と増刷して売った。とにかく五百弗でとび切り綺麗な白人の女が手に入るといふのだつたから、船員などは数人合同で券を買つたりした。

いよいよ当日の十五日になった。朝からぞくぞくと人が流れこんだ。ミシシッピの河を船で下ってくる者もあつた。ドナルドスンザイルから来る蒸汽船が河を上下していた。

沿道の両側には適当に黒人が出ばつていて、富クジを握りしめてやつてくるお客を、特に設けた大きなテントが見える庭に案内した。広い広い庭だつた。したたらんばかりの緑の樹木、そこらじゅうに花が飾られ、まるでエデンの園に入つたような心地になるのだつた。

ところで、まず客人たちが度膽を抜かれたのは、会場の入口の左右に一合づつ、軽四輪馬車があつたことだ。いや、馬車な



んか珍らしくはなかつた。それを牽く者に眼を見張つた。二人づつの白人の女奴隸が牽くのであつた。というのは、そこに待機している四人の女は、まるで馬のように馬具をつけていたから。

「いつたい、この馬車には誰を乗せるんだね？」

「ハイ」と側にいた接待係の黒ん坊の一人が答えた。「モーチマ様の特別な御親友の方をお乗せいたすことになつております」

「ほほう」と客の一人は羨しがつた。「こんな牝馬に引ッぱられたら悪くねエだろうなア。だが、いつたい、幾らで乗せようてんだね？」

「お氣の毒ですが殿方一人はお乗せしないことになつております」

「いいじゃないか。いま、車は空いてるし、俺ア乗りたくてたまらないんだ」

「だめなんですよ、旦那様。女の連れがある方だけということになつてゐるのです。もし、そのお連れの女が白人奴隸でしたら、お祭の催うしに貸していただくという條件です。一人でも多く白人奴隸をふやして景氣をつけようというモーチマさまのお考えなので」

「ちえッ」

そのとき一人の混血女を連れたアンダースンという農園主が入つてきた。彼は、キラキラ光る鍔を打つた革馬具をつけた裸の女たちはブルブルと身ぶるいをして顔をそむけた。

「いよう、デイジイローレンス。久しぶりだな」

彼は、何もかも承知している態度で、あたりの人々を得意そうに見まわしながら悠然と馬車に乗りこんだ。そして、どっかと馭者台に腰をおろすと、奴隸女の肩の付根から腕に縛りつけられた手綱をギュッと握り、同時に鞭をピシリと鳴らした。とたんに二人の女は前にのめり、ごくんと車が動いた。

デイジイの大きな太ももが緊張し、ローレンスの素晴らしい腰がこわばつた。

四ツ匐いにこそなつていないが、馬具をつけた二人の裸の女が前こごみになつてグイグイと馬車を引つぱつた。アンダースンは、ちよつと舌打ちをし、勢よく鞭を振つてローレンスの大理石のような尻を打つた。彼女は急いだ。それに歩調をあわせたいデイジイは、はアはアと喘いだ。男は、ときどき聞くに堪えないような悪態をあびせながらピシピシと馬を打つた。

「ねエ、モーチマ、こいつア本当の馬より重宝だよ。ひとりで元のところへ戻つて行くからな」

会場のそばに立つてゐるモーチマのところまで馬車を降りたアンダースンは横柄に笑つた。こうして、何人かが人間馬車で大テントのところまで乗りつけ、そのたびにシスリイ以下四人の女の悲鳴が群集の中に高く響いた。

その何人目かに金髪の美しい女を連れた蒼い顔の男が入つてきた。彼は、その奇妙な馬車をジロジロながめていたが、つと女の手を引いて群集の中にまぎれこんでしまつた。

チパーズとチャーチルだつた。しかし、彼を見知つてゐる者

たちも、あまりにも彼の顔が變つていたので彼だと氣づいた者は一人もいなかった。

チバーズは、当日売りの券売場へ行つて一枚買った。

ちようど、そのころ、庭の入口にアスコットが姿を現わした。

イヴリンと一緒にたつた。彼女は、好みのいい派手な服を身につけ、顔には厚いヴェールをかけていた。たいへん身分の高い、獵奇趣味のマダムとして紹介された。

「ほら、これがモーチマさんのところへ行く乗物です」

とアスコットは氣狂い女に馬車と奴隷女たちを示した。

イヴリンは、ヴェールの奥からじいっと女たちを見た。外からは見えなかつたが、たちまちその瞳はらんらんと燃えはじめローレンスの裸体に灼けつくようにそそがれた。あのブロンドの髪、あの白い肌、あれが愛を殺し、いのちも理性も奪つた憎い仇だ。ローレンスは、ややチャーチルと似たところがあつた。

「あの馬車にいたしましょうよ」

じつと睨みつけながら人差指で指した。そして、あッ、もう

彼女は、その馬車の階段に足をかけていた。

「手綱をとつて頂戴。鞭は私が受け持ちます」

アスコットが手綱を持つと、イヴリンは、びっくりするほど元氣よく鞭をふりかざした。前にいるローレンスの金髪がさつと光る。その光はイヴリンの心の底を照らし、いままで眠つていた意識を猛然とあおつた。うつくしい女は憎惡そのものになつたように燃えあがり、いなみ難い、ちからづよい迫害心がどツと湧き起つた。むごたらしい、狂つた、血みどろな女の惡魔

的にくしみ。

「ブロンドは、どうもノロいようね」

ローレンスのお尻の下のところに一鞭くれた。

「トロットで行くか」

とアスコットが言うと、

「そうそう、トロットがいいわ」

きびしい一撃が加えられた。たちまち馬車は駈けだした。二人の女は、だまつて、唇を噛み、クビキ棒に手をかけて走りつづけた。リンリンと鈴が鳴り、枝間から射す陽ざしが裸女に斑点の影を作つた。

イヴリンの鞭は絶えずケイレン的に宙を切つていた。その的はローレンスだつた。肩から胸、お尻、ふくらはぎ、と打ちつづけた。

「ブロンド、もつと足を揚げて。いまにも倒れそう。こら、あんまり右へ寄りすぎる。いやだわ、この牝馬は」

笞の乱打。脇腹にからみ、乳房にまでもまつわりついた。

見る見るうちに、馬車は、大テントのそばまで行きついた。

二人の女の脚はワナワナふるえ、全身は汗みずくになつていた。デイジイは眞蒼になり。眼は吊り上つて鼻がヒクヒクし、今にも氣絶しそうだつた。ローレンスは、苦痛のために顔をヒン曲げたまま瀕死の人のような大息を吐いていた。肩が破れて血の滴が流れていた。

晝食前に来会者一同に酒が出され、やがて晝食が運ばれた。一同は、いい氣持に酔つてガヤガヤと食べたり喋舌つたりした。

そのあいだにドシドシ当日売りの券が売れていった。アスコットがモーチマに何かささやくと農園主は狂女に丁重にお辞儀をし、どうか向い側の特別席に就いて何かとお祭行事の進行に助力して下さい、とたのんだ。

午後になつた。人々は、ようやく昂奮してきた。刻々と近づく運命の時間におどらせた。そのときまでに色々な催しがあつた。モーチマの奴隷以外の当日そこへ連れて来られた女奴隷たちの品評会もあつた。その場で取引さえ行われた。中でも眼ざましかつたのは、シスリイたちも含め、来場の他の女奴隷たちを参加させた大競争だつた。

「みんな、これからレースに参加するーだ」

とモーチマは言い渡した。「いいか、お前たちには大した賭金がかけられているんだ。龜の子レースは眞ッ平だぞ。ベストをつくせ。この芝地を三度まわるんだ。決勝点はあの標柱。優勝者は、向う二十四時間は自由にやることになつとる。つまり、ふつうの人と同じに振舞えるんだ。負けたやつ、ビリになつた奴は、あの柱に縛りつけて二十辺ひっぱたく」

奴隷たちは恐怖に顔を見合わせた。しかし、一齊に前に飛び出そうとして身構えた。みんな髪を高く束ねていた。重なりあつて並んだ裸の女たちの眼は光つた。一等にならなくともよい、ビリになるまいと決意の色が見えた。

出発係のアスコットがさつと手をふつた。ぱつと駆けだす美



事な尻、尻、尻。

第一周。

第二周目には障害があつた。命令によつて、黒ん坊たちが何時の間にか細い綱を張つていた。ケイツとクララは、ピーンと足をさらわれて倒れた。その他の女たちも倒れた。倒れた女の上に他の女がたおれ、みだらな恰好に肉塊が重なり崩れ、見物人がどつと喝采した。

その六 生きてゐる壺

いよいよ富クジを抽く時間になった。モーチマは一枚五百ドルの券を八百枚も売っていた。大テントは人間で埋まつてしまつた。

中央に広い台が置いてあり、そのすぐ側に奴隷たちが並んだ。半裸体の黒人の女奴隷たちも混つていた。白を引き立たせるためのモーチマの悪智慧だつた。客席の前列に一人のヴェールをつけた白人の女がいて何かと世話をやいていた。イヴリンだつた。

誰も彼も、自分にクジが当たるような気がし、あの女にしようか、これにしようかと、独りで唾をのみこみながら奴隷たちを見較べた。勝手に欲望しては、女たちの、よく見えない肉体の隅々を推測して太い溜息をつき、やがて、そのどれかが自分のモノになつたときのことを想像して勝手に欲情した。その淫らな息がテントのなか一杯に立ちこめ、ますます一同を昂ぶらせ、がやがやわいわい、平素はつつしみぶかい連中までが上氣してお喋舌りになつていた。

おかしなもので。こうして眼の前に賞品を並べられ、当つた者が好きな女を選べとなると、しぜん、誰でも処女のクララが希望の焦点になり、いつの間にか、クララこそ当りクジの景品である、ということに決まつた空氣になつた。

クララは、ぎらぎらとかがやく何千という好色な視線を感じなんだか氣絶しそうになつた。

一人の、身なりはいいが、いかにも人相の悪い大男が、さつきからクララをしげしげと眺めていた。もし、あの男が主人に

なつたらどうだろうか。と彼女は不安になつて顔をそむけた。ニュウオルリアンズの有名な娼家の親父だつたのだ。

そのとき、うしろの人波をわけてチバーズが入つてきた。チャーチルも一緒だつた。二人とも前方にいるイヴリンに気がつかなくなつたが、ふとイヴリンはヴェール越しに二人を見とめた。はッと、彼女は立上つて、きッと二人をぬすみ見た。一瞬、そのからだはふるツとふるえたが、すぐに痴呆のように、石像のように動かなくなつた。人、人、魚のように犇きあつている群集の中の金色の髪。チャーチルだけが彼女の眼に灼きつけられくるくると頭の中で廻り、イヴリンは、人波に、空間に、くるくる駆けめぐる金色の塊を追つかけながら何ものかを探し、想い出そうと努めた。

三時が告げられた。ひとときわ群集はどよめいたが、やがて、モーチマが、ゆつくりと壇上に姿を現わすと、一瞬、水を打つたように静かになつた。

「エヘン」と彼は咳ばらいをして始めた。「今日は、かくも盛大な奴隷祭を催うさせていただき、心から厚く厚く御礼を申し上げます。それから、先般来の私の立案に熱心に御賛同、御援助下さいまして、これまた心から厚く厚く御礼を申し上げる次第でございます」と口上を述べ、すぐ近くの誰かに、「どうも改まつた挨拶は下手なもんで」と普通の調子で言つた。一同はどツと笑つて緊張が崩れたが、すぐに、モーチマは、嚴然と肩を怒らして切口上になつた。

「エヘン」と彼は續けた。「抽センは公平無私に行います。売

れた券の總数は七百七十四枚です。くり返して申しますが、当たった方は、ここに居る女たちのうち好きな者を一人進呈いたします。残った女はどうなるか？クジに外れた方はどうなるか？」

「そこだ！」

「その点だ！」

誰かが叫んだ。モーチマはニコリして續けた。

「残った女は、みなさんの御眼鏡に叶わなかつたことを恥じるでありましょうし、クジに外れた方は面白くありません。そこで、私は、大英断をもつて、思いきつて女どもを全部手放すことに決心しました」

わアと人々は沸いた。

「ただし、これはタダでは進呈できません。まず一等の方に好きな女を差上げ、次に二等のクジを引き、当たった方には金百ドル、たつた百ドルで残った女のうちから好きなものを進呈します。つまり、二等の人は、券が五百ドルですから合計六百ドルで別



嬪が一人もらえるわけ。同じようにして三等は百ドルの倍二百ドルで、四等はその倍四百ドル、とこういつた具合にして全部の女を進呈することに致しまアす」

わア、とまたも喚声があがつた。

「さて、」とモーチマは一同が静まるのを待つて胸を張つた。

「問題の抽せん方法ですが、これは次のようにします。つまり三人の女がこの台の上に並び、左から順に百位、十位、一位を表わすことにし、三人の女の身体にゼロから九までの数字を書いた小さな球を入れておきます。球は何処にあるかわかりませんが、とにかく下着と肌の間にありますから、諸君は御自由に彼女のからだをさぐつて取り出して下さい。いったん外へ出した球を決定的なものにし、一つしか取り出してはいけません。とんでもない場所に隠されているかも知れませんが、念を入れて、おたのしみながらクジを引いてもらいます。もし七百七十四以上の数字が出ましたら無効にしてやりなおします」

三ど目の叫びが大テントをゆるがした。

「ブラボー！ 俺に引かせろ！」

「わしが引き受けたぞ」

人々は口々に叫んだ。

「なるだけ大勢の方に引いてもらうようにします。ところで、その三人の女がまだ決まっていませんから、ただ今からそれを決めます。その決定は、そこにいらつしやるマダムにおまかせ致しましょう」という言葉に、人々は、今更のようにイヴリンに



気がついた。彼女は、あたりの喧噪も熱狂も耳に入らぬふうで、呆然と、氣拔したように腰かけていた。しかし、モーチマの言葉に、ふッと立上ると、ヴェールに顔をかくしたままキョトキョトと群集の上を見まわした。

とつぜん、彼女のからだはケイレンしたようにびくツとすると、ぐツと握りしめた手をワナワナとふるわせ、大罪人でも摘発するように腕をのぼし、人差指を突きつけた。人々の眼は、その指の方向にそそがれた。

そこには、美しいブロンドの女と、もじやもじやの頭をした男がいた。グラヂス・チャーチルとチバーズであつた。

「あと二人は？」

モーチマはイヴリンの顔をのぞいた。

彼女は、くると女奴隷たちのほうを向き、だまつてローレンスとケイトを指した。すると、二人の女は、だまつて合の上に登つた。そのひまにチバーズとグラヂスは、その場を遁れようと外へ出た。とたんにイヴリンが叫んだ。

「あの女を呼んで下さい。私が指命したのに背くのは許しません」

声に応じてアスコットが外へ駆けだした。庭の入口に向つて足早やに行く二人に追いついた。

「アスコット！」

二人の前に立ちふさがった彼にびつくりしてチパーズは声をあげた。

「チパーズ！」

アスコットも、これがあの男かと思われるくらい變りはてた瘦せこけて、熱病やみのように眼ばかりギョロギョロしている旧友を見て息をのんだ。

「アスコット、俺は君の謀略にかかつて、こんなになつてしまつた。だが、今ではこれが最愛の妻だ」

「チパーズ、あのときは俺が勝つたみたいだつたが、結果としては俺の負けさ。イヴリンは、君の名さえ忘れた女になつたんだ」

「なんだと？」

「発狂した」

「この悪党め！ みんな貴様のセイだ！」

「その報いを受けているんだ。だから、グラヂスを出してくれ。無事にお祭をすませてやつてくれよ」

「じゃ、チパーズはチャーチルにいつた。「お前、行つてやれよ」

「いえ、イヤです」

「俺の言うことをきくんだッ！」

チパーズは女に命令した。

やがて、彼女は、二人の女と並んで壇上に立つた。三人ともブロンド、一人は真赤なビロード、一人は青い縐子、一人はバ

ラ色の絹のドレスを着ていた。

しかし、誰が一等のクジを引くのか？ 誰しも、眼の前の金髪の女のからだをまさぐつて球を取りだしたかつた。われもわれもと台のところへ詰寄つた。収集がつかなくなつた。そして、とどのつまり、一等だけは全部イヴリンに引かすことで一同納得した。

やがて、イヴリンは、いちばん左に立つているローレンスに近づいた。そして、長い黒手袋をしている右手をブロンド女の胸に入れた。

人々は片唾をのんだ。

イヴリンは、意地悪そうにローレンスの胸を探つていたが、まもなく二本の指に番号玉をつまみ出して一同の前に差し出した。

「四番！」

モーチマが高らかに呼びあげた。

失望、希望、絶望の叫びと呻きがテントに満ちた。

いつの間にか花束で編まれた大きな『4』という字がローレンスの足もとに飾られた。

モーチマが合図をした。すると、イヴリンは、かわいいケイトに近より、彼女が羞しがるのを楽しむように胸やお尻のほうを探し、大膽にも両脚のあいだに手を入れると、息をのんで眺めている人々の前に一つの球を取り出した。

「八番！」

ケイトの前には『8』の字の花が飾られた。いよいよ決定的

な最後の数字！ 人々は、一切を忘れて熱狂してしまつた。イヴリンは、じろりとチャールを見つめた。そして、しずかに彼女に近づいた。

チャールは、それがイヴリンだとは気がつかなくつた。発狂して家に閉じこもっているくらいに思つていた。だが彼女が近づいてきたとき不思議なショックを受けた。なんだが氣味が悪くなつて逃げだしたい氣持だつた。このとき、さつきからイヴリンをじつと見ていたチパーズの顔色がさつと蒼くなつた。だが、その次の瞬間、もう氣狂い女の手はチャールの胸の間に胸をハダけ、それと知れる二つの盛り上つた乳房の間に入られていた。

「キヤッ！」

と一声、と同時にチャールが台の上に崩れるように倒れた。イヴリンの黒い手袋は赤く染まり、ふるえる指先に血にまみれた細い刃が光つていた。

誰も、いつたい、どうしたワケがわからなかつた。彼らは、ただ、呆然として台の上の美しい女、むき出しになつた片方の美事な乳房が見る間に赤く染まつていくのを眺めるだけだつた。チパーズが台の上に駆け上つた。イヴリンは、さつとヴェールをとつて彼の顔をにらんだ。そのとき、チャールの身体が一、二ど大きくケイレンしたかと思うと、それっきり動かなくなつた。

「番号を見せろ！」

群衆は喚いた。アスコットがイヴリンの手から血まみれの球

をもぎとつた。

「三番！」とモーチマが叫んだ。「四百八十三番が当りクジです」ひとしきり群衆はどよめいたが、誰も当りクジをふりかざして名乗り出る者がなかつた。

「一等は誰方です、当りクジを持つてゐる方は？」

モーチマは声をからして叫んだ。

「早く名乗り出て女を選んで下さらないと後のクジが出来ません」

とつぜん、台の上から、この世のものとも思われないうような無氣味な笑い声が起つた。

「ヒヒヒヒヒヒ」

それは笑つてゐるようでもあり、泣いてゐるようでもあつた。地獄の底から洩れてくる鬼の声かと思われた。

「ヒヒヒヒヒヒ」

あきらかに氣が狂つたと思へない笑聲を発しながら、あつち、チパーズは、しずかにピストルをアスコットに突きつけた。止めるヒマはなかつた。轟然一発、アスコットはチャールの死体の上に折重なつて倒れた。

「ヒヒヒヒヒヒ」

チパーズは、一枚の抽せん券を二つに破つて投げた。

それは四百八十三番だつた。

〔完〕

サ
チ
ズ
ム
ス
ト
オ
リ
ー

群

狼

白いパンティが投げ出された。蔽うものもなくなった真珠色の
若い裸體が、螢光燈の間接照明の中に匂うように浮き出されて、
太腿に喰いこむ赤いガーターが初々しくなまめかしい……

佐々木 恭

小田 明 男画



須美子はふと眼をあけた。暫くぼんやりしていた。何時の間にか眠っていたのに違いないのだ。

肩のあたりが冷めたくて、思はず衿をかき合せようとしたが、その手は胸のあたりをすべっただけで止つた。手がしびれたように痛んで、自由にはならなかつた。だが、それよりも、彼女をギョツとさせたのは、その手が何一つまとつていない、裸の胸にふれたことだつたかもしれない。

裸！ あたしは裸で寝ている……一瞬全身が硬直して、呼吸さえも止つたかと思はれた。それから、さまざまの出来事がドツと胸にあふれて、ビクビクとあらわな乳房のあたりが痙攣した。

あたしは眠っていたのだ。なんと云うことだろう、このいまわしい屈辱の床で……

しばらく、そのままの姿勢で荒い呼吸が続いた。そして遂に彼女の顔が動いた。恐る恐る自分の右側を見た。そして、やはり其処にあの岡部と云う男を見出したのだ。顴骨がとび出した額に、太い静脈を浮かべた、醜い初老の男を……

美しい表情をひきつらせて飛び起きた彼女を、彼は床の上に横たわつたまま、ジツとみ

つめていた。或は彼は一睡もせずに、この若く美しい犠牲者を、眺めつづけていたのかも知れない。

ベッドをすべり降りた彼女は、傍の椅子の上に、自分の衣類の一切、が投げ出されているのを見て、よろ／＼と近よつた。まだ足元がフラ／＼として、躰の節々がギクシヤクとこわばつてゐる。震える手でシュミーズをつけた。赤いワンピースの脇は、無惨に裂けてゐる。

ハンドバックをとり上げて、つまづくような足取りでドアに近づく須美子に、老人は声をかけるでもない。ただ乾いた視線を、やはり彼女の後姿に放つてゐるのだ。昨夜の、あの執拗で病的な狂態は跡形もない。今は何処か冷めたい、傲慢な老人の表情だつた。

須美子が玄関に出ると、無表情な老婢が現はれて、やはり黙つたまゝ彼女を送り出した。まつたく、昨夜の嵐のような叫喚に比べて、今朝のなんと云う静けさだろう。明け方の澄み切つた空気が彼女を包んだ。その冷めたい風に吹かれてゐると、須美子は改めて躰中がギシ／＼ときしむようで、色を失つた唇を噛みしめていた。

駅につくと、丁度始発の国電が出る処だつ

た。ガランとした車内でハンドバックを持ち直した時、ふとそれをあけてみる氣になつたのだ。

ムキ出しの千円札の束が、乱暴に押込んであつた。それは凡そ二、三万円はあるだろう。予期しないことではなかつたのだ。急に二つ三つも老けた表情が、それを凝視した。そして、今はあらゆる悪徳を代表すると思はれるその札束の上に、涙がしたたり落ちるのだつた。

須美子は窓にもたれて、疲れた眼を閉じた。札束を見た瞬間の感情は、激しい怒りだつた。しかしその怒りは、あまりにも迂闊だつた自分自身にも向けられていた。すべては見事に仕組まれた罠だつたのだ。

須美子はまるで一昔も前の思出のように、昨日までの自分をふりかへつた。

須美子が橋書房に入社したのは、つい二、三日前のことでしかない。新聞の三行広告を頼りに、なんとなくガサついた感じの、埃っぽい街を尋ね歩いた。

やつとその橋書房を捜し出した時、彼女はひどい失望を感じた。漸く尋ね当てたその橋書房なるものが、実にチャチな、薄汚れた二階建の、その二階の一室らしいと判つたのだ

から、ガタンと拍子抜けがしてしまつたのである。

階段はひどく汚れて、煙草の灰や痰などが気味悪く、須美子はます／＼躊躇を覚えたが、突当りのドアは明いていて、その時、声高な話声がピタリと止んだ。

「あの、新聞で、女子事務員募集の広告を見て……」

「オッ、さあどうぞ、お入りなさい」

それが大変響きのいい調子だつたので、彼女はホッとしながら部屋に入つたが、しかしすすめられた椅子に坐る前に、やはりガツカリしてしまつた。

男は三人だが、誰が上役やら一向見当がつかない。三人とも非常に若い様子だし、それに品がいい人種でないことは、須美子にさえもピンと来たのだ。机が二つ、あとは椅子と、申訳のような書棚、隅の方になにやら薄い廉価本らしいものが積重ねてはあるのだけれど、これが一体出版社なのだろうか——。橘書房と云ふ名で彼女が想像していた雰囲気とは大違ひだつたのである。

とにかく型通り履歴書を出したが、その三人がのぞき込んでいる様子を盗み見ると、彼女はこれは、たとえ先方が採用すると云つて

も……と、二の足を踏んでいた。世間知らずの彼女にも、これが真面目な出版業を営む会社とは思えなかつた。

「××学院をこの春出たのですね？」

「はい」

「編輯の経験はないようですが、まあだんだん覚えて貰えばいいでしょう。——ところで御家族は幾人？」

「父は亡くなりまして、母と弟の三人暮しでございます」

「ホホウ、すると、貴女の責任は相当重いわけですね？」

なんとなくネチネチする彼等の質問と、視線の前に身を晒していることが、須美子には非常に苦痛だつた。就職も大問題だけれど、若く潔癖な彼女の神経が、とうてい耐え得る職場ではなかつた。須美子はうつむいて、膝の上のハンドバッグを握りしめた。その男たちは相変らずジロジロと彼女の様子を見守りながら、何か短く囁き合っているらしい。

須美子は何か屈辱に似た感情を覚えて唇を噛んだ。

御父様さえ生きていらしたなら！　こんな愚痴に似た思ひが胸をかすめるのだ。

「ええつと、それでは志村さん、今迄にずい

分応募者がありました。貴女を採用することになりましたから……」

やはり断られるよりは気持がよかつた。とにかく一応採用と決定すれば、家に帰つてよく考えた上で、嫌なら出社を見合せばいいのだ。

「ところでサラリーの件ですが、貴女の方で御希望がありますか？」

須美子は曖昧に微笑した。父の存世中とは違つて、今ではすっかり生活に追いつめられてはいたけれど、そうした給与の額などをあからさまに口に出すのは、やはり彼女のプライドが許さなかつた。

しかし、今まで黙っていた面長の男が、そんな彼女の態度に押しかぶせるように口を出した。

「どうです、一万円ぐらいで？」

一万円！　その数字を頭の中で反芻した瞬間、須美子の表情がパツと上気した。学校を出たばかりで、これと云つた技術もない彼女にとつては、思ひがけない高給だつたのだ。「それでは、明日から早速出社して貰います。貴女もいろいろ支度もあるでしょうから今月の給料を先渡ししましょう」

言葉と一緒に、至つて気軽にふくらんだ封

筒が須美子の眼の前に置かれた。それがあまり無難作なので、彼女は半ば呆然としてそれをみつめた。——だから、そんな彼女の様子を、三方から見守っている、男たちの瞳の色に気がつく筈はなかつたのだ——。

翌朝、定刻にはもう須美子は出社していた。赤味の勝つたワインレッドのジャージのワンピースが、色白の須美子の美貌を品よく引立てている。昨日の一万円は、文字通り彼女の支度金になつたのだ。残りの三、四千元ばかりは母に渡した。

その時の、如何にも嬉しそうな母の表情を見た時、彼女はハッキリこの橘書房に勤める決心をしたのだ。会社自体がどんなにいかかわしいのであつても、今の彼女にとって、一万円のサラリーは魅力以上のものだった。

出社はしたものの、乱雑な机の廻りを片ずけると、他には仕事らしい仕事もなく、彼女はひどく手持無沙汰だった。紹介された社員は、細面の何処か冷酷な印象が残る村瀬、ツングリした樋口、それから、背広の下にまるで船員のような縞のジャケツを着ている、伴の三人だけだった。

彼等も別段仕事をするでもなく、部屋からなんとなく出たり入ったりする。樋口や伴の

会話のはしばしには、教養らしいもののカケラもなく、須美子は居心地の悪い想ひで、机の上に顔を伏せていた。三人の中では年長らしい村瀬が、そんな彼女の当惑を見透したような眼でかすかに笑っているのだ。

晩秋の五時はもう殆ど暮れて自動車の窓にネオンの灯がキラキラと流れて行った。須美子はなんとなく不安を覚えながら自動車の動揺の中で軀を固くしていた。



「社の出資社でね、まあ実質的には社長なんだが、君も、一度挨拶に行つた方がいいから……」

そう誘われれば、須美子には断る理由はなかつたのだ。

世田ヶ谷の、三軒茶屋の辺りを走つてから暗い住宅街を通り抜けて、車はある邸宅の前にピタリと止つた。

凝つた洋館だが、なんだか陰気な感じで、人氣がないように静まつている。だが村瀬たちに導かれて、彼女がその部屋に入つた時、正面のマントルピースに、季節にはちよつと早い火が、赤々と燃えていた。

その横の腕椅子に、厚いガウンを纏つた、氣むづかしそうな老人がゆつたりと坐つてゐる。その老紳士は、射るように須美子を見つめた。彼が、村瀬たちの云う出資者、岡部老人だつたのである。

「いかがです、社長？」

「うむ……、二十、いや、十九ぐらいかな……」

痰がからまつたような低い声で咳きながらその執拗で病的な眼ざしが、まだ須美子の姿態から離れないのだ。

村瀬たち三人は、戸棚から二、三本の酒樽

をとり出すと、乱暴な調子で、立つたままグラスをあほつてゐる。酔は、急速に若い身内をかけめぐらしかつた。

居たたまれない氣持で、須美子が椅子から立ち上つた時、樋口がパンと岡手を叩き合せて叫んだ。

「さあ、それじゃあ一つ始めようや！」

それから上衣を脱いで、長椅子の上に放り投げた。またグラスを満たしながら、村瀬が云つた。

「そう慌てるなつてんだ」

「だけどさ、今度のは飛切り上玉だから、早く拜みなくなるつてもんだ。善は急げさ。ねえ、社長？」

その樋口の方は振向きもせず、老人は度を失つたように立つてゐる須美子を、飽かず眺めつづけているのだ。唯、何かの合図のよう、もの憂く右手を動かした。

「志村さん、さあ社長に余興を御覽に入れるんだ！」

「判らねえお嬢さんだな、裸になれつて云つてゐるんだ！」

「えつ！ なんですつて!?」

「面倒臭いな、剃いちやえよ」

悲鳴と同時に、須美子の赤い巾広のベルト

に、無骨な手がかかつていた。叫びながら、彼女の躰が男たちの間で、揉まれようにゆれた。その足元に赤いベルトが落ちる。ワンピースの下から、むき玉子のように、白い下着が現はれる。シユミーズの紐が、音を立てて切れた。

「ほら、思つた通りだ。こいつは凄いや！」

「社長、こりやあ、特賞もんですな」

男たちの、みだらな視線に晒されながら、須美子はもはや氣が顛倒して、立つてはいられなかつた。

肌についてゐるものと云つたら、ナイロンの靴下と、チュール入りのパンタイだけ……。震える手が乳房を蔽つてうづくまつたが、その掌にもあまつて、健康に盛り上つた隆起が大きく波打つてゐる。清純に過ぎて来た、二十の青春なのだ。

「さあ、せいぜいいい声を聞かせて貰おうか。遠慮はいらないぜ」

「オツと、その役は俺に任せて貰おう」

伴の手にあるのが、鎖だと氣がついて、須美子は叫びながら後ずさりしたが、それは男たちの眼をたのしませるばかりだつた。縞のジャケツを着た伴はニタニタしながら、ゆつくりと彼女の後を追つてくる。

彼女は必死に逃げながらドアに飛びついたが、それはビクとも動かない。彼女は絶望的な気持でそれを激しく叩き続けた。

「無駄だよ。此処はちよいとばかり変ったお邸だからね、誰も来るもんか……」

冷めたい鎖の感觸が、ヒヤリと乳の上を走った。二重、三重とそれは冷めたく胸をしめつける。同時に云ひようのない恐怖が、頭のしんをつらぬいた。後に廻された手が、そのまま一寸も動かないのだ。

横倒しになつた彼女は、床の上をグイグイと引きずり廻される。彼女を縛つた鎖が、ギンギンと音を立ててきしむ、それからグイと躰が浮いた。何時の間にか、回転窓の上から反対側の書棚の上に鉄の棒が渡してあり、須美子は軽々とその中間に釣り下げられていたのである。

つま先が僅かに床につくばかりで、白い裸が不安定にユラユラゆれる。須美子は眼を明けて、正面にマントルピースの火を見た。すぐ前に岡部老人のギラギラと熱を及びた眼がまつすぐ、彼女の腹部のあたりにそそがれている。

「どうだいお嬢さん？　ところでこいつはやつぱり邪魔つけたから、とらして貰うぜ」

悲鳴と身もたえ、……しかし、そのなんと無力なことか——。花瓣をむしられるように、白いパンティが投げ出された。蔽うもののなくなつた真珠色の若い裸体が、螢光燈の間接照明の中に匂うように浮き出ている。太腿に喰いこむような赤いガーターが、如何にも初々しくなまめかしい。

「こいつは見事なもんだな。おい、もつと社長にごらんに入れろよ」

身をねじらせながら、必死に両足をびたりと合はせて、やつとつま先立ちになつて、いる彼女の両足にグイを手がかかった。男たちが両側から、足をグイと左右に引っぱるのだ。

呻きながら、須美子の顔が恐ろしくゆがんだ。羞恥にさつと顔が染り、やがて再び蒼白に戻る。ゆるく波を打つた長い髪が、喘ぐ肩に乱れ、額にもベツトリ貼りついている。

男たちは調子をつけて、まるでブランコのように前後にゆする。はづみがついて、前方にゆられる時、須美子の下腹部は、腕椅子に坐つたまま動かない老人の、顔にぶつからんばかりの勢ひでつき出される。老人はそれを避けようともせず、氷のような視線が一箇所に釘づけされている。丁度彼の眼の高さの

ところ……。

須美子のぼんやり霞んで来た意識の中に、村瀬の憎々しい声が聞えた。

「どうです社長、よく見て下さいよ、正真正銘の娘らしいですぜ」

前方に下半身をつき出されたまま、両足を持つた男たちの手で、彼女の躰は暫く静止した。老人の顔から三寸と離れていない。彼はやはり動かなかつたが、腕椅子をつかんだ手の甲と、汗がにじんだ額に、みるみる靜脈が太くふくらんで走つた。

ブランコがすむと、破廉恥な男たちの手で鞭が鳴り、足枷、首枷の乾いた音が、小止みなく響いた。白い須美子の裸体がバラ色に上気して、油汗が全身を濡らす。彼女の心身はもう、あまりに無法なこの虐行に耐えられなくなつてゐる。そのギリギリの限度で、夢うつつに呻いていた。

しかし、そんな夢心地の中で、須美子は狂暴な若い三人の男たちの力よりも、身じろぎもせずに坐つたまま自分を凝視している、岡部老人の病的な眼を怖れた。

それから暫く経つて、彼女は儂い抵抗を繰返しながら、老人の双脚が義足であることを知つたのだ。



母や弟の手前は、気丈に何気なく云ひつくろつた。屈辱に身を震わせて帰つては来たものゝ、今度の勤めを喜んでゐる肉親たらを見ると、橘書房を辞めるとは云ひ出せなかつたのだ。それに、一日狭い家の中で母と顔をつき合はせてゐるのも苦痛で、翌日からやはり彼女は勤めを装つて家を出た。一日中あてもなく街を歩いて、夕刻に帰つてくる。公園のベンチに坐つて暖かい陽ざしを浴びてゐると、又しても悪夢のようないまわしい影像が浮び上る。それは縛り上げられて自由を失つた、あられもないあの時の自分の姿なのだ。それと一緒に岡部の乾いた手や、冷めたい義足の感触さえもよみがえる。そ

れは今でさえも虫のように、彼女の全身をムズ／＼と這ひづり廻るのだ。

そうした空虚な日が三日つゞいた。須美子はその朝何時ものように出勤を装つて出かけようとする、門の処で一通の封書を受取つた。無記名のその封筒を握つたまゝ、彼女は追いつめられた表情になつた。

薄い便箋に品のない字で、要領の悪い文章が並べてある。だが、意味するところは明白だつた。「入社勿々無断缺勤は困る。前借もさせてあることだし、この書面を見ても尙出社の意志がなければ、此方から訪問して、家族に金の返済を迫ることにする。云々——」

その午後、須美子は疲れた表情で、再び橘書房の、汚れた階段を上つた。半ばは自暴自棄の、捨鉢な氣持だつたが、なにより彼女は肉親に真相が暴露されることを恐れた。そんなことになるくらいなら死んだ方がいゝとさえ彼女は思ひつめていた。不如意勝ちな生活ではあつたけれど、見栄にも似た彼女の潔癖は失はれてゐなかつたのだ。

黙つて戸口に立つた須美子を見ると、一人でパイプをくわえていた村瀬はニヤリと笑つた。

「やあお嬢さん、よく出て来たな」

憤怒で彼女は蒼ざめていた、激しい言葉が咽喉もとまでこみ上げていたけれど、唇はわななくばかりで、言葉にはならないのだ。
「まあ掛けなさい。一つゆつくり喋ろうじやないか」

「……………」

「なにしろね、あの岡崎の因業爺さんと来たら、あれから、毎日君をよこしてくれつて、大変な御執心なんだ。まったく弱つてたところさ」

「わ、わたしを、ど、どうなさるんです…」

「どうもしやしないさ。ただ、あの爺さんの御気嫌をとつて貰えばいいんだ。阿足がない癖に、因果なことには大した色気狂ひでね。

それでも爺さんだから、普通じや駄目なんだ。女を裸にしてさんざ虐めてさ、それでやつと一人前になると云うわけさ。俺たちはなんのことはない。金で買われて、爺いの助平心を掻き立てているようなもんさ」

「悪魔!!」

「冗談じやねえ、俺はただ金が欲しいだけさ。あの爺さんは大した金満家で、女と寝るためなら、いくらでも金を出すからね。お前さんもしこたま金を貰つた癖に、まさかあれつきりで、つき合はねえつもりじやないだらうね」

「うね」

喋りながら、村瀬はジリジリと動いて、ドアの前に来ると後手に音をさせて鍵をかけた。

「なにをするの、帰えして!」

「ふん、もう遅いよ。まったくお前は、怒つたところも悪くねえな」

「離して!」

「冗談じやねえ、昨夜はさんざ見せられた揚句、俺達は指をくわえて引下つたんだ、又夜になつたら、爺さんにいい様にされる。その前に、俺だつておこぼれぐらい頂いても、罰は当らねえだらうさ」

グイグイと長身の村瀬に押つけられて、須美子は汚れた壁ぎわに追ひつめられると、無意識に傍の花瓶をつかんだ。力の限り投げたそれは、しかし狙つた窓硝子をそれで書棚に当つて碎け散つた。

「ふん、味なことをするじやないか——」

グイと肩をつかまれて、椅子の上にドシンとつき飛ばされる。何時の間に手に持つていたのか、村瀬は器用に麻縄を捌いた。椅子にくくりつけようと云うのだ——。

「か、かんになして!」

「フフフフ、まあ大人しくしてるんだな」

荒々しく、下半身がむき出しにされた。その除かれた下着が、そのまま口に押込まれる。須美子は顔をふつて避けようとしたが、その首にも縄がかけられて、椅子の背に固定される。

キレ長い大きな眼が、破れるほど見開かれて、迫ってくる村瀬を迎えた。それにみるみる涙が溢れて、やがて力なく閉じられた。

「ふん、痛い真似はしたくないんだがね。俺もどうやらあの爺さんにカブレちまつて、こんなむごいことが、面白くて仕様がないうさ。どうせ今夜も、あの邸に行けば始るんだ。まあ小手調べのつもりでつき合つて貰うさ」

「人でなし!!」

それは、猿ぐつわの咽喉の奥が、かすかにひきつただけ……。

須美子は渾身の力をふりしぼつて、身もだえした。だが、かえつていけなかつた。椅子ごと、ドタリとひっくりかえつた。椅子の足と、縛られた足首が宙に突き出ている。無残なほどにも卑猥なポーズだつた。

「よう、お嬢さん、えらいサービスだね」
須美子の血は逆流していた。

(おはり)



江戸の禪・上方の禪

「エツサツサ、ドツコイサノサ」
と紀州御用の三度飛脚（月に三度、その地を往復するからの謂）が、大阪あとに南へさして発足して行つた。
野を、原を、林を、森を、峠を、山を。
と——俄に目の前が真暗に、何とも云へな

ぐろてすく藝談・第五回

落語糞尿譚

今回はまた趣を變えてグロテスク落語の数々……初冬のうすら寒さを吹飛ばすノンビリとしたお笑い……

正岡 容

濱田 稔 画

い腥い風が吹きそめて来た。

しかし、飛脚は一向に怯むいろなく、エツサエツサと尙もすツ飛んで行くうち、今度は行く手に明るい日の目が見えそめ、やがて小春の暖いみかん島へ、無事にどうやら辿り付き得た。

無事に、と云つたのは、いまの真暗な腥い一角、切通しでも洞穴でもなく、じつは大きな蛇のお腹のなかへ飛脚先生、口から飛び込み、お尻から飛出して行つてしまつたのだつたからである。そうと気が付いた蟒が、「しまつた。そんなら禪をしてあげばよかった」

上方落語の「うはばみ飛脚」で、「エツサツサ」と飛脚が走りだすたんびに、「韋駄天」と云う派手やかな鳴物が奏でられるのだが、大阪にはこのような尾籠と淫卑の落語は、殆んど枚挙に暇がない。

全く卅年以前の上方の寄席では、音曲までがおよそ尾籠で、いつかもちいたが、橋の上から散便をすると、泳いでいる魚は玉子とちに等しいと云つた風な、およそ言語同断な都々逸さへが、平気で歌はれていた。そののち余程肅正されたが、戦後は歓迎されまた再び昔時の猥雑さを取戻しているらしい。

江戸の落語の禪では、先づ「万病円」を挙げねばなるまい。

勤番侍が銭湯の湯槽のなかで禪を洗ふので、客は怒つて番台に掛合ひ、みなみな湯銭を返して貰つて行く。

そこで今度は番台が、

「もし困りますネお武家さま、そんな不潔いものをお洗ひになつては」と侍に掛合ふと、

「どうして不潔い」

「でも、前のものを包みますから、不潔うございますよ」

「フーム成程。然らば訊ねるが、その方のところでは客の前ものを一々台へ預るか」

「御冗談仰言つちやいけません。あれは取外しのなりませんもので」

「その前のものを湯のなかへ入れるのが差支へなくて、單にそれを包んだ丈けのものを、洗ふのが何で悪い」

「……………」

「不屈な奴だ、湯銭を返せ」

「フふざけちやいけません」

と云ふのであるが、いまでは何と云つて

も古今亭志ん生君のが極め附。

志ん生君と云へば、そのお師匠さんたる先代志ん生はよくまくらで、江戸と上方の言葉の称への相違を述べて、箆をいかき、火消をがえん、梯子をノンポリクンダリ、などと紹介したのち、

「禪をヘコシと申しますそうで。成程、へは越しますがフンは越しませんやうで。いや汚いお話で恐入ります」

と云ひ云ひしたものだつたが。

しかしこれは東西の対立いと烈しかった時代の昔の江戸つ子の、殊更なる上方人への悪謔だつたと見ていい。だつて、大正大震災以前、西下した私だつたが、彼地の古老に質してもノンポリクンダリだの、ヘコシだのなんてそんな市井語は全然なかつたもの——！

『四 宿の屁』

いまのヘコシから自然に放屁の落語におもひ至るならば、大人国の放屁者を、ドロドロと云ふ大太鼓で表現する上方ばなしの「島めぐり」は、圧巻だろう。

「てんしき（転失気）」は、病中の住職を診察に來た医者が、

「御住持、近ごろてんしきはおありか」

と放屁の有無を訊ねると、この和尚、てんしきの意味が分らないところから展開されるまちがひの滑稽であるが、先年、てんしきとは放屁そのものではなく、下腹部がどうとやられた状態を云ふのだと大真面目に説いている江戸中世の隨筆雜記のたぐひを一読したことがあつた。「新燕石十種」だつたか、「日本隨筆大成」だつたか、俄に身辺の蔵書を引くり返して、引用す可くいま日時のないことを憾みとする。

放屁癖のある母親が、他家を訪問にさいし、わが子を伴い、

「坊や、けふは××さんへ連れてつて上げるけど、もしお母ちゃんがお屁をしたらお前を叱るから、さうしたらお前が粗相をしたやうにあやまつてお呉れネ、その代り五十錢づつ上げるから」

とかう云ふ約束で先方へ行つた母子だつたが、さて先方で挨拶をするかしないかに母親ははや放屁するので、慌てて烈しく子供を叱ると、

「御免よ阿母さん！」

素直に子供はあやまつたが、とたんにまたまた母親が放屁するので、

「忌だよ阿母さん、二つで五十銭ぢやあ」

同巧異曲の作品ながら、次の噺の方が一段といい。

さる場末の廓で、客の前で放屁した禿を花魁が叱り、

「何だねえお座敷でそんな失礼な。そつちへ行つておいで」

と叱つたとたん、花魁自身が取落したので、

「お待ちよ、私も一しよに行く」

そもそもこの咄、「四宿の屁」と云ふ放屁の小咄シリーズのなかの一つなので、四宿とは品川、新宿（当時は内藤新宿と称へた）千住、板橋—つまり江戸の出入り口であるが、

「場末よりは余程賑かであつた」

と三田村鳶魚翁も、「大東京の話」で述べてゐられるやう、それらの宿駅にはいづ

れも甘酸っぱく廓の灯がさざめいてゐた。

それにしても、それらの廓をバックにした放屁の小咄を、一つ一つ克明に創作しては微笑んでゐた、そのかみの落語作者の、なんとおほどかにもうれしくバカバカしいことよ。

殊に品川の巻などは、風情があつて、なかなかいい。

品川の女郎、客前で放屁したのですぐに障子を開け、

「ごらんないさいよあの帆かけ舟」

云つたらお客、

「いま匂つたのは肥船か」

まことに古川柳の、

入船を見たと初会の客に云ひ

品川は膳の向ふに安房上総

の景情を宛らではないか。

翠聲のお祖父さん

放屁につづくとなると、今度は当然肛門の落語だらう。これは「義眼」。

遊里でモテず、拠所なく廊下トンビをして隣りの部屋へ入り、屏風の外にだしてあつたコップの水を飲干してから気が付いて慌てて引上げるが、さあどうも翌日から腹工合よろしからず。

こりやそのわけで、コップのなかには隣室の客の入れ目が漬けてあり、それをそつくり水諸共飲んでしまつたからだつた。

困つて懇意のお医者に診て貰ふと、トドどうもお尻にちかい辺がをかしいからとて遠眼鏡を差しあてて肛門の内部を覗くと、

「キヤーツ！」

と叫んで、眼鏡を抛りだし、医者は真青に逃出した。

「オーイオーイ先生一体どうしたんで」

愕いて男が訊ねたら、

「なかを覗いたら、誰かこつちを見ていたよ！」

作者は、先々代五明樓玉輔。

下岡蓮杖らによつて写真術がわが国に普及したところ、一枚の写真を手がかりに渡米中父を殺された息子が、見シ事復讐を

すると云ふ明治開化の長編人情噺「写真の仇討」は、この玉輔の自作自演であるが、そのやうに一応の文字があり、文才があつて、この老匠のお孫さんが、なんと「陽気な喫茶店」おなじみの松井翠声君。

放尿抄

人いきれの角力場で、便所へ立てなくなつた男が、傍らを見るとしきりに声援してゐる酔どれの飲干した一升瓶があるので、早速、それへ用を達す。

そのうち我に返つた酔どれは、空にしたはずの一升瓶の、いつしかまた一杯になつてゐるのに気が付き、てつきりお替りが届けられたのだと許り嬉んで飲まうとする諧謔は、例の「癡り角力」の一席であるが、なればこそこの落語、

なづけて楽屋では又の名を「小便徳利」。

事変以前に、ある落語家が、一升瓶へ放尿している男がふとヒヨンなことをおもひ

だし、たうとう瓶の口から抜けなくなると云ふ斬新奇抜な演出をして、ヤンヤの大喝采を

書をとられたなど、とんだ笑へないお茶番も、いまはなつかしいおもひである。



桂文楽十八番の「しびん」。
田舎侍ではあるが、花の一つも活けようという風流気のある江戸詰の武士が、古道具屋の店先にでてゐた尿瓶を花活けと許りおもつて珍しがり、しきりに値を訊くので、つい主人も悪戯半分、五両と吹ッかけて売つてしまふ。

嬉んで宿へ持ちかへつた侍は早速にそれへ花を活け、床の間へ飾つてホクホク眺めてゐると、折柄、やつて来た馴染の貸本屋が、
「旦那様失礼ながらそれは花活けではなくて、尿瓶で」

と教へるので、烈火のごとく憤つた侍は大刀片手に裸足で飛出し、
「下道具屋それへ直れ、真ツ二つだ」と刀の柄へ手を掛ける。

博したまではよかつたが、偶々当夜のお客のなかにまじつて某々署の私服刑事あり、翌る日早速に署へ呼出されて、大目玉の上、始末

いろを失つた道具屋は、母親が永年の病氣のため、つい五両はしさの出来心でと、いろいろ口から出任せの詭言をして、漸く

に許して貰ふ。侍のかへつたあと、隣りの家の主人が感心して、
「流石にお侍だ。よく五両返せと云はなかつたネ」

云ふと古道具屋、

「当り前だ、根がしびんだもの、小便（註）——ひやかしのこと）はできねえや」

そもそものが上方の落語で、先代桂文団治（ぶんだんぢ）から師父三世三遊亭円馬（えんば）（先代）へ、さらに文楽君へと継承されたものであるが、ところが原作はこの落ではなく、極めて淡彩のエロで、しかもその方がなかなかの風流である。
それは、道具屋が八方陳謝して互ひに笑



絵

ひ合つたとき、

「では旦那さま、お詫のお印に、これはいかがでございませうか。いえ、今度は正身正銘のお花活けで」

と頭上に架けられてある薬研型（やくけんがた）の花活けを指すと、振仰いで見た侍が、

「アアイヤ、家内（かない）のは要らん」

今日の人たちには全く分らないが、当時の婦人用の尿瓶は、とんとこの薬研型の花瓶に形がそっくりだった由。

マさうと知つてから、もう一ぺん両者の「落」を味ひ比べて頂度い。優劣は自ら明らかであるが、時世風俗の推移変遷は矢よりも速く、いまは全くに後者の通用しないのも餘方あるまい。

もう一つ、五代目の小さん君のあの涼しい目が、嬉しくかがやく妙技の一つに、「禁酒番屋」がある。

さる藩で酒狂の侍二人が、果し合ひをして、共に仆れたので、殿さまからお布（ふ）れがでて、以来は藩中へ酒を持込むこと一切まかりな

らぬ。

さあ、おどろいたのは酒党の面々で、なにかにもひとりの酒好きの武士は、何とかわが邸へ一升運ばせて寝酒を楽しまむものと、馴染の酒屋へ頼み込む。で、酒屋の若い衆、一計を案じて、菓子屋の半纏を着、菓子折二つへ五合瓶を詰め、水カステラだと偽つて、検閲所たる番所の前を通過しようとするが、

「あの、ここな偽り者め」

と事もなく見破られ、役人二人に瓶は取上げられて、飲まれてしまふ。

次は手を油だらけに、油徳利へ酒を詰めて油と称し、別の若い衆がやつて来たが、これまた、

「あの、ここな偽り者め」

と見破られ、また忽ち飲まれてしまふ。

口惜しがった酒屋の若い衆たち、今度は店の誰彼に一升徳利へ放尿させ、

「ヘイ小便でございます」

と番所役人の目の前へ突出す。

最前からの没収した酒で、もはや大ペロペロの役人二人は、頭（めづ）からそんな小便だなどとは信じる由もなく、



「偽り者めが、小便など何を申す」
と徳利を引寄せ、一と口飲んで吃驚仰天、
「ウーム、あの、ここな正直者めが！」

で鯉（肥）が入つてゐた

志ん生君も演るが、私は三笑亭可楽君の古

花が咲きそろ黄金の花が

兄貴分の新宅祝ひへの届け物に
困つた銭なしの二人があらうこと
があるまいことか古道具屋の店先
に転がつてゐた雪隠の糞壺をよウ
く洗つて担ぎ込む。

大そう飲んだ兄貴は、ソレ胡瓜
もみだの、ヤレ菜の浸しだのと江
戸つ子らしいあつさりした酒の肴
を並べて飲んで行けとすすめるが
そのたんび二人は自分たちが担ぎ
込んで来た壺で洗はれた料理と知
つて、尻込みをする。

不愼におもつた兄貴が立上がつ
て行つて壺のなかを覗込み、
「ヤ、ひどい殿（おり——汚れ）
だ。今度来るとき、鮎を一尾飼つ
て来て呉れ。殿がなくなるから」

「兄貴、鮎にや及ばねえ、いまま

で鯉（肥）が入つてゐた

道具屋の親父が忌に二人を見くびつて、木
で鼻をくくつたやうな返事をする辺りを妙
とし度い。胡瓜揉みだの、菜の浸しだのと
夏未だ老いぬころの市井の季節が、話中し
きりに感じられて来るのも嬉しい。

題は、「肥がめ」。

昔は、悪く念の入つた趣向を凝らして吉
原へ遊びに繰込む手合が少くなかつた。

これも亦その一つで、一座のなかから就
眠中脱糞の病癖ある男を予めこしらへ、粟
餅を人糞そつくりの形に捻つたのを、用意
して行つて秘かにその男の床のなかへ入れ
ておく。

やがて花魁が来てアレーツと大騒ぎとな
りこれも予め馴合ひ喧嘩の、

「恥ッ曝しな。ヤイ何だつてあんな者を連
れて来やがつたんだ。糞でも喰へ」

と云ふと、相手が、

「オオ喰ふとも。喰はなくつてよ」

とムシヤムシヤ粟餅をやりだすので、

「マーお止しッたら汚い汚い」

と花魁が泣きかけると、

「花魁、安心しねえ。垂れねえうちにちや

んとお初はあすこの神棚へ上げておいた」

故人三語樓がよく演った「栗餅の女郎買」であるが、ティマがティマ丈けに、あくまで老練枯淡に表現しないと、江戸末期の遊冶郎らしい悪洒落が活きて来ない。おしまひに「勘定板」。

廁で用を達すことを「勘定をする」と称へる田舎者が上京投宿して、翌朝、番頭に勘定をするものをたのむと云ふので、てつきり会計のことだとおもひ、算盤を差出すと、すぐ裏返しにし前を捲つて用を達さうとするので、

「ナ何をなさいます」

と番頭、手で強く算盤を押したら、ツツと動いて滑りだした。

田舎者、感心して、

「流石に江戸の勘定板だ、車仕掛になつてゐる」

この落語、ここであう終ればいと輕妙な一席なのだが、この算盤へ脱糞させる演出

ありさらに脱糞と放尿とを共にさせ、その尿水が階下で食事の奉公人の頭上へ落ちて来るギャグが頃日歿つた上方の桂春団治にはあり、柳は緑花はくれない。実に実に世はさまざま人もさまざまと云はねばならない。

さて宴席でも話題が下がれば、もうそれで夜も更けわたり、そぞろに市が栄えるとやら。

おかげで半才にわたつた「ぐろてすく芸談」も一と先づここで幕を閉ぢ、新春永日、題を新に若水を硯に汲んで、また見えよう。

ハイ誰方も随分佳い年をお取りなされませ！

—終—

愛 読 者 通 信

小生風俗草紙の大ファンです。四、五年前から貴に興味を持ちましたが、内気でどうにもなりません。一度女性を、自分の前で縛つて見たいのですが、相手がありません。滋賀県の方で、僕の欲求に応じて下さる女の方がおられましたら御知らせ下さい。誌上御連絡を御まします。(滋賀 K W)

原稿募集

★経験談・告白・手記

(四百字十枚から十五枚以内)

誰でも自分だけの奇妙な秘密な経験をつや二つ持つてゐるものです。殊にアブ党諸兄ともなれば、一寸知人友人には話せないが、といつて自分だけの胸にしまつてをくのは惜しい、といった話があるに違いないと思います。どんなお話でも結構です。御申込の秘密は厳守しますから安心して御投稿下さい。

★アブ・ストオリー・小説

(四百字二十枚から二十五枚以内)

アブ・ストオリーとは前記の異常な体験談などを、やゝ小説風・物語風にまとめたものです。

★掲載分には一枚壹百円から貳百円の間で稿料を呈します。但し原稿の返却はお断り致します。

送り先は

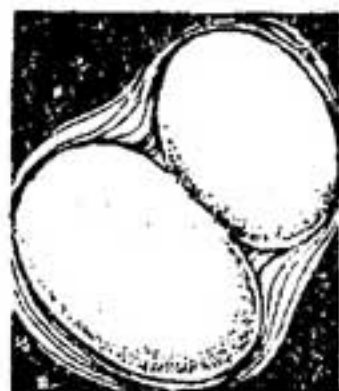
東京都千代田区神田

神保町二の三四

日本特集出版社編集部

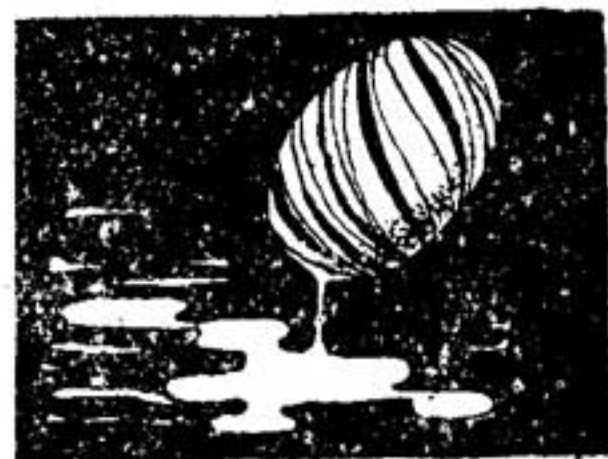
異常性愛の醫學

男色は治癒できるか



明確に云えることは、私の知る被動的ソドミアの殆んどすべてが、女性との戀慕の經驗をすこしもつていないことである。そうして、たゞ男性の魅力にのみ憑かれている――

鹿火屋一彦



(1)

戦前も大分以前のことである。そのころ私は、本誌によく執筆される伊藤晴雨氏や正岡容氏も多分ご存知であろうところの古い性ジャーナリスト秋山尙男老主宰する一雑誌に、若輩おぞましくも「性教育読本」なるものを連載していたのであるが、その中の「同性愛篇」を読んで相談に来たという一青年の訪問を或る朝受けた。

会見して話をきいてみるに、明かに被動的ソドミア、すなわちウールニングなのであ

る。その男色歴や相手との情交のテクニックなどかなり奇異で記すに足るべきものなのだが、それは本課題とは関係のないことなので省略して、さて、彼は話の最後に、
「この病氣は治るものなのでしょうか。一つ先生に身体を診ていただきたいのですが」
と今にも着ている物を脱ぎそうな風である。

私はあわてて、自分は医者ではないからそんなことは無益だことわり、若し君にほんとうに同性愛癖を治癒したい意志があるならば精神科の名医の診断を受けた方がいいだら

うと云つて、厚知杉田直樹博士への紹介状を書いて与えた。

青年は、早速治癒をうけますと云つて歸つていったが、私が後で杉田博士に会つたところ、彼がただの一度も博士の所え、見えてないことを知つたのである。治したいとは口実で、彼は実は私を誘惑に来たのである。

其後私は、かなり多くの同性愛者と会見するに及んで、この青年の心理は、同性愛者特に被動的ソドミアの大半に共通するものであることを知つた。

彼らは自己の男色傾向を治そうなどとは考

えていないのだ。治そうと努力するよりもむしろ、自分のもつ男色をいかに楽しむべきかに努力する。或いは、治らないものだとも最初からあきらめている。

なぜ、彼らは自分の傾向を治そうとせぬか？

又、それは治らないものだろうか？ 治るものなのだろうか？——これらについて、二三私見を述べてみたいと思う。

(2)

まず、男色という傾向が事実治るものかどうかを、いままで行われて来た各種の治療法の実験の結果について見てみよう。

その一つに、催眠術による療法がある。催眠術をかけておいて、暗示をあたえるのである。人は催眠状態中、特に暗示感受性が強くなるから、この傾向を利用して、治療の暗示をあたえるわけだ。

たとえば、自分を女性的立場においている、ウールニグに術をかけた後、術者が、「君は男だ！」

と断定的に云う。一回だけでなく、繰返し繰返しサゼッションする。そして、

「君は男だから女性を愛する」という風に誘

導暗示をしていくのである。

又、残続暗示をあたえる。残続暗示とは催眠状態中にあたえた暗示が、術を解いた後にも覚めることなく現れる——という暗示である。

ソドミアに対する催眠術療法は、クラフト・エビング、シュレンク・ノッツインク、アルベルト・モル、フォレル等の諸大家によつて、大いに試みられたが、その結果は芳しからざるものだったということである。

又、連想療法というのがある。モルによつて発表された。それは、こうである——

Aなる男に恋慕しているBなる青年があるとする。

医者は、BにAの容貌や体付、或いは性格等を問い、そのAに相似した女性のイメージをBに連想させる。

Bは、脳裡につくりあげられたそのイメー



ジを追つて、Aに似た女性をだんだん愛し得るようになるという療法だ。

この療法は、重い同性愛にはダメだが、軽度の者にはかなりの効果があると云われている。

次に精神分析。フロイドの創出した学説である。

精神分析が同性愛に対する療法の狙いどころというのは、——人間は根本的に両性的である。解剖的にさえも、両性が、われわれ各自の中に再現されている。男性には胸に乳嘴があり、女性にも男性的特徴の体質的萌芽がある。男性と女性の混淆は多々ある。そして、他の性が著しいときには、それは呼んでいる。ある男性は広い骨盤をもちある女性は狭いそれをもっている。これは生理的表徴である。それらの表徴の多くは心理的方面にも認められ、あらゆる人間は両性具有者である。あらゆる人間は両性愛的素質をもっている。その素質の中に隠され含まれて

いる異性愛を、患者の意識の表面に浮びあがらせ、これを発達させる、というのである。この療法の外国における治療成績はあまりかんばしいものではなかつたらしい。

精神分析のいい点は、同性愛を異常とか病氣とかに見ていないところである。同性愛は決して異質的なものではなく、万人に共通する性欲発展の一段階に固定しているにすぎないものとして、とりあつかつてゐる。このことは、同性愛者によつて、大きな救いとなつて、治療上にある程度の効果があるのではないかと思う。

最近にはまた、同性愛にホルモンの異常に因るものとの考えから、内分泌学による治療が研究されている。

フランス内分泌学の大家ズルベール・ドブリーズ博士は、これについて

「内分泌学の進歩は、同性愛の論理的な実体を把握させるように、専門家を励ましてゐる」

云々と自信の程を示している。

だが、いまのところ、ホルモンによる同性愛者の治療は確定的なものではなく、未だ道遠しの感なきを得ない。

(3)

さて、以上いままで行われて来た、或いは行われつつある男色の治療を展望するに、科学の進歩を以てしても、ホモは百発百中のには治療できないもののように思われる。

では、科学のほかに、何か治す方法があるだろうか。それについて、私の思うところを二三記してみよう。

ことわつておくが、私は医者でもなければ精神分析学者でもないから、医科学的な論をなすことはできない。ただ同性愛という現象に関心を寄せる者の一人として、かなり多数の同性愛者との会見其他によつて得たものから割り出した私流の考えを語るにすぎないのである。

明確に云えることは、私の知る被動的ソドミアの殆んどすべてが、女性との恋慕の経験

をすこしももつていないことである。或いはもとうとしなかつたことである。女性との美しい、或いは甘い恋愛を知らずに、そして女のよさというものを知らずに、ただ男性の魅力にのみ憑かれてゐる——ここにこそ、ホモ治療のカギが握られてゐると私には思われる。

どういふところから、彼らは、女性との恋愛をもたなかつたか、或いはもとうとしなかつたか——それには、人によつていろいろの由因がある。

或人は幼少六、七歳のころ、年長の同性から屢々性的に愛撫されたところから、そこにある *pleasure* を覚えるとともに、相手の男性というものに魅されるようになり、それが因となつて普通の人の辿る色情発達軌道を外れて、女性に心をひかれなくなる。

つまり、男性の魅惑があまりに大きいために、女性というものがその前に影をひそめてしまつてゐるのである。

又、或人は、芸者屋とか娼婦置屋とかの女



ばかりの家庭に育つて、あからさまの女のすがたのみ常に見ているところから、女のみにくさや悪いところのみ目につき、次第に女性嫌悪の感を抱くようになる。そしてたまたま見る男性に秀拔さをも覚え、魅せられてしまう。

或いは又、両親の好みから、幼時より女のように育てられ、三味線やら踊りやらの稽古事などさせられているうちに、いつしか性格や心理まで女性的になつてしまう。自分が女性と同化してしまうのだから、女性に恋心など感じようわけがない。むしろすべてが自分と反対の男性に心を惹かれるようになるのが当然であらう。



少とか、臆病小心とか、生活能力薄弱とか、そうしたいろいろの劣等感から、女性に接近することを恥じ恐れ、次第に女性恐怖となる一方、ちかずきやすい少年などと親しみ、愛するようになるというケースである。

こうした場合の同性愛は、多くのペデラストの形となつて現れるようである。私の知己にもそうしたタイプの人が二人ほどいる。二人とも大体同じような型で、そのために周囲から変人あつかいされながら、別に自分の性向を治そうともせず、又周囲の者も治させようともしなかつたが、あくまで独身で通して、他に迷惑をおよぼさぬことは賢明である。

又、エディプス・コンプレックス（性を異にする親子間の精神的抑圧関係）——から、女性と遠去かるようにする人も少くない。

たとえば幼時母親に愛情がなかつたためとか、母親の Yoni を偶然見てしまったためとかが因をなして、母親が代表するところの女

性のすべてに嫌悪、時には憎悪を感じるようになる。また、これと反対に、母親を非常に愛していたために、母親とそういうことをしてはいけぬという潔癖感、或は倫理感から、強いて母親——すなわち女性と遠去かり、同性愛に傾くようになるというケース。

以上のほかにも、まだまだ枚挙に遑ないほどのケースがあるが、とにかく、なぜ彼は女性に関心をもちたぬか、又、女性を恐怖するか或は又女性を嫌悪し憎悪するのかの要因を突詰めてみるのが、まず必要である。

そこには素質的にホモの性向をもっているものもあるだろうし、又後天的のソドミアもあるが、その因をとりぞくべく説得或いは治療し、同性愛者をして、異性のよさというものをシミジミと味得させる。

といつてしまえば事は簡単のようだが、それが容易ならざるものであること云うまでもない。

(4)

そのためには、時には連想療法、時にはホルモン療法、又時には精神分析と凡ゆる治療をないまぜて行わねばならない。

大体、学者というものは、己が学説のみを

次に又、こんな由因から、女性と恋愛がもてなくなるソドミアがある。

それは、自分の劣等感——たとえば性器短



堅持して、他の学説を貶さぬまでもとらぬものが多い。狹量。偏見と云うか。他説といえども長所はドシドシとりいれ用うるべきだ。

さて、ではいかなる方法で、同性愛者に異性のよさを知らしめるか。

まさか落語や講談にあるように、女嫌いの物堅い息子を番頭に命じて無理に遊女買いに引っぱつていくようなわけにはいかぬ。

そんなことをしても、ソドミアの Rite が諸んじるはずはない。仮りに交りができたとしても、おそらく、それは相手の女を男性と空想しながら、行爲したにすぎないだろう。

異性のよさを味得させるといつても、何も性的なことだけにはかぎらないのだ。否、むしろ肉体的なことより、精神的のよさを知らしめる方から行つた方が効果的と私は思う。

男性に、女性のよさ、美しさがあるとともに女性には、女性特有のよさ、美しさがある。その女性の精神的な善美を、それを知らぬ或いは知ろうとせぬソドミアに、身にシミシミと味わせるのである。そのためには、周

囲の不断の協力本人にハッキリ協力と分らぬ協力が必要であることは云うまでもない。変人あつかいなどでの外である。事実、同性愛者とは「変人」ではないのだから――。

そして急いではいけない。時期を待つのである。機会はちよつとしたところから来る。

美人でも何でもない一女性の体臭がふと鼻先におつてきたことから、不思議のように異性愛に目覚めたというソドミアの例もある。

又、被動的ソドミアは女性的だから、男性的の女性と結婚させればいいだろう位に男のような女を娶わせるようなことはいけない。

男性的なのは男だからこそ惹かれるのであつて、男性的な女性に惹かれるわけではない。

とにかく、男色を治す治さぬは、ソドミア本人の意志に任せることである。フリッツ・ウィッテルスも、その著「愛の精神分析」の中で、云っている。「われわれ精神分析者は、同性愛者本人が救済されたいと願う者のみを治療することができるのである」

さて、私は、同性愛としては高度であるウ

★ HOMOSEXUALTAT ★
TECHNIK

同性愛技法に就いての一考察

K.KABIYA

ソドミア性愛秘典

ソドミアの性愛技法について未発表のものを堂々発表の秘典

袖珍判美製本 200圓 丁20圓
◇ 11月25日出来豫定 ◇

東京都千代田区神田神保町2の34
日本特集出版社代理部

ールニングの場合についてのみ、その治療について述べて来たが、一方同性愛者であるとともに異性愛者でもあるペデラストの場合、これは比較的容易にその同性愛傾向を治すことが出来るであろう。

ウール、ペデいずれにしても、己が同性愛の傾向にこだわることはいけない。他に禍を及ぼさぬかぎり、自然に任せることである。それが最もよい治療法である。

變態十二ヶ月

變態強姦 二題

……女のチンバは尻の筋肉が自然に發達して腰が強いと言うぜ、俺もいちどいたずら半分てそんな女の経験があるが……

武野藤介



第一話は武野一雄博士から聞いた話で僕の郷里岡山のある村にあった戦争中の童話であり、第二話は終戦直後、東京の近郊、埼玉県との県境に近い新開住宅地にあった同じく童話で、これは吉倉範光博士から聞いた。兩博士とも精神科の専門医で内科を兼ねた開業医である。前者を村の悲喜劇とすれば、後者は警察官が介在して、都会にありそうな悲喜劇といえよう。

第一話。百姓の妻三十歳位。突然、腰がたたなくなった。疊の上も、土間も、いざりのように這い

ながら、用事をするので、子供がなかったからいいようなものの、第一、一家の主婦として、甚だ不便なことだつた。別に、どこも痛むわけでなかったから、なおさら、不審な病状である。が、何しろ、文字どおりに、（足腰が立たぬ）とあっては、夜の夫婦のいとなみにも不都合千万で、何よりもそれが亭主を憂鬱にした。

三十才といえば、この細君も女盛りで、ヒナにはマレに見るといいたいほどの、なかなか、美人だつたそうである。

全然、（夜の御用）が勤まらないというのではなかつたが、いざりも同然とあつては、そこはまた、四十八手に裏表のあることだつたけれど。

「それに……女のチンバは、自然、腰のあたりが強く、尻のあたりの筋肉が發達していて俺にもういちど、いたずらで、そんな女の経験があるが、今もってそのよさが忘れられない。案外、お前も夜は、人の知らぬお楽しみということじゃないのかい？」

と、同情されながらも、ひやかされ半分に村の者から、「いらぬ腹」をさぐられるようなことも云われた。

「そんなんじゃねえや……」

亭主の表情はいよいよ憂鬱そうだった。

晝間は、「いざり」ながらも、別に痛がりもしないのに、夜になると、夫婦の一つ寢床で突然、眉を痛そうにしかめて、

「いたッ、た、た……」

「どこが痛い？」

「腰が……」

が、痛いのは腰ばかりでもなさそうで、ワギニズム的な傾向さえあつたのだ。

お灸もやってみた。

いろいろなことをやつてはみたが、万策つきて、村から町まで、三里、亭主は細君をリヤカーに乗せて、それを引ッぱって、町の外科医へ連れて行つた。暫く通院してみたがすこしもよくなる。その医者からすすめられて、一応、産婦人科の診察を受けてみたが、ここでも別に異状は認められなかつたのだ。内科の医者にもみせた。が、どこでもそのウルザツへは発見されなかつたのだ。しかし、彼女の「腰のたたぬ」というのは嚴然たる「事実」だったのである。

この産婦人科の紹介名刺を持って、リヤカーに乗せた細君を連れて来たのが、精神科の看板の出ている武野医院。

僕が、この精神科の武野博士から、聞かさ

れた話では、

「初診の日は、一応の内科的と外科的な診療をして、消化剤程度の薬餌を与えて引き取らせた。が、精神分析的に、このくらいの患者のウルザツへを発見するのは、何でもなさそうに私は思った。しかし、その裏面には、何か、人事的な事情が伏在しているらしいことも、私にはすぐ想像されたので、二日目は、亭主を患者控室に待たせておいて、彼女と二人ツきりで、それこそ、文字どおりに、膝を交えて彼女と話してみることにした。が、腰がたたぬといえ、自然、シモがかつた話にもなり、夫婦の閨房のことも、その習慣や、亭主の癖など、いろいろと訊いてみるのだがどうも、かんじんな質問になると、彼女の返事に曖昧なところがあつた。その日も、薬にもならない水薬程度のものを与えて帰らせた。また、何日か間をおいて三日目のことだ。この日は最初から世間話をもちかけてみた。戦争中のことだから、そんな世間話なら、いくらもタネはあつたが、たとえば……お前の村でも、若い者がつきからつきと応召されて、今でこそ農閑期だけれど、いまに、猫の手も借りたいぐらいに忙しくなるだろうが……お前がいつまでもそんなふうでは……」

「はい……」

と、うなだれた彼女の顔色が、その時、さッと変っていたのだ。

そこは専門医のことでもあるから、世間話をしながらも、二人ツきりの差し向いで、それとなく患者のコンプレックスを「診察」していたことでもあつたから、この顔色の変化を見のがす者がなかつた。

遂に、彼女の口から、涙ながらに次のような驚くべき事実が告白されたのだ。亭主は不在だった。村役場から、軍事的な公用を頼まれて、二三人で、すこし遠方へ出かけた。夜にならないと帰つて来ない。その留守を狙われて思いもかけない災難にあつたのだ。戦争も、だいたい戦局が悪化してきていた折から、応召されて、出征する村の三人の青年が、もとより、生還は期し得べくもなく、半ばやけッぱちになつた気持も想像されるが、いわゆる、「行きがけの駄賃」というやつで、この細君を襲撃したのである。相当に、亂暴なことをやったものらしい。

「輪姦でもやつたのですか」

と、僕が訊いてみると、

「左様。強姦的輪姦でな。一体そんなことがやれるものかどうか知らないが……」



一人が掛へつけておく。接吻したり、乳房を、なぶりものになっている間に、一人が「前」

から××、そして、一人が「後」から、××業だつた。而も、それをこの、

三人が、××××にかわるがわる××××というのである。

「小母さん。俺達、どうせ生きて還らねんだ。餞別を貰いに来た。」

と、そんなことを云つてあがりこんだ三人の青年。もとより顔もよく知つている村の青年達のことだから、その餞別の意味で、亭主が秘蔵しておいたドロクを、ひそかに、取り出してもてなした。既に、どこかで飲んで来ていたのだ。が、青年達の云つた餞別の意味は、亭主の留守に、彼女の肉体を所望したのだつた。

それとわかつて、青年達が乱暴をしかけた時、声を立てて救いを求めれば、隣家に姑もいたことだし、この災難にまぬかれたろうが、彼女も、ちよつと、口をつけたドロクに、ほろ酔

いだつた上に、最初、歳上の女らしく、青年達をからかうような、へんな、色っぽい素振りを見せたのがいけなかつたのだ。もとより「出征軍人」を傷つけないということもあつて、万事を内緒事に、彼女が（泣き寝入り）したのも、彼等が出征したあと、冷靜になつてから考えて、いよいよ、亭主に相済まないことをしたと思つた。ああ、亭主に申訳ない。申訳ないことをしたと、くよくよ、ひとりで思い悩んでいるうちに、メンスになつて例月になく腰のあたりが重くなるしいと思つたら、ふと、足腰が立たなくなつたのださうである。

その病院通いの町から村まで三里。途中、笹力瀬川のながい堤の、山沿いの道は、晝間でもめつたに人通りがなかったのを知つていた博士が、

「あの堤あたりでリヤカーをひと憩みさせるのかい？」

「はい……」

「それじゃ、今日の歸りにでも、あそこでひと憩みしたところで、何もかも正直に御亭主に話して、お前からあやまつちやどうだね。それや二ツ三ツ、その場で撲られるかも知れンな。しかし、あとがさつぱりした氣持にな

るよ。私はそれをすすめるね」

「はい……」

「理窟からいえば、お前のほうは災難みたいなものだから、悪いのはその村の青年達の奴等なんだが」

「亭主にあやまります」

「きつと、あやまるかい」

博士は念を押した、彼女は、この医者忠告どおりにした。果して、この細君は、その堤の上で、亭主の百姓力で猛烈なピンタを二つ三つ喰らわされたのである。が、その瞬間彼女の腰が立ったのだ。

その後も、この夫婦は円満に暮しているのだそうである。

博士は笑つて、

「キリストがいざりを立たせたなどという奇蹟も、案外、こんなことではなかつたかと思いましたが……」

第二話。これも夫婦二人っきりの暮しだった。子供は無い。中年者。別に、美人というほどの細君ではなく、どこにも見かけるような、平凡な家庭である。が、突然、この細君の気がへんになつた。ヒステリー症の嵩じたものでもなく、また、憂鬱症というのとも違

い、ときどき、おかしなことを口走るのである。その口走る文句が、結婚して六年、とつ

く、遠慮のなくなつてゐる夫婦の寢床でさえ、一遍も口にしたことのないような、あられもない淫語めいたことを、喋舌りたてるので、これには亭主も大いに弱つて、

「おもてを通る人達が、何事が起つたのかと、立ちどまつて聞き耳を立てるようなキン声を出すものですから、第一、御近所に對しても、ミツともなくて……」

と、これを吉倉博士に相談に來たのだ。

勤めに出た不在中も、この細君のことか不安になつたので、田舎から、彼女の母親に來て貰つてゐるとのことだった。

「どんな淫語だね」

「とても口では云えないような……」

「羞かしくて、か」

「そうです。どちらかという、閨房も淑なしいほうの女で、日常生活でも口數がすくなく、それがパン助でも人前では口にしないようなことを、突然、大きな声で喋舌りだしますのです」

「最近、何か、そういうシモがかつた大事件はなかつたかね」

「……」その夫の、云つてしまおうか、

どうしようかと逡巡した瞬間の表情。

「本人ではなくても、日頃、親しくしている者とか……」

「いや、実は本人に……」

「何かあつたのかい？」

「強姦されましたのです」

之は、いかにも云いくそうにして、その強姦一件を打ちあげた。白晝のことであ。晝間、夫が勤めへ出ていた不在中、この細君が、物売りに化けたコソ泥に強姦されたのだつた。夏のことだつたから、それは多分、その前夜、いつになく夫から町重懇切に愛撫されて、その疲れが午後になつて出てきたものでもあつたらうか、縁側に近いところで、この細君が、晝寢のうたた寢をしていたのを、垣根のそこから通りがかりに垣間見て、むらむらと、おかしな氣になつた男の犯行だったらしく、細君のほうでも、そんなところに寢姿を見させたのは油断というもので、古川柳にも、妻のうたた寢はわが女房ながら夫の眼には毒だと詠んだ一句がある。

もやもやと、その前夜の、亭主に可愛いがられた夢でも見ていたうたた寢だったとしたら、彼女の手の置きどころにも、煽情的なものがあつたらうと想像されるぐらいである。

戦災直後の焼跡に新築したバラックにすこし毛の生えた程度の住宅。

男は、裏木戸から遁入って来て、その縁側へ廻ると、そこからあがって、まず、障紙をしめた。手拭で両手を縛った。その結び目を、そこにあった紐で柱にいわえつけたのは、彼女を逃げださせないための處置だったらしい。勿論、玄關にも内側から鍵をかけて、「留守」のようなカモフラージュをした。また、重なつてからいざツという時に、眼を覚ました彼女に声をたてられなようにと、猿グツワ用の湯上りタオルも用意したほどの男だった。これだけのことを、彼女の眼を覚まさせないようににやっただけだから、男の、はやる心を自制し、一寸二寸きざみに、その辛抱強さ。

この辛抱強さが、柱に紐をいわえつけたことなどよりも、男の変態的な気質をよく物語っている……と、吉倉博士は云っていた。胸に重みを感じて、はッとして、彼女が眼を覚ました時は、万事が手遅れで、「完成された不義」という言葉があるぐらいなら、

完成された強姦という言葉があってもいいのだ。

既に、この万事のなりゆきを、自分で諦めた彼女は猿グツワをかまされもせず、男のほ



うでも、彼女の表情からもそれと察した様子で、濡れぬさきこそ露をもいという文句ではないが、さんざ、男に、もてあそばれて、娼婦よりも素直な姿態を見せたらしく、退参する時に男は、
「奥さん、済まんことをしましたなあ……」

と、やさしい捨て台詞を残していつたとか。

この細君は、夫の帰宅を待つて、この留守中の災難を涙ながらに語った。もつとも、こんなことを笑いながら語る細君はあるまい。

そして、夫婦で相談した上で、これを警察へ届けたのだつた。

この夫が吉倉博士に云うには、
「終戦直後のことでありましたから、私はこれを災難とあきらめました。早速、産婦人科の医者のところへもやつて、ダツチエスの消毒をさせました。勿論、妻の油断に叱言も申しましたけれど、かえつて、私のほうから、妻の災難を認めてやつたぐらいです。あの小平事件などというのもありましたからね。妻には、贖罪という意味もあつたのでしょうか。そんなことがあつてからというものの、夫婦の寢床も、これまでに私を満足させてくれ、妻のそのサービスが、私には、妻を小娘のように可憐に思わせたものです。どちらかというと、妻は不感症気味でしたが、このことが動機で……」
「あり得ることだな」

と、博士はうなずいてみせた。

「女の肉体にはいくつも不思議な部屋があるとか申しますが。その部屋の、不思議な謎を夜ごとに解いていくような閨房のよろこび。

親類では、私どものことを、おしどり夫婦だなどと云っていました。それがためにいつそう、琴瑟相和したと云つてもよろしいのです。おかしい方の方ですが、私はコソ泥に、お礼のひと言もいたいたぐらいにさえ思いました。ひと月ばかり前にあつた事件です」

この細君の氣がへんになったのである。

博士が僕に云うには、

「私は、ある事件で、こんな場合の警察のやり方を知つていたので。いや、そういう警察ばかりではあるまいが。それより外に考えられなかつたから、私からすすめて、この細君を転地させた。転地といつても、田舎から心配して出て来ていた実家の母親に連れさせて一カ月ばかり、その実家へ預けたのだ。すっかり、病氣もなおつて、夫婦で私のところへ礼に來たが、私の想像がやつぱり當つていたの、さ」

なる程……これはありそうな話だつた。被害者のこの細君を所轄の警察署から刑事が訪

ねて來るのである。勿論、夫は晝間、勤めに
出ていた不在だつた。その留守を、コソ泥の
ように狙つて來るわけでもあるまいが、
「まだ捕まらないのでねえ……」

と、刑事が云う。しかし、この細君にとつても、夫と同様、最早、そのようなことはどちらでもよかつたのだ。

「強姦の、暴行にもいろんな手口があつてねその手口で、これは外の犯罪捜査と同様、案外のことから捕まることがあるもんだよ」

と、そんなことも云つて、羞かしがるこの細君をつかまえては、あの時のことを、根掘り葉掘りに、訊いて行くのだが、翌る日にもまた、夫が勤めに出ている留守を狙つたようにして、こんどは。同僚を連れて來たのだつた。そして、同じことをむし返して訊くのである。この「細君は、美人というのではないが、笑顔にも愛嬌があつて、その顔つきに、へんに、色ッぽいところがありながら、聞くほうの年若い刑事連にしてみれば、絵に描いた背景を言葉で見るとような興味でもあつたのだらうか。

この「紳士たち」の毎日のような訪問を、細君も困つたことには思つたらしいけれど、面会謝絶というわけにもいかず、この困惑を

夫に打ちあけて、不愉快がらせる、こともわかつていたから、これは最後まで黙つていたのだ。この隠しだてもいけなかつたらしい。こうなつては、一種の強迫観念に翻弄されて、いるようなもので、夫がそばにいてくれる夜は、何事もなく過ぎたが、その夜が明けて、今日もあの「紳士たち」が訪ねて來そうに思われて、朝からそわそわと落着かず、夫にそれを隠していたことも、相済まない氣持だつたらしく、とうとう、この細君は氣がへんになつたのだつた。

「それで、そのコソ泥は捕まつたのかい？」

と、博士がこの夫婦に訊いてみたら、夫が苦笑して、

「一向、捕まつたという話を聞きませんね。捕まつたら、首實驗ということもあるうし、何んとか、警察から私どもえも云つて來そうなものじゃありませんか」

愛 讀 者 通 信

小生は廿七才独身のスーパー的男性です。身長五尺三寸三分、美男子ではありませんが悪くもなし。十一月号東京TV生と御交際を致し度いのです。小生サヂストです。同好の士御連絡下さい。(東京 YO生)



レスボス通信

——女性だけの秘密な愛のサロン——

お姉様のルージュが甘く匂つて、おつばきがチュツと口の中へ入つて来たとき、私、ジーンと胸中がしびれてしまいました……接吻でおつばきを頂くなんてあまりに思ひがけなかつたので……

園村 恵子

芳子様よりの第一信

朝夕、涼しく大変くらしよくなつてまいりました。突然見知らぬ私の手紙、失礼をお許し下さいませ。

私は今日と云う日に、これほど生甲斐を感じたことはないと言つてよい程でございませう。

何度もお手紙を書いたのですが、そのたびに恥かしくなつて破つてしまいました。でもとうとうあなた様にお手紙をするという誘惑にうち勝つことが出来ませんでした。

恵子様。私は今年二十才になります。——

の——バスの車掌をして居るものでございませう。ハッキリ書きましたが、これはだれにも知れぬよう秘密にして下さいませ。

あなたを信じてお頼りする私でございませう。

運命の日は半月ほど前のある日でございました。——からのつた男のお客が、本を忘れておりて行きました。それを車庫へ行つてから気がつき、とりあげますと、それが「風俗草紙」で、女の私にはペラペラめくつてみる

のも恥かしいような御本でした。乗務を終つてから、運転手さんが、後で見せてほしい、などと云つておられたのですが、私も一度みてみたくなり、そつと宿舍へもちかえつて、お寝床でよみました。

はじめは男性の同性愛がたくさんあるのにびっくりしましたが、そのうちに、恵子さまあなたの御通信があるのをみつけ、異様な胸さわぎを感じながら、よんで行くうちにどうしようもない恥かしい興奮を感じてしまいました。……

園村様。私は、毎日バスに美しい同性が乗られると、気になつて、その人ばかり見たりそばへ行つてお手にさわつて見たいような気になつたり、その癖、そんなひとが、私に、何かお聞きになるような事があれば、どもつて赤くなつてしまう、そんな娘なのです。

友達がよく休憩所などで「今日はすてきな男性が乗つたわ。ああいう人と結婚したいわ」などとお客様の噂をしているのをききましても、私は、少しも結婚など魅力だとは思いません。不潔な気がして、男は見るのもイヤ。結婚するんだつたら、ステキな女性と結婚したいの。……

私は今、毎朝バスにのる十八の女高生三人と親しくして、お写真を交換したり、お手紙を交したりしているのですけど、私のこの異様な胸のもたえを打あけられなくて、苦しいのです。

結婚している方でもいいわ。レスポスを理解して下さる女性に、思い切り甘えたり、また、男のように、自分の思うままにしたいような気になります。たまりません。

私は、美人ではありません。ただ若さと肌の白いの、恵子様のお気に入るかしら。

私、恵子さまに愛撫されることを考えると興奮でねられません。軀が恥かしいみたいですなつてしまいます。お写真も頂きたいのですけれど、でも、一度でもいいから、会つて頂けませんでしょうか。

こんなに胸苦しく、まだ見ぬあなたを恋慕つて、もたえておりますのに、会つて頂けないのでしょうか。お許しあれば、いつでも上京します。

御返事を、せめて御返事だけは下さいませ。お待ちしております。 芳子

園村恵子様みもとへ

× 芳子さまよりの第二信

三日ぶりに宿舎から家へかえりましたら、お姉様（もう、こう呼ばして頂いていいでしょう？）のお手紙が、ついてました。飛びあがつてよろこんでしまいました！

ああいう雑誌のなかの文章なので、お姉様を信じながら、御返事を頂けるかどうか半信

半疑でしたのに！

まいりますわ。すぐに。仕事の方は、休暇を頂いて、東京へまいります。本当に教えて頂いた喫茶店に参ればよろしいんですね。東京は女学校のと看、行つたきりですから、もしお姉様が来て下さらなければ、私、途方にくれてしまうわ。お願いですから、本当にきして下さいネ。

毎日、車で勤務していても、お姉様のことばかり考えて、ちつとも落付きません。

夜、宿舎の床へ入りましてからは、お姉様のおもかげが眼ぶたの裏にちらついて、

「お姉さま、お姉さま」

と呼びながら、恥かしい位、軀が汗にぬれてしまいます。……

両腕をひろげて、じつと、吾と吾が胸をいだきしめて、お姉様に抱かれていますように空想して、やるせなさに身もたえし、お姉様の御名を呼ぶの。

ああ、そのお姉様に会えるのですもの。お姉様にレスポスの愛をおしえて頂く、その時のことを考えると、切なく、苦しく。……



お姉様のお書きになつた絵。いやよ。あんなの、見たら感じてしまつたわ。イジワル！お姉様、絵お上手ね。でも、なぜ、あんな絵を下さいましたの。ずいぶんネ。

私、処女ではありません。こんなお話、恥かしいわ。——でも、お話しなければ、会つて下さらないなんておつしやるんですもの。

お姉様、私処女じゃないの。お姉様、処女でなくてはいや？……ゆるして下さいましね。おさげすみになつてはいや。悲しいわ。十九歳のときですの。

家へ下宿していた、会社へおつとめになつていた三十の男のひとに、半分暴力みたいにして犯されました。

ああ、あのときのことを考えると、今でも、何だか全身がカアツとあつくりますの。

私、その方を「お兄さま」「お兄さま」つて呼んでましたのよ。なんだか、お兄さまみたいな気がしたので。——
その方の部屋は二階にあるので、物干しに

上るには、その方のお部屋を通らなくてはなりませんでしたの。

私、ある朝、お洗濯して、それをもつて、お二階へ行きましたの。——もう、会社へ出られたと思つていたのに、その方は、お部屋でねてらつしやつたのです。

私、仕方がありませんから、「ごめんなさ



い」つて断わつて、窓から物干しに上つて行きましたの。

あとから考えると、あれが、いけなかったのですわ。私、みじかいスカートをはいていたでしょ。それで、窓へ上つたりしたんですもの。私は無邪気でしたけど、私の白いもも

を下から男にのぞかせた事になるのね。

私が洗濯物を干して、おおりてくると、その方は、いきなり、「芳子さん」つて、変な声を出して、私の手を引いたの。

「あら、何なさるの、イヤよ」

つて、声を出しましたが、その時はもう男は野獣のようになってました。

私をおふとんの上へおしたおして、（そのお布団の男臭いつて云つたらありませんでした。それを今でも不思議におぼえています）そして私の上におしかぶさつてきて。……私は下に、お母様がいたので、恥かしくて大きな声も出ませんでした。内気で、そんなことが、とても恥かしくて仕方がなかつたの。だから、だめなのね。私たち娘は……

男つて本当に野獣ですのね。お姉様。もう何度も、何度も。……私は、悲しさに、涙が頬をつたわりました。……

バラ色のように空想していた、男のかたとの愛というものが、こんなものだつたのか、と、……私は、しきりになぐさめる、その方

をふり切つて、下へおりました。——でも、もう、汚された処女は、直りませんでした。思うだに、いまわしいこと。……私は、それから、車にのつても、男のかたを見ると、あの時のことが思われて、劇しい嫌悪におそわれるのです。

私が、口もきかないので、その人は、とうとう居づらくなつて、引越して行きましたけど、——でも、私のうけた心のキズは直りませんでした。

お姉様。こんなお話して、お姉様にきらわれるかと、気にしている芳子です。どうか、さげすまないでね。芳子、それから、あんな見苦しい、そして、痛いことのないレスポスの優しい、やわらかい愛を、切なく胸に描くようになりましたの。女は、女同志が一番よく知つていますわ。

男の攻撃的な愛は、思うだけでもいやよ。でも、お姉様のやさしい愛のしずくは受けたいの。

ああ、お姉様に会うのが待遠しいわ。お姉様、告白したんですから、きつと会つて下さ

いね。(写真同封します) あなたの下僕
いとしのお姉様へ
芳子より

× 芳子さまよりの第三信

お姉様。

昨日、無事にかえつてまいりました。

そして昨夜お礼のお手紙を書こうとしたのですが、つかれが一時にどつと出て、昨日は一日、ねてしまいましたので、お手紙今日になりましたこと、お許し下さいませ。

お姉様とお会いした東京での二日間。……ああ、今、思い出しても、胸がわき立つようですわ。

私は、あの二日間のことを決して忘れないでしよう。お姉様と会つたときの、言葉やした事の一つ一つを私は、こうしていても、はつきり思い出すことが出来ますわ。それを心に思いうかべると、なんだか軀が、……お姉様のあの愛撫を待うけるように……じつとりと、露をふくんだつぼみのようになつてくるわ。……もう、あの二日間だけで、私の軀はお姉様のものになつてしまったのね。……こ

んな芳子を、あわれと思つて下さいませ。

あの新橋の喫茶店で、お姉様をはじめ見たとき、私、自分の眼をうたがいましたわ。だつて、お姉様があんまりお美しかったんですもの。紺のスーツをきて、胸に花をさしていらつしやつたお姉様。

はじめ、私が真ッ赤になつて、黙つてしまつたので、お姉さま、とても気にしていらいしやいましたわね。でも、それは、はじめのお姉様の印象が、とても意外でしたので、私が、すつかり上つてしまいましたからですの。……そんなこと申し上げられないし、私、自分が、あんまり田舎っぽいし、恥かしくて逃げかえろうかと思つた位でしたわ。

でもお姉様は、私をやさしくいたわつて下さいましたのね。そのお心根、芳子、涙が出るほど、うれしく感じましたわ。

あの劇場は何て申しましたつけ。二階の片すみですわつて。……映画を見るところではありませんでたわ。

お姉様の温かい体温を軀の片がわに、そつと感じて、そこが、しびれてしまいそうだし



た。お会いして、まだ二時間もたたない方ですのに、お姉様を、なつかしい恋人みたいに感じ、思いきり甘えたい衝動にかられました。

お姉様の、柔かい、やさしい手が、そつとはつてきて、私のふるえる手に重なり、「芳子さん！」そうささやかれて、……ああ、あのはじめての、お姉様のキス、思い出しても切ないわ！

お姉様、よくあんなところで、なさるのね。私、まわりの人が、気になつて仕方がなかつたわ。田舎もののせいなのかしら。

男の接吻とはなんて違うんでしょ。私、接吻があんなにいいものとは思いませんでした。お姉様は、ずいぶん、接吻お上手ね。でも、外のひとにも、あんな接吻してあげるのかと思うと、苦しいわ。

お姉様のルージュが甘くにおつて。お姉様のおつばきが、チュツと口のなかへ入つてきたとき、私、ジーンと軀中がしびれてしまいました。……接吻で、おつばきを頂くなんてあまりに思いがけなかつたので。……なんだかあまりに生々しがつたので。……でも、私、夢中で、それを頂いての

み込んでしまいました。外のひとのたつたらイヤだつたけど、お姉様のたつたら、ちつとも、いやじやなかつたわ。

なんだか、自分が、お姉様の愛の犠牲になつていく気がして、お姉様からうけた、おつばきで、私の軀が、すつかりお姉様のものになつてしまつたように感じました。

あの、ひる間の二階で、男のかたのものを受けたときと、なんと云う違いでしょう！

でも、私、ずいぶん、まわりを気兼ねしてしまつたわ。音するんですもの。お姉様は平



気ネ。私、告白しますけど、お姉様の舌で、唇の間をこすられた時のあれ、一番興奮してしまつたわ。もう、映画館のなかでなんて、あんなこと、なさらないでね。……興奮していること、お姉さまに見つけられたら、どうしようかしらつて、ずいぶん気を使つちやつたわ。やつぱり、興奮したこと、知られるのは、恥かしいわ。

日比谷公園の御散歩もよかつたわ。夢のようでした。目のさめるような花の一杯さいている花壇に休んだひとときの、楽しさは、忘れられません。

自分の生活が、夢のように遠く思え、お姉様に会えたよろこびが、しみじみと胸をひたしました。

それから、食事をして、……夜の銀座をお姉様と肩をならべて、買物などしてあるきましたわね。人は、私達を何と思つたでしょう？ 仲の良い姉妹？ いいえそれにしては妹があまり田舎ものじみてますわね。お姉様は、私のセパレーツ、ほめて下さいましたけど。……

お姉様のお宅へ行くのは、恥かしがつたの。だつて、お姉様とは、只のお友達じやないのですもの。……

お姉様のおうちへとまつたらかたくなつて楽しみを十分に味わえないことをおそれたのです。

でも、お姉様が、つれて行つた旅館も、普通の家のような、落ちついた、いい旅館でしたわ。私、それが一番心配でしたのよ。

ああ、それからの事は！……

私、あんなこと始めてだつたわ！

想像はしていたのですけど（お姉様の通信や、レスボスの御本など読んで！）あんな、素晴らしいものだとは、思わなかつたわ。

お風呂のなかで見たお姉様のお軀の美しさ。お乳のふつくりした豊かさ。……

私、昔、子供のとき、お母様のものの上で軀を洗われたことを思い出しました。

お姉様の、あたたかい、ふつくりと盛上つたももは、美しいお母さまのものようでした。そうして、そのもものもとの……切ないわ。

お姉様のお腰は、たくましいのね。芳子のは、男の子みたいに、細くて、小さいわ。や



つぱり、それだけ、未熟なのかしら。

お姉様の背中に、黒子があるの御存知。私見つけて、ひとりで笑つてしまいましたわ。だつて、あんな可愛いんですもの。

それからのこと。……お床へかえつてからのこと。ああ。……苦しいお姉様の愛撫。切ない、胸をしぼられるような、レスボスの愛のちかい。お姉様は、我儘なタイラントよ。……あんなにいやつて申上げているのにあんなひどいこと、なさるんですもの。

でも、あの×××いやでした。なんだか、あのお二階の事件を思い出させるようで。……

やつぱり、お姉様のやさしいお軀や、奥深

いキスのほうがいいわ。だつて、それでこそレスボスですものね。でも、恥かしいわ。こんなこと申上げて、お笑いにならないでね。

でも、私、もつと、お姉様を愛したかつたわ。お姉様があんまり、それをお望みにならなかつたので、芳子、悲しかつたわ。お姉様には、きつと私よりもつといい方がいらつしやつて、その方の愛でないと満足なさらないのでね。——物足りないと言え、それだけ。

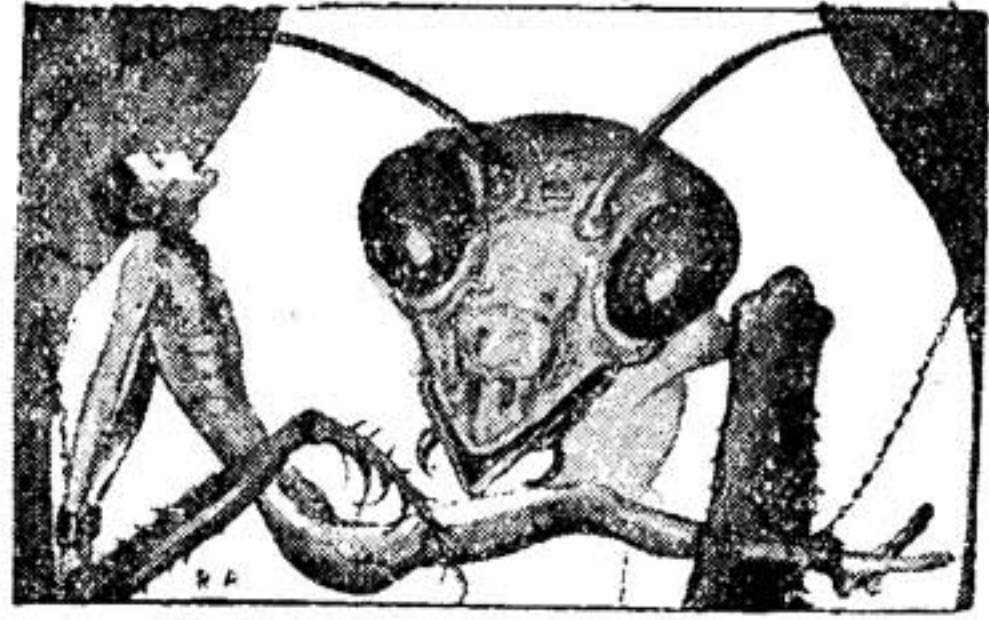
でも、芳子は、五彩のにじがきらめく、夢の世界に何度もあそびましたわ。……あんな、よろこびはじめて、……そしておそろく、これからも、味わえないことでしょう。

当分、お姉様に会えないかと思うと悲しいわ。ひとりで、いけない事をしてしまします。お姉様のことをおもつて、……お姉様の愛のおつばきのことを思い出して。……

ずいぶん、つまらない事を永くかきました。先は、上京お礼まで。

芳子





カマキリの雌

千加子は圭作を血走つた眼で見すえながら、つゞけざまに鞭をふるつた。激しい動きにつれて、赤い長襦袢が、袖も裾も白い肌にからまりつく。豊かなその頬がつきつめたようにゆがんで、息づまるような美しさがあつた。

鳥 羽 瑛 子

秋 吉 巒 畫

千 加 子

ドア・ボーイに呼ばれて、明輩のマユミが立つていつたのを見ると、大垣はグイと千加子にすりよつて声をひそめた。

「今夜、どうだい？」

「え？ なあに？」

千加子は耳を浮かすように首をかしげて見せた。バンドがヤケに熱演しているから、この聞えなかつたふりは実に自然だつた。その実千加子は大垣の次の合詞まではほぼ正確に豫期している。この辺がバー生活三年間の收穫

かもしれない。

「今夜ね、いいだろ？」

「……………」

今度は答えずに、ちよつと眉をあげて「あら！」と云つた表情をかえす。それが美しく見えることを、彼女は知つていた。現にその反射作用のように、ジワリと男の手が腰にかかつてくる。

だが、千加子はガツシリと骨太の、大垣の膝のあたりに細い手を

つきながら、少し臍をズラせて曖昧な微笑を見せた。銀座では名の通つた店だから、ボックスでそれ以上の態度に出られると、少し困るのだ。

カンバンになつてコートのボタンをかけながら舗道に出ると、向う側の広告塔にもたれていた大垣が手をあげた。

「車を待たせてあるんだ」

「あら、何処にゆくのか？」

「まだそんなこと云つてる。

とにかく乗つてゆつくり

口説くさ」

パターンとドア



が閉ると、もう先刻の埋合はせのよう
に、大きな手が細腰をしめつけ
てくる。運転手は機械的な表情
で車をスタートさせた。

「なんならこのまま、熱海か
湯河原に行つてもいいな。ね
え、今夜帰らなくてもいいん
だろ？」

「あら、とんでもないわ。

わたしこれでも、外泊つて
こと、一度もしたことがな
いわ」

「フフフフ、そんないい
躰して、そんな巧いこと云
つたつて通用しやしないさ。

君なんぞ、まるでノベツに男
の生血でもすすつているように
見える。とにかく、ちよつと妖
しいほどの魅力だね」

「フフフフ、信用しなくたつて、外
泊の経験がないのは本当よ」

千加子は暗い窓の外に眼を放しながら、
のしかかるように膝を押しつけてくる大垣
を、手袋をはめたままの手でほどよくあしらつてい
る。土地建物のブローカーをしていると云うこの男は、



三十代に
しては、店で
も割に綺麗に金を
つかつて遊んでいた。
「冗談はとにかく、この先に

懇意な待合があるんだがね」

「待合なんていや」

「千加ちゃん、いやにジラすんだな」

「あら、だつたらわたしの家にいらつしやればいいんだわ」

大垣は意外そうに千加子の顔を見た。

「ほう、君ん家にね？ 誰も居ないの？」

「一人いるけど……気がおけなくつていいわよ」

彼女は又微笑した。それからカーブする車の中で、確かめるように男の厚い胸元あたりに視線を止めた。

車が止つたのは低い生垣の前で、これも小さな門をくぐると、つい鼻の先に玄関の格子戸がある。そのほの暗い玄関の前に一人の男が立っていた。千加子ともつれ合うように歩いていた大垣は、一瞬ギョツと立止つた。

その男は逆光線の中で、まるで細長い影のように見える。すれ違ふと瘦せた蓬髪の男で咽喉佛がひどく、立つて見えた。

千加子は店にいた時よりも気嫌がよかつた。玄関の三疊間の疊の上に、コートもハンドバックもストッキングも手袋も放り出してから、今度は大垣のスプリングやマフラなども脱がせてくれる。

掃除がゆき届いた茶の間の長火鉢の前に坐

つて、大垣は珍しそうに辺りを見廻した。小

じんまりした三間ばかりの家らしい。千加子が袷にグルグル伊達巻を巻いて、娘のような柄の羽織に袖を通しながら出て来た。

「なんだつて、そんな顔してみるの？」

「いや、着物だと、又一段と艶っぽいな」

火鉢ごしに、袖口から千加子の二の腕をつかもうとして、大垣はふと三疊の方をうかがつた。故意か、偶然か、境の襖が一尺ばかり明いていて、あの瘦せた男がうつ向いて、何かゴソゴソと動いているのが見える。気になつて、千加子に囁いた。

「あの人、誰だい？」

「ああ、あれ？ 夫よ」

彼女は普通の声で平然とそう答えたのだ。

「なんだつて？」

大垣は思はず叫ぶように口走つて、軀を浮かした。

「君の夫？」

「そう、わたしの夫よ。——どうしたの、そんなヘンな顔して……」

「だつて君、旦那さんがいるんじやあ——」

「今になつて帰えるの？ あんな人、居たつてなんでもないぢやありませんか。——まあ

とにかく、お茶でもお上りなさいな」

器用な手つきでお茶を差出す千加子の艶々

しい顔と、三疊の男とを見比べた。

今の会話は、当然その男にも聞えた筈である。しかし、気がついてみると、男は妻の脱ぎ捨てた衣類を片づけているのだ。頬のコケた横顔を見せながら、その千加子の夫は妻の薄いストッキングをクル／＼と巻いていた。

異常な関

夫の圭作は、大垣の鞆を持つて茶の間に入つてくると、二人の横の茶簞箆の上に乗せてそのまま黙つて出て行こうとした。むしろ美男子と云つてもいいほど整つた容貌だが、蒼白くて、病み上りのように、何処か芯の弱い感じがある。

「ちよつと圭さん、ウイスキーと、それからなにかツマミ物たのむわ」

肯いて出てゆく彼の後姿に、千加子は口早やに浴びせかけた。

「まつたく、あの人つたら気が利かないんだから……」

そのさも憎々しそうな調子が、大垣の好奇心を刺戟した。

「一体、どうしたんだい？ 君たち夫婦は」
 「どうもしやしないわ。折角こんな杉並くんだりまで貴方を引張つて来たけれど、まあ、あの人が今夜のお看みたいなものね」

その圭作が小綺麗に並べて運んで来た、チーズやアスパラガスをつまみながら、千加子は赤く濡れた唇を光らせて、嘲けるように云う。

店で見る何時もの彼女とは又印象が異つてその千加子の躰から、なにか妖しい霧のようなものが発散するような気さえする。それは居心地の悪いおもいで、半ば腰を浮かせていた大垣を、グイと引ずりよせるように、強い力で迫ってくるのだ。

彼はなにか混乱した刺戟を覚えながら、今度は次の間に寢床を敷き始めた圭作を盗み見てゴクリと唾を呑んだ。それからまだグラスを離さない千加子の白い首筋に囁いた。

「君、まさかあの人を差しおいて、僕達と一緒に寝るわけにはいかんだろう？」

「あら、そんなこと、ちつとも構わないじゃないですか——」

「判つたよ。それじゃあ、君の旦那さんはアレだな……」

その次に囁いた彼の言葉を、吹き飛ばすよう

に千加子は大声で笑つた。

「ホホホホ、そんなことはないわ。あれでも、ちゃんと一人前の男よ。でも、あの人は空気と同じ、いないと思えばいいのよ。——とにかく、もつとジャンジャンお飲みなさいな」

もつれ合うように次の間に入ると、清潔に用意された床の上に、枕が二つ、キッチンと並べて置いてある。

今迄に相当女道楽も仕つくした大垣だけれど、千加子の夫の手で並べられた二つの枕はさすがに異様な刺戟を誘つた。

「おい、本当にいいのかい？ ヘンなところで間男呼ばわりをされちゃ、目も当てられないぜ」

カタリとも音を立てず、静まりかえつた隣室を顎でしやくつて見せると、

「まあセイセイそうして、餘計な神経をつかつてらつしやい。貴方もずい分場数を踏んだような顔してる癖に、案外純情なところもあるのね」

千加子は素肌には赤い長襦袢一枚だけをひつかけて、ノビノビと床の上に手足をのばしている。赤い長襦袢の胸元や乱れた裾からのぞく白い肌が、まるで濡れているように、ヌメ

ヌメと光っていた。

思わず大垣は、そのふくよかな胸の上に酔つた顔を伏せた。千加子は男の脂切つた頭を愛撫するように抱きながら、甲高い声で叫んだ。

「ちよいと圭さん！ スタンドつけなきや駄目じやないの！」

まるで命じられるのを待つていたように、白格子の寝巻を着た圭作が入つて来た。

慌てて躰を起そうとする大垣の頸筋に、千加子はしつかり両手をからめて、平然と不思議な微笑を浮かべている。大垣は乳房の上に窮屈に顔を押しつけられたまま、息をのむような思いで、圭作の動作をうかがつた。

その瘦せた男の手で、ピンクのシェードをつけた大型のスタンドに、なまめかしい灯がとぼる。

それから圭作は床のわきにしりぞいて、忠実な番犬が主人に用を命じられるのを待つように、からみ合つた二人を見た。まだ三十一と云つたところで、尖つた肩のあたりや膝の上の両手には、一種清潔な匂いさえ漂っているようだった。

「まったく、この人と来たら、仕様がなないボンクラなんだから……。大の男のくせに、女

房のわたしに働かせて、自分は一日中ブラブラ遊んで暮してるのよ。その癖、ちよつとも肥りもしない、まるで針金のような軀をしてんの」

千加子は喋りながら、美しい唇をゆがめて夫を見た。

「あんた、ちよつと裸になつてごらん！」

あつと大垣が声をあげる前に、圭作は前結びにしている寝巻の細帯に手をかけた。上半身肌脱ぎになると、まるで洗濯板のようにアバラ骨が飛出した、痛ましい裸身が現われた。そして、それまで殆ど無表情だった圭作の秀麗な顔に、甘えるような、はにかみの色が浮んでいる。

「ねえ、見てごらんない、この人つたら、まるで骸骨でしょ？」

「……………」

「わたし、瘦せた男なんて大嫌い！」

勝ち誇つたように云い放つて、千加子は起き直つた大垣の、ガツチリした肩にしどけなくもたれかかる。大垣はあまりのことに、さすがに言葉を失つて、驕慢な女王のような彼女と、痛々しい圭作の裸身を見較べた。

「あんた、そんなに遠慮してないで、みんな脱いでごらんよ。パンツもなにもみんなとつ

て、真つ裸になつて立てごらん！」

「千加ちゃん！ なにもそんなに……………」

口ごもりながら声をかける大垣を見向きもせず、彼女は圭作を見すえて、スックリ立上つた。

「嫌なの？ わたしの命令がきけないのね！」

「千加子！」

「フン、止してよ、そんな夫らしい口をきくのは…………、なにさ、女房に養われているクセに——」

「かんにんしてくれ、千加子！」

「パンツをおとりつて、云つてるのよ！」

何時の間にか、彼女の手には細いベルトが握られている。その婦人用の、極く薄いビニールのベルトが空を切つて、圭作の瘦せた背筋のあたりに鳴つた。

「あッ！」

「これでも、あたしの云うことが、きけないの！」

千加子は圭作を血走つた眼で見すえながら、つづけさまに鞭をふるつた。激しい動きにつれて、赤い長襦袢が、袖も裾も白い肌からまりつく。豊かなその頬が、つきつめたようにゆがんで、息づまるような美しさがあつた。

大垣はあつけにとられて、床の上にあぐら

をかけたまま、目前の異様な光景に見入つた。細いベルトが、圭作の瘦せた裸体に喰いこむように、不気味な音を立てる。妻の無慈悲なその鞭の下で、夫は囚人のように悲鳴をあげて転び廻るのだ。

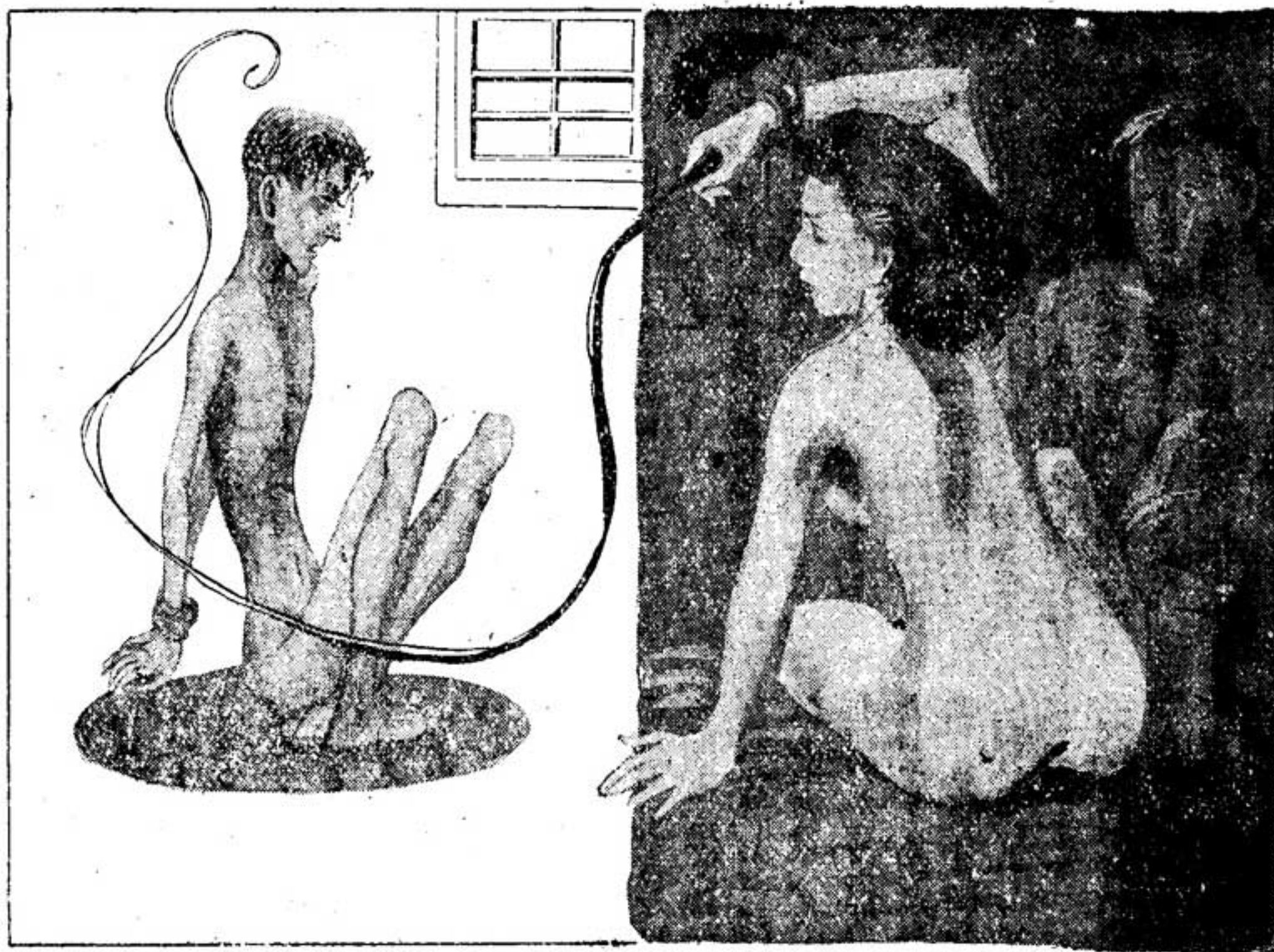
千加子は倒れた圭作の軀に、グツと片足をかけた。紅絹裏が割れて、白いふくらはぎが貧弱な圭作の軀を圧倒するように踏みしめる。力のみなぎつた美しい女体と、蹂躪される病身の男との対照が、見ている大垣を鳥肌立つような亢奮に誘いこんだ。

「ほら、まだ御仕置が欲しいの！」

ピシッと布の裂ける音がして、千加子の手でパンツが剥ぎとられた。男にしては白い尖つた尻が露になる。大垣は「あッ」と声をあげた。千加子が断言した通り、圭作は決して不能者ではなかった。明かな肉欲を示して、彼は生々しく息づいているのだ。

千加子の巻きおこした、暴風雨のような情欲に、何時か大垣もまき込まれていた。それはまだかつて、彼が知らなかつた種類の、くらめくような刺戟だった。残酷な優越感、彼の亢奮をメチャメチャにかり立てるのだ。

白い床の上に、雌と雄にかえつた千加子と大垣が、汗を光らせながらのたうっている。



女の躰は、まるで飢えたもののように燃え上るのだ。

その部屋の窓に圭作が張りついている。丁度礫になつた罪人のように両手をひろげて、首も手首も、後の窓格子にしつかり縛りつけられている。床の上の二人の痴態を見下しながら、彼の裸体が、耐え切れぬように身もだえするのだ。

しつかりと絆創膏を貼られて、否応なしに見ひらかれた腫の輝きは、この世のものとは思えなかつた。キリストのようなその礫像の下半身は、彼の鬨いをまざまざと物語っている。

十七日の月が、背後からこの受難者の像を

蒼白く照らしていた。

腐蝕

翌日、妻と、その不倫の相手を送り出すと、圭作はグッタリと疊の上に横になつた。昨夜は殆ど一睡もしていない。躰中がバラバラに離れてしまうような、手ひどい疲労感が、礫のように沈んでいる。「あなた、今日は氣胸にいらつしやる日でしょう？」

出がけにそう云つた千加子の声音が、まだ耳元に残つてはいるが、起き上つて病院に行く氣がない。数年前の、病気の初期の頃に感じたような氣力の劣えを、彼は最近再び感じるようになっていた。血痰も又チョイチョイ彼を脅かす。しかし、それ等はすべて妻には秘めてある。

静かだつた。疲労が、圭作をウトウトと眠りに誘つた。

何時ものように、夢の中の千加子は、初々しい幼な妻だ。結婚勿々、肺結核で倒れた夫を抱えて、その看病だけに身も心も捧げつくした、貞淑な妻だつた。

「あら、駄目よ」

「……………」

「いけませんつたら、あなた……。ねえ、大人しくおやすみになつて——」

「もう僕を愛してないんだね」

「まあ、又あんなことおつしやつて……。絶対いけないつて、先生もおつしやつたじやないの。御病氣に悪いんですもの。ねえ、我慢して頂戴！」

「いやだ、僕はもう死んでもいい！」

「駄目よ！ ほら、お咳が出るじやありませんか——、ねえ、そんな自棄をおつしやらずに、我慢して早くお癒りになつて……」

「僕がこんなに苦しんでるのに、千加子はなんともないの？ え？」

若い夫は、微熱の手で妻の肩をつかみながら、さぐるように、そむけた顔をのぞきこんだ。筋ばつたその手は、押しつぶされた性欲で小さきみに震えるのだ。

生活と療養費のために、千加子は銀座のバーにつとめ始めた。やつれた妻は、華かな夜の世界の空気に触れて、みるみるその美貌に艶を加えていった。それを病床で見上げる夫の眼は、焦燥と嫉妬で狂ほしく燃えるのだ。圭作の病状は、この頃どん底の状態にあつた。

「いやだ！ 療養所なんかにくくものか！」

僕は、死ぬまで君にへばりついてやる！」

「無茶ばかりおつしやるのね。だつて、これ以上悪くなつたらどうするの？」

「判つたよ。君は病人の僕が厄介になつたんだらう？ 僕を療養所にやつて、身軽になつて、さんざん勝手なことをして遊ぶつもりなんだろ？ え、千加子、そうだろ？」

「あなた、どうしてそんな情けないことをおつしやるの……」

「無理もないさ。僕と違つて、君は健康な、そんな美しい躰を持つてるんだもの。だけど僕は君を離さない！ 自分のものに出来なくつても、僕は君から一日も離れないんだ！」

涙を流して絶叫しながら、圭作は病人とは思えぬ力で、グイと千加子の手首をつかんだ。だが夜の闇の中で、隣の床に千加子の寝苦しそうな吐息を聞くと、彼は病んだ。性欲は、異常に分裂してゆくようだった。

「眠れないらしいね、千加子？」

「……………」

「君には不自然なんだよ、この生活は——。こんな尼のような生活をするためには、君はあまりにも健康なんだ」

「……………」

「だからね、君は僕に遠慮しないで、恋人をつくれればいいんだ」

「なにをおつしやるの！」

「だけど、君が僕の知らないところで、よその男と寝るのは嫌だ！ 我慢出来ない！ 君のことは、どんな醜いことでも、僕はみんな知つていたんだ。知らないうちに裏切られるのはたまらないんだ。——だから、千加子。」

君は店の客をこの家に連れてくるんだ。僕の眼の前で、よその男に抱かれるんだ！」

眼が覚めた、全身、気味の悪い寝汗に包まれている。虚無的な絶望感がむしばまれた胸のあたりにうごめく。圭作はもはや病気の再発を疑はなかつた。しかし、これは妻の千加子には絶対秘密にされねばならない。

圭作はよろよろとタオルを取りに立つた。

彼は千加子の愛情を信じていた。そのことは一点の疑惑も抱いてはいない。これは、二人の愛情の上に組立てられた、奇形な夫婦の生態なのだ。何時の間にか、そんな異様な刺戟なしには過されぬ夫婦が出来上つていた。病状が快転しても、圭作はもう千加子の躰を求めようとはしなかつた。もはや彼の性欲は、妻によつて満たされるべきではなく、不自然に抑制されるべきものだった。

病中の激しい闘いが、そんな変則な夫婦の型をつくり上げてしまったのだ。圭作はもう甘んじて、この型から脱れ出ようとはしない。妻とその情人のたわむれを眼前に見る異常な亢奮は、圭作にすべてを忘れさせた。豹変する妻の鞭は、彼のマゾヒズムの血を歡喜させるのだ――。

夜が更けてくる。圭作は立ち上つてノロノロと掃除を始めた。もうすぐ千加子が店から帰ってくる。又酔客を連れてくるかもしれない。来ないかもしれない。圭作は妻と、その情人を迎える支度にとりかかるのだ。終電近くになると、圭作は待ちきれなくなつて、底びえがする戸外に出て遠い闇を透して見た。

彼は千加子が決して外泊しないことを信じていた。夫の面前以外では、彼女の不貞は成立しないのだ。

千加子は今夜も情人を連れて帰るか、どうか？――圭作はスリルに似た激しい期待を抱きながら、深夜の門前に立ちつくしていた。

倒錯の血

商用で関西地方に旅行した大垣は、半月ぶりで銀座に現われた。

ネオンも女も、肌ざわりが異つた関西とは違つて、彼はホームグラウンドにかえつたような、気易さを感じるのだ。彼はなにか新鮮な蕩心を抱きながら、バー・メトロポリスのドアを押した。

声をかけると、千加子はふりかえつて複雑な微笑を見せた。

流行色の、薄紫に光るサテンのドレスを裾長に着た彼女は、まるでオペラのヒロインのように、華かな哀愁をただよわせている。思いきりカットしたネックラインから艶々しく脂肪をおびた白い肌、ハツとするような輝きを見せて遊客の目を奪う。黒曜石の首飾りが、素晴らしく効果的なアクセントを見せているのだ。

傍に腰を下した千加子を見て、大垣は彼女がああ時から一層美しく、豊かに充実していることを知つた。まるで男の生血をすすつて己の血肉にするような、妖しい女体の神秘だ。

この女がこんなにも魅惑的な原因を、俺は知っている――。そう思うと、大垣は身震いするような快感に打たれた。

千加子は、そんな彼の亢奮を見透したように、顔をよせて笑つた。

「あの時以来だね？」

「うふふふ」

「君の旦那さん、その後元気かい？」

「ううん、あの人、わたしにはかくしてるけれど、どうやら又再発しちゃつたらしいの。

ひどくやつれちゃつたわ」

「じゃあ、君の、例のゲームは当分中止なんだね？」

千加子は黙つて顔を振つた。切れ長な瞳が謎のように宙をみつめる。

「驚いたな。そんなことを続けていたら、とりかえしがつかないことになつちやうぜ？」

「だつて、あの人、あんなにきかないんですもの……」

「それから、君の妹も、承知しないんだろ？」

「そうかもしれないわ――」

そう答えて、彼女は又笑つた。

その微笑には、大の男をひきずり込むような恐ろしい力がある。学生時代からの女の修業を積んで、自他ともに蕩児を以て任じている大垣にも、それはかつてない経験だつた。

夫の面前で行われる姦通――。その強烈な倒錯の世界に、引ずりこまねずにはいられないのだ。

この前の夜のように、車が門の前に止つた。千加子はハイヒールで二、三步小砂利を

蹴つたが、ふと立止つて辺りを見廻した。

「へんねえ、あの人がどうしたのかしら？」

何時も門の前で待っている、圭作の姿が見えないのだ。なにか不安を感じたように、

小走りに駆けこむ千加子の中から、大垣はうつくり玄関に入つた。

「どうしたの？ あ

なた」

「いや、どうもしないよ。ちよつと眠くなつたから、横にな

つただけなんだ。もう起きる——」

「無理しちや駄目よ。——あら、こん

なに熱があるじやありませんか？」

「なんでもないよ、風邪なんだ……」

床の中に、半月前よりも一層頬のこけた圭

作が横たわつていた。枕元にコートのまま坐つた千加子の肩ごしに、大垣の姿を見ると、

その瘦せた病人の表情が、如何にも嬉しそうにニヤリと笑つた。

それはまるで、子供がさんざん待兼ねたお

土産を、やつと手に入れた時のような手放しの笑顔だつた。大垣はなにか慄然としたものが背筋を走るのを覚えた。

「あら、あなた、どうするの！」

「死んでもいいんだ！ ねえ、この人の前で

うんと僕を虐めてくれ！ 思いつ切り鞭打つてくれ！ もう僕は我慢が出来ないんだ……」

「あなた！」

「千加子！ お願いだから……」

よろよろと立ち上つ

た彼と、千加子とがもつれ合つた。千加子の

顔は圭作よりも蒼くなつて、眼尻がギリギリ

とつり上つている。

ピシッと寝巻が裂けて「ああッ！」と圭作

が満足そうな呻き声をあげた。白々した電氣

の下に、骨だらけの男の裸身がむき出しになつたのだ。

こんな、骨と皮ばかりの病人の躰の何処に

うか？——大垣は千加子の鞭の下で、妖しく

くねつてゐる圭作をみつめながら、こんな形でしか愛し合うことの出来ぬ、夫婦のすざま

じさに打たれた。



「千加子、お願いだから、何時ものように僕を打つてくれ！ この人の前で、僕を裸にしてくれ！」

「駄目よ！ そんなことをしたら、死んじやうわ！」

丁度、叩き売の景気つけに使う叩き棒のよう、扁平になつた先の方に布を巻いた棒が力の限りふり下される。疊の上に、まるで一枚の板のようにつぶせになつた圭作の尖つた臀部に、喰いこむようにピシリ！と鳴る。その度に、圭作は喘ぎながら、快感に耐えられぬもののように、激しく手足を痙攣させた。「なによ、弱蟲のくせに、病人のくせに、まだ虐められたいの？ え？ 返事をしてごらん！」

「千加子！」

「まだあやまらないのね、まだ虐められたいのね！——ちよつと、大垣さん、その縄をとつて頂だい！」

何時の間にか、大垣も千加子と同じ心理状態に陥入つていた。呻いている圭作を見ると、足りしたいほどにも狂暴な血が沸いてくる。ジツとしてはいられなかつた。責めて、責めて責め抜いてやりたい！ その一つの執念に憑かれて、彼は前後を忘れた。

この骨だらけの憔悴した男が、こんなにも健康な男女の血をかり立てるのは、一体どうしたことなのだろう——。

幾本もの縄が、圭作をガンジがらめに縛り上げた。海老責め——。首を下腹部につつこ

むようにした、異様な姿態のまま圭作はまだかすかに呻いていた。

千加子はまったく自由を奪われた夫を、勝誇つたようにみつめた。それから、ギラギラとその瞳を輝かせて、雌獣のように大垣に挑んでくるのだ。

本能だけが、火花のように飛び散る、幾分かが過ぎた。大垣は腕の中で、重たく静止した千加子を抱きながら、ふと今迄聞えていた圭作の呻き声が止つたのに気がついた。

それはまるで妻とその情人との快楽を助長する音楽のように、絶え間なく圭作の唇から洩れつづけていたのだが——。

「あッ！」

大垣は夢中でハネ起きた。震える指が縛られたまま、傍にころがつた圭作を指さしている。

「死んでいる！」

千加子は、まるで豫期していたもののよう、静かだつた。裸体のまま、自分で縛り上げた夫の顔をのぞきこんだ。

その顔も胸も腹も、ドス黒い血の海だ。血の中で彼は絶息している。大暗血による呼吸困難で息が絶えたことは、誰の眼にも一目瞭然だつた。

「死んじやつたわ、この人……」
始めて夫の跡に頬をよせながら、千加子は呟いた。

「どうせ死ぬんなら、何年も前から、あんなに苦しんで禁欲することはなかつたのに……なんのために、あなたはあんなに苦しんだの？ オホホホホ、馬鹿ねえ、あなたつたら……」

縛られたままの夫をひと抱きしめて、うつろな笑顔をひびかせながら、千加子の背は激しく波打つた。

圭作の顔は、まるで無上の快夢をむさぼる人のように、莞爾と微笑んでいた。

大垣は塑像のようにつつ立つたまま、圭作の吐いたおびただしい血が、その下腹部を無気味に染めているのを見た。

愛 読 者 通 信

小生四十才のペデラストです。身体、容貌、中の上。決して女性的ではありません。相手の方は、まじめでおとなしい三十才位までの方であれば結構ですが、少年臭の持主ならいゝと思ひます。肥つて色白な、餅肌なら理想的です。御連絡下さい。(M K生)

談 會

本誌 本日はお忙がしい中
をお集り戴いて有難うございま
した。「風俗草紙」の読物の中

★出席者の
ソドミア歴

(十月十日 午後
於・新宿「夜曲」)

(本誌)	氏	家	富	良
(作家)	鹿	火	屋	一彦
會	山	本	辰	夫(23才)
社	杉	田	等(32才)	
員	藤	井	正	治(22才)
雜	同	店	ボー	イ
貨	新	宿	「夜	曲」
店	マ	ス	タ	ー
主	芳	村	豊	(42才)

出

席

者

寫眞説明 向つて右端からボーイの藤井氏、マスターの芳村氏、作家の鹿火屋氏、読者の杉田氏



男色の歡びと惱みを語る……

座 大 あ み ど そ

都内で一番古い歴史をもつソドミア喫茶店『夜曲』のマスター芳村氏を圍んで、本誌は全國のホモ黨諸兄の爲に座談會を取行した。かゝる本格的な企ては本誌が始めて行うもので全讀者の御愛讀を乞う次第です。

でも、ホモに関するものが一番反響が多く、また地方の讀者の方からの、交際や文通の斡旋、座談会開催などの

要求が非常に多いものですから、今日は東京で一番古

い歴史をもつ斯道の喫茶店（兼酒場）『夜曲』のマスターを中心にボーイの藤井さん及び讀者の杉田、山本両氏に集つて戴いた訳です。鹿火屋先生に一つ司会をしていただいて、皆さんから、ザックパランにいろいろお話ねがいたいと思つております。それでは、鹿火屋先生どうぞ。

鹿火屋 大体、「風俗草紙」はホモを理解し協力してゆくという編集方針であつて、これはホモという性現象に関心を寄せている僕としても、またその現実の渦中にある皆さんたちにとつても、悦ばしいことだと思ふのです。

いつの世、いずれの国でも、戦後には同性愛者が殖えるといわれておりますが、今次大戦後の日本におけるホモの激増は、僕の知るかぎりでも大変なもので、地方などでは流行の観があるくらいに、ふえている



状態です。そこで、今日は東京における、その傾向の方たちを集つて頂いて、自分自身の体験や、また東京における同性愛者のありのままの実態などを語つて頂き、誌上を通じて全國の讀者に知らせて、歡を分かちたいというわけです。

座談会の主旨がそういうわけですから、今日は固苦しい理屈は抜きにして、私も聴き役に廻り、主役は皆さん方にやつて頂こうと思ひます。

で、まず最初に、皆さんから、自分のホモの傾向、及びソドミア歴のようなものを話していただきたいと思ふのですが……杉田さんの傾向は、ウールですか、ペデですか？ どちらかというところ……。

杉田 その両方じゃないかと思ふのです。何しろ私はその方の実際の体験は浅く、実際にこの方面の方たちとおつき合いを始めたのは、まだこの九月からなのです。そういう傾向は、前からあつたのですけれども……。

鹿火屋 山本さんの傾向は？

山本 ぼくは、まあ、ウールニングでしようね。そうして年令の好みは若い人というのは全然興味がないんです。年配った人一点ばり……といつても三十以上くらいの人ですけれども……。

杉田 私もやはりそうですね。私は三十二歳ですが、同年輩以上の方がいいですね。

芳村 うちへいらつしやる方には、若い方を好きだという方が多いですね。そして中年から上の方がいいという方たちは、たいてい浅草へいらつしやるようですね。浅草にもこういう飲み屋——喫茶はありませんけれども——があるんです。若い人を好きな方は新宿のお店へといつて、うち辺りへきてくださるのです。

鹿火屋 マスターは、大体の傾向としてはペデラストの方ですか？

芳村 (含羞んだ表情で) どちらかという、男性的な人を好むのではないでしようか。

鹿火屋 お宅のお客さんの傾向は……。

芳村 やはり男性的な、テキパキした人を好みますね。つまりそういう方々の心理というものは女性的ですから、ちやうど女性が男性を好む場合と同じように、男らしい人を好むわけです。ですから、人形のような子供よ

り、野性的な子供の方が好かれますね。

鹿火屋 あなたの、最初のホモの経験といえますか、それは……。

芳村 やはり先天的なものではないでしようか。昔の本にはあまり露骨には書いてありませんでしたけれども、それでもやはりそういうことは雑誌などにも出ていましたから、そういうものを讀んだりして昂奮していたものです。同性愛というものは、それこそ十三、四くらいから感じておりましたし、また経験もありましたの。

杉田 私の場合でもそうですね。そういう頃から、芽生えはあつたのです。けれども、実際にこういうおつき合いをするようになったのは、さつきも申上げましたように、今年の九月に入つてからです。

芳村 東京の方にしては、ずいぶんおそかつたですね。

杉田 いえ、私は、農村に育つて、終戦後東京にきたのです。

芳村 終戦後、こういうことが、はなばなしくなりましたからね。

本誌 杉田さんは、ご家庭をお持ちですか。

杉田 持っています。大体、私は養子です

が、終戦後、まア漠然と結婚しまつて、子供も二人儲けましたが、どうも妻があまりセックスの方に関心がないのです。それで、自分の性慾のハケ口というものがなかったために、悶々としていたうちに、そういう人の集まる所が、新宿にも浅草にもあるということを知つたものですから、それから新宿へ行つて初めておぼえたわけなのです。けれども、一番最初の時には、やはりこわくて、そのまま帰つてきてしまつたですね。

本誌 一番最初の経験というのは、どういふのですか。

杉田 映画館です。そして、そこで知り合つた方から、日比谷にも銀座にもあるということを知りました。

鹿火屋 映画館での経験はいつ頃ですか。

杉田 九月初旬でした。

鹿火屋 相手の人は、年輩の人ですか。

杉田 若い人が多かつたのですが、私は若い人にはあまり興味を持っていなかつたし、年輩の人にも来ましたけれど、これも何か不安でそのまま帰つてきてしまつたのです。

本誌 山本さんはいつ頃からですか。

山本 そうですね。中学二年、数え年十六のころです。その頃に学校の先生からそ

うことをされたのですが、その時は別に同性愛とかなんとかいうことは深く意識していなかったし、わからなかったもので、ただ可愛がつてくれるのだと思っていたのです。所が、戦争中、学徒動員で工場へ働きに行っている時に、なにしろ集団生活であつたために、そういうことがあつたわけです。しかし、今みたいになんかということが一般に広く云われている頃ではなかったから、よく知らなかったのですけれども。

鹿火屋 マスターは、女性との恋愛の経験というのとは全然ないですか。

芳村 そうですね(笑)。

杉田 私は女性とも猛烈に恋愛をしたことがあるのです。それで軍隊にいる頃でしたが、一日に四通くらい女からの手紙がたまりましたね、週番士官や中隊専任将校からずいぶん怒られたりしたくらいだったのです。

本誌 山本さんは、女性との恋愛は全然ないですか。

山本 ぼくがこういうことを知つたのは、終戦後二十四年からです。だから、それまでは普通の人と同じで、女性との恋愛の経験もありましたけれども、それはうまく行かなかつたのです。女性との恋愛だつたら結婚へ

行くというコースが決まっていますからね。所が、こちらの方になると、複雑であるし、おもしろさも強いのです。といつても、女を見るのもイヤだというようなことはありません。やはり美しいとも思うし、魅力もある程度感じはするのですが、しかしただ同性愛の方がもつといいと思うだけです。

★ホモと結婚

鹿火屋 マスターは終生、独身を通されま

芳村 今さら結婚ということは、考えても

鹿火屋 山本さんは結婚については？

山本 ぼくは普通に結婚します。

鹿火屋 自分の意志ですか。

山本 自分の意志が半分と、両親への考慮が半分と……。どちらかというと、ぼくは、

性格が楽天的なのかも知れませんが、あまり悩むことはないのです。今までずいぶん考えたけれども、これからは結婚して家庭を持つて行くつもりです。

鹿火屋 相手の女性とうまく行くと思ひますか。

山本 そうなれば、うまく行くと思ひます。

杉田 私の場合でも、至つて円満に行つて

鹿火屋 それで夫婦間の愛情は？

杉田 おたがいに信じ合つていれば、こういうことは円満に行くのではないかと思いますね。

鹿火屋 奥さんは、あなたのホモの傾向を知っているのですか。

杉田 いや、知りません。

山本 ぼくのつき合っている人の場合は、たいていその奥さんがこういうことを知つていて、その人は奥さんに自分のこういうことを訴えて、奥さんの方でも、理解しているらしいですよ。

芳村 杉田さんはご養子さんだというお話ですが、うちへいらつしやる方には、ご養子さんの方がずいぶん多いですね。でも、結婚なさつて五年も八年も奥さんをそのままにしていらつしやる方が多いのですけれども、そういう方の奥さんは、ほんとうにお可哀そうだ

と思います。

杉田 私の場合、むしろ妻の方が、夫婦関係をとてもいやがったのです。

本誌 今、全然同衾なさらずにいて、奥さんの方から何か云い出さないですか。

杉田 全然云わないですね。どちらかというと、うちの女房はおとなしいですね、家族は六人家族ですが、家族の衣類から何から全部、私の好みで、私が買つて与えるような状態で、妻は一年中ほとんど外へも出ないようなわけです。

鹿火屋 山本さん、勤め先の会社なんかではホモの傾向を隠していますか。

山本 ええ。別にそんなことを見せようとも思わないしね。

鹿火屋 ご両親なんかは？

山本 知らないですね。ただ友だちがいてつき合っているのだと思つていますよ。

鹿火屋 マスターは男性的なタイプがお好きと云われるが、外見がですか。

芳村 外見も性格も——そして、それを征服するのが、何か楽しみ……とでも言えましようか。

鹿火屋 マスターは店のお客さんとも恋愛などされますか？

芳村 お店のお客さんとは、私はなるだけ避けるようにしています。中にはいろいろ心を寄せて下さる方もありますが、店のためにはそういうことはしない方がいいと思ひまして、じつところえております。よく地味から手紙をいただいたり、またわざわざ訪ねていらつしやつてボーイに使つてくれといつてきたりする方もありますが、そういう方々はわりあい心持が浮わつていますから、使つたことはありません。

★ソドミアの情事

鹿火屋 マスターが愛人に会われる時は、その場所なんかは……？

芳村 別に決つておりません。

鹿火屋 失礼ですけれども、セックスの交渉はどういう形で……Afterとか相互Oranieとか……

芳村 ……。

鹿火屋 杉田さんなんかはどういう……。

杉田 私は、ほんとうにまだ浅いですが、自分の方から積極的に愛情を示すというようなことはまだしてないのです。

芳村 私なども、どちらかというと、一対一でおたがいにほんとうの愛情が高まつた時にするようにします。よく四人でも、五人でも一緒に一つホテルへ行つていろいろな遊びをなさる方たちがあるらしいですけどもね。

杉田 そういう人がありますね。私の場合にも、三人で遊びたいという人がありましたけれども、私は、三人で遊ぶのはおことわりだといつてことわつたのです。

本誌 しかし山本さんなんか、相手の人とどこかへ行かれた場合、もうセックスの処理まで行かなくては、納得できないでしょう。

山本 そういう時もあるし、そうでない時もあるけれども、やはりそうなつちまう時の方が多いかな。

本誌 場所は？

山本 大抵ホテルなんかへ行きますね。

鹿火屋 男と男とでそういう所へ行く場合は、先方で変に思いませんか？

山本 そんなことはもうどこのホテルでも知つていますよ。

芳村 昨今ホテルの女中さんあたりはみんな心得ています。

杉田 私なんか日が浅いから、旅館へ行く



写真左は鹿火屋氏 右は芳村氏。芳村氏は女形出身なので態度の柔らかな紳士タイプである。

時にきまりが悪いですね。誘われても、二度と同じ所へ行く勇気がないので。

本誌 セックスの処理まで行くには前戯的なテクニックはなさるのでしょうか？

山本 もちろんそれがなければ……。

芳村 昨今の若い方たちはアメリカの方とつき合っていますし、あちらの方がとても濃厚ですからね。ですから今の若い人の方が、われわれ年輩のものがビツクリするような遊びを知っています。

山本 パン助なんかでも、外人が好きだというのと、それから嫌いだということとありますが、この方にもやはりそういう傾向がありますね。

鹿火屋 山本さんは、被動的なのですか。

山本 ぼくの場合には、

年取った人を好むでしょう。だから被動的ということになるのではないかな。

鹿火屋 性交渉はアヌス？

山本 さア、困っちゃうな（笑）。

鹿火屋 僕の所へよく手記が送られて来ます。それには性交渉についても詳細に書いてありますが、一番多いのは相互 Onanie と Fellatio です。

芳村 そうですね。終戦後あちらの人たちが来るようになってから、とてもその方が烈しくなりましたね。変な話ですけども、あちらの方は、身体じゆう、足の指の股まで親づきするらしいですよ。うちへいらつしやるある外人の方が、若い子を連れて行つて遊んだことがありますが、あとでその若い子がうちへきて、「マスター、おどろいたよ、あの人がコップを持ってきておしつこをしろしろとあまり云うから、出たくなかつたけれどもしたらば、それを飲んだよ」といつていましたね。それからもう一人別の子がやはり外人と遊んだ時には、その外人から大便をしろといわれて便所へ行つて大便をしたらば、一緒に便所までついてきていて、その若い子が紙で拭こうとしたらば怒つたので拭かないでそのまま便所から出てきたらば、それをべ

ロペロなめて、おいしいおいしいと云つたというのです。

鹿火屋 尿飲症というんですね。ずいぶんあるらしいですね。

芳村 Samen を飲む人も多いらしいですけれどもね。

本誌 相互 Onani。なんかだつたら映画館でも簡単に行えるわけですね。

杉田 ですから、映画館なんかで実際やつていけるのではないですか。私たちもよく見受けまされどもね。

本誌 しかし映画館なんかでのそういう情事も案外スリルがあつて、好む人には好まれるかも知れませんか。

鹿火屋 相手の好き嫌いは何か勘ですか。

山本 そうですね。なんとなくインスピレーションでピツタリとくるのです。

芳村 容貌ではないですね。

山本 そうです。ぼくも顔なんかほとんど問題にしないです。けれども、あまりノッペリした人はイヤです。

杉田 それと清潔でないイヤですね。

芳村 所がまた、不潔なのを好む人があるのですよ。私なんかはやはり清潔な人を好みますから、ホテルなどへ一緒に行つた時に、

相手の人がパツと着物を脱いだ時、真ッ白いパンツでもはいていると、なんともいえない昂奮を感じますが、反対に不潔だと、イヤになりますね。

本誌 マスターなんか相当ご経験がお有りだから、Ejaculation までには、相当前戯的なものを要するのではないのでしょうか。うちくを傾けて、タツプリ楽しまれる方でしょうか。

芳村 その時の気分によります。早い時はほんとうに早いし、そうかと思うと、一時間も楽しめる時もありますし……。

鹿火屋 ホモの場合、やはり四十八手というような体位があるのですか。

芳村 みんなそういうのを見て行方なのでしょうし、結局、男女の場合と同じではないですか。

鹿火屋 昔の陳問というのはバックでやつたのですが、普通のノンプロの方はバックですか。

山本 バックなんか大嫌いだから、あれだけはやらないという人多いですよ。

芳村 今、一番多いのは「お尺」ではないでしょうか。私は、この飲食店をやる前には、演劇界の連中は皆バックでしたから、こ

ういう関係にはバック以外にはないものかと思つていたので。それが終戦後いろいろな方とおつき合いをするようになってから、バックなんかはあまりなさらないで、「お尺」(註・フェラチオ)の方が主のようだということがわかりました。またその人その人によつて、絶対バックでなければいけないということもあれば「お尺」でなければいけないということもありますから、一概にはいえませんけれども、とにかく終戦後キスと「お尺」だけはとても普及されましたね。

鹿火屋 杉田さん、奥さんと交渉の場合は、相手を女性と意識してなさつたのですか。

杉田 まア夢を持つてね。

鹿火屋 相手が男性だというイメージをですか？

杉田 ええ。

本誌 マスターは結婚のご経験も、女性との交渉のご経験も全然お持ちにならないのですか。

芳村 ええ。

杉田 それに対して周囲では、なんとも思わないのですか。

芳村 劇界にいる間は、周囲でも全然そういうことを勧めもしませんでしたけれども、

飲食店を始めましてからは、結婚話もたびたびありまして、見合いも何回も致しましたし、そのたびに及第して、「ぜひ」と云われたこともありましたけれども、こちらは初めからただ世間の手前だったものですから、いつもおことわりし、先方にはお氣遣いしております。

本誌 劇界には永く……。

芳村 十年ばかりおりました。

鹿火屋 女形をなさっていたのですか。

芳村 そうです。

鹿火屋 芸能界には、この方の人はずいぶん多いそうですね。

芳村 多いですよ。女形の方はたいいていそうでしょう。

鹿火屋 関西のSの一座にもそういう人はずいぶん多いらしいですね。

芳村 あの方々もみんなお友だちで、東京へくると、ずいぶん遊びにきて下さいます。

★ボーイ稼業うら話

(「夜曲」のボーイ藤井君出席)

本誌 藤井さんは「夜曲」にいつ頃から居られるのですか？

杉村 うちにもう五、六年になります。その間に一度お嫁に行きましたが……(笑)。

鹿火屋 藤井さん、ボーイさん同志で愛情を感じることはないですか。

藤井 そういうことは感じないです。

鹿火屋 ホモの傾向が同じだからですか。

ウール同志というような……。

藤井 別にそういうわけでもないでしょうね。

鹿火屋 自分と同じ傾向のお客さんがきた場合どうしますか。幾分反撥を感じないですか？

藤井 別にどうということはないですよ。お客さんが好きだとか、嫌いだとかいうだけですけれどもね。

鹿火屋 男女のアベックのお客さんがききますか。

芳村 うちの店は、普通の方はふしぎと入っていらつしやらないのです。たまに男女のアベックの人がきますけれども、何も知らない人かと思うと、そうではなくて、どこかで私の店の話をきいてきて見学に来た方なのです。(笑声)

山本 「フランスウィック」や「イブセン」は普通の人にもきますけれどもね。

杉田 こういう所を知っている人は全体からいうと少数ではないですか。

芳村 知つていてもこういう所へくるのはイヤがる人もあります。ホモの人でもね。そして映画館とか公園とかいう所へばかり行く人もあります。

鹿火屋 お嫁に行かれた体験談を一つ(笑声)……それはお客さんの所だったのですか。

・藤井 そうです。

芳村 それはこうなのです。お客さんが三、四人で店へいらつしやいまして、ちよつとこの子を貸してくれないかとおつしやつたので、営業中は絶対出さない方針ですからいつておことわりした所が、マスター、大丈夫だ、すぐそこでお茶を飲んでくるだけだからとおつしやるし、一対一ならば出さなかつたのですけれども、相手の方は三、四人でしたから、この子を出しました所が、さア三日も帰つてこない、どうしたかと思つて心配していた所が、四日目にフラッと歸つてきました。どうしたときいた所が、実はあの方が永久に自分を幸福にしてやりたいし、自分が経営している会社で使つてやるからまじめに働けとおつしやつただけだともいいます。

から、私も、それならば行きなさいといつてその方の所へ出してやつたのです。最初のうちは、会社の方も順調に行つていたらしく、

この子も部屋を借りて貰つて、そこから会社へ行つていたのですけれども、そのうち、小さい会社でもあつたし、うまく行かなくなつたとみえて、解散になつてしまつたものですから、その方がご自分のお宅へ連れて行つたのです。その方の奥さんは、そういうことは知らなかつたのですが、とにかく会社で使つていたボーイまでお宅に置くわけには行かなかつたと見えて、奥さんが冷く当たるようになり、それからこの子も私の所へ相談にきましたから、それではまたうちの店にいなさいといつて、今いて貰つてゐるのです。

鹿火屋 相手は年輩の人だつたのですか。

芳村 もう四十くらいの人なのです。

本誌 お店で働いていると楽しいでしよう。

芳村 それは楽しいでしようね。とにかく

皆さんが、たとえコーヒ一杯でも飲まなければ来られない店に、しかもこの方の店に月給を貰つていただけるのですからね。ですけれども

芳村 そうです。
鹿火屋 ずいぶんお客から誘惑があるので



写真は『夜曲』入口

藤井 ずいぶんありますね。

芳村 でも、やはりこつやつて店に永く働いていまして、お客の心理をちゃんと心得ていて、この人は真実があるかどうかということを見分けますから……

鹿火屋 ほんとうの愛情だつたらばどうされます？
芳村 その場合には、いくら主人でも止めるわけには行きませんね。人の恋愛は妨害したくないと思ひますから……

本誌 読者で写真なんか

ども、うちではボーイさんには決してみだらなことはさせません。
本誌 こういうお店でも、やはりきれいなボーイさんを置けば、そのボーイさん目当てにくるお客さんが多いでしようね。

を同封してきて、こちらのよう店なボーイに世話をしてくれという人がとても多いのです。……藤井さん、マスターがおられて、お話しにくいかもしれませんが、打ち明け話というか、楽しいこと、つらいことを何

か。

藤井 別につらいということはないです。

芳村 お客さんに積極的に出られて、それをおことわりするのが、一番つらいのではないかと思いますね。

藤井 商売のことですから、お客さんを怒らしたくもないし、といつて、別にお客さんをたらし込んでお金を使わせようということもないし……。

本誌 とにかく、ぜひ紹介してくれという人が多いですよ。

芳村 そうでしようね。地方の方はずいぶん悩んでいるでしょう。

本誌 好きなお客さんがくると、うれしいでしょうね。

芳村 そりやあそですよ。私でさえ浮き浮きしますもの（笑）。

鹿火屋 藤井さんは、最初に同性愛を意識し始めたのは幾つぐらいの時ですか。

藤井 十八です。

鹿火屋 やはり年長の人ですか。

藤井 二十代の人です。

本誌 お客さんの誘惑というのは、どんな形で……。普通のバーなんかでは、お客がお金を見せて誘ったりするのですけれども。

藤井 そういうことはないですね。

芳村 やはりその人々によつてちがいますね。映画へ誘つて徐々にという人もありますし、積極的に今晚すぐ泊りに行こうという人もいますし……。しかし初めからあまり積極的な人には、職業的になりますからおことわりしています。まアこういうことは、最初はきれいな恋愛で行つて、おたがい心持ちがわかつた時初めてセックスに行くのではないでしょう。

本誌 三人も五人もお客さんに慕われたら、ちよつと厄介でしょうね。

芳村 三人や五人ではありませんよ（笑）。

★東京のソドミア社交場

鹿火屋 ところで、東京には、こういう喫茶店や酒場はどのくらいありますか。

芳村 そうですね。昨今ずいぶんできましてね。新宿に四軒、それから、銀座の方は、銀座から新橋にかけて、一週間ほど前に開店したお店もありまして、それを合せてやはり四、五軒あります。終戦後、二十一年に私がここへ始めました時には、東京にはほかにまだ一軒もなかつたのです。ですから、その頃

は、お客さんがどのくらいいらつしやいましたことか！ 大変なものでした。それがだんだんあちらこちらへこういうお店ができるようになってまして、散らばつて行つたわけですよ。でもやはり地方から、私の店のことをきいて慕つてきて下さる方もありますし、また店も古いだけに、古いお客さんがしばらくぶりにたずねてきて下さる方もありましたね。

山本 銀座の「B」店は三島由紀夫の小説に書かれたので、宣伝にはなるけれども迷惑だといつていますね。あすこは二階はそういう方の人を上げますが、階下は普通の人知らずに入つていきますからね。

本誌 こういう所では、お客さんの扱いにもなかなか苦心がお有りでしょうね。

芳村 そうですね。十人寸色ですし、階級もさまざまですからね。

鹿火屋 たとえば山本さんみたいな人は、こういう所へは、どういふお考えでおいでになるのですか。単なる休憩、それとも目的があつて？

山本 ただブラーツとくるので……。

鹿火屋 お客さんの中にペデの人があるからじゃない？

山本 まアそうですね。

鹿火屋 マスター、こういうお店はハンサムボーイばかりだから美少年趣味のお客さんはいいでしようけども、男性的なタイプを好まれる人はどうなのでしょう？

芳村 でも、この方のお店でも、なかなかガッチリしたボーイもいるのですよ。

山本 ここはよそにくらべてわりあい気易いでしょう。だから、そんなに意気込んでくるわけでもないのです。マスター、もう一つの「小春」(「夜曲」の支店)の方は、こゝとはだいぶ感じがちがうでしょう？

芳村 ええ。あつちの店は、わりにご年輩の方がお見えになりますね。

鹿火屋 客あしらしいの苦心談などを一つ……これでなかなか苦心がお有りでしょう。

芳村 ありますよ。今申しましたように十人十色の方がいらつしやいますし、それを見分けなければならぬし……中には立派な格好をしていらつしやるから紳士だと思つていきますと、猛獣のような方もいらつしやいますからね(笑)。

杉田 職業的な人は見えますか？

芳村 たまには見えますね。見えますけれども、そういう人は、どこかほかでできたお客さんを連れてきて、私の店でなごやかに飲

んでいらつしやいます。

★女性にも騒がれるボーイさん

鹿火屋 藤井さんは女の人には全然魅力を感じませんか。

藤井 セックスの方は別として、きれいだということは感じます。

芳村 だから、たまのお休みの時には、近所の女給さんたちに誘われて映画などをおごられることがあるようですよ。

鹿火屋 女の子からも好かれるでしょう？

芳村 そうです。うちのボーイさんはみんな綺麗だ綺麗だといわれています。それと、うちのお店へくるお客さんはみんなきれいな人たちばかりですねと近所の人たちが云いますが、それはやはりうちへおいでになるころころ傾向の方たちは、とくにいい男というのではないけれども、みんなちゃんと自分の好みに合ったものを身に付けていらつしやつたりしていますからね。

山本 普通の世界から見れば、みんな垢抜けた人たちがばかりですよ。

本誌 女性からの誘惑の場合は、サツと身をおかわしてしまうのですか。

藤井 こちらが冗談にやつているのに、向うから強引にやつてくることもありますね。

本誌 それはどまつわりつかれても、セックスの慾望は全然感じないですか。

藤井 男同志の場合よりもかえつてこわいような気がしてしまうのです。

鹿火屋 同性愛の因には、女性に対して恐怖の感情があるのではないのですか。女は近寄りにくい、男同志の方が気易いというよう……。

芳村 若い人たちが、初めて童貞を破る時に恐怖感で勃起しなかつたということがよくありますが、それと同じで、女性に対して不潔に感じたり、恐ろしく感じたりするのではないのでしょうか。

杉田 ここへきて、相手を紹介してくれという人もいますか。

藤井 います、そういう時には、こんどはこつちが仲人をするわけです。

杉田 そういう点は、なかなかむづかしいでしょうね？

藤井 それであとでダメだと文句をいつてくる人もいますよ(笑)。

本誌 Aのお客さんは好ましいが、Bのお客さんはそうでなくて、困ることもあるでし

よう。

芳村 そうすると、そこにいろいろトラブルが起きましてね。

杉田 最初から嫌いでつき合う人がいますか。

芳村 嫌いだつたらばつき合わないでしよう。

鹿火屋 「お嫁」に行かれる人もあるのですか。

芳村 ええ(笑)。ついこの間までいた子なんか、だいぶお客さんに好かれましてね、そのお客さんは地方の人で、東京へくると、その子をひっぱり廻して店を休ませたりするの、そんなことをされては困るといった所が、それでは月に幾らかやるから店をよせと云われて、店をよしまして、囲つて置かれる……といつてはおかしいですけども、とにかく専属になつています。

杉田 しかし、そういうことは永続きしないのではないですか。

藤井 その人が東京でなく地方の人で、ふだん離れていますから、かえつて続くのですね。

本誌 藤井さんは、お嫁に行つた時は、楽しかったですか。

藤井 それほどにも思わなかつたですね。

どうもなかなか思うようには行きません。好きな人には嫌われ、嫌いな人には好かれて……。

★ソドミアの變態・縦横談

本誌 ところで、マスター、同性でいじめたり、いじめられたりというのはありますか。

芳村 ありますよ。相手の身体を縛つて悦ぶ人があるし、また縛られて快感を感じる人もありますし……。

鹿火屋 縛られて悦ぶ方は、やはりウール傾向の人に多いのではないですか。

芳村 そうですね。外人のある人ですが、この人なんか、Fellatioしながら、また、させながら、革紐で叩いてくれといつて、ミミズばれになるのがとてもいい、いいというそうです。

本誌 藤井さん、変態的なお客さんにあつたことはないですか。

藤井 ないですね。ただし、つこいお客はあります。

本誌 しかし、好きな人ならば、いつこく

されてもイヤではないでしょう。

藤井 でも、あまり、つこいのはイヤですね。

本誌 アメリカの人は、同性愛でも、普通のことで満足しないのでしょうか。

芳村 そうらしいですね。

本誌 山本さん、外人の場合どうですか。

山本 嫌いではないけれども、やはり言葉が完全に通じないし、それと、日本人にくらべてあまり風呂に入らないので、ア、かだらけで……(笑)。

藤井 日本人の体質とちがいますからね。またそれがいいという人もいますけれども……。

杉田 外人の場合、最初不安ではないですか。

山本 外人でも、いい人と悪い人とあるでしょう。だから、あまり外人、日本人という区別をして考えませんね。

芳村 外人はとても親切だそうです。日本人はセックスの行爲がすんでしまうと、すぐクルリとお尻を向けて寝てしまう、けれども、外人はそれからあとのテクニックが上手らしいです。だから、私の知っているある人

などは、日本人の場合だつたら若い子でなければイヤだけれども、外人の場合ならば、年令に差別なく誰でもいいと云つています。

本誌 杉田さんなんかは経験が浅いから、変態的な情事の経験はないでしょうね。

杉田 経験はないですが、ある人は私が靜かに眠っている時愛撫したいから、どこか温泉へでも行つて泊りましようと言いましたけれども。

★男色の性技巧

本誌 テクニックも自然にいろいろなことをおぼえるのでしょうか？

芳村 ことに若い人たちは、年輩の人たちにおもちやにされますし、それがまた十人十色で、十人につき合えば十色おぼえられるというわけですからね。

鹿火屋 人によつてちがうでしょうけれども、どんなテクニックが一番喜ばれますか？

芳村 男女の場合とそんなに変わらないのではないのでしょうか。

鹿火屋 とにかく一方が男性的で、一方が女性的のですからね。ところでマスター、ウール傾向の人はどちらかというとマゾ性が

強い方だし、Abberの展覽性も強いだろうか、バックを喜ぶのではないですか。

芳村 そうですね。その人々の体質によりますね。若くてもどうしてもできない人もあれば、年輩になつてからでも平気で苦痛なしにやれる人もありますし。……ずつと前の話ですが、ある映画俳優がやはり物質に困つていましたけれども、たまたまうちへお茶を飲みにきていた時に、その方のベテランの人に見染められ、ムリに誘惑されてホテルかどこかへ連れて行かれたのですが、二、三日経つてから、その人がきて、ほんとうにあの子はなんでもできたよ、というから、初めてではなかつたかしらときいた所が、初めてなのだけれども、筋肉がやわらかいとみえてなんでも平気だつたといつていたことがありましたね。女のような体質で、Beesされたくて、ウズウズしている人があります。又、そうかと思えば、全然そんなセンスがなくても、お金欲しさにやる人もありますし……。

本誌 バックの場合、何か塗りますね。

鹿火屋 潤滑油をね。昔の陳間は丁子油などを使つたのでしょうか。

芳村 しかし、この方のベテランになると、別にそんなものを使いませぬね。

本誌 しかし、バックを好きな人には、バックが一番いいのではないのでしょうか。

芳村 ほんとうに女に飽きた人は、こういう傾向でない人でも、その方に転向する人があるのです。とにかく戦争で軍隊とか、徴用とかいうことのために、こういうことがとても普及され、その後さらにアメリカさんがきたり、それから新聞雑誌でずいぶん書き立てますから、このごろは世の中の人はずいぶんこういうことを知つてゐるのではないですか。

本誌 三島さんの本を読んだら、ポマードや何かを持つて歩いてゐる、ということが出ていますが、このごろはバックに使う特別の油ができてゐるのではないですか。

芳村 さア、どうですか。私の聞く話では、コールドクリームとかペニシリン軟膏を使つてゐる人もあるようです。昔はコールドクリームなんてなかつたですから、ワセリンなんかを使つたのですが、コールドができてからは、あれはことにいい香りもしますしね。それから少し衛生的に考える方ならば、傷ができた場合でもいいように、ペニシリン軟膏を使うというわけでしょうね。

本誌 好きな男性の象徴物なんかは、立派な方がいいのでしょうか。

芳村 十人のうち七、八人は、大きいのを喜ぶらしいですよ。

本誌 山本さんなんかは、Phallus に対してはげしい昂奮を感じますか。

山本 そりやあそうですね。

本誌 藤井さん、お店にくるお客さんでいたずらをする人があるでしょうね。

藤井 くるたびに、*Phallus* に触れてくる人もあります。

鹿火屋 触れさせますか。

藤井 別に触れさせるといふことはないです。こつちが見た瞬間、好きになつたのならばまた別ですけども、まア滅多にそういうことはしません。しかし、好きになるとお客さんが露骨になつてきて……

本誌 杉田さん、バックはどうですか。

杉田 私はイヤですよ。一度要求されたけれども、ことわりました。

山本 ぼくも絶対イヤですね。



『夜曲』の内部

本誌 バ

ックの場合、

初心者傷をつくつたりするこ

とも考えられますね。

鹿火屋

直腸を侵されることもあるらしい

芳村 そ

れもありますし、それから大腸菌

を受けて、ちようど淋病みたいな

ウミが出たり、いたんだりして、自分では淋病だと思つて医者へ行つてペニシリンを打つてもらつたりしたけれども、効かない。それ

から医者にはんとうのことを話したら、それじゃあ大腸菌だろうというので、その方の薬を打つて貰つて治つたそうです。だから、バックというものは、あまり感心いたしませんね。

鹿火屋 ところで、ホモ傾向の人は、自分でその傾向を直したいと思いませんか？

芳村 中にはそういう人もありますけれども……。

鹿火屋 マスターなんかどうですか。

芳村 私は死ななければ治らないと自覚しています。これはこういうふうに生まれてきているので、中性の人を愛するように本能的になつていけるのです。結婚して直そうと思つた人でも、やはり一年か二年で戻つてしまうのです。ですから私はよく「度を越さないようになさいよ。家庭を捨てないようになさいよ」といふのです。それからよく若い人たちがリツ（利益）のために犯罪に走ることがありますけれども、それを私は一番憎みます。愛情で行くべきことを、物質で行くといふのは……。

鹿火屋 山本さんは治療については？

山本 治したいと思つています。完全には治らないとしても、なるべく少くしたいと思

うのですが、それにはやはりある程度経験して幻滅を感じてしまえばいいだろうと思つて。

芳村 そうお思いになるでしょう。ところが幻滅を感じたと思うのはその当座であつて、一年、二年経てばまた戻りますよ。

鹿火屋 杉田さんは治そうという意志は？

杉田 やはり山本さんと同じですね。私の場合なんか非常に家庭ということを考えますし、あまり家庭を破壊したくないのでね。

本誌 藤井さんなんか、治したいという気持ちをお持ちになつていますか。しかし、楽しいでしょうね。

藤井 楽しいですね。

本誌 男女の場合だと、女の方が感度がにぶいだけに情事時間などは長い方が喜ばれるのですが、同性の場合はどうですか。

藤井 好きな人だつたら長い方がいいね

鹿火屋 ホモの人は精力を強くする方法は講じませんか。薬とか……。

芳村 そうですね(笑)。

本誌 こういう方の人たちは相手と話をつけるのに、男女の場合とちがつてセツカチだそうですね。

芳村 それはそうです。甲を口説いてダメ

だと乙に、乙を口説いてダメだと丙にというようにね。ですけれども、そうなるとおもちやにされているという感じで、そういう人は相手にされません。

杉田 映画館なんかでよくありますね。今遊んでいた人が、それが済んだと思うと、また別の人と、すぐ遊んでいる、というようなことがね。しかし、そういうのはとてもイヤですね。

本誌 映画館の中などで相手の見当はつきますか。

杉田 普通の人の場合だと、身体が接触することは嫌いますけれども、こういう方の人だと接触することを好みますし、それにそういう人のいる位置は大体決つていますから、そこへ行けばたいいていいるわけです。そして、自分がイヤな時には横へ退くとか、ほかの方へ行つてしまふわけです。

本誌 最後に、ホモのテクニクの種類について、何か……。同性同志で男女の正常位みたいな「ちね」はないですか。

芳村 ありますね。

藤井 ウール上位や、ペデ上位や……。

芳村 ですから、もう男女とちつとも変りはないのです。

藤井 お乳を揉んでくれたりする人もありますけれどもね。

芳村 それがとても快感をおぼえる人があつて、そうですね。

杉田 やはり体質なのでしょうね。

藤井 男でも乳揉まれると、乳首が固くなつてきますね。

本誌 山本さんなんかどんな場合に参てしますか。

山本 やはりキスが上手だといひですね。もつとも、相手の人を好きならば、どんなことをされても参りますよ。

本誌 しかし嫌いな相手からでも参つてしまふような泣き所みたいなものは……。

山本 ないですね。嫌いな人には、どんなことをされても、なんともないですよ。

鹿火屋 つまりホモには、ウールには、雪夫人はいないわけだ、ホモの愛情は何といつても心理的なものが主点になる、という結論になりますね。

本誌 それでは大体この辺で……他ではきけない実際の話題が沢山出てこの種の座談会の模範的なものとなり、ありがとうございました。

(終)

読者交歓室



さちすと

★平凡な挨拶ながら時下秋冷誠に良い季節となりました。

小生最近の読者ですがかつて関西にて出版されている風俗誌に比べて、貴誌のすぐれた内容に対し敬意を表しております。右誌では関東で此の種の雑誌は成立たぬであらうと自慢した記事が載っていた事がありました

が、どう致しまして立派な貴誌の存在が東男の実力を示しています、と申上げたい。

さて小生は少年の頃からある傾向が成長しても消滅せず、それが一種のマゾでもありサドでもある

事を貴誌より教えて頂きました。いわば一種の緊縛マニアなのです。今迄何の経験もありませんが、貴誌を見て一つの美の感覚に連るこの趣味も万更でない事が判りました。

他人を縛るには承諾がいりますが、自分で自分の体を縛る事は真似だけなら出来ますので、殊更の装置を工夫してひそかに楽しんで居ると言うより我慢していたのです。

ついでには貴誌の読者の中の同

傾向の方と共に楽しみ合う事が出来ればうれしいと存じます。横浜のTK様等に御意見、御指導頂ければ幸いです。何卒よろしく御願ひ申上げます。

(横浜 K 生)

★若きマゾ的女性へ

二十八才の男子ですが、東京都内の教養あるマゾ的女性と結婚致し度し、但し生命や、健康上の危険は勿論、傷つく事も絶対に避けるという条件付です。

従つて激しいマゾは敬遠します。而しサドでない限り、此の方面に理解と興味を有する方ならば、必ずしもマゾであるを要しません。何故ならサド行爲の

実行よりも、サド的小説を書き度く、「こんな物を書いて」と妻の無理解を怖れる爲なのです

本名を秘して結構ですから、本紙読者交歓室気付で、家族、略歴、趣味、写真その他をお送

り下さい。どうか勇気を振つて応じて下さる方を切望致します

(リストの愛の夢)

★僕は現在卅一才、妻子を持つている者です。体重五〇瓩、やせ型で眼鏡をかけていますが、人並の容貌です。どちらかと言へば女性的な性格で、小学生の頃から男性の縛られた絵や写真を見ると昂奮してしまいます。

ミケランジェロの逞ましい裸体面を好んで居ります。男性被縛の絵は女性のにくらべて非常に少ないので、拙い画ですが、最近では自分で描いて楽しんで居る有様です。

又、僕の場合は女性の被縛には何の興味も感じません。男性に限るのです。と言つても男色の経験はありません。

フアライ・グレンジャーや池部良の様な智的で秀麗なタイプとジョン・ウェイン三船敏郎の

第1集
泣むせびく
悦虐秘圖
写真
三枚
一組
五百四
キヤビネ判
印画紙焼付

眞寫
キヤビネ判印画紙焼付
三枚一組五百四

から、人生が急に明るく、大いに嬉しくなりました。

二十才から三十才位迄のサデイステックな御婦人に、一匹の奴隷として、あなた様のお靴を磨き、馬として跨がり、鞭打つて下さる方を求めて居ります。縛りあげお臀に敷いて苦しめられてもよし、蹴倒されて踏躪されても結構です。

そんな行爲に興味をおもちの御婦人、本誌気付けで御通信下さい。どこか表通りの看板のはつきりした喫茶店で御目にかかつてよいのです。個人の秘密と御貞操は、マゾヒストの意地にかけて御護りします。

(カナガワ人)

★胸を躍らせて十一月号を読ませていただきました。どの読物一つを取つても、それぞれが息づいて私に呼びかけてくれるような気がして……

横浜TK氏と悩みを同じくす

る者です。少年時代に投ぜられた、感化院でのうづくような体験が、私をしてマゾヒストの道を選ばしめたものと思います。とに角、男性女性を問わず私を縛り苛んで下さる方はいらつしやらないでせうか。日夜私を縛りに来る人の現われるのを心待ちにして居る者です。尙TK氏とも御文通願ひたいと思つております。是非御連絡下さい。

(横浜 KN生)

★私は二十八才、十六貫五百、身長五尺三寸、至つて健康体です。四十才位から五十五才位迄の重役タイプの御方に懽り、縛り責めに逢わして頂きたいと思つて居ります。御存知でしたら御世話頂きたいのですが、よろしく御願ひ致します。

(大阪 美津子)

★御誌九月号を始めて拜見した時、私の悩みを解消してくれる唯一の綱である事を知りました

第2集	第3集	第4集	第5集	第6集	第7集	第8集	第9集	第10集	第11集
岩風呂の被虐	制服の女學生	危機一髪處女責	エプロン責め姿	ガンヂガラメ	淫風淫ら責	やわ肌責五態	マニヤ地獄の女	白衣の看護婦	セーラーの女學生
写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真	写真
三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚	三枚
キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付	キヤビネ判印画紙焼付
五百円	五百円	五百円	五百円	三百円	五百円	五百円	五百円	五百円	五百円
サービス責め寫眞									
写真									
三枚									
キヤビネ判印画紙焼付									
五百円									

東京都千代田区
神田神保町二ノ三四
振替東京二四二五一番

日本特集出版社代理部

何故もつと早く御誌を発見出来なかつたのかと残念でなりませ

ん。
私は二年程前、或るサジの未亡人に三ヶ月程仕へて居りました。その時の事が忘れられず、今もつて木暮実千代の様な婦人を夢に見ます、若い方はいくら責められ、縛られても征服された感じが出ません。四十才位のどつしりした婦人を好み

ます。
馬乗り、叩き、くすぐり、何でも致します。御年輩の方私をいじめて下さい。遠方でも出かけて行きます。私は満十九才の女々しい男性ですが、童貞である事は広言出来ます。どうぞ、よい御方が現われます様祈つて居ります。
(大阪 奥村)

★去る日当地の書店で貴誌を発見し、一枚の内容の写真を見た瞬間、はつとなにかに打たれた様な感じがしました。一頁一頁

頁を重ねる度に、体中が熱くなり云うに云われない気持ちになつて来ました。

私は四十才になる社会的にも多少地位のある者ですが、青年期に女性に対して満されなかつた慾望が変形されて、この頃になつて女性の腰巻や、花やかな着物等を身に纏つたりして満足して居りましたが、それが次第に自分の体を縛る事により悦に入る様になりました。又、それを鏡に写す事の喜びを感じるのです。心では女性を縛つて見たいとも思ひますが相手がありません。マゾ六、サチ四、と言う様な女性がありましたなら是非御紹介下さい。
私は四十才で身長一六三、やや細身、です。

(愛知 K 生)

そ ど み あ

★貴誌益々御発展の程御慶び申

上げます。

殊にソドミア通信に狂喜の念をよせて、愛読して居ります。

小生の勝手な考へに過ぎませんが、類似雑誌の多彩な中で、貴誌の好評、良好な売行は一つには、ソドミア愛好家の実際に有用な連絡記事の多い事、及びその通信に対する努力のあとが表われている事に有ると思ひます。私達同好者にとつてはそれが、貴誌に対する第一の希望なのです。

扱て小生、中学生の頃より同性の体格よき毛深い裸体に魅力を覚え始め(兄二人は戦死、前後し父母も亡くなり、此のショックにより兄を慕うあまり、こんな気持ちに発展したものと思われま)社会に出て、夢に描いていた男性に逢ひましたが、父一人の家庭として意に沿わぬ結婚を急ぎ、半年にて離婚致しました。その後前記の同僚に思ひ

を寄せ続けましたが、彼は普通の異性愛の感覚を持つ人で、唯一度無理に許して貰つた肉体以外は談笑するのみにて別れて来ました。

しかし小生は、彼に似た人を必死になつて此の一年夢遊病者の如く探し廻りましたが、遂に見られませんでした。

どうか一日も早く心の友を御紹介下さい。京阪神の方なら分ありませんが、多少の距離はいけません。切に御願ひ申し上げます。
(メトロ)

★男色党に心から理解ある貴誌に接し、手に持つただけで興奮が起ります。

小生二十八才、五尺三寸中肉で浅黒く野性的で十人並より良い容貌です。

私の求める男性は十八才位より三十才位迄の野性的な、筋肉隆々たる人が最的ですが。私は能動、被能動どちらでも結構です

特にリンガの、逞ましい若々しいものを持つて居ります。喜んで提供致します。

私の理想とする男性がありません。したた物質的にも援助致します。私は身寄りもなく孤独で、広い屋敷に一人暮して淋しくて閉口して居りますので、一日も早く同棲生活を致したいと思ひます。同志の方御連絡下さい。

(岡山 M Y生)

★愛媛県下のそどもあ同好の皆さん。本誌の取り持つ縁にて一日楽しく交遊しようではありませんか。

来る十一月二十二日(日曜日)十二時に、松山市の松山城の天主閣上に御参集下さい。当日は日曜日の爲、相当の人出が予想されますので、目標として左手に今月の本誌を持たれる事と、自分の交遊を願う相手の方に対して「紫会の方ですか」と声をかけ、相手の方は「いいえ青の

会の者です」と答えればOKです。尚、その時の様子により出来れば当日お集り下さった全員で、別の所で、二時間程愉しく座談会でも開きたいと思ひますから、二百円程度用意して下さい。この催が成功すれば、後日誌上をかりてその結果を、全国のそどもあ諸兄に報告します。

注当日は終始、住所本名は不問にします。ふるつて御参同下さい。(愛媛 小林健二)

★私は不幸な青年でせうか。いつも生きて苦しんで居るより死んでなにもかも忘れた方がと思つて居りました。

それがたしか七月頃と思ひます。御誌の発刊と同時に世に同好の士の多い事を知り、思い切つて通信致しました。

私は二十六才の独身の会社員ですが、異性との関係は一度もありません。身長五尺三寸顔は丸い方でなく普通より良い容貌

です。黒い髪に自然なウェーブがあります。やせ形で、柔和なやさしい女性的な方です。

体格のよい私よりやや大きい方で、心のやさしい、容貌の美しくしい同性を望んで居ります。弟として兄として交際下さい。男色歴はありませんので、御指導下されば幸いです。

私の良き心からのフレンドの御便りを御待ち申上げます。

(栃木 K生)

★大阪T O生氏の御提案に賛成致します。既にスエーデンではソドミニストのクラブが出来ているとの事。私も同好の士がお互に語り、共に楽しむ機会を持ち度いと兼ねがね思つていました。是非大阪近郊の純粋なソドミニストの会合を持ち度いものです。どうか御連絡下さい。色々御話しやら御相談やら致したいと存じます。

尙小生は満三十六才、五尺五

寸、十六貫五百、容貌十人並、音楽、映画、文学を好みます。

(大阪 MO生)

編集部より

★川村加代様、お手紙が殺到してきます全部御回送しました。が住所に不明確な点あり戻つて来ます。至急御連絡下さい。

★サヂ・マゾ女性の座談会をいよいよ近く開催します。誌上を飾るの間もないと思ひます。何卒絶大な御期待を乞ひます。

★サヂスト・マゾヒストの皆様、本誌はアツと息を飲むような凄く資料を筆に盡せぬ苦心を拂つて、豊富に入手しました。現代では貴重品というより既に秘物であり御満足戴けると思ひます。次号よりの発表を併せて御期待下さい。

★そどもあ座談会開催の爲、本号は特に「そどもあ通信」を休載しました。乞御諒承。

★次号からまた「交歓室」を拡張し一層の充実を期します。どしどし御投書下さいませ。

(編集部 氏家 記)

落城秘史・第三話

悲憤上月城



ふしどは亂れていなかった。姫の俯伏していた疊が、彼女の開花を迎えた。その證據に姫から少し離れて、黒うるし塗りのたばこ盆に、むぞうさに紙屑が捨てられてあるのだが、そのもみほごされた白い色に、ちかつと血の色がしみついている……

岩堀 光

古正英生画

※

「ああッ！」

あこや姫は、両耳を、たもとで押えて、うつぶした。

それでも、しわがれた声は、お庭の奥からお廊下を這ひ上つて、座敷の内に、流れこんできた。

「ひゅゅゅ……呪いぞや、怨霊の呪ひぞや。」

ひゅゅゅ

「姫さま、姫さま」

侍女の菊が、やさしく、おびえるあこや姫の、肩を、抱き起した。そして、こうしたことは、いぜんにも、一度あつたのを、思いだした。それは、姫路の、ご城内で……。

その時も、あこや姫は、おびえきつて、こうして、身を伏せていた。だが、菊は、もち

ろん、いま、それに、ふれはしなかった。

「姫さま。どうあそばしました」

菊は、姫の、蒼白めたひたいに、あらいたたみの、目のあとが、ついているのをみた。

「あの声じゃ。ホレ、あの声」

「ほゅゅゅ、あれは、かや殿が、お牢を抜けでられたので」

「そうではない。わらわが、おそろしいのは



かやではない。あの声じや」

菊の耳にも、低い呪いのような、声が、弱々しげにきこえた。

「ひゝゝゝゝ、呪いじや……さきのお城主さまはじめ、憤死の方々の、呪いがかかり申したのじや」

菊は、思いきつて、庭に面した、障子襖を開けた。

夏の、青い夜の底を、ふらふらと、ただよい流れるように、あゆむ、白い影がみえた。時には、明るい月光の中に、時には、繁茂する樹々の、暗い中に、白い小袖のすそを、地

にひきずつて、狂女の姿がみえた。

「ご番衆。ご番衆」

菊の声に、お庭の木戸が開いて、小者がふたり、現われた。いずれも小者ながら、コテ、スネアテをつけて、真槍の穂を、きらめかせていた。

「お呼びか、お女中！」

「かや殿が、

お庭に、さま

よいでていら

れるのじや。

姫君さまのお

めざわりでご

ざいまするゆ

え、いたわつ

て、おつれ下

され」

「はっ」

と、小者は

答えて、走り

去った。やが

て、狂女の、

双手、肩を摑

むのがみえ

た。そして、チツ！と、舌打ちして、
「さあ、お戻りなされい。どうして、そう度度、お座敷牢を、抜けてでられる」

「ひゝゝゝ。呪いじや、呪いなじや」

「エ、イ、手荒に致しまするぞ！」

「呪われているのじや、われらはな。この城で、悲憤に死んだお方たちの、呪いが、われらにかかつているのじや。……いまに、怨霊のさまようままに、ご城内の女子たちも、おたけび、なぶられ、屈辱に死ぬのじや」

「さあ、早うかえられい！」

菊が障子襖をしめると、あこや姫はいつた「あれじや、あれをききやつたか。笑うてくりやるな、尼子の家に生まれて、あまりに心弱いと」

「はい……」

「きよう、あすにせまる、われらが身のなり果を思えば」

あこや姫のおびえは、菊の心でもあつた。

かやのように、狂いたいほど。

かやは、菊たち、お女中衆の頭だつたが、

落城寸前にせまるこの日頃、みのなり行きに

おびえて、ふと、気が狂つた……。

「おそろしいことよ。前に、このお城に住まわれた、女子衆は、それは、むごいめに

おあいなされたとか」

夜風にゆれるともし火に、まわりのふすまに落ちたしおたれた影が、いまにも崩れそうにふるえていた。

「ご心配なされますな。出雲の大守尼子の家が、なんで、こんな小城に、ほろび去りました。そうぞ。それに、羽柴秀吉殿が、しかとお約束下さつておりますれば、今に、織田の大軍が、救ひに参りましようほどに」
「いうてたもるな、その名を」

「ああ、これは」

と、かえつていつそううろたえた、菊の様子に、あこや姫はいつそう顔が熱くなつた。

※

尼子家が、毛利家と、最初に手合せをしたのは、大永三年のことである。

尼子家は大内家と並んで中国を二分する雄藩だつたが、まず大内家が、逆臣陶隆房によつて滅亡をみ、その陶を討つて、大内家に代つた毛利家と、当然、喰うか喰われるかの、干戈をまじえる運命におかれた。

両家の争ひは、連綿とつづいたが、ついに永祿三年、毛利軍によつて、当時の尼子当主晴久がほろぼされ、四十有三年目に、やつと一段落ついた。

だが、永祿十二年、尼子勝久が、突然、出雲に兵をあげた。勝久は晴久の甥で、尼子滅亡後、出家していたが、尼子家の遺臣、山中鹿之助らにかつぎだされたのである。

毛利軍はただちに、これをうち、敗走させたが、勝久も鹿之助も、巧みに逃亡した。

そして、織田信長が天下に号令するに到つて、未だ勢力の及ばぬ毛利を討つべく、羽柴筑前守秀吉を総司令官に、軍を出した。山中鹿之助は、その征毛軍の力を借りて、滅びた主家再興を策した。

秀吉が中国路に兵を進めたのは、天正五年十月であつた。さすがに彼は、電光石火、毛利家の先鋒、播磨一帯の諸城を攻めとつた。

十一月には、備前、播磨、美作の三国に接する要害、上月城を落しいれた。

狂女かやが怨霊の呪いというのは、この時のいくさに、滅び死んだ人々をさすのであつた。

と、いうのは、京都の信長公から突然、征毛軍の一時中止を命じてきた。

三木の城主別所長治が、織田軍にそむき、また信長公の股肱の驍將荒木村重が、京都に近い伊丹に兵を挙げたからである。村重は、織田勢の征毛軍にあつて、殆んど、副將の位

置にあつた。したがつて、信長としては、中国への軍旅を止めても、早く、この根をたつ必要にせまられたのである。

いっぽう秀吉に囲まれて、落城寸前の上月城内では、反乱が起り、城主は首をうたれ、残兵は、秀吉に和を乞うた。色々に詫びをいう敵に情をかけず、城兵の首をことごとくはねた。

そして、城内の女、子供二百余人を、引出し、まず、子供たちをしぼり、女たちを裸にむいて、旗差物につり下げ、その眼下で、子供たちを串刺しにした。

信長に比して、その戦歴に、残虐行爲の少ない秀吉が、こういうことをあえてしたのは、信長公に、勝ちいくさの軍を、みすみす退くように命じられ、よほど、むしやくしやしていたのであろう。

子供たちの慟哭が消えぬ時の間に、獸心につかれたような、刑吏たちの腕が、女たちへのびた。

わつといつせいに、たてかけた旗差物を、倒すさまは、何かの競技を愉しむにも似ていたが、やがて、数刻後、ふたたびたてられた旗差物に、下げつられた女たちの姿は、屈辱にしはたれていた。

乳房から腹に、そしてまた、ふとももを這う血のすじが、そのあかしである。裸にされてはいても、いぜんは、すべすべと美しかった脊やでんぶに、砂や泥、それにすり切れた草葉が、あせに、みにくくこびりついていて、もう満足した、とばかりに、女たちのからだに槍の穂尖がくいいつた。

なかには、子供たちにした串刺しでは物足りぬげに、女たちのからだに、そのためにできてゐるのだといいたげに、物食う用にたたぬ口に、真槍を、食い入らすものもいた。

あこや姫が、山中鹿之助に伴われて、姫路城に秀吉を訪ねたのは、そんな、処刑の日であつた。

彼女は毛利軍に滅ぼされた、晴久の娘だつた。現在の尼子家当主、勝久とはいとこになる。父が討死した時、乳母と共にひそかに逃れ、河内の平野村にいた。乳母の家がそこで油商をやつていた。彼女も、平和な里人の生涯を終えるものと思つていた。

晴久敗戦の年に、三才だつたから、中国の雄藩の姫としての栄華の思い出もなく、また日々、殺伐に明けくれる、武士の生活にも未練をもたなかつた。

それが、昨年、十六才の春、突然、尼子家

の遺臣という山中鹿之助に見出されて、いとこ勝久に迎えられた。

いちじ、勝久の室になる話もあつた。それが、こんど、ふいに姫路城内に伴われたのである。

あこや姫はなにもしらなかつた。ただ、戦争の天才である秀吉を、たいへんな豪勇と想像して恐いだけだつた。尼子の忠臣で、戦争狂のような山中鹿之助が、やはり、身の丈高く、力もまた三十人力といわれた。

いよいよ、秀吉にあう直前、あこや姫は鹿之助にいわれた。

「姫！ 羽柴殿は有名な好き者とか、万に一つ、姫に伽をと望まれなば、こよい一夜、堪え忍んで下されい。尼子再建の志に燃えるわれらの運命は、いま、この時の、羽柴殿の腹一つにかかつてゐるのでござりますれば」

山中鹿之助が、姫を伽に出す決心をしたのは、秀吉の智將、姫路の主、黒田孝高の入智慧である。彼はいつた。

「尼子は、もともと、中国の大家。毛利を討つ一翼に参加させたとこで、秀吉殿が、信長公への申開きはたつ。しかし、尼子家ともあろうものが、秀吉軍の一將として、参加したでは、近隣のきこえも悪かろう。どうして

も城持大名として、尼子勝久殿をまつりあげ
るが大事だな。それにはうちの大將の虚栄心
を満足させておくのだ。秀吉殿は、拙者の目
から見ると、将来をかけていい大英雄だが、
そんな人間にも弱点がある。大將は百姓上り
だから、名家を表面に押したてて、尼子家を
買えでは、おそらく、逆に、歯牙にもかけぬ
だろう。そこで、尼子が、心底から、大將を
尊敬している、臣礼をとりたがっている。と
いう証拠をみせるのだ」

菊が、あこや姫の、たたみにうつぶせた、
おびえきつた姿を姫路城内にみた、むかしの
ことというのはこの深夜であつた。

「みてたもるな、はずかしい」

菊があこや姫を抱き起し、まだ、そのまま
に乱れている小袖の衿や、ひたいの髪をなお
してやろうとすると、姫がいつた。

菊は、秀吉が姫の寢所にきたのをしつてい
た。ふしどは、彼女がとつた。それは、少し
も、乱れてはいなかつた。

たぶん、姫は、そこで待つこともできなか
つたのであろう。

あこや姫のうつぶしていたたたみが、その
まま、彼女の開花をむかえた。

その証拠に、姫から少しはなれて、黒うる



しぬりのたばこぼんがあつて、そこに、むぞうさに紙屑がすてられてあるのだが、そのもみほごされた白い色に、ちかツと、血の色がしみついているのを、菊はみた。

その夜明けだった。秀吉は、山中鹿之助を呼んで無造作にいつた。

「こんど落城した上田城は、備、作、播の国境にあり、当地より山蔭にいる咽喉だ。東に市川、西北に太平山、南に狼山を持つ要害だ。そいつを、尼子勝久殿に、信長公より、こんどの軍の差配を任された羽柴が贈り申そう。出雲博多の入海がさざえ結びは、初物じやつたが、高うついたようだな」

本当に、この城を足場にして、尼子家は、出雲を本領に十二カ国の太守のむかしにかえられるのだろうか。

入城当時勝久は、あこや姫に、嬉しそうにそんな話もした。だが七十余日たった今は、ただ蒼白めて、

「姫のためにも、羽柴殿は、毛利軍の囲みを破つてこれねばならぬ筈だ」

と、そんな、たのみにもならぬ理由さえ、とりあげるようになっていた。

いや、ちかごろでは、もつとあからさまなことを、いらだたしげにいつた。



「姫は、いつたい、どのように伽をなされたのじや。ただかりてきた猫の真似をしていたのではないか。たかが、百姓上りの心を掴めぬからだをみたいわい」

勝久をこんなに苛立たせたのは、信長の命で、軍をひき、高倉山から、別所討伐に、秀吉が転じると、間髪を入れず、毛利軍が総勢をあげて、上月城攻撃にでたからである。

なぜなら、尼子は毛利からいつても年来の敵である。尼子家が、再度勢ひを得たなら、織田軍を相手に、顔勢の気配が濃い毛利家はそれまで、翼下におさめていた、中国の群小国主に、見限られる恐れがあつたからである。

羽柴秀吉は、はじめから、上田城をえさに毛利軍をたたかわせておき、その間に、別所を討つて、兵を再び中国に進めようと、ずるい手をうつたわけではない。

はじめ、彼は、上月城危ふしの報に、信長に乞うて、約二万の大軍を救援に向けた。

そのため、いちじ、毛利勢は総退却した。

だが、信長は、再び、急に兵をかえし、上田城を見捨て、別所征伐におもむくよう重ねて厳命した。

秀吉は城内に人をやつて、自分たちに合流せよと、いつてやつた。だが、鹿之助はきかなかった。

毛利との決戦を頑固にいいはつた。せつかく手にいれた城を、尼子の腰弱がまた捨てよつたと、毛利にいわれたくなかつたのだ。

「尻の狭い量見だ。鹿之助の不屈の勇猛心は立派だが、戦いには、勝ち易きに勝つという法のあるのをしらいでは、尼子ももとはにかえらぬな」

秀吉は参謀の黒田孝高に笑つたという。

運命がこうして、尼子勝久たちを捨石にした。

※

天正六年七月三日、まだ、二十六才の尼子勝久は切腹した。

あこや姫も、短剣でのどを突こうとして、鹿之助にとめられた。

「はなしてたも……」

あこや姫はもがいた。むしむしする夜のこゝろ、うす衣の白小袖が、そのまま、死の装束になつていて、その胸前が、からだをふるにつれ、開いた。

「あなたに死なれては、毛利家との五十六年余にわたる闘争が、全くの徒勞に終る。尼子家の血統がたえるのでござる」

「じやといつて、逃れようすべもない」

「ある……あるのでござる」

鹿之助は、細い姫のうなじに眼を落してから、いつきにいつた。

「拙者と縁組して下されい？」

「えつ？ そなたには妻子が……そして」

女たちが、といほうとして、姫は黙した。

「きかれよ。毛利軍では、尼子の血縁を許しはしなかつたが、拙者の降伏を承認した。拙者はいまさきまで、このまま毛利元春がご前

にでて、きやつとさしちがえても尼子のうらみを晴らさん所存でござつたが、姫、姫がござつた。かりに拙者の妻となりなされて」

「鹿之助、もう許してたも」

あこや姫は、眼になみだをためていつた。

「毛利がどう、尼子がどうと、姫に押しつけずに、このまま死なしてたもれ。もうあこやはたくさんじゃ。なんのためかはしらねども心にもない女のさがを売りものに、ひとつとしておのれの心のままになれぬくらは、もうしとうはない。平野村にいた時の貧しい油売りの娘としてなら生きてもいたいが、さぶらいの売りものとしては、生きとうはない」

「なにをきままをおおせられる。きようが日まで、尼子再興をただ一つの望みに、辛苦を重ねてきた、多くの遺臣たちのことをお考へなされい！」

「いやじゃ、いやじゃ、もう」

「姫！ 許されい！」

鹿之助は、小さい肩を驚攔みにした。

「ああ、痛や！」

はなそうとして、逆に、あこや姫は鹿之助の膝に、反り倒れた。

鹿之助は、いまも、ぐにやつと指先にふれた、やわらかなふくらみが、胸前から、なか

ばこぼれでているのをみた。

「姫！ ごめん！」

彼は、膝をずらせて、あこや姫のからだをあらむきにした。

「ああなたにをするぞや、鹿之……」

あこや姫はそこまでいつて、いき苦るしく物がいえなくなつた。

彼女は、秀吉より三倍も重かるう圧迫を感じた。よろいどうのすそが、ひやりと、みぞおちの下に、じかに、感じられた。

※

山中鹿之助は、降人となり、毛利元春の前に引出されるのを待つて、本当に、刺違える覚悟だつたかもしれない。

また、あこや姫を、主君勝久切腹の夜、犯したのも、それで姫の死を止めさせて尼子の子孫を残す方便だつたかもしれない。がこの場合少し、こじつけを感じさせはするが。

併し勇智仁徳の士として、鹿之助は、毛利軍に優遇された。しかし再び、事実上、尼子勝久という還俗青年をあやつりながら、毛利を敵に、東奔西走したような主役は演じられようもない。

彼は毛利家から五千石の知行に任じられ、周防の地に招かれた。待ちにまつた、それは

彼の英雄趣味をまんぞくさせてくれる、機会かもしれない。毛利元春と刺違えて死ぬるかもしれない。

鹿之助は、妻子、下人ら三十人あまりを伴つて旅立つた。一行は備中阿部川の渡までできた。

渡船は一艘よりなかつた。

鹿之助は先に下人たちを向う岸に渡した。

やつと船がかえつてくると、女たちをのせ自分も、二人の家臣と共に、後から乗ろうとして、今まで、涼んでいた。岸辺の岩から尻を上げた。

「たあッ！」

その瞬間、彼は腰をま横に、なにかたたきつけられるような衝撃を覚えた。

「うむ！ 曲者！」

と、鹿之助は、ざんぶと河に飛びこんだ。

「毛利家が身内、天野の家臣、河村新左衛門」

「同じく福間彦右衛門」

と、名乗りをあげて、鹿之助の後から、二人河に飛びいつた。

鹿之助の家来たちも、すでに、十人あまりのさぶらいに囲まれていた。

「小童！」

鹿之助は絶叫して、河村の組みついてくる腕を引き寄せ、腰に手をかけ、双手高く差上げた。

だが、腰の傷のために、ふだんはやさしいそんな力業で、思わず、後ろにひよろついた。そのうしろ髪を福村がひきながら、刀を首にあてた。

「むねん！」

叫んだつもりだが、鹿之助の首は、二つに分れて声にならなかつた。

「あれッ」

と、渡船の中では、声が上つた。

最初、鹿之助につづいて、河に飛びいろうとした二人の女は、どこにひそんでいたのか、かけよつたさぶらいに、けさに斬られた。続いて飛びいろうとした、鹿之助の妻は、引戻された。

船はぐんぐん岸を離れた。河面は、いつしゆん、人血を赤く流したが、すぐ澄んで、青く淀んだ。

船には、鹿之助の妻と十四才になる娘、それに、あこやがいた。そのほか、先に斬殺された二人の女をひいて、三人のめかけがいた。渡船の中に、ひそんでいたのは、いつけん野武士風の荒げな七人の男たちだつた。

「船頭、深みにくれば船の流れのままにしておけよ」

ひとりが命じた。船頭は、先と後に二人いた。

「へえい、がつてん」

と、振向いた、前の船頭は、赤いふんどしをしめただけの姿。それが、完全ではなく、思わず顔をそむけさせた。

そんなけはいを、いちはやくみたさぶらいのひとりがいつた。

「おい、そいつの姿に後光がさして、お女中衆が、眩しいそうだ」

「いや、こやつたち、たぶん、好物の食いじまいになろうて……みただけでは気の毒じやで、たんのうするほど、味をみせてあげようわい」

「ああ、けがらわしい！」

奥方がいつた。

「早う、殺してたも」

「いかにも」

さぶらいのひとりが、うなづいた。

「女共は、そのまま、石をつけて、沈めてしまえとの命令だ。いずれ、生かしておくわけには、まいらぬ。だが、それまでは、女のみようが、そなたたちの若々しい肌を、ここに

いる七人、いや、船頭共もいれて九人が、心ゆくまでかいなでて、やろうぞい」

「いいやるな！」

奥方は、帯にはさんだ、帯剣のふくろの口をとくと、さつとぬいた。

喋りつづけているさぶらいの腹に突きかかった。

それは、ひよいと、あつけなくかわされた。

「危ない！」

奥方の泳いだからだだが、そのまま、船べりから、急になつた流れに落ちようとするのをひとり、帯を掴んで引戻した。

「あッ！ なにをなされます」

奥方は後じさりになつた足ひざを、ぽんと蹴られて、四つん這いに倒れた。

すると、男のひとりが、その足首から、小袖のすそをつかんで、さつと、逆に、背の方へまくりあげた。

かばおうとして、身をねじつたが、かえつて船の揺れに誘われ、あうむきにかえり、いまひきむかれたばかりの、足首を、空にあげた。

「うわアッ、はッ、はッ！」

男たちは、いつせいに笑つた。それほど、奥方の必死の行動が、こつけない結果に了つた。そして、そればかりではない。次の瞬間

には、女たちが、それぞれ帯びている剣に、男たちはきずいた。

「剣を！」

ひとりが下知すると、七人のさぶらいは、いつせいに、とびかかった。

あこや姫は、すばやく帯剣をぬいて、夢中で、自分の首につきたてた。

「いッ！」

だが、それが深くもはいらぬうちに奪いられた。

「阿呆め！ おのれは、いちばん若くて、綺麗な女と狙いをつけたに、死なしてなろうか。しろ、痛かろうが。喉から、血がふき流れているわい。だが、それでは死ねぬて。ここにいる男たちを、とつくりなくさめる間は、その傷では、いきの根がたたれまいて」

「ああ、むねんな！」

あこや姫は、血のりが、首を伝い、えりから胸に流れるのを感じながらいった。

いつか、帯を、姫がのどをついた剣尖で、切り裂かれていた。首すじから、つり下げるように、小袖や下着がはぎとられた。

肩から腕をぬける時、双手が、後ろにまわる。その手首をそのまま逆にとられ、血のふく首を船板に押しつけられた。

「あれッ」

と、悲鳴も、傷の痛みに、ひいッ！とよりきこえなかつた。そして、首と反対に、ひざを下腹におりこむ姿勢のために、高くなつた下半身のふくらみが、重荷を受けた。

あこや姫は尼子家の血統を、残さず済んだ。喉の突傷のためではない、また、彼女のなかで、とけはじめた、種類が、七種、いや最後には、船頭まで含めての多種だから、尼子の血との均衡をたもてない、という理由でもない。

多量の出血のために、いつそう透明なばかりに、美しく蒼白んだからだ、貫余の石を、自分の小袖に包み、それを頭髮に巻きつけるように結ばせられて、水面から消えたからだ。

もう、夜がきていた。

それまでに、あこや姫は、他の同性たちが呻いたり、叫び泣いたり、悶えたりするのをきいたし、みもした。

彼女と同じ姿であることには代りがなかつた。陸から離れて、人間を廃棄したとでもいうのだろうか、彼等は、十四才の女子も、女の仲間にいれた。

こうして尼子家は完全むけつに消滅した。

(をばり)